
インフィニット・ストラトス ~ N E X U S ~

ウィース

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス〜NEXUS〜

【Nコード】

N0607R

【作者名】

ウィース

【あらすじ】

特効兵器の襲来でたった1人で立ち向かい命を落としたレイヴンズ・アークのレイヴン。

しかし彼は死に際に光となって消え失せ、たどり着いた世界は女性にしか起動出来ない最強の起動兵器“IS”によって女尊男卑の風潮が当たり前となった世界であった。

プロローグ（前書き）

ウィースと申します。まだまだ未熟ですがどうか暖かい目で見ていただけると幸いです。

ブローグ

空を覆う赤色の特効兵器、キサラギが起動させてしまった旧世代の遺物だ。

レイヴァンかの起動から始まりレッドバタフライと言う無人兵器の起動。

2つの起動兵器は1人のレイヴンによって破壊され特効兵器の作動は阻止されたかに思われていたが、甘かった。

特効兵器は世界に飛び立ちありとあらゆる物を破壊して回った。とあるビルの上、そこには中量二脚タイプの“アーマードコア”通称ACが泰然と構えていた。

右腕にはバズーカを所持し左手にはドラム型マガジンのマシンガンを持っている。

右肩にはマイクロミサイルを左肩にはレールガンを背負っている。頭部の顔に相当する個所には1つの赤い目が空を見つめている。

『無数の敵影が接近しています。……もう間に合わないのかもしれませんが。ですが戦う事だけが我々の生きる道なのだと……我々は信じます』

オペレーターの通信通り、遙か上空から飛来する特効兵器が目視出来るまでの距離にまで迫っていた。

『来ました！ レイヴン、生きて帰ってくれますか？』

オペレーターの震えた事に1人のレイヴンは無言で通信を遮断した。そして顔を前に向け、凜とした目つきで特効兵器を見ると戦闘システムを起動させる。腰と足から青い噴射炎を放出し期待は一気に300kmで地を走り抜けて幾つかの特効兵器を回避するとそ

こから空に飛び上がると同時に左手のマシガンを斉射し5機の特効兵器を落とした。

だが四方八方から襲い掛かる特効兵器を完全に回避する事は不可能であった。

脚部とコアに立て続けに自爆攻撃を受けると共にAPは5000を切った。

右肩のマイクロミサイルを放ちまた数機の特効兵器を墜落させるが、次から次へと無限に飛来する特効兵器の雨は止む事を知らない。

『AP、40%機体ダメージが増大しています』

頭部のAIから機体の状況を告げられるがこのパイロットの耳には何も聞こえていなかった。

再びコアに自爆攻撃を受けAPは10%も残っていない。

機体の関節部分から火花が飛び散り、動きも悪くなる。それに連れて被弾率も上がって行き、APが0なるか否かと言う所にまた特効兵器が飛んで来ていた。

レイヴンは歯を食いしばり、ゆっくりと目を瞑り死を覚悟した……。

プロローグ2（前書き）

今回は少し短いですがどうぞ。次回から本編です。
ISは面白いなあ。

プロローグ2

“インフィニット・ストラトス”通称IS。女性にしか起動出来ず、現行では世界最強のスペックを誇る兵器である。

戦車や戦闘機などこの兵器を前にすればただの屑鉄同然の存在である。

天才科学者、篠ノ之 束が1人でIS技術の基礎を考案しISの命であるコアを作り、そのコアは世界にたった467個しかない。この数は機体の数と比例する。

本来なら女性にしか起動出来ないとされているが世界でたった1人、男性がこのISを起動させてしまった。

『えゝ続いてのニュースです。世界初の男性のIS操縦者である織斑一夏くんですが――』

「またこのニュースか。いい加減飽きないかな」

「世界で初めて男性の操縦者だ。世間が騒がない筈がないだろう」

世界初の男性操縦者、織斑一夏の姉である織斑千冬は元日本代表IS操縦者。

第一回IS世界大会総合優勝者である。

「そうそう、お前は明日からIS学園に入学する事になった」

「え！ 何でだよ！」

「あそこはどここの国家、企業も手出し出来ない。お前の身柄は最低でも3年は安全だ。それともどこかの組織に捕まって実験動物にな

るのがお望みか？」

「……それはやだ」

「だろう？ 求めよさらば」えられんといっちゃった」

クラスメートは全員女子

「皆さん入学おめでとうございます。私はこのクラスの副担任の山田真耶です」

黒板の前に立ちニッコリと微笑むやや童顔の女性。身長はやや低めでサイズが少し大きい服を着ており子供が無理に大人の服を着たような感じになっている。

メガネもズレておりどこか抜けている様な気がして仕方ない。

「では皆さん一年間よろしくお願いしますね」

にこやかな笑顔で言うがクラスには依然、緊張感が立ち込めており誰からも反応がなかった。

あまりの無反応に山田先生は戸惑いながらも続けた。

「じゃ、じゃあ皆さんには自己紹介をしてもらいます」

『はい』や『わかりました』等の反応も無く彼女はおどおどとした態度になり心なしか涙目になっているように見えた。

（これは……想像以上にキツイ）

IS学園に入学した織斑一夏だが今は緊張と全員女子からの視線を一身に浴びて腹をキリキリと痛ませていた。

それもその筈、一夏のクラスは全員が女子生徒なのだから。

クラスだけではない、この学園に男子は一夏以外に誰も居ないのだ緊張しない筈がない。そして席の位置も悪い、最前線の真ん中という最も目立つ位置に座っているのだ。

「……くん、……むらくん、……織斑くん」

「はい？」

「あ、ごめんね驚かせちゃって。でも今自己紹介で『あ』から始まって今『お』なの。自己紹介してくれるかな？ ダメかな？」

しきりに頭を下げて誤る山田先生に対して一夏は『は、はい』とだけ答えて席を立つとさつきよりも更に視線を浴びた。

横目で端の席に座る幼なじみの篠ノ之 箒を見るが酷い事にフツと顔を窓側に向けてしまった。6年ぶりに合う幼なじみの反応がこれとは一夏も泣きなくなる思いだろう。

「織斑一夏です。よろしくお願いします」

深々と頭を下げて礼儀正しく挨拶をしたのだが、教室には『それだけ？』と言わんばかりの空気が流れていた。

「以上です」

そう言った途端、一夏の頭に強烈な衝撃が走りそれと同時に振り返るとさつきの頭の痛みなど忘れる程の光景が広がっていた。

「全く、挨拶も満足に出来ないのかお前は」

「ゲツ……千冬姉……！」

「学校では織斑先生と呼べ」

今度は出席簿の角で叩かれ一夏はまた頭を押さえていた。
しかし出席簿で叩かれるなど問題ではない。今の問題は一夏と千
冬の両名が姉弟である事がバレた事だ。

「千冬様と織斑くんって姉弟なの？」

「名字も一緒だし」

「いいなあー代わって欲しいなあ」

「入学から騒々しいぞ。静かにしろ」

さっきまでざわついていたクラスを一言で制し彼女は続けた。

「私は織斑千冬。お前達の担任だ。私の仕事は一年間でお前達を使
い物にする事、逆らってもいいが私の言うことは聞け良いな？ 良
いなら返事をしろ良なくても返事をしろ私の言うことには返事を
しろ」

何とも雄々しい自己紹介である。そこらの男とは比較にならない
くらいの勇ましさである。

千冬の自己紹介が終わると教室中から黄色い声援が上がった。

「千冬様ステキー！」

「あたしわざわざ北九州からES学園にやって来たんです！」

（「苦労なこった」）

「あたしは択捉島から来ました！」

（あつこはロシア領域じゃなかったか？）

「やれやれ、何故毎年私のクラスにはこういうバカが居るんだ。私のクラスだけ集中させているのか？」

「千冬様！ もっと叱って罵って！」

「でも時には優しくして〜！」

「つけあがらないように黙って〜！」

「今年も凄いですね」

「勘弁して欲しいものだ」

さっきの黄色い声援は隣のクラスまで届いていた。一先ず、教室をもう一度静かにさせた後、チャイムが鳴り休み時間に入った。

入学早々からドツと疲れた一夏は深い溜め息を吐き、机に体を伏せていた。

教室の外には物珍しさ故に他クラスからも女子が集まりいろんな噂話をしていた。

「一夏」

「おう？」

見上げるとそこには幼なじみの箒が腕を組んで立っている。

「話がある、廊下でいいか？」

「ああ」

簀の後に続いて一夏が廊下に出ると2人は壁に背中をつけて黙り込んだ。

「……そう言えば剣道の全国優勝おめでとう」

「え……何故そんな事を知っている!」

「新聞で見たから」

「何故新聞を読んでいる!」

「何言っただお前。まあ……6年ぶりだけど簀って直ぐわかったぞ」

「……っ。よく覚えているものだな」

「髪型とか一緒だし。幼なじみなんだし忘れる訳ないだろ」

「一夏……出来ればだな……あの……」

簀が何かを言おうとした時、タイミング悪くチャイムが鳴った。

「時間だ。行こうぜ」

「わかった」

全員が席に座りしばらくすると千冬と真耶が教室に入って来、授

業がスタートした。

「ISを守るのは機体から発生する肉眼では確認出来ないエネルギーシールドです。他にも操縦者の命は最低限守られる絶対防御などがあり――」

授業開始から凡そ10分が経過し、一夏は頭を抱えて机の上に広がっている教科書を凝視していた。

（何言ってるかさっぱりわかんねえ）

辺りを見ってみるが全員、真剣な表情で黒板を見詰め一夏の様に疑問符を大量に浮かべた生徒は誰一人居なかった。

先生の説明がどこか知らない異世界の言葉に聞こえ、黒板の文字がヒエログリフに見えて来る。

こうして一夏は授業の9割を理解出来ないままIS学園での初日が終わった。

現在、一夏は放課後教室に残って自習をしている。少しでも勉強してみんなに追いつかなければと言う意欲が伺える。

しかし、何度教科書を読んでも全く理解出来ないでいた。

「あ、織斑くんここに居たんですか」

教室に入ってきたのは副担任の山田真耶である。

「放課後に残って勉強ですか？ えらいですね。先生関心します」

「は、はあ。用件は？」

「織斑の寮の部屋が決まったので」

真耶は部屋番号が書かれた紙とキーを一夏に手渡す。

「一週間は自宅からの通学って聞いてたんですけど」

「それはですね。急な事態だったので一時的な処置として無理矢理変更したんです」

「そうですか」

「それと織斑くん授業はわかりますか？」

「さっぱりですね」

「分からない所があれば先生が教えてあげますよ。あ、でも生徒と教師が放課後2人つきりなんて……。でも織斑くんなら……。ああ恥ずかしい！」

勝手に妄想を広げて勝手に赤面して教室を走り出して行った真耶を見て一夏は頭をかきむしり、分厚い教科書を脇に挟んで一先ず自分の部屋に向かう事にした。

学生寮は校舎を出てから少し歩いた所に位置し、そこに行くまでに石で出来た道やよく整備された芝生や木々が並ぶ美しい庭を通るのだ。

一夏が石の道を歩き、学生寮が見えてきたその時であった。

油や火薬の異臭が一夏の鼻につき、少し顔をしかめた。臭いの元は木と木の間の向こう側に見える湖付近からであった。

分厚い教科書を脇に挟み直して何気ない気持ちで木陰から湖を覗いてみると、一夏は言葉を失った。

それは、関節部分から火花を散らし、片膝を着いた態勢で固まっ

た大破寸前の巨大な人型のロボットが居たからである。

脇から教科書がすり抜けて落ち、少しの間だが呆然と立ち尽くしていた。

（IS……な訳ないよな？）

どこから見てもISとは似ても似つかぬ機体構成とサイズ。どこかの国家の新型兵器かと思ったがこれだけの技術を持つ国や企業は存在しない。

好奇心か、その機体に吸い寄せられかのように近付いてみるとその巨体に一夏は圧倒された。軽く見ても10mはある人型ロボットは幼少時に見ていたアニメやゲームを思い出させた。

「ぐっ……！」

「人？」

気が付くとそのロボットの足元にはパイロットスーツを着た人物が横たわっていた。落とした教科書の事を完全に忘れてパイロットスーツ姿の人に問い掛けた。

「大丈夫か！　しっかりしろ！　直ぐ先生を呼んで来るぞ！」

一夏はそのパイロットのヘルメットを外すとようやく性別が分かった。

男性である。艶を失った褪せた黒色の髪をし、年齢は20代後半にさしかかった所だろう。

精悍な顔立ちをしているが吐血などで少し汚らしい容貌となっていた。

「息は……あるな」

呼吸がある事を確認して一夏は直ぐに千冬を呼ばうと立ち上がるが、その足は止まった。

何故か、それは機体の腕部や脚部に人間の血がべったりこびり付きそのパイロットが人を殺めていると確信したからだ。

「なんかこの人……ヤベエ臭いがする……」

名前（前書き）

いや〜レイヴンのこれからどうしようか悩みますねー。
山田先生可愛いなあ。

名前

巨大ロボットの足元に倒れていたパイロットスーツの男。その男を保健室に運び延命装置も付けてもらい一夏は真耶に渡された部屋番号が書かれている紙を見た。

「えーと、1025室ってここか」

部屋番号を確認してドアノブに鍵を差し込んでみるとそのドアが開いている事に気が付いた。

ギギツと木の軋む音を出しながらドアを開けると先ず、目に飛び込んで来たのが羽布団が敷かれた大きなベッドである。

流石は国立と歓喜の声を上げて、荷物を床にやり部屋の奥のベッドにダイブした。

見た目通りのフワフワ感に包まれ一夏の表情が緩む。今日の嫌な出来事を全て忘れさせてくれる程の心地よさだ。

「誰かいるのか？」

突然、一夏の耳に女子の声が聞こえて来る。ドアの向こうで少し声が曇っている。

記憶に間違いがなければ各部屋にはシャワー室が設置されており、今そのシャワー室に入っているのは十中八九、いや間違いなく女子である。

嫌な気配が足元から上がって来ると同時に冷や汗も出始めた。

「こんな格好ですまないな。今日から同室になる者だろう。これから一年間よろしく私は篠ノ之——」

「——箒」

一夏と箒が顔を合わせた途端にその場の空気が凍り付いた。

箒の体にはバスタオルが一枚巻かれてあるだけで他には何も身に着けていない。

艶やかな髪は水に濡れて美しさが際立ち、若く瑞々しい太ももが露出した状態にあった。体のラインも綺麗で全身、無駄なく鍛えら

れた証拠であろう。

そのボディラインはバスタオルの上からでも分かる程であった。少しして凍り付いた空気によりやく亀裂が入った。

「み、見るな！」

「わ、悪い！」

「だいたい何故お前がここにいるのだ！」

「いや、同じ部屋何だよ」

そう言った束の間、箒は華麗に跳躍し木刀を手に取ると上段に構え、一気に間合いを詰めて来た。

間一髪、箒の縦一文字の振り下ろしを回避して猛スピードでドアを目指し部屋の外に出た。

一安心と胸をなで下ろしたが木刀はドアを貫いて一夏の頬を掠めた。

今度こそ攻撃が止んだと安堵の溜め息を吐いた途端、脇下や左頬をギリギリ掠める位置に木刀の切っ先が飛び出して来た。

「お前は幼なじみを殺す気か」

「なになに？ あ、織斑くんだ」

「あそこ織斑くんの部屋なんだ。いい情報ゲット」

騒ぎを聞きつけた女子が部屋からわらわらと出て来ると一夏はあつという間に女子に囲まれてしまった。

健全な15歳である一夏は目のやり所に困った。シャツの下でチラチラと見え隠れするピンク色の逆三角形の下着や全体的に薄着の女子の谷間などが当たり前の様にあるのだ。

「あの、箒さん。中に入れて下さい。このままだと何か凄く不味い事になるんで。お願いします。この通り」

頭の上で合掌して室内の箒に頼み込んでから凡そ1、2分が経過した。

当の一夏にしてみればこの数分が1時間に感じられた。

ゆっくりとドアが開くと胸着を着た箒が仁王立ちしている。この服装が最も早く着れる服だったのだらう。

「……入れ」

一夏が部屋に入りドアを閉めると室内にまた嫌な沈黙が訪れた。

「……」

「何だ？」

ギロツと一夏を睨む箒。

「お前が私の同居人だと言うのか？」

「お、おう。そうらしいぞ」

「どういっつもりだ？」

「へ？」

「どういっつもりだと聞いている！ 男女七歳にして同衾せず！ 常識だ！」

「いつの時代の常識だよ」

ボソツと呟くと目の前の幼なじみはまた目を光らせて睨んで来た。眼光だけで竹くらいなら斬れそうな鋭さだ。

「お、お、お……」

「お？」

「お前から言い出したのか……？ 私と同室にしろと……」

「そんな馬鹿な——」

「馬鹿……だと？」

またどこかの逆鱗に触れてしまったらしく箒は木刀を手にとっている。

あれで殴られたら頭蓋骨陥没は間違いないだろう。真剣より鋭い気迫を漲らせて箒が一夏に飛びかかると、咄嗟に木刀を掴んでベツドに倒れた。

この態勢は必然的に箒が一夏にのしかかっているという事になる。

「わあゝ篠ノ之さん、大たーん」

「抜け駆けはダメだよー」

「織斑くんの総受けも悪くないかな」

鍵の閉まっていないうちから女子5人が部屋の中を覗いている。その周りには数倍の数の女子が囲っているだろう。

「なっ……！」

箒が一夏から飛び退いてなんとか体が動かせるようにはなった。しかし箒の方はドアにしっかりと鍵をかけている。遂にこの部屋を殺人現場に変える気だろうか。

「とりあえずだ。この部屋の決まりと言うか……同居するとしてある程度の線引きは必要だろう」

「おう」

「まずはシャワーの使用時間だ。私は7時から8時、一夏は8時から9時だ」

「俺先の方がいいんだけど」

「私に部活の後そのままでいると言っのか」

「部活って剣道か？」

「ああ」

「そう言えばトイレはどうするんだ？ この部屋個室トイレは無いんだろ？」

「各階の両端に2ヶ所ある」

ふと一夏は思った。男子トイレはあるのかと。元々E.S.学園は女子しか入らない事を想定されているのだから男子トイレが必要な訳がない。

「なあ男子トイレは？」

「しっ、知らん。先生に聞けばいいだろう！」

「最悪の場合、女子トイレを使わないといけないとか……？」

殺気が溢れ箒は再び木刀を手にした。

「見ないうちに変態趣味に走るとは見損なったぞ。ここで成敗してくれる！」

「されてたまるかよ！」

一夏はくると半回転し床に置いてある荷物の竹刀を見つめる。柄を握り竹刀を引っ張り出すがどうも何かに引っかかって抜けない。

しかしそんな事は問答無用で竹刀を引き抜いた。

「あれ？」

竹刀の先端には三角形の布を2つ繋げたような物がぶら下がっていた。

「か、返せ！」

刹那の強奪、箒は木刀をベッドに放り投げてブラジャーを両手で抱いて守った。

「箒……」

「な、何だ」

「ブラジャー着けるようになったんだな」
バコツと一夏の頭に爆音が鳴り響いた。

時刻はだいたい10時を過ぎた頃、一夏が助けたパイロットスーツの男が目を覚ましたという報告を受けて千冬と真耶は保健室にいた。

あの大破寸前の巨大ロボットについて今すぐにも質問をしたい所だが、覚醒して早々に質問は多少、酷だろうと今はその男がハッキリと意識を取り戻すのを待っている。

その男の瞳は虚ろで光が灯っておらず心ここにあらずといった感じである。

男の両手には皮が裂けた跡があり、その部分だけ変色していた。自分が何故ここに居るのか、何故助かったのか、どうやってここに来たのか、ここがどこなのか全く分からないでいた。特攻兵器の一撃で確かな死の感覚を突き付けられそこから生き延びれる筈はなかった。

だが今はこうして生きている。

「そろそろ質問してもいいか？」

千冬が何かを問い掛けてはいるがその男の耳には何も聞こえてはいない。

『アークにまだこんな奴がいたのか！』

『その力を何のため使う気だ……』

『今この瞬間は力こそが全てだ。私を超えてみる』

幻聴か何かか、かつて鎬を削り合った者達の声が頭に響いた。

豁然、その男の瞳に光が戻り夢から覚めたか如く、意識がハッキリと戻っていくのが感じられた。

「聞こえていないのか？ 聞こえているなら名前を言ってくれ」

名前、その男の本名は遙か昔に捨てられている。だが代わりに別の名前があった、親しみや恐怖等の感情を含めて皆はその男をこう呼んだ――。

「レイヴン、俺の名だ」

クラス代表決定戦（前書き）

クラス代表決定戦は2回に分けようかと悩みましたが、やっぱり
つにまとめました。

結果かなり長くなりましたがどうぞ。

クラス代表決定戦

朝の職員室、織斑千冬の目の下には隈が出来ておりだいぶ疲れた様子であった。

それでも生徒の前では決して疲れた姿を見せずに常に凛としていた。

千冬の机の上にはコーヒートと真っ白な報告書が置いてある。何の報告書かと言うとそれはレイヴンについてだ。

巨大ロボットに乗って現れたというだけでもニュースになってもおかしくは無いのだがこの件は学校側で黙認しようと言う話しでまとまった。

何故か？　どこの企業で製造されたか分からない未知の兵器を今の日本政府では到底対処出来ないだろうし、ニュースになって変に市民の不安を煽る結果はどうしても避けたいからだ。

現状、レイヴンの巨大ロボットの存在は学校側でも教員陣と一夏しか見ていない。

流石にレイヴンの存在までは生徒に隠す事は出来なかった。

精悍な顔立ちをした偉丈夫であるレイヴンを多数の女子生徒は好感を持って保健室の窓からレイヴンを覗いていた。

「はぁ……」

「だいぶお疲れですね織斑先生」

にこやかに笑いかけながら千冬の冷め切ったコーヒーを入れ直して机に置く。

「すまないな。山田先生」

「これくらいでしたら……。それよりあのレイヴンさんですけど何か分かりましたか？」

「抜け目の無い男だ。自分の情報は決して晒そうとしないでこちらの情報ばかり探ってくる」

「かなり警戒してますね」

「当然だろう。それに何回か検診していてレイヴンがISに適性がある事がわかった」

サラツと言っているがこれは大ニユースだ。ISは女子にしか使えないという原則を破り一夏は望まずながら一躍有名になってしまった。

まさかその原則を破る者がまた現れるとは思いつかなかった。

「男にISが動かせるだけで十分、謎と言える。それでいてレイヴンはISの存在を知らないと言いつつ出した。おまけに日本語を話せるのに読み書きが一切出来なかった。あの男には謎が多すぎる」

「ちなみにIS適性はいくら何ですか？」

「Eだ」

「E!？」

思わず声を上げてしまい職員室の教員の視線が一斉に真耶に集まった。

慌てて口を押さえると自然に小声になって千冬に語りかけた。

「適性Eなんて初めて聞きましたよ」

「私も初めて見た」

女性なら動かせて当たり前なのだからIS適性がE判定が出る事はまずない。

この結果はISをギリギリ動かせるラインであり突然、機能停止が起こっても不思議ではない程低いのだ。

「あの何者何でしょうね。もしかしたら別世界の人だったり……」
冗談のつもりで言ったが千冬の方はそうは思っていない。

「別世界か……無い話ではないかもな」

「そんな織斑先生、冗談ですよ」「ISも篠ノ之束が開発し実用化するまで誰もその性能を信じなかったんだ」

ISの存在もつい最近までは夢物語として扱われていたのだ。それを考えてみれば別世界の人間という解釈も出来ない事はない。

「まあ、あくまでも過程の話だな。それは」

「そうですね……」

真耶はレイヴンの不明な点に溜め息を吐き、千冬は書くことの無い報告書に溜め息を吐いていた。

IS学園にかくまわれる事となったレイヴンは保健室で暮らしている。

朝の日差しに目を覚ましベッドから出てみると保健室のドアが少し開いており、その隙間から数名の女子が中を覗いていた。

何のデザインも施されていない白色の寝間着を着たレイヴンは先ず、身の回りを確認した。

パイロットスーツはある。しかしその他身に付けていた拳銃やナイフは全て押収されていた。

「目、覚ましたみたいよ」

「うそ、見せて見せて」

「ああ、あれが大人の男性の魅力なのかな。ウチの兄とは大違い」

保健室の外でひそひそと談笑していると突如、ドアが開き大量の女子生徒が部屋になだれ込んで来た。

ドアを開けたのは勿論、レイヴンだ。

自分について話していた女子を尻目にレイヴンは保健室を出て行き校内を徘徊し始めた。1日以上も寝たつきりであったのだから体がなまっつてしょうがない。

ふと、レイヴンは廊下の向こうから1人の男子が歩いて来るのを確認する。

（いつて、箒の奴あんなに怒る事ないじゃないか）

昨夜のデリカシー0の発言によって目一杯、竹刀で殴られた一夏は頭を撫でながら歩いていた。

「お前が織斑君だな」

「はい？」

聞き覚えの無い男性の声に頓狂な声を出して声の方を見ると昨日、一夏が助けたパイロットスーツの男がいた。

「お前が俺を助けたんだってな。感謝する」

「は、はい。あの……」

「名前か？ レイヴンと呼んでくれ」

内心、一夏はレイヴンを危険人物という疑念を持てずにはいられない反面、この学園で同性と会えたと言う喜びも捨てずにはいられなかった。

「で、レイヴンさん。俺に何か用ですか？」

「いや、ちょうど見掛けたんでな礼の一つくらい言っておこうと思っただけだ」

キーンコーンと予鈴が鳴る。

「じゃあ俺は授業があるんで」

そう言い残して一夏は自分の教室に向かってダッシュした。もし遅れるような事があれば千冬の出席簿アタクが待っているのだから。

ガラスとドアを開けて教室に飛び込むと真耶は愚か担任の千冬もまだ教室に来ていなかった。授業開始のチャイムは一夏がダッシュしている時にもう鳴ったと言うのに2人の教師の姿はない。

ラッキーと思いながら一夏は席に着いた。

「ちよつと、よろしくて？」

「へ？」

カバンから教科書を出して授業の準備に取りかかっていた所に突然声をかけられ素っ頓狂な声を出してしまう。

見ればそこには白人の少女がいた。腰まである長い金髪に少し口イルがかかっており高貴な雰囲気醸し出していた。

実際に良い家系のお嬢様なのかもしれない。

腰に手を当てて男性を見下したような目つきは『いかにも』現代的な女子であった。

知つての通り、ISは女性にしか起動出来ない。それ故に社会で

はかなり優遇されている。

しかしそれも行き過ぎて女性「偉い」と言う構図が出来上がっていた。

男性は対照的に冷遇されほぼ奴隷である。ただの労働力に過ぎない。

町でも知らない女にパシリをやらされている男なんてよく見掛ける。一夏はそれが堪らなく嫌であった。

「聞いています？ お返事は？」

「お、おう。んで用件は？」

一夏がそう聞くとその少女はわざとらしく声を上げた。

「まあ、なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのでそれからそれ相応の態度があるんじゃないかって？」

「……………」

一夏はこういう手合いのは苦手である。

ISを使える。それは国家の軍事力となる。ISは原則女性しか使用出来ない。

だからと言ってその力を振りかざすのは如何な物か？ いくら優れた操縦者でも自分が偉いと考えて力を振りまくのは力ではない、ただの暴力だ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

実際に一夏はこの少女が誰だか知らない。自己紹介の際にちゃんと喋っていたのだが一夏は千冬が担任である方がショックだった為、意識が完成にそちらに行っていた。

その少女は吊り目を細め見下したような口調で言った。

「わたくしを知らない？ セシリア・オルコットを？ イギリス代表候補生にして入試主席のわたくしを？」

ビシッと突き出した指が鼻に当たる程近い。

「ああしらない。それより一つ質問していいか？」

「ふん、まあ下々の人間の要求に応えるのも貴族の務めですわ。いいでしょう」

「代表候補生って何？」

「がたたツとクラスの数名がずっこけた。」

「あ、あ、あ」

「あ？」

「あなた本当に言ってますの！」

「おう」

怒りが一周して冷静になったのか指を額に当てて何やらブツブツ言っている。

「信じられせんわ。極東の島国はこんなにも無知だなんて、テレビがありませんの？」

「失礼なテレビはあるぞ。見ないがな。で、代表候補生って？」

「国家代表IS操縦者のその候補生、つまりエリートですね。あなた……単語から想像したら分かるでしょう？」

「そう言われればそうだな」

「そうエリートなのです！ 本来ならわたくしのような選ばれた人間という事がどれだけ幸運な事か……その現実を少し理解していただける？」

「それはラッキーだ」

「あなた、バカにしていますの？」

向こうの言った事に相槌を打ったがセシリアは少し不満げな表情である。

「まあわたくしは優しいですからISについて何か分からない事があれば……泣いてお願いするのであれば教えてあげてもよろしくですよ。何と言ってもわたしは入試の際に唯一教官を倒したのですからね」

唯一の部分だけやけに強調して言っていたようだが、一夏にも教官を倒した覚えはあった。いや、倒したと言うより教官が勝手に突っ込んで自滅したと言った方が適切かも知れない。

「入試ってISで戦うやつだよな？」

「他に何がありますの？」

「俺も倒したぞ教官」

その瞬間、ピキツと言う氷にヒビが入った様な音が聞こえた気がした。

「あ、あなたも教官を倒したと言うの！」

どこかのプライドが震えたらしくすごい剣幕であった。

「わたくしだけと聞いていましたが」

「女子ではってオチじゃねえの」

セシリアがまた何かを言い出そうとした時だ。ようやく教室に千冬が入って来た。

弟の一夏だけが千冬の疲れた表情を見抜き心の中で首を傾げていた。

「授業は始まっているぞオルコット、席に着け」

「この話しはまた後でしますわ。逃げない事ね」

さつきまで騒がしさが嘘のように教室は静まり返っていた。

「さて、まずはクラス代表を決めるとしようか。自薦他薦は問わない誰がいるか？」

クラス代表と難しい言い方をしているが畢竟するに級長の事である。

再来週に行われるクラス代表決定戦に出場したり生徒会にも顔を出さなくてはならない。普通の高校生なら面倒くささから逃れたい為に他薦の嵐となるだろう。

「はい、織斑くんを推薦します」

1人の女子が一夏を推薦する。

「え、何で俺が」

「自薦他薦は問わないと言った筈だ推薦される覚悟はしている」

「……はい」

「他に誰もいないのか？ 居ないのなら無投票という事で織斑になるが」

「納得いきませんわ！」

突如、甲高い声が教室に響いた。

「クラス代表というのでしたらこのクラスのトップの実力者が出るのは必然、そしてそれがわたくしですわ。物珍しいからと言って極東の猿にやらせるなんて。わたくしはISの修練を積む為に来たのです。サーカスをする気はありませんわ」

このままセシリアにクラス代表を引き受けてくれるのであれば一夏としては何の問題もない。願ったり叶ったりだ。

しかしここまで言われる筋合いはなかなかり癪である。

「ただでさえ文化としても後進的な国で過ごさなくてはいけないなんて、耐え難い苦痛で——」

流石の一夏もここまで言われては黙ってはられない。

「イギリスだって自慢の国じゃねえだろ。世界一不味い飯で何年覇者だよ」

「あなた、わたくしの祖国を侮辱しますの！」

「そんなつもりは——」

バンッとセシリアは机を叩き、一夏に鋭く指差した。

「決闘ですわ」

「いいぜ、四の五の言うよりわかりやすい」

両者の熱が未だ冷め切らぬその時である。

また教室のドアが開き何者かが顔を出した。ここにいる皆が真耶だと思っていたがその考えは見事に裏切られた。

「すまない織斑先生、トイレがどこか教えてくれるか？」

教室に入って来たのはレイヴンである。

多くの謎に包まれたその男の噂はIS学園全体にまで広がっていたが姿を見たのが初めてという生徒は大半であった。

祖国が侮辱されたとあって苛立ちを覚えていた所に知らぬ乱入者が現れたのだ。

セシリアの怒りの矛先は一夏からレイヴンにも移っていた。

「あなた何者ですか？ 授業中に教室に入ってきて来るなんて随分と常識がありませんのね」

「お前も言えた立場か？ ここに来るまでにお前の声が聞こえて来

たぞ」

レイヴンとしては普通に言い返したつもりなのだがセシリアからしてみれば、揚げ足を取られた気分で、更に憤りを積もらせていた。「祖国の侮辱だのエリートだのひよっこが偉そうに吠えるな耳障りだ」

「レイヴンさん、ちょっと言い過ぎだろ」

余りに抜き身なこの一言がセシリアの沸点を突破させてしまった。男のレイヴンにこのような言われ方をされセシリアの自尊心に明確な傷が付けられた。顔を微笑ませてはいるものの、目の奥が笑っていない。

クラスメートはセシリアがただならぬ雰囲気醸し出していることを察しておきながら『この方が面白そう』という理由で放置した。「レイヴンさんですわよね？」

「ああ」「一応聞いておきますけど、IS適性はお持ちかしら？」

「知らん」

「織斑先生、どうなんでしょう？」

「レイヴンはIS適性を持っている。ただしE判定だ」

E判定と聞いてセシリアは笑った。

適性の低さを嘲笑する笑みではなく少なからずIS適性を持っている事に対してだった。

「決闘ですわ」

「は？ 俺との勝負は？」

「いいハンデですわ。2人まとめて跪かせてあげますわ」

（何なんだこのプリンシバルのような女は）

「レイヴンさんよろしいですか？」

「一向に構わないが、織斑先生」

「許可する。勝負は一週間後の月曜、放課後第3アリーナで行う以上。あとトイレは保健室の隣りだ。さて授業を始めるぞ」

一夏は腑に落ちない様子で席に着いて教科書を広げた。一週間後までに専門的知識は最低限頭に入れておかなくてはと心に決め改め

て気を引き締めた。

その日の放課後、つい思った事を口にしてしまいセシリアを怒らせてしまったレイヴン。今は保健室で千冬と真耶にISについていろいろと教わっていた。

「ここまでで何か質問はありますかレイヴンさん」

「ない」

「レイヴン、相手が代表候補生とわかって言ったのか？」

一旦、ISの説明が終わった所で千冬が気になっていた事を聞いた。

「そうだ、確かに他の生徒よりはかなりの訓練を積んでいるようだが、それだけだ」

「ほう……」

「所詮は15歳の小娘に過ぎない」

「大層な口を聞くじゃないか」

千冬は研ぎ澄まされた刃のような眼光をレイヴンに向けていた。千冬の目から見ても真耶の目から見てもレイヴンはただのパイロットではなかった。

29歳とパイロットとしては若いがレイヴンには言葉にし難い風格があった……。

所変わって一夏はと言うと、幼なじみの箒と共に夕飯を取っていた。

「なあ箒、ISの事教えてくれよ」

「下らない挑発に乗るからだ」

「そこを頼む」

両手を合わせ頼み込むが箒に反応はない。

「キミ、噂の子だね」

そこへ話し掛けて来たのは名前も知らない女子であった。リボン

の色が違うので一夏は三年生だと判断した。

「はい、そうですけど」

「ISについてならわたしが教えてあげようか？」

「じゃあ、ぜ——」

是非と言おうとしたが、それは箒が机を叩く音で遮られてしまう。

「結構です。私が教えますんで」

「キミ一年生でしょ？ わたしの方が上手く教えられると思うな」

「いいえ、私は篠ノ之束の妹ですから」

箒を折れんばかり握り締めてその言葉を吐き出した。天才学者篠ノ之束の妹だから手厚い保護を受けるのは箒自身、堪らなく嫌なのだ。

「あの、篠ノ之博士の……！ ならいいかな」

その三年生は束の名を聞いてあっさりと引き下がった。

「えっと……お前が教えてくれるのか」

「そう言っている。この後、道場に来い一度腕がなまっていないか見てやる」

そんなやり取りがあり、一夏と箒は現在剣道場にいた。道場の中からは竹刀を打つ音が響きそれに伴い、気合い溢れる箒の声も道場にこだました。

「うわあっ……！」

箒の面を受けて一夏は尻餅について倒れる。

「何故だ。何故ここまで弱くなっている！ 中学は何部だ！」

「3年間帰宅部の皆勤賞だ」

バシイと竹刀で頭を叩かれた。

「それよりこれがISと何の関係が——」

「鍛え直す……」

「え？」

「鍛え直すと言っている。IS以前の問題だ！」

「いや、だから俺はISについて——」

「それ以前の問題だと言っている！ 毎日放課後三時間練習だ！」

だいたいISならまだしも男が女に負けて悔しくはないのか！」

「そりゃあ悔しいけど」

「では練習だ！」

「あつ、おい！」

それだけ言い残し箒は道場を去って行った。昔は一夏の圧勝だったが今は完全に逆になっている。

一夏は立ち上がると面を着けて竹刀を振ること100回、顔は暁の雲のように赤く火照り、炎のような熱い吐息を何度も何度も吐いていた。

「今日はこれくらいでいいか……」

竹刀を片付け、一夏は道場を去った。

翌週、遂にセシリアとの決闘の日がやって来た。ちなみに一夏と箒がこの一週間、やっていたのは剣道だけである。

「なあ箒。ISの事教えてくれるんじゃないかったのか？」

「……………」

ぷいと箒はそっぽ向いた。

「目をそらすな」「仕方ないだろう。お前のISもまだ届いていないのだし」

「そうだけど基本的な知識とかあっただろ」

「織斑君、そこにいたのか」

声が出た方を見ると、ISスーツを着たレイヴンと真耶と千冬が歩いて来ていた。

「織斑さんの専用ISが今届いたので準備して下さい」

「え、はい？」

「早く！」

箒、千冬、真耶の声が重なった。

世界初の男性IS操縦者という事により国家側から新しいデータ

を取れるかもしれないという理由により、一夏に専用機が与えられる事になった。

悪く言えば実験体である。

真耶がピットのドアを開けて中に入ると薄暗いピットの中でも輝きを失う事なく純白の機体が座っていた。

「それが織斑くんの専用機『白式』です」

「よし織斑、動きは実践で物にしろ」

ISスーツに着替えた一夏は白式に座るように身を寄せる。

「起動はシステムが最適化してくれる。気分は悪くないか？」

「大丈夫」

白式のハイパーセンサーは千冬の声が僅かに震えている事を察知した。

——心配してくれてるんだな千冬姉。

「筭、行ってくる」

「ああ、勝ってこい」

カタパルトが開き白式を駆る一夏は勢い良くアリーナに躍り出ると、空中には青い機体“ブルー・ティアーズ”に身を包んだセシリアが空中に浮いていた。

「流石に訓練機ではないようで安心しましたわ」

再びカタパルトの射出音が聞こえると量産機“ラファール・リヴアイヴ”に搭乗するレイヴンが現れた。

「あら、レイヴンさん。そんな機体で勝負するつもりですか？ 舐められたものですわね」

（アモーにも言われたな……）

「2人とも逃げずに来た事は誉めてあげますわ。だからチャンスをおあげますわ。今ここで許しを乞うと言うなら見逃してあげてもよろしくてよ」

「悪いがそんなのはチャンスって言わないんだよ」

「そう……」

セシリアは目を細め青い砲身をしたライフル“スターライトmk

？”を構えた。

——敵、エネルギー弾装填完了。

「ならばここで終わりですよ！」

まさに刹那、セシリアは瞬間的に2発のエネルギー弾を2人に発射した。

一発のレーザーは一夏の白式の肩の装甲を奪い、もう一発はレイヴンのリヴァイヴにかすりもせず、流れて行った。

レイヴンはスラスターを前面に噴射し勢い良く後退しアサルトライフルを2丁呼び出し、手に取った。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲で！」

次々に放たれるレーザーを一夏は回避仕切れず、何度も被弾しシルドエネルギーは面白いくらいに減って行き、警告を告げるアラームは絶え間なく鳴り響いた。

それに対してレイヴンは最少の動きで最善の回避法を瞬時に見極め、セシリアの放つ弾幕には未だ一発も触れていなかった。

（さて、どうしたものか。あの少年を使って弾切れを狙ったがISには弾切れの概念が薄いようだな）

一度セシリアが射撃の雨を止めるとブルー・ティアーズの特殊装備のビットが射出された。

4機のビットは2人を取り囲み四方八方から狙い撃つ。

（くそつ、俺が白式の性能について行けてないのか。何か装備は）
ディスプレイを見詰め何か武器はないかと探していると、名称不明と記された物理剣が一本だけあった。

「無いよりはマシか」

一夏はブレードを呼び出し右手に握った。

「中距離射撃型のブルー・ティアーズを前にブレード一本だなんて笑止ですわ」

一夏の貧相な装備を嘲笑っているとセシリアの背後からアサルトライフルの弾丸が降り注ぎ、エネルギーを持っていかれた。

険しい顔をしたレイヴンはそのままセシリアに急接近すると彼女の周りを飛び回り、アサルトライフルによる攻撃を加えた。

「不意打ちとは卑怯な！」

苦虫を噛み潰した表情を浮かべたがレイヴンは無言のまま攻撃を続けた。

動きのキレ、射撃精度、回避運動、どれを見ても今日初めてISを動かした人間とは思えぬ程、ハイレベルでまとまっていた。

「邪魔ですわよ！」

ビットを一度呼び戻しレイヴンの背後から一斉掃射した。が、この攻撃も読まれレイヴンはスラスターを真横に噴射する事でビットの攻撃をかわした。

「うおおおっ！」

セシリアの意識が完全にレイヴンに行った所で一夏はブレードを上段に構え突進した。だが、セシリアは一夏の攻撃を見透かし、加虐的な瞳で一夏を見下ろしスターライトmk?の引き金を引いた。超音速で迫るレーザーを剣では落とせない。ここであの一撃をくらうような事があれば本当に後が無くなる。

（やばいッ！）

ギョツと目を瞑り、レーザーの攻撃に備えるがいつまで経っても何の衝撃も来ない。

ゆっくりと目を開けると一夏はレイヴンに首根っこを掴まれギリギリの所でセシリアのライフルを回避していた。

「バカかお前は、正直に真っ正面から突っ込んでどうする」

「じゃあどうするんだよ」

「あの女はオービットを射出している間、ライフルを使用出来ない。俺がオービットを引きつける。その間に切り込め、出来るな？」

「ああ」

「いやあ、凄いですね織斑くんは、ISに乗るのが二度目とは思えませんよ。才能ありますね」

管制室のスクリーンにでかかど映し出されている一夏達の戦闘を見ながら、真耶は正直な感想を述べた。

一方、千冬の方がいつになく真剣な表情でレイヴンの動きを凝視していた。

あの男が何者でかつてどこの様な事をして来たかは今はどうでもいい。

昨晚まで起動すらまともに出来ず、今朝になってやっと動かす事が出来るようになった者の動きとは到底思えなかった。

「レイヴンさんを勝負の参加を許可したのは力量を計る為ですよね？」

「そうだな。山田先生、レイヴンの実力をどう見る？」

「あの人は実力の半分も出していませんね。いえ、出せないんですよ？」

「そう、リヴァイヴがレイヴンのあらゆるステータスについて行けてない」

「でも、早く試合を終わらせないとレイヴンさんの適性では——」
アリーナからの爆音によって真耶の言おうとした事は遮られ、同時に画面へと視線を注いだ。

ブルー・ティアーズのビットを引きつけていたレイヴンがビットを一機破壊する事に成功したのだ。

右手には変わらず、アサルトライフルを持ち、左手にはショットガンを握っていた。

頭上から降るレーザーを右へ回避すると間髪入れず、別のビットがレイヴンを狙撃する。

しかしそれも上半身を捻る事で紙一重で避け、青いレーザーはまたもや空を流れた。

最後に背後からビットが迫り、レイヴンのがら空きの背中を狙うが、銃口にアサルトライフルの弾丸を撃ち込まれ暴発した。

残りは二機となった。ビットはレイヴンを左右から挟み込みレーザーを放とうとしたその刹那、レイヴンは両手を広げ左右に握られている銃の引き金を引く。

散弾はビットを蜂の巣に変え、アサルトライフルの弾丸はビットを貫き破壊した。

ブルー・ティアーズのビットは全て破壊した。セシリアとしてもこの結果は予想を遥かに上回る事態であった。意識を面前に戻せば一夏がブレードを振り上げているのだ。

「終わりだッ！」

「ふっ、おあいにく様」

腰部にあるスカート状のアーマーが開き二基の突起が展開された。「ブルー・ティアーズは六機ありますのよ！」

発射されたレーザーではない、ミサイルであった。

回避が間に合わない距離からの発射、轟音がアリーナに響き渡った。

「一夏っ……！」

管制室で見守っていた筈が思わず叫んだ。

「——ふん」

千冬は少し笑みを浮かべた。

「機体に救われたなバカ者」

まだ僅かに漂っていた煙が弾け、その中心にはあの純白の機体が立っていた。

そう真の姿で——。

——初期化が終了しました。最適化を確認、ボタンを押して下さい。

純白の機体“白式”の背中には翼を模したようなバックユニットが備えられ、薄ぼんやりと光を放っていた。

神々しくスラスターを広げ、一夏は確認のボタンを押した。

そして一夏の手に握られてあったのは名もないブレードではなくちゃんとした名称が記載されていた。

近接特化ブレード“雪片式型”

（雪片……千冬姉が使っていた剣……）

「あなた、まさか今まで初期状態で戦っていましたの！」

「俺はつくづく最高の姉を持ったよ」

『織斑君』

突然、プライベートチャンネルでレイヴンから通信が入って来た。

『悪いが俺はここまでだ。後は頼む』

レイヴンがそう言っていると、通信は切れリヴァイヴの機能がその場で停止した。

E判定で無理をした代償である。

一夏はリヴァイヴが動かなくなつた事を確認すると雪片を両手で握つた。

刀身は蒼白のエネルギー体となり、雪片を垂直に立てた。

「守られるだけの関係はもう終わりだ。俺は家族を守る」

「は？ あなた何を言って……」

「先ずは千冬姉の名前を守るさ」

「だから何を……ああもう！ 面倒ですわ！」

セシリアはスターライトmk?を一夏に目掛けて斉射する。

最適化が完了し手足のように動く白式なら今の一夏なら回避は造作もない。

スラスターを噴射し、白い炎を吹き上げ一気にセシリアの間合いを侵略すると同時に振り上げた雪片を上段への袈裟払いを放つ。

——が、その斬撃が当たる直前に決着を告げるブザーが鳴り響いた。

『試合終了。勝者、セシリア・オルコット』

「あれ？」

一夏もそして目の前のセシリアも頭に疑問符を浮かべポカンと阿呆のように口を開いていた。

管制室で見守っていた篤と真耶も同じように。

「やれやれ」

ただ1人千冬のみが額に手を当て首を横に振っていた。

何が起こったのかわからないまま試合が終了し結果的に一夏、レイヴンのタッグは負けた――。

クラス代表決定戦（後書き）

次回はジノーヴィーとアグラーヤが出るよ！

世界の迷走（前書き）

テストがあつて更新が少し遅くなりました。

テストで点がとれてる自信がない……大丈夫かな……。

さて、今後のACとISをどう戦わせて行くか悩みますね。

世界の迷走

中東のある米軍の駐屯基地――。

そこは現在、アラブで起こっている反乱などを鎮める為に出来た基地である。

しかしその反乱を鎮める為に用意された戦力はどう考えても異常であつた。

歩兵が500人に戦車が50台、武装ヘリと戦闘機が10機ずつとISが2機投入されているのだ。

ここらの地域の反乱ならIS1機でもおつりが来る。

しかし米軍がここまでの戦力を投入したのは諜報部の情報が引き金となつていた。

――2機の不明機体を発見した。

という一言が原因である。最初は誰もが信じようとはしなかったが、その情報を裏付ける証拠となる写真も出て来る事により諜報部の下らない虚言ではない事が露呈した。

その機体はどちらも巨大でISとは全く別物であると判定された。不気味な所属不明機体、中東地域での情報が有力であつたが故にこうして、この世界の絶対戦力であるISを投入する結果となつたのだ。

しかしその不明機体の存在は兵の士気に関わるという理由により一般兵には全くその事を知らせていない。

今回の部隊で知っているのは2名のIS操縦者と部隊長のみとされている。

月も雲に隠れ、駐屯基地を照らすのは室内のネオンの光だけで一歩外に出れば辺りは完全な闇に包まれていた。

生ぬるい風が吹き、何とも言えない緊張感が兵士達を縛り付けていた。

それは指揮官のただならぬ雰囲気を感じた兵士達が良からぬ噂に

発展させ、兵士から兵士へと飛び火して行っただからだ。

ある者は宇宙人を相手にするのだのと勝手な想像を膨らませ、またある者はイスラエルの新型ISの暴走などと言う戯れ言を虚構していた。

しかしその中でも2人のIS操縦者は凜とあり、不気味な噂を弾き返すかのように振る舞っていた。

夜間の警備は一層、厳しくなっていた。

例の操縦者2人の出で立ちに当てられ、数十名の兵士がなんとか士気を取り戻し警備にあたっていた。腐ってもここは紛争地区、どこかの国のスパイが弾薬庫に爆弾を仕掛けに来る可能性は十分にあった。

午前2時を回り、駐屯基地はシンツと静まり返っていた。

だが、その静寂を切り裂くような砲撃音が大気を揺らした。兵士が全員が目覚め即座に銃を手に取り、持ち場に着こうとしたその瞬間、基地の弾薬庫は爆炎と共に吹き飛び鉄の破片を辺りに撒き散らした。

空から再び赤く燃え盛る炎のような砲弾が降りかかり、今度は戦車を破壊された。

さっきの砲弾の後に続くかのように曇天の空から2機の人型のロボットが降下して来る。体長は10mはあり、どちらも黒いカラーリングが施された機体で一方は両肩にグレネードランチャーを備え、右手にライフル左手にブレードを装備した“デュアルフェイス”と称する機体である。

そしてもう一方の機体は肩にチェインガンとミサイル、右腕にシヨットガンを左腕にはグレネードランチャーを装備した“ジオハーツ”と言う名の機体であった。

既にその2機は自分の役割を把握している為、襲撃して基地に乗り込んでからの行動も早かった。

デュアルフェイスは地上を滑走しながらグレネードランチャーを発射し建造物という建造物を破壊して回った。

ジオハーツの方は戦車やヘリの相手をしていた。ブースターを噴射し空に飛び上がり空中からチェインガンとショットガンの雨を降らせ、その火力に戦車はなす術も無く破壊された。

『アグラーヤ、そちらに2機のISが向かっている。迎撃を頼む』
『了解……』

アグラーヤは迎撃ミサイルを展開しまた敵戦力の掃討を再開した。通常戦力などもはや屑鉄に等しく、部隊の戦力は瞬く間に失って行った。

すると、駐屯基地の上空に2機の機影が姿を現した。

「ようやくお出ましのようだな」

ISの出現にアグラーヤは嬉しそうな笑みを零し操縦桿を握り締めめた。

敵方に話し合うような穏やかさは残っておらず、アサルトライフルをジオハーツに向けて狙いを定めていた。

ブースターを拭かし、巨体に似合わない速さで地を駆けると空中から弾丸の雨が降り注いだ。

しかしアグラーヤの腕ならば回避する事に難は無く。ブースターを巧みに使い右へ左へ飛び弾丸の雨を回避していた。

反撃に出ようと機体を半回転させ後方に引きながら迎撃を行った。

ショットガンで牽制しつつ、ハンドグレネードを1機に的確に命中させ、シールドエネルギーを確実に削いで行く。

トドメにミサイルを3発撃ち込み、1機を撃墜した。

絶対防御の恩恵を受けている為、パイロットは死にはしていないだろうがああISは確実に大破した。

人とはほぼ同じサイズの弾丸がジオハーツのチェインガンから再び斉射される。

機体の小ささを利用し弾幕の中をかくぐり反撃としてアサルトライフルの弾を見舞うが一向に命中しない。

ジオハーツは左に旋回しつつISとの距離を離し瓦礫の中を滑走

しトリプルミサイルを撃つ。

そしてそれを追うかの様にグレネード弾が放たれた。アグラーヤの一瞬の隙を突いた攻撃は決定的なもので、最後の1機を地に沈めた。

『ISの掃討を完了した。ジノーヴィー例の物はあったか?』

『どうやらこの基地には無いようだ』

『ジノーヴィー、疑うつもりは無いが……本当にこの世界に旧世代の遺物が入り込んだのか?』

『それは間違いない』

『……お前がそう言うなら信じる』

米国の駐屯基地の襲撃事件は翌日には大々的に公表された。

現行世界最強の兵器を2機も撃破され基地は崩壊。世界のIS操縦者の胸には恐怖が色濃く残り、そして世界には癒えぬ火傷として傷を残して行った。

さて、所変わってここはIS学園のピットの中。その場には胃をチクチクと突くかのような空気が流れ一夏はキリキリと腹を痛めていた。

「あれだけ持ち上げておいてこの様か。大馬鹿者」

「すいません、あの……織斑先生」

「何だ」

「俺、何で負けたんですか?」

「まあ今回はぶっつけ本番という悪条件だった為機体の特性を熟知出来なかったからな。特別に教えてやろう」

「はい……」

「お前の白式は言わば欠陥機だ」

「欠陥機!?!」

「すまん、言い方が悪かった。元々ISは完成された兵器ではない

からな欠陥もなくでもない。お前のはシールドエネルギーを攻撃に回しバリアを無効化させる特性がある」

それを聞いて一夏はふと、ある事を思い出した。雪片式型で切り込む寸前、エネルギーが急激に減って行った事に。

「お前のは少し攻撃に特化した機体という事だ。今日はもう帰って休め」

「は……はい」

一夏と箒がピットから出て行ったのを確認すると千冬と真耶の視線は一斉に壁にもたれているレイヴンへと向いた。

「レイヴン、お前は何者だ？」

「質問が唐突過ぎないか織斑先生」

「回りくどいのは無しにしよう。ISの操縦が初めてであればどの動きが出来る訳がない。お前は昔何をしていたんだ？」

パイロットである事は明白、だがあの機体を使ってどういう事を職業にして来たのか、千冬はそれを問いていた。

“良い奴ら”という認識はしているがレイヴン自身まだIS学園の面々を信用仕切っている訳ではない。

しかしここまで頑なに壁を作る必要はないと考えていた。

「……俺は昔、傭兵をしていたそれだけだ」

初めてレイヴンの素性を聞いた2人の反応は意外にも薄かった。

「なるほど傭兵か、あの回避運動は経験と言うやつだな？」

「これ以上喋る気はない。失礼させてもらう」

壁から離れレイヴンはピットから出て行った。その足取りは妙に覚束ないものであったが、千冬はそれを追求せず見送った。

「ゲホッ……ゴホッ……！」

ピットから出た途端、レイヴンは咳き込み壁にもたれかかった。

「ぐッ……ゲホッ！」

口を押さえ咳払いをするとレイヴンの手中には血溜まりが出来ていた。

口の両端から垂れた血を拭くとレイヴンは壁を伝いながら保健室

を目指して歩き出した。

ザアツと熱めのシャワーを全身に浴びて今日掻いた汗を流しているのはイギリスの代表候補生、セシリア・オルコットである。

体のバランスが良く流線型のボディは彼女のちょっとした自慢である。

流石と言った所か全身は無駄なく引き締まりそれがセシリアの美貌を更に高めていた。そこら辺りのアイドルに負けぬ程、いやセシリアの方が確実に勝っているだろう。

髪を伝い水滴が排水口に流れて行くのを見つめながらセシリアはある男の事を思い出していた。

（最後の一撃、あれが当たっていればわたくしは……）

そんな事を思いながら雪片式型を構え自分に突っ込んで来た一夏の顔を思い出していた。

「織斑一夏……」

その名前を呟くと自然と顔が赤くなり全身が火照りを覚えた。

セシリアの父親はだらしのない男であった。

名家に婿として入った為、いつもセシリアの母親の顔を伺い、ゴマをするような態度であった。

その行動が母に取っては鬱陶しく会話を拒絶しているように見えた。

そんなある日、両親は他界した。

列車の脱線事故である、何故あの時に限って2人は一緒に居たのか。

疑問ではあるが既に故人となった両親はもう戻って来ない。セシリアには莫大な遺産が残され、同時に金の亡者がハエのようにたかった。

両親の遺産を守るためあらゆる事を必死に勉強しその際にI.Sの

テストパイロットとなりA判定をもらった。

そしてこの国に来て出会ってしまったのだ理想的な瞳の少年に。何者にも媚びる事のない真っ直ぐな瞳、それはセシリアの父は正に対照的であった。

——知りたい、もっと織斑一夏を知りたい。

セシリアの中にはもう、どうなっても構わないという恋情が熱く燃え、恍惚と走り出していた。

シャワー室には水が滴り落ちる音が延々と響き渡っていた。

セカンド幼なじみ（前書き）

今回は短めです。

次回あたりにクラス対抗戦かな。

また長くなりそう。それにしてもレイヴンの出番が少ないなあ……。

セカンド幼なじみ

レイヴンが特攻兵器の襲来を逃れこの世界にたどり着いてから2週間が経過して最近、彼はよく思う事があった。

暇だ、と。

平和な暮らしそして朝昼晩全て食事が出され保健室で適当に寝たり、校内を徘徊しているだけで良いのだ。

以前なら徹夜は当たり前で常に気を引き締めて集中を途切れさせず、食事も毎日ある訳ではなかった。

平和という点においてはレイヴンは何の不服も無いのだがやはりこの暇はどうにもならない。

現在レイヴンはIS学園の校舎をふらふらと目的も無く歩いていった。

暇なレイヴンが最近見つけたやる事の一つ、人間観察である。

しかしこれにもいささか飽きが来ていた。

「レイヴンさん、ここに居たんですか」

話しかけて来たのは真耶であった。

「どうした？」

「これから第3アリーナでISの訓練があるんですけど暇なら見に来ませんか？」

ISの訓練と聞いてレイヴンの瞳に少し興味の色が宿った。

「お言葉に甘えさせてもらっ」

少なからずレイヴンはISに興味があった。ACとは全く違う起

動兵器であり、自分の居た世界にあったパワードスーツと比べて桁外れの性能に。

真耶に連れられセシリアと戦った第3アリーナに向かった。アリーナの中心には既に一夏のクラスの生徒が4列の横隊に並んでいる。

「山田先生、遅かったな……………レイヴンも来たのか」

「誘われたんでな」

レイヴンが顔を出すと生徒の方からひそひそと噂をし出す者が現れたり先日 of クラス代表決定戦について話す者がいた。

「この前IS動かして戦ってた人だよねビューンって」

「そうそう、何か昔は傭兵だったらしいよ」

「傭兵ッ！？　　うわゝ前時代的……………」

「騒ぐな馬鹿者、これからISの訓練に移る。織斑、オルコット、ISを展開しろ」

「え……………何で俺が」

「専用機持ちの方が出すのが早い。はやくしろ」

そう言われ一夏は腕を前に突き出し、白式の待機状態の姿であるガントレットを握った。が、反応は無く隣りにいたセシリアはISの展開を終えていた。

「どうした、早くしろ」

一夏は両手を上に上げイメージを固め心の中で叫んだ。

（来い、白式！）

全身が白光に包まれたその刹那、一夏の全身を白い機体が覆っていた。

変わらない白の煌めきはある種の威厳を兼ね備えていた。

「よし飛べ」

言われてセシリアは直ぐに空へ舞い上がり遙か上空で静止している。白式を駆る一夏もまた空へ飛び上がりセシリアに追い付いた。

「織斑、スペックだけならセシリアの物よりも上だぞ。もっとスピードを上げる」

「でもなあ、空を飛ぶ感覚がまだあやふやなんだよな」

『イメージは所詮イメージですわ一夏さん。自分が考えやすい方法を模索するのが先決ですわよ』

あのクラス代表決定戦からセシリアの様子が随分と変わった。一夏へ妙に友好的になりISの事に関してもよく話してくれる。

「……山田先生」

「はい？ 何ですかレイヴンさん」

「女子のＩＳスーツだが……あれは誰の趣味だ？」

「あれは世界共通ですよ。それがどうかしましたか？」

「昔、所属していた組織でスク水ニーソが流行ったのを思い出しただけだ」

——どんな組織だ。

と、言いたげな顔を千冬と真耶はしたが下手な詮索は避けておいた。

「次は下降と完全停止をやってみろ」

「では一夏さん、お先に」

そう言いセシリアの『ブルー・ティアーズ』は高速で下降して行き地面スレスレの所で態勢を直立に戻し砂埃を巻き上げ、急停止した。流石は代表候補生と感心し一夏もそれを真似て地面に向かって猛スピードで突進した。

地面が近付いて来たと思い、セシリアのように態勢を元に戻そうとしたが――。

「あれ……どうやるんだっけ」

轟音がアリーナに鳴り響きフィールドの真ん中には大きな穴が空いていた。

「馬鹿者、誰がグラウンドに穴を空けると言った」

（……やはりコイツは下手だな）

胸の内でレイヴンがそう呟いた。
地面に勢い良く突っ込んだ一夏だがISのシールドのおかげで怪我はない。

だがクラスの面々のひそひそ笑いに心は大怪我である。

「一夏さん、お怪我はありませんか？」

展開していたブルー・ティアーズを納めてセシリアは一夏が墜落した場所へ向かった。

「お怪我は？」

「ああ、大丈夫」

「ISに乗っていて怪我などする筈がないだろう」

「あら、篠ノ之さん他人を気遣うのは常識ですよ」

「猫かぶりは何を……」

「鬼の皮をかぶっているよりはマシですわ」

（……何だろっ日に日にコイツ等、険悪になってるような……）

「いつまで呆けている。授業は終了したんださっさと上がって来い」

「は、はい」

「あ、それとだ。その穴はちゃんと埋めておけよ」

「わかりました……はあ……」

「ここがIS学園ね……アイツも今はISの操縦者か……覚えてるかなアイツ」

ボストンバックを肩に担ぎ右手には何やらメモ帳らしき物を握り校内をうろろする少女がいる。

「ああ、もう案内係りくらい置いときなさいよね。事務室でお待ちしてますってその事務室がわかんないんでしょうが」

ブツクサ文句を言う少女は東洋的な面貌をしているが日本人ではなくやや吊り目で艶やかな黒髪が特徴の中国人である。

ツインテールが特徴的で低身長とお粗末な胸がその少女を幼児体型に一層、引き立てて見せて来る。

しかしその少女こそ中国の代表候補生の凰鈴音であった。そして一夏の幼なじみでもあった。

（つたく、あたしは政府の重要人物なのにもっと出迎えとかないわけ？）

頭の中で重要人物という単語を浮かべてみると鈴は少し口の端がつり上がった。

自分より何十倍、年上の人間がへつらい頭を下げて来るのは鈴として非常に気分が良かった。鈴は昔から『年を取っただけで偉そうにしている大人』が大嫌いだった。

それに『男に産まれただけで偉そうにしている子供』も嫌いな子供であつた。

男の腕力は児戯、女性のISこそ正義、それが鈴の思想である。

「だからお前の教え方が分かりにくいんだって。なんだよ『くいつて感じ』って」

廊下の門のから聞こえる男の声、間違いなく一夏の声だ。鈴の鼓動は急速し廊下は走り出す。

幼なじみに久しぶりに会えるのと考えるとまた鼓動が早くなる。

「いち——」

「失礼な私の教え方に何の問題がある」

「問題だらけだよ」

目の前を通り過ぎて行く男女。

——誰あの女、何であんなに親しそうななの。

石化したかのように固まり妙な冷たい感情がひしひしと湧き上がりそして、苛立ちを覚えていた。

それから事務室は直ぐに見つかった。

アリーナの向こう側な本校舎なのでそこに設置されていた。

唇を尖らせて不機嫌な顔をしながら入学の手続きを済ませる。

「はい、じゃあ凰鈴音さん手続き完了しました」

「あの織斑一夏って何組ですか？」

「あの噂の子？ 一組よ凰さんは二組だからお隣ね」

「じゃあ、二組のクラス代表の子の名前は？」

「聞いてどうするの？」

「クラス代表譲って貰おうかなって」

顔は笑っていたが鈴の顔には血管マークが3つ現れていた。

決戦！ クラス対抗戦 前編（前書き）

クラス対抗戦はやっぱり2回に分ける事にしました。
後編は戦闘がメインになると思います。

決戦！ クラス対抗戦 前編

「織斑くんクラス代表おめでとう！」

パーンと景気良くクラッカー鳴りテープが一夏へと降りかかった。みんなの期待が込められたテープは岩のような重さで一夏の肩にのしかかり精神をすり潰す気分であった。

クラスのみんなが開いてくれた祝勝会も一夏にしてみれば疲れの種の一つだ。

レイヴンも呼ばれているようだが彼は壁にもたれて何食わぬ顔でそこにいた。

一夏と一緒に戦ったという理由で呼ばれたようだがレイヴンとしては保健室で横になっている方が良い。

「……何で俺がクラス代表なんかに……」

「仕方ないだろう。オルコット君が何故か代表を辞退したんだから」

「レイヴンさん、変わってって言ったら変わってくれますか？」

「俺は生徒ですらない無理だ。何にせよなってしまったんだ。やり遂げるよ、暇なら訓練くらい見てやる」

ありがたいような無いような妙な気分である。確かに箒の擬音だけの指導とセシリアの精密指導に比べればマシな気はするが、今の一夏にはこれを笑顔で受け答える事など到底不可能な話である。そして、昼の授業から箒の機嫌なヤケに悪いのだが、相手にする程のエネルギーは残っていない。

何故女子はここまで騒げるのだろうか、と一夏は不思議そうな表

情を浮かべながら椅子に身を寄せて天を仰いだ。

「はいはい、新聞部の黛薫子、二年で副部長やってまーす。これ名詞」

一夏は名詞を受け取り、見てみると画数の多い漢字が並んでいる。書く本人はきつと大変なのだろう。

「じゃあ織斑くん、クラス代表になった感想をどうぞ。パンチ効いたヤツお願いね」

ボイスレコーダーをスイッチと押し付けて期待の眼差しを向けて来る。

「ほらほら、何かないの？」

「自分、不器用ですから」

「うわーお、前時代的。まあいいや、適当に捏造しとくし。じゃあ次はレイヴンさんね」

「何故俺が？」

「突然現れた謎の傭兵、カッコ良くない？」

「さあな」

「まあいいや、何か一言」

レイヴンはポリポリと頭を掻き、少し考えると押し付けられたボ

イスレコーダーにそつと言漏らした。

「俺は面倒が嫌いなんだ」

「うーん、なかなかパンチ効いてるからこれで良いや」

「……パンチ効いてたのか」

「はい、じゃあ最後にセシリア。何かコメントと写真ちょうだい」

「では、わたくしが何故今回のクラス代表を辞退したか——」

「長そうだからパス。写真だけ取らせてね。あと織斑くんとセットで握手とかして」

なんとマイペースな人だろう。

話が凄い速さで進み一夏はいつの間にかセシリアと腕を組んでいたのだ。

「じゃあ、 $78 \times 3 \div 9$ は？」

「へ……2……？」

「残念26でした」

パシャッとフラッシュがたかれ綺麗に写真が撮れた。

ややセシリアが頬を赤く染めているのだがそれに気付く程、一夏は敏感ではない。

一夏の祝勝会は夜中の10時まで続き、9時頃になればレイヴンはふらりと姿を消して保健室に戻っていた。

——バカ騒ぎも悪くない。

内心でそう呟くとベッドに寝転がると眠気が一気に襲い掛かり、レイヴンは眠りに落ちた。

翌朝の教室、一夏はいつも通り最も注目を浴びる自席に座り、教科書を机の上に置いて授業の準備を終えた。

近い内に行われるクラス対抗戦に出場する一夏に対する期待は大きかった。

出場するからには勝つという心意気なのが、何せ一夏の操縦技術は低くセシリアの懷に飛び込めたのも機体性能の高さによる所が大きい。

それに今度はレイヴンも居ない、完全に自分の力だけで戦わなくてはならない。

「ねえ織斑くん聞いた2組の転校生の事」

「転校生？ この時期にか」

「なんか中国の代表候補生なんだって」

中国と聞いて一夏は古い友人の存在が脳裏をよぎった。

「一夏さん、クラス対抗戦があると言うのに他の女子のお話をしている場合ではございませんわよ」

「お、おう。やれるだけやってみるよ」

「やれるだけでは困ります」

クラス対抗戦を優勝したクラスには学食のデザート半年分フリーパスが贈られるのだ。女子がやる気を出すのも頷ける優勝商品である。

しかし当の一夏からしてみれば自信のある返事を返す気にはなれなかった。

ISの基本知識でつまずいている訳だし最近では最初に動かした機体との一体感も薄くなっている気がして仕方がない。

「織斑くんが優勝したらみんなが幸せなんだよ頑張つてね」

「今のところ専用機持ちは一組と四組だけだし余裕だよ」

余裕、と言われても一夏は苦笑い気味に受け答えしか出来ない。

「——その情報古いよ」

やや高めの声が教室のドアから聞こえ視線がそこに集中した。

「二組も専用機持ちがクラス代表やる事になったから簡単には優勝出来ないから」

「鈴……何格好付けてんだ？ 全然似合っていないぞ」

「——！ う、うるさいわね一夏！」

「にしても久しぶりだな」

ヤケに親しそくに語り掛ける一夏に筈の不機嫌な視線が当てられるが、唐変木の一夏には全く気付かない。

「お前帰って来てたのか」

「そうよ、あたしもこのISが——」

バシンと出席簿アタックが鈴の頭に炸裂した。

「邪魔だ。教室に戻れ」

「千冬さん！」

「学校では織斑先生だ」

「は、はい」

シユンと縮こまり鈴はそさくさと自分の教室へと戻って行った。
そして何事もなかったかの様に授業が開始された。因みに今回の
授業も一夏はお手上げ状態であった。

昼休み、一夏は鈴とセシリアそして箒と昼食を取る為に学食に居
た。

「席どこか空いてねえかな」

左右をキョロキョロと見回しているとある学食の席にレイヴンが
1人座り昼食を取っていた。

「レイヴンさん隣りいいですか？」

「……ああ」

一夏と箒のメニューは変わらず鯖の味噌煮の定食。セシリアは Pasta、鈴はラーメンである。が、レイヴンの昼食は他とは一線を画していた。

白米に冷ややっこ、牛乳とデザートにヨーグルトと言う何から何まで白い物を食べていたのだ。

「レイヴンさんはいつものそんな昼食なんですか？」

「まあな」

「で、一夏。その子との関係をそろそろ教えてくれるか」

「あ、ああ。コイツは鈴、俺の幼なじみだ」

「何ッ！？ 幼なじみは私だろう！」

身を乗り出す箒を制して話を続けた。

「お前が転校して入れ替わりに転入したからな。お前はファースト幼なじみで鈴はセカンド幼なじみだな」

「そ、そうか私は最初の幼なじみか」

「それよりさあ、あんたクラス代表になったんでしょ？ ISの操縦あたしが見てあげよっか？」

「じゃあおね——」

『お願いしようかな』と言わせる前に箒とセシリアの声が割って入って来た。

「一夏は私が教えるんだ！」

「敵の施しは受けませんわ！　だいたい教えるなら専用機持ちのわたくしが適任ですわ！」

「幼なじみなんだし良いでしょうが。あたしも専用機持ってるし」

「私は一夏に教えてくれと頼み込まれたのだ！」

やいのやいのと言い合いが始まり一夏はそつと視線をレイヴンの方に向け、助けを求める眼差しを送ったが無視された。

「じゃあこの際一夏に決めてもらおうじゃないの」

「そうですわね」

「一夏、私とセシリアと鈴。誰に教えてもらいたいんだ」

一夏が最も恐れていた質問が来てしまった。誰か1人を選べば確実に気まずい空気になってしまうのは明確。だが逃げ道は存在しなかった。

「えっと……………レイヴンさんで」

「はあ！？　このバカ！」

3人の声が被ったのと同時に2発の平手打ちと1発のゲンコツが飛び、箒達はぶすツとした表情で学食を出て行ってしまった。

一夏としてはかなり平和的に終わる方法を選んだつもりだったが。

「織斑君」

レイヴンは少し哀れみを込めた声で言った。

「大変だな」

「はい……」

「訓練は見てやるから放課後アリーナに来い」

「はい……」

そして放課後、訓練は第3アリーナで行う事になりレイヴンはセシリアとの決闘で使ったリヴァイヴを装備し、一夏は勿論のこと白式であった。レイヴンと2人だけかと思っていたが、セシリアと箒もアリーナに来ていた。

「まず模擬戦をしようか。お前の力量がどれほどになったか見てやる」

「はい」

リヴァイヴは中距離射撃を主に攻撃を行う機体に対して白式は近距離格闘戦がメインの機体である。そして今回、レイヴンが使用する武器はスナイパーライフル一丁だけである。

加速、最高速度、旋回性能、運動性はどれを見ても白式が上で尚且つ、狙撃銃は懐に入り込まれる事に極端に弱く、何も出来なくなってしまう。

リヴァイヴが仮に後退しながら撃つても白式のスピードなら即座に間合いを詰められてしまう。機体性能なら白式が圧倒的優位に立っているのは代表候補生であるセシリアなら言わずとも理解していた。

だが、忘れてはいけけないのはパイロットの操作性であった。

「行きます」

背中のスラスターを噴射し白式は瞬く間に最高速に到達した。

これに対してレイヴンはスラスターを前面に噴射し、後退しつつ狙撃を開始した。

ここまでは一夏の予想通りである。

雪片を水平に構え、自分の間合いに十分レイヴンが入ると一夏は横から切り裂くように雪片を振り抜いた。

——勝てる！。

そう確信した次の瞬間、一夏は目を疑った。リヴァイヴを切り裂かんと迫る雪片に対してレイヴンは雪片の鏑にスナイパーライフルの銃口をぶつけて見事に雪片の一撃を制していたのだ。ISのシールドを切り裂く破壊力を持った雪片をかわす事は出来ても真っ向から受け止めに来るなど、一夏の計算には無かった。

（嘘だろ……）

一夏が最も恐れたのは今の形勢である。

スラスターを噴射しシールドエネルギーを雪片につぎ込めば押し切る事は、可能だろう。しかしそうすればエネルギーの残量は僅かとなる。

仮に後退、もしくは左右に旋回してもレイヴンのライフルが一夏に襲い掛かる。

一夏はレイヴンのライフルに向かって蹴り上げるもののその攻撃は虚しく回避されライフルの弾丸を受け、シールドエネルギーは半分も持つて行かれた。

（まさかスナイパーライフルにあのような使い方があるなんて……）

セシリアはどこか悔しそうな表情で一夏とレイヴンの模擬戦を見詰めていた。

一夏の突進からの大振り攻撃を何度も行ったが、さっき同様に受け止められるか回避されるかで1発も当てる事が出来ず、反撃をもらつ。その繰り返しのおかげで一夏は物の見事に完敗した。

「織斑君、お前はもつと回避に重点を置くべきだ。被弾率が上げればお前の雪片の使用出来る回数も自然と減る」

「はい……。でも回避つても難しいんですよ」

「ISの動かし方ならセシリア辺りにでも習えばいい。俺が教えられるのは戦い方くらいだ。……時間だな」

リヴァイヴの各所から蒸気が噴き出しセシリア戦の時の様にリヴァイヴは機能を停止した。レイヴンがISを稼働出来るのは長くて7分だけである。

「俺はもう上がるがお前達はまだやるのか？」

「あ、はい。俺はもう少し」

「わかった」

レイヴンはリヴァイヴから降りるとピットを通り、更衣室へ入った。

ISスーツを脱ぎ捨て、普段着となっている寝間着に手を伸ばした途端、突如として胸に苦しさを覚え咳き込んだ。

「ゲホツ……くっ……う！」

不気味な程に鮮やかな血を吐き出しレイヴンはその場にうずくまった。

「……肺を病んでいるんだな」

「一応、ここは男子更衣室だぞ織斑先生」

「……………。ISに乗ったからそうだったのか？ それとも元々か？」

「お前には関係ない。失礼させてもらう」

レイヴンはISスーツを手にかけて更衣室を後にしようと千冬とすれ違う。

「合って3週間弱の人間を信用しろとは言わないが、そこまで拒絶する必要はあるのか？」

「得体の知れない地で誰を信用しろと言っただ？」

吐き捨てる様に言いレイヴンは保健室へと戻ると千冬は腕組みを

して職員室へ帰って行った。『裏切られる事は傭兵の常である』あの高名な傭兵はそう言っていた。

レイヴンが去ってから一夏はセシリアと箒の2人を相手にISの訓練を行っていたが、それはもはや訓練という言葉を超えていた。

「ハア……ハア……」

「だらしな過ぎる一夏」

「だって2対1は無理だろ」

「一夏さん、わたくしはもう失礼させていただきますね」

セシリアもだいぶハードに動いていたが一夏のようにへたれていない、流石は代表候補生と言った所だろう。

一夏は白式を展開解除し肩で息をしながらピットに戻ってきた。レイヴンに回避を重点的に行えと言われた事を思い出しながらさっきの自分の動きを振り返ってみた。

攻撃は直線的で回避は左右への旋回かスラスターを利用した高速の上下移動。

機体性能の恩恵を受けている為、これだけの動きである程度までは回避出来ているが、限界がある。

今の一夏では白式の性能を完全には引き出せていない。

「一夏！ 訓練終わった？ はいタオルとスポーツドリンク」

ピットのドアを開けて鈴が入ってきた。

「おう、ありがとな鈴」

「ねえ一夏、あたしが居ない間さ。寂しかった？」

「そうだな、仲良い奴が居なくなったら大なり小なり寂しいぞ」

「そうじゃなくてさ……」

そわそわした様子を見て一夏はポンと相槌を打った。

「鈴、トイレ行きたいのか？」

「バカ！ あんたって昔っからそういう所変わってないのね！」

産まれながらの唐変木、ここまで鈍感なのは才能と表現しても構わないだろう。

「そう言えば一夏、あたしとの約束覚えてる？」

約束と言われ一夏は鈴と約束をして結局迷宮入りした物をいくつか思い浮かべる。

「あ、ああ」

「何か曖昧って感じね。ホラあたしが酢豚の腕が上がったら——」

「思い出した思い出した」

「そ、そう？」

「お前が酢豚の腕が上がったらおごってくれて話したろ？」

「へや？」

鈴の待っていた答えとは僅かに離れた回答に素っ頓狂な声を上げてしまった。

「だから、お前が酢豚の腕上げて毎日俺にご馳走してくれる——」

パアンと鈴の平手打ちが飛び、鈴は顔を紅潮させて大声で叫んだ。

「最っ低！ この朴念仁！ あんたなんか豆腐の角に頭ぶつけて死ね！」

なぜ鈴が怒ってしまったのか当の一夏には皆目見当がつかない。
流石、鈍感に定評がある15歳。

「何で怒ったんだ……アイツ」

「一夏」

「お、おう箒。居たのか」

「馬に蹴られて死ね！」

箒まで怒ってしまう始末である。

これで一夏の疑問がまた増えた。

謝った方が良いかと一瞬、考えたが怒る理由を聞かないと納得出来ないという訳でそのままにしておく事にした。

翌朝、一夏に凶報が入り込んだ、クラス対抗戦の相手が決まったという内容で相手は四組、そう一回戦目に鈴と当たってしまったのだ。

決戦！ クラス対抗戦 後編（前書き）

次回はようやくシャルルとラウラの順番か。

ラストレイヴンの面々はいつだそうかな。

レイヴンがACに乗るのはまだまだ先になると思います。

決戦！ クラス対抗戦 後編

5月。

あれから2週間が経過したが鈴のご機嫌は変わること無く悪かった。廊下ですれ違えば無視され食堂で顔を合わせれば避けられるのだ。

訓練の方が何度かレイヴンに見てもらい一夏の方から模擬戦を挑んだりもしたが未だにレイヴンに1発も攻撃を当てていないでいた。そして今、一夏は食堂でレイヴン、箒、セシリアと一緒に昼食を取っていた。

相変わらずのセシリアと箒の険悪な空気に一夏は首を傾げ、レイヴンは我関せずを決め込み冷ややつこを口に運ぶのであった。

「一夏」

「ん？ 鈴どうした？」

「謝る気になった？」

「だから何をだよ！」

「はあ？ あんたまだそんな寝ぼけた事言ってるの」

「だから何で謝らないといけないか言ったらちゃんと謝るって」

「それが嫌なのよ！」

久しぶりの会話が口論になるとは思いもしなかった。

「一夏さんに動きを教えるようにレイヴンさんもおっしゃっていましたでしょう」

「あれはたまたまお前がそこに居たからだ。それに何度も言っているだろ。私は一夏に教えてくれと頼み込まれたと！」

「いいから謝んなさいよ！」

「だから理由を言えよ！」

一つの席で二つの口論、流石のレイヴンも不機嫌な表情を浮かべていた。

切り分けた冷ややっこを口に放り込み、白米をかき込み、ヨーグルトを一気に平らげ牛乳を飲み干し、荒っぽくグラスを机に置きそして――。

「飯の最中くらい静かに出来んのか」

怒気のこもった一言に4人は口論を止めて席に着いた。

「えっと………すいません」

おぼんを返却口に返しレイヴンは食堂を後にした。そしていつものように保健室へ戻ると千冬と真耶がいた。

真耶の穏やかな雰囲気は消え去り真剣な目つきをしている所を見ると、朗報というより凶報の方が舞い込んで来たに違いない。

「何か用か？」

「ああ」

千冬が椅子に腰掛けるとレイヴンは柵からカップを取り出しコーヒ―を注ぎ出してやる。

「ありがとう」

「で、話したのは？」

「先日、暴徒鎮圧に用意された米軍の駐屯基地が壊滅した」

「ほう、暴徒鎮圧にしては大層な物を準備するんだな」

「ISが2機投入し操縦者もそれなりの技量の持ち主だ。それで基地が壊滅するなど有り得ない」

ISの戦闘力はよちよち歩きの子供ですら知っている。世界最強の兵器が墜ちるなど千冬ですら予想していなかった。

「情報には巨大ロボットが奇襲したとあるんだ。お前と関わりが無いとは言えないだろう」

巨大ロボット、ACについてはレイヴンが最も理解している。そしてACの戦闘力は全て搭乗者に委ねられる事も承知している。

世界情勢をねじ曲げる悪魔と化すか、数台の戦車に敗北する屑鉄と化すか。

IS程の超兵器を2機破壊出来る技量がある者はレイヴンの記憶の中でだいぶ限定される。“赤い星”と謳われたあの女が例のトッランカー、もしくはレイヴンと同時期に傭兵となった“あの男”か。

「レイヴン、あの機体について話してもらっぞ」

「断る。と、言えば?」

「お前を拘束した後、政府にお前の身柄を引き渡し拷問にかける」

「なるほど」

納得したように何度も頷いてはいるがレイヴンが何を考えているかは一切、予測が出来ない。

「あれについて話してやるが、条件がある」

「本来なら取引出来る状況ではないが、何だ?」

「いつでも俺にリヴァイヴを使用出来るようにする事だ」

「リヴァイヴを? 意外だな専用機をよこせとでも言っのかと思っただぞ」

「まさか。どうなんだ?」

「それくらいなら問題ない」

「よし、なら俺の機体がある場所に案内してくれ」

「ついて来い」

千冬に案内されたのは学園でも限られた人物しか入れない地下の管理施設。

レイヴンの機体はそこにあった。

灰色のカラーリングと肩に張られた鴉のエンブレム。ここに来た時は大破寸前であったが、今はほぼ修復されていた。

1ヶ月近くも愛機と顔を合わせないという事は初めてだったのでレイヴンはその機体を見て懐かしさすら感じていた。

灰色の機体、名を“ネクスス”。

レイヴンはこの機体を駆り、アーク時代では最強の座に君臨していた。

幾度も企業からのスカウトがあったがそれら全てを蹴り、どの権力にも属さず淡々とミッションをこなしていた毎日が脳裏をよぎって行った。

「さあ、話してもらっぞ」

「まず、この機体の名称は“アーマードコア”通称“AC”と呼ばれている」

「アーマードコア……」

「性能についてだが、その殆どは搭乗者の技量に左右される。多種多様のパーツを組み合わせ自分だけの機体を作る。コンセプトは市街地戦だが宇宙でも活動は可能だ」

「それでISでACは破壊可能なのか？」

「ああ、搭乗者の腕が悪ければ戦車や戦闘機でも破壊出来る」

未知の兵器、アーマードコアに対して千冬も真耶も畏怖の念を覚えずにはいらなかった。今もこうしている間に各地の軍事拠点がACの攻撃を受けているかもしれないのだ。

各国家もこの脅威に対処出来るのかどうか非常に怪しい限りである。

「他に聞きたい事は？」

「……ない」

機体性能は搭乗者の腕に委ねられる、という言葉がどという意味を指しているのか千冬はちゃんと理解していた。

今回の米軍の駐屯基地襲撃の首謀者は相当な技量の持ち主であると。

レイヴンに一括され静かになっていた一夏達であったが、その騒がしさはまた元に戻っていた。

「だから何で約束覚えてただろーが」

「は？ まだそんな寝言いつてるの。意味が違つたよ意味が！」

「じゃあその意味を説明してくれよ」

「それが嫌なの！」

「わけがわからん……。じゃあこうしよう、来週のクラス対抗戦で勝った方は負けた方の言うことを何でも聞くつてのはどうだ？」

「わかったわ。ちゃんと謝る練習しときなさいよ」

「お前もちゃんと説明しろよ」

「説明は……その……」

「なんだ？ やめたいならやめてもいいぞ」

「やめないわよ！ 負けたらあたしに謝るのよいい！？」

「何回も言わなくてもわかるって馬鹿」

「馬鹿とは何よ！ アホ！ 朴念仁！ 間抜け！ 馬鹿はアンタよ」

「うっさい貧乳まな板」

一夏は自分が言い返した言葉を思い出し自分の口を押さえたが既に遅い。

食堂内に轟音が響き渡り、一夏の目の前にあるテーブルは粉碎され、鈴の右腕には部分的にISが展開されていた。

原形を留めていないテーブルは地面深くにまでめり込んでいる。ISを部分展開そして尚且つ0.5秒とかからずに展開するその速度は鈴が相当の実力者という事を証明していた。

しかし、当の一夏にそこまで分析する余裕は無く自分の過ちにただただ後悔するだけであつた。

「あんた……！ 試合の日、覚悟しときなさいよ！」

「いや……あの、今のは俺が悪い」

「今の『は』じゃなくて今の『も』よ！ いつだっつあんたが悪いのよ……」

展開したISを解除し鈴は不機嫌全開の表情で行ってしまった。
約束の事や勝敗の事がどうであれ鈴に謝らなくていけないのは確定であった。

鈴は昔から胸に人一倍コンプレックスを持っているからだ。

試合当日、第3アリーナは歓声に包まれアリーナ上空では一夏の白式と鈴の専用機、甲龍が対峙していた。甲龍の最大の特徴であり最大の武器は両肩に装備されたバックユニットの衝撃砲である。

そして二刀一対の青竜刀を模した剣を握っている。両者に未だ会話は無く、試合開始のブザーが鳴るのを待った。

『第1試合、一組、織斑一夏と2組、凰鈴音の試合を始めます』

放送が入ると一夏は雪片を中段に構え、鈴は右腕の剣を上空に左腕の剣を下段へと下げた。

『始め！』

かけ声と共にブザーが鳴ると鈴は構えを崩しバックユニットを展開し衝撃砲を放ったその刹那、一夏の体は吹き飛ばされ地面へと激突した。この衝撃砲の特徴、それは砲身と砲弾が見えない点にある。砲身が見えればまだかわすことも出来るだろうが、それすら見えないのは一夏に多大な不利を与えていた。態勢を立て直した一夏はスラスターから炎を噴射し右へ左へとフェイントをかけながら接近する。

一撃当てれば軍配は一夏へ上がる。

もしそうでなくても相手のシールドエネルギーの大半を失う。雪

片の攻撃力を知る鈴にしてみれば僅かな油断が敗北へ繋がるのだ。
だが砲身、砲弾共に視認不可な衝撃砲をフェイント1つで回避出来ない。

鋭い鈴の勘は一夏の動きを正確に先読みし衝撃砲を命中させている。

目に見えない分、レイヴンの射撃より数段かわす事が難しく、衝撃砲を今の今まで回避出来ているのはやはり、白式の機体性能による所が大きい。

一夏の操作技術は確かに低い、だが彼もセシリア戦からずっと何もして来なかった訳ではない。一步また一步と進化しているのだ。

鈴の放った衝撃砲、一夏はただがむしゃらに動く事を止め、大気の揺れに目を付けた。一瞬で更に微かではあるが衝撃砲を放った際に空間が揺れるのだ。

一夏はその瞬間を見極め、左半身を軸に体を半回転させ衝撃砲を回避した。

「見えないのによくかわすわね」

「お前の命中率が悪いんだろ？」

「何ですって！」

実力はあるしあらゆる場合に冷静に対処出来る鈴なのだが挑発には弱い、しかも一夏の挑発は効果抜群である。

レイヴンから触りだけ教わった心理戦、それはまず相手の冷静さを崩す事にある。

簡単なのは挑発である。

「あんまり言いたくないけど……おい、貧乳」

「殺す！ あんたは絶対にぶつ殺す！」

衝撃砲の乱れ撃ちが始まったが一夏の狙い通り、衝撃砲の命中率は確かに落ちていた。

——いける！。

そう確信した一夏は雪片にエネルギーを注ぎ込むと両手で握りしめ、最小限の動きで衝撃砲をかわし、スラスターの出力を最大に突っ込んだ。

「終わりだ！ 鈴！」

「そんな安い挑発で冷静さを失うと思ったの？」

さつきまで紅潮させていた顔とは打って変わり鈴は平静を取り戻し、至近距離で2門の衝撃砲を撃ち込んだ。

「誰の吹き込みか知らないけど、あんた心理戦下手ね。流石に貧乳はイラッてしたけど」

鈴には一夏の挑発など最初から効いてはいなかった。冷静さを失った振りをし勝機を掴ませ、向かって来た所を衝撃砲で狙い撃ち。流石は代表候補生、一連の動きに心底感心する一夏だがそんな余裕は毛筋程も無い。

今の形勢は誰がどうみても鈴に軍配が上がっている。

「レイヴン、凰の動きどう見る？」

「悪くないが衝撃砲の命中率が悪いな砲身と砲弾が見えないという好条件があるにしてはかわされ過ぎだ」

一方、ピットではレイヴンと千冬、真耶、箒にセシリアがいた。セシリアも箒も一夏の勝利を願いモニターを見つめている。

「織斑君は嘘をつけないタイプだな」

「そうだな、アイツは昔っから無駄に正直だったな」

「勝てるのか？ あの中国の代表候補生に」

「イグニッションブーストを使えばもしかしたら……」

「イグニッションブースト？」

「白式に備わっている瞬間加速装置だ。一瞬だが白式の最大限界速を超え圧倒的なスピードを実現する。その分エネルギー消費も激しいがな。使いこなせばアイツは代表候補生とも渡り合える」

再びアリーナから爆音が響きレイヴン等はモニターに顔を戻すと鈴が衝撃砲を連射していた。一夏は防戦一方で攻め込む機会がなかった。

イグニッションブーストを使用すれば鈴の懐へ瞬く間に侵入する事が可能だが雪片のエネルギーとイグニッションブーストのエネルギーを同時に消費すれば白式に残されるエネルギーは半分もない。

このまま戦いを長引かせば一夏の分が悪くなるだけでそれこそ本当に、勝機を失う事になる。

この際、四の五の言っていられない。

「イグニッションブースト発ど——」

豁然、アリーナを覆う強化バリアの一部が音を立てて砕け、そこから1機の未確認ISが侵入して来た。鈴と一夏が呆気にとられている隙にそのISは異常に長く大きな両腕部からレーザーを放って来た。

間一髪で一夏はレーザーを回避し反応の遅れた鈴を抱きかかえて遙か上空へと舞い上がった。

そのISは全身が装甲に包まれた茶色いカラーリングで頭部の力メラが妙な恐怖感を与えてくる。

しかし問題はそこではないどこの所属なのか不明でしかも、あの全身を覆う装甲はISにしては奇妙であった。

本来、シールドエネルギーにより防御面はそれだけで十分である為、わざわざ装甲で覆う必要はどこにもない。

それに肌が一切見えない程に固めているISなんて一夏は初めて見る。

「鈴、何だアイツ」

「こつちが聞きたいわよ。それよりいつまで抱えてんのよ！ 早く離しなさいよ！」

「わかったよ」

抱えていた鈴を離してやる。

装甲に包まれたISのさっきのレーザーはセシリアのライフルよりも高出力であった。アリーナの強化バリアを破るこのISはパワータイプである事を裏付けていた。

未確認ISが動きだすとアリーナの観客席にバリアを再度張られ、シャッターが下ろされた。これならこの所属不明機は脱出する事が出来ず、教員等が鎮圧に向かえるのだ。が、外部からハッキングによりアリーナに入る扉全てにロックがかかっているのだ。

一夏も鈴もエネルギーに余裕がある訳ではない。既に交戦を試みたものの所属不明機の性能は高く、2人とも苦戦強いられていた。

「織斑くん！ 織斑くん！ 聞こえますか！？」

ピットでは真耶が叫んでいるが電磁波の影響でプライベートチャネルも繋がらなかった。

「落ち着け山田先生、まずはコーヒーでも飲むといい」

「……織斑先生、それ……塩ですよ」

自分がコーヒーに入れた物を見るとでかかと塩と書かれてある。

「誰だここに塩を置いたのは」

「やっぱり焦ってるんですね織斑先生も——」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「え、これは塩が……」

「どうぞ」

強引に塩コーヒーを押し付けられ真耶はやや涙目になりながら受け取った。

「熱いので一気に飲むといい」

「織斑先生！ 早く政府に救援を！」

「やっている。今は山田先生がロツクの解除をしている。解除が済み次第、三年の精鋭が突入する。まあ安心しろオルコット、お前は突入班では無いからな」

「な、何故ですの！」

「お前の機体は一对複数用だ。お前が複数側に入れば邪魔になる」

「そんな事はありませんわ！」

「では練習時間は？ その時のお前の役割は？ チームの構成は？ 敵はどの程度を想定している？」

「わかりました、もういいです」

「よろしい、山田先生まだ解除出来ないのか？」

「まだもう少しばかりかかります」

「早くしないと鳳君も織斑君もエネルギー切れでやられるな」

「レイヴンならこの場合どうする？」

「そうだな、鳳君の衝撃砲は2門同時発射ではなく片方ずつ撃ち、衝撃で敵の動きを硬直させた後、織斑君が斬り込む」

「しかしそれには鳳の命中精度が低い」

「ああ」

所属不明機の攻略法と状況の分析を行っているがそんな場合ではない。

いくらここで思案しても2人にはこの作戦は届かないのだ。

所属不明機がアリーナに侵入してから数十分、鈴のエネルギーもだいぶ減衰し一夏に至っては雪片を一度使用出来る程度にまで消費していた。鈴の衝撃砲は悉く回避され近接戦闘を仕掛けても反撃を受けるだけであった。

「なあ鈴、アイツって機械か？」

「ISは機械でしょうが」

「そうじゃなくて人が乗ってる感じがしないっつか」

「何？ 機械なら勝てるって訳？」

「ああ、アイツが無人機なら勝てる」

「そう、じゃあ有り得ないけどアイツを無人機と考えて攻めましょ」

「なら俺に衝撃砲を最大出力で撃ってくれ」

「はあ！？ そんな事したら……」

「早く！ 勝負は即効に決める！」

「どうなっても知らないんだから！」

甲龍のバックユニットが開き衝撃砲が発射された。一夏は衝撃砲を背中に浴びると同時にスラスターの出力を最高値に上げ、白式は爆発的な加速を実現した。

雪片を右へ振り上げると白式の唯一仕様“ワソオファビリティ零落白夜”が発動した。雪片の刀身は蒼白の輝きを帯びると刃の周りにエネルギー体が炎のように揺らめき猛っていた。

「終わりだ！」

雪片を何もない空間が振り抜く、一同が呆気にとられたその瞬間、雪片の刀身から三日月型の蒼白の刃が放たれた。

光速で迫る雪片の光波を鈍重なパワータイプのISではかわせは出来ない。

蒼白の光波は所属不明機の頭部の半分と左腕と肩を切り裂き、奪って行った。

地面に深くめり込んだ光波は青い粒子と化して消えた。重心のバランスを取れなくなった所属不明機は覚束ない足取りで地上を右へ左へと歩いている。

零落白夜とブレード光波の使用により白夜のエネルギーは完全に空となり一夏は地面に落ち、瓦礫に身を寄せている。

所属不明機はゆらりと一夏に歩み寄り右腕のレーザーの砲口を突き付けた。

「狙いは？」

『バッチリですわ』

青い4機のビットが所属不明機を奇襲しレーザーは機体を貫いていった。

よく通る声、時々うるさいが今回はそうでもない。ブルー・ティ

アーズのビットの一斉掃射をともに受けて無事な訳がない。

それに一夏のブレード光波を受けた後なら尚更だ。だが、その機体はギギツと金属のこすれる音を立て右腕の砲口にエネルギーを収束し始めた。

最後のあがきであろう、一夏はただな剣になってしまった雪片を握り、所属不明機の砲口を恐れる事なく突進し、ブレードを払った。その一撃には確かな手応えがあった。

「うつ……」

目が覚めると一夏は保健室のベッドで寝ており隣のベッドにはレイヴンが座っている。記憶を辿り所属不明機の事を思い出すとガバツとベッドから起き上がった。

「あのISは!？」

「落ち着け、例の所属不明機は完全に機能を停止した」

「よかった……」

「まあ、今回の戦いは見事だったぞ。少し見直したぞ一夏」

「は、はい」

「いちかー！ 大丈夫!？」

保健室のドアを開けて入って来たのは鈴である。レイヴンはベッドから立ち上がると消えるように保健室を出て行った。

「本っ当に無茶するわねアンタ」

「なあ鈴」

「何？」

「その、なんだ……。悪かったよ。色々、すまん」

一夏は素直に頭を下げた。

経緯はどうであれ鈴の嫌がる事を二度まで言ってしまったのは事実だ。

鈴は少し面食らったようである。

「あたしもムキになってたしもういいよ」

「あとさ約束思い出したんだけど。正確には『酢豚の腕が上がったら毎日あたしの酢豚食べてくれる？』だったよな？　もしかして俺は意味を間違えてたんじゃ——」

「間違つてない！　間違つてないから！」

「そうか」

慌てた様子だが一夏はそれ以上何も聞かなかった。

「じゃ、じゃああたし行くね」

「おう、またどこか遊びに行こうな」

「それってデート……？」

「ん？ 何か言ったか？」

「うっん！ 何でもない」

保健室を出た鈴は溜め息を吐いてどこか自分に情けなさを感じトポトポと部屋へ戻って行った。

レイヴンのアーマードコアが置いてあるあの地下の管理施設では一夏が破壊した例の所属不明機の解析が進められていた。

そして、外部からのハッキングされた時に発生したロックの解除コードの解析もされていた。その暗号はこの世界の文字ではなくレイヴンの世界の物であると見られていた。

結局、あのロックはレイヴンが解除した事で暗号がレイヴンの世界の物だという認識を色濃くしていた。

「このIS、やはり無人機ですね」

「ISの件は置いておいて例の暗号は解析出来たのか？」

「まだです。もしレイヴンさんの世界の物を使用しているなら」

「そう、レイヴン以外にも別の世界の人間が来ている事になる」

地下管理施設で所属不明機の解析などを行っているその最中、一夏は自室のベッドで寝転がっていた。保健室に居た際に第の部屋が出来た為、今日から部屋に1人きりになると告げられていた。部

屋の面積が二倍になった気分で非常に快適である。

かなり身体も疲れ、うとうとし制服を着たまま眠りに落ちようとした時だ。

誰かがドアをノックする音がした。

このまま無視して寝てもよかったのだがわざわざ来てくれた人に悪いと一夏は目をこすりながらベッドから出ると、ドアを開けた。

「箒、どうしたんだ？ まあ中に入れよ」

「ここでいい」

「そうか、どうした？」

「来月末の個人トーナメントの試合だが」

箒は頬を赤らめ、ビシッと一夏に指差した。

「私が優勝したら付き合ってもらおう！」

「……はい？」

恋愛的な意味で言っただつもりだったが一夏はこれを何故か宣戦布告と受け取り、気を引き締めていた――。

ボーイ・ミーツ・ボーイ（前書き）

更新がだいぶ遅れてしまいました。

長期休暇ですんごいだらけた生活を送ってます。

シャルルとラウルがやっと出せるぜ！。

ボーイ・ミーツ・ボーイ

クラス対抗戦から4日、レイヴンは所属不明機体の襲撃の際にハッキングされドアがロックされた時を思い返していた。

暗号はレイヴンの世界の物であった。

単調で自分の存在意義と目的を明確に表したその暗号をこの国の言葉で訳すところなる『復讐』。

思い当たる節は大量にあった。

ACを駆り戦い、殺傷しても全く罪に問われないのだ。一般人や軍人とあらゆる人間から憎悪の目を向けられるのは当然である。

しかし中でも復讐という言葉に人一倍に敏感でそして執念深い男を1人知っている。

「リム・ファイヤー……まだあの男は親父の仇を取ろうとしているのか」

リム・ファイヤーの父、ピン・ファイヤーはレイヴンと同じ傭兵であるミッションでレイヴンと交戦し死亡した。

それ以来リムはレイヴンをいや、傭兵という存在そのものを憎んでいる。

もしあの男がここに来ていとなるとそれはレイヴン個人だけの問題ではなくなるだろう。

保健室のドアが開き、千冬が入って来る。

用件は決まっている、例の暗号についてだ。

「単刀直入に言うぞあの暗号の内容を教えろ」

「ああ、内容は単純だ。『復讐』と書いてあった」

「ずいぶんと素直だな」

「織斑先生、生徒と教員に呼びかけておいてくれ。危険人物がうつっている」と

「……………訳ありのようだな。どうせ話してくれないんだろ？」

「今回だけは答えられる限り答えてやる」

レイヴンは再度、保健室のベッドに腰掛けると千冬は適当な椅子に座った。

「では、危険人物の正体は？」

「俺と一緒に傭兵だ」

「目的は？」

「俺の命と俺に関わる者全ての命だろう」

「……………何をやらかしたんだ？」

「その男の父親を任務の際に殺した」

罪悪感や躊躇いなどを一切見せないレイヴンの言動に千冬は面前の男に危険な匂いを感じずにはいられない。

傭兵である為、固い覚悟はあるに違いないが、それでも殺人を作業と見なしている人間を自由にさせて良いのか、千冬はその点について考えた。

「他に何かあるか？」

「いや、無い」

千冬が席を立ち保健室を後にするとベッドに寝転がりカーテンを手でいじり、天井を眺めていた。

6月頭の日曜日、一夏はアリーナでISの訓練に励んでいた。

未確認機体の襲撃の際に見せたブレード光波、いつでも使えると言えは使えるのだがあの技は莫大なエネルギー量を消費するという欠点がある。

零落白夜とブレード光波、そしてイグニッション・ブーストをそれぞれ一回発動させれば白夜のエネルギーは半分も残らなくなる。鈴との試合では一夏自身、かなり被弾率を抑えられたつもりだったがまだ駄目だ。

攻撃に転じた場合の一夏の攻撃は非常に読みやすく、相手からすれば反撃に出やすい事この上ない。スラスターを最大噴射からの雪片の斬撃。

武装が剣だけであるが故に裏をかく戦術が困難であるのは確かである。

それに相手を惑わす話術もない。

見た目に似合わず一夏は相当なパワータイプであった。

アリーナに配備されたテスト用のミサイルを何発か発射してもらい一夏は朝からずっと回避の練習に精を出していた。

ちなみに被弾率は60%でISに乗り始めて日も浅いのでこの結果は上々と言える。

一夏の練習が終わったのはちょうど昼頃だったので食堂で昼食をとる事にした。

今日は筈も鈴も居ないので安らかな1日を送れそうと思った時である。

「一夏さん」

疲労の原因Bが現れた。

「お、おうセシリア」

「これからどちらへ？」

「昼飯で食いに行こうかなって」

「一緒にしてもよろしいですか？」

「ああ」

断る理由もないので了承するとセシリアは何故か一夏と腕を組んだ。

「え、何で腕組むの？」

「男性が女性をエスコートするのは英国では常識ですわ」

「……………なるほど」

周囲からの女子生徒の視線が痛かったがセシリアは気にしていない。今、この瞬間を十二分に満足しようとしていた。

食堂に着いて、一夏はサンマの定食を頼み、セシリアはパスタを頼んだ。2人は席に着き、一夏は箸で白米をすくい上げ口へと運

んでいるとふと、感じた事がある。

「お前と2人になるって初めてだよな」

「そ、そうですわね」

セシリアが顔を紅潮させているが、唐変木の一夏が気付く筈はない。

「一夏さんは午前中、何をされていたんです？」

「ISの訓練だな。お前がいたなら見てもらえばよかったな」

「でしたら午後からわたくしがお教えしましょうか？」

「そうか、ならお願いしようかな」

セシリアの教え方は箒や鈴の擬音だらけの指導に比べれば遙かにわかりやすい。

そして今日はあの2人がおらず、ケン力で練習がストップする事はない。

（アイツらもうちょっと静かになんねえかな）

昼食を終えて2人はアリーナに向かう所でふと、女子の視線がいつも以上に多い気がした。それだけなら良いのだが何やらひそひそと耳打ちをしているようである。

女子は三度の飯より噂が大好きな生き物だ、一夏は思い当たる節を辿りその先には箒の『付き合ってもらおう』という言葉が脳裏にぎった。

（もしかして付き合ってもらって勘違いしてるのか？ にしても
箒も箒だよな。買いい物に付き合うくらいいつでも付き合ってるの
にな）

やはり一夏は鈍感だ、付き合うの意味を完全に間違えている。

「個人別トーナメントに優勝したら織斑くんと付き合えるんだって」

「うそ！ あたし頑張ろつと」

「でも専用機持ちと当たったらやだな」

「みんな何の噂をしてるんだろうな」

「さ、さあ何でしょう」

セシリアもこの噂は聞いた事があった。

噂は今や一年生全体に広がっており、付き合う発言をした箒は実
は未だ、こんな事態になっている事を知らない。

「……一夏さん」

「何？」

「モテてらっしゃるんですか？」

「さあ……どうだろう」

月曜の朝は起きるのが非常に嫌になる。

昨日の休日が名残惜しく、箒はまぶたをこすりながらベッドから起きた。

昨日は実家に戻っており、帰って来たのは夕方の5時頃だった。

そこで箒が耳にしたのは個人別トーナメント戦で優勝すれば一夏と付き合えるという噂だった。

まさか自分の発言がここまで改変された噂になりあちこちへ飛び火しているとは予想もしていなかった。教室に入ると未だにその噂で持ち切りであった。

そして、一夏が教室に入ると来ると噂話はピタリと止み、一瞬だがるで千冬が教室に入って来たかのような静けさが来るのだ。鈍感な一夏は異変に全く気付く事なく自分の席に着いた。

程なくして副担任の真耶が先にやって来た。

「おはようございます。今日はですね転校生を2人紹介したいと思いまーす」

妙にテンションが高い気はしたがクラスメートはそんな事よりも転校生の方に驚きの声を上げた。

噂好きの女子達の包囲網をかくぐって転校生がやって来たのだから驚かない筈はない。

「では、入って来て下さい」

ガラッとドアが開き転校生が2人入って来た。一夏はその時最も驚いたのは転校生の1人が男子であった事だった。

ルームメイトはブロンド貴公子（前書き）

ISの7巻が発売したらしいのですがまだ買ってません。
早く読みたいなあ……。

ルームメイトはブロード貴公子

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国ではまだまだ不慣れな所もありますがよろしく願いします」

黄金色の長い髪を後ろに束ねて深い翠の瞳をした中性的な少年は丁寧に頭を下げて礼をした。通った鼻筋と長い足などが特徴的な美丈夫で、絶やさない笑顔は眩しく輝いていた。

「お、男？」

一夏を含め、皆が同じ質問を投げかけた。

「はい、こちらに僕と同じ境遇の方が2人いらつしやると聞いていたので」

「きゃ……」

「きゃああああ！」

女子の黄色い歓声は凄まじい。

「男の子よ！ しかも美形の守ってあげたくなる系の」

「日本に産まれてよかったー！」

「わざわざ北九州から来た甲斐があつたわ！」

千冬はこの歓声を予想していたように耳を塞ぎ、授業見学に来て

いるレイヴンは教室の端で同じように耳を塞いでいた。

「いちいち騒ぐな。まだ自己紹介が終わってないぞ」

千冬の掛け声にクラスはまた静まり返った。相変わらずこのクラスのうるさい時と静かな時の差が激しい。

「で、では次の方、自己紹介をどうぞ」

シャルルの隣りにいる少女、腰まである長い銀髪をしており伸ばし放題にしたようであった。そしてその少女の何よりも特徴的なのは左目の眼帯である。

医療用の眼帯ではなく黒い革で出来たマンガやアニメの大佐が着けてそうな代物であった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「以上……ですか？」

「ああ」

随分と冷たい雰囲気が漂うラウラはまた腕組みをし一歩引き下がる。

しかしその時だ。一夏とラウラ偶然、目が合った。

「貴様が……！」

ラウラはつかつかと一夏に歩み寄ると席の真正面に立つと綺麗な平手打ちをお見舞いした。一夏の思考が一瞬、停止しクラスメートもまた、あまりの出来事に固まってしまっていた。

時間差で叩かれた頬が痛みだしどこかへ行っていた一夏の意識が戻って来ると椅子から立ち上がり――。

「何しやる！」

「ふん――」

怒気を込めて放った言葉もラウラにあっさりと言われてしまい、ラウラは何事もなかったかのように教壇へ戻った。

「自己紹介は済んだな。では授業を始める。今日は2組と合同で練習を行う、以上。そうだ織斑、デュノアの面倒を見てやれ」

「は、はい」

「えっと、君が織斑君だね？ 僕はシャルル――」

「ああ、自己紹介は後にしてくれ」

一夏はシャルルの手を握り、教室を出て行った。早く移動しないと女子は普通に着替えだすからだ。

早足で廊下を歩き進めて特に女子の妨害もなく無事に更衣室に着した。

一夏は室内に入ると直ぐに制服を脱ぎISスーツに着替え始めた。

「そうそう、俺は織斑一夏、一夏って呼んでくれ」

「僕はシャルル・デュノア、シャルルでいいよ」

「いやぁホント助かったよ」

「何が？」

「男が転校してきた事、レイヴンって人も居るんだけど自分よりだいぶ年上だからなあ」

「そんなに嬉しいかな」

「嬉しいさ。何だろ気が楽になるよ」

「ふうん」

ISスーツに着替えた一夏は白式が腕にある事を確認し2、3回腰を捻りアリーナに向かった。時間はギリギリ間に合った為あの出席簿アタックを受ける事はなかった。

アリーナに1組と2組の生徒が並びその前に千冬と真耶がおり、その隣りにレイヴンが居た。レイヴンの目つきは今日はやけに鋭く、朝礼の時からずっとシャルルを凝視していた。

「今日はISの模擬戦を行う。凰、オルコットISを展開しろ」

「ええ！ 何であたしが」

「専用機持ちは直ぐに準備出来るからだ」

セシリアと鈴は渋々、自分の専用機を展開した。お互い、1秒と掛からずに展開すると所は流石は代表候補生といったとこだ。ブルー・ティアーズを身に纏ったセシリアと甲龍を纏う鈴は凜然と生徒達の前に直立する。

「よし、相手だが……レイヴン、頼めるか？」

「……俺は専用機なぞ持っていないぞ」

「リヴァイヴを使えばいい。それにタダ飯食わせてやっている上に寝床までやっているんだ少しは働け」

「……………わかった」

最近、レイヴンはタダ飯という言葉に弱いという事がわかった。レイヴンは片膝を着いた状態で静止しているリヴァイヴに乗り込むと機体にエネルギーが循環しリヴァイヴは起動した。

「あの……織斑先生、わたくし達はどうすれば」

「レイヴンと模擬戦をやってもらおう。安心しろお前等なら絶対に負ける」

そう言われ最も闘争心に火が着いたのは鈴であった。セシリアはクラス代表を決める試合の際にレイヴンの实力を見ている。

それでも適性Eランクと考えると負ける訳にはいかない。鈴に至ってはレイヴンの实力を知らないし今の今までISを動かせる事すら知らなかった。

単なるタダ飯食らいの居候としか認識していなかった。

レイヴンの準備が整うと鈴は“双天牙月”の柄を連結し投擲武器にして投げつけた。

独特の風切り音で迫る双天牙月の両端をライフルで狙撃し空中で迎撃すると、間髪入れずに衝撃砲とブルー・ティアーズのビットがレーザーを放って来た。

リヴァイヴのスラスターを真横に吹かし衝撃砲とレーザーを回避

すると、レイヴンは空高く飛び上がりショットガンやライフル、マシンガンを巧みに操り2人を牽制し始めた。

「デユノア、レイヴンが乗る“ラファール・リヴァイヴ”の説明してみろ」

「はい、レイヴンさんの駆る機体は“ラファール・リヴァイヴ”デユノア社の第二世代型で格闘、射撃、補助もこなせて豊富な武装の機体でスペックは第三世代型の前期型にも劣りません」

「その辺でいいだろう」

シャルルの説明で少し気を取られている隙にレイヴン等の戦闘は終盤に突入していた。セシリアのレーザーと鈴の衝撃砲を紙一重でかわし、2人の懐に潜り込んだレイヴンは2丁のショットガンを2人に突き付け、引き金を引いた。

至近距離で絶大な威力を誇るショットガンは2機の残りのシールドエネルギー全てを持って行き、エネルギー残量を表す数字は0を示していた。

勝敗が決したと同時にレイヴンのリヴァイヴも使用時間に限界が来たらしく間接部から蒸気を吐き出してそのまま停止した。

「あんた何うまい事相手の誘導に乗せられてんのよ！」

「鈴さんこそ接近戦を誘われてそれに乗るなんてあり得ませんわ！」

2人とも互いの駄目な点を的確に言い合っている分、かえって惨めに見えて来た。

両者、レイヴンに一発も当てられなかった事に自分へのイライラが抑えられずにいられなかった。

「ねえ、あの人何なの？」

シャルルが一夏に耳打ちする。

「傭兵って聞いたけどそれ以外は知らない」

「傭兵……か」

意味深長な物言いに一夏は首を傾げたが特に気にする事もなく、千冬の話に意識を戻した。ボーっとしていたらあの出席簿アタックをくらいかねない。

「今回は5つの班に分ける。班長は専用機持ちがやること、以上」

「ISはリヴァイヴが3機と打鉄が2機ですよー。班で相談して取りに来て下さいね」

班分けは誰が誰の所へ行くかは自由であつた為、一夏とシャルルの班はあつと言う間に満員になった。

シャルルの班は異様に盛り上がっているのに対してラウラの班だが、一切の会話が聞こえて来ない。氷のような冷たいオーラを放っており誰も話し掛けようとはしないのだ。

「じゃあ、僕はリヴァイヴを取って来るからみんなは少し待っててね」

「はい」

班の女子に見送られシャルルがリヴァイヴを取りに真耶の所へ行

く。

リヴァイヴをカートに乗せるとシャルルはカートの取っ手を握り、前へ踏み込むと思いのほか重量があり、それと同時にシャルルは足を滑らせて転けた。

「いったゝ……」

「デユノア君！？ 大丈夫ですか？」

「あ、はい。大丈夫ですよ」

「でも足を擦りむいてますよ。は、早く保健室に！」

「そんな大袈裟ですよ」

「ばい菌入ったら大変なんですよばい菌！」

「じゃ、じゃあ絆創膏だけでも……」

真耶に圧されて頷くと砂を払い立ち上がった。

「俺が連れて行ってやる」

ヒョイとレイヴンが顔を出すとシャルルの手を取り、そさくさとアリーナを去って行った。いつもなら我、関せずを決め込むレイヴンなのだが今日は妙に干渉して来るのだ。

保健室の中へシャルルが先に入り、レイヴンが後から入ると保健室のドアを閉めて鍵をかけた。その時点ではシャルルは一切、警戒をしていない。

「適当な所に座っている。直ぐ絆創膏を出してやる」

「ありがとうございます」

「……名前はシャルル・デュノア君、だったな？」

「はい」

「正確にはシャルル・デュノアさん……だろ？」

レイヴンの核心を突いたその一言にシャルルの笑顔は少し崩れ、手に汗を握りなるべく平静を保とうとしていた。

「どういう意味です？」

「男装少女のシャルル・デュノア君とまで言えば分かるか？」

シラを切る事は出来そうにない。

レイヴンはシャルルの正体を完全に見透かしていた。

消毒液を傷口に塗り綺麗にするとレイヴンは足の傷に絆創膏を張り、ゴミをゴミ箱へ投げ入れた。

「……失礼します！」

シャルルは早足でレイヴンを素通りし保健室の鍵を開けて逃げように出て行った。

千冬の目をも欺いた完璧な変装と日本に来るまでに磨いた男性の仕草をレイヴンにはあっさり見破られていた。

胸の奥が熱くなる、変装がバレてこれから何が起こるか分からなくなつたシャルルの右手は小刻みに震えていた。

「えっと、君の名前は何だったかな？」

「リム・ファイヤーだ」

「君に日本にいるあの男の情報を渡せば我がデュノア社に協力してくれるのは本当だね？」

デュノア社の社長室、えらく豪華な椅子に腰掛けて数枚の資料に目を通しながら話しているのはシャルルの父親である。

そして、部屋の中央にソファが2つ配備され、そこに座っているのがレイヴンに父を殺され“レイヴン”という存在を心の底から憎む青年、リム・ファイヤーであった。

かつては精悍な顔立ちをした美青年であったが父を殺されてからは復讐に燃え、頬は瘦け、眉間には常に深くシワが刻まれており凶悪な容貌となっていた。

「俺は奴の存在が憎い、情報をよこすならライバル社の要人の抹殺だろうが、ISの破壊だろうと請け負ってやる」

「フフ……そうか、それは頼もしい限りだ。仲良くしよう、リム君」

デュノア社の社長は怪しげな笑みを浮かべ手を差し伸べるとリムは険しい表情を決め込んだまま手を伸ばし、握手を交わした。

ブルー・デイズ/レッド・スイッチ（前書き）

携帯のユニークアクセスが6000を超えました。単純計算で日本全国の6000の人が携帯の決定ボタンをこんな物の為にプチプチ押してる事になるんですよ……。
本当にありがたい限りです。

春休みの昼夜反転生活がだいぶ日常生活に響いてます。眠い……

ブルー・デイズ/レッド・スイッチ

翌日の放課後、一夏の訓練を手伝おうと思っていたシャルルだったが昨日の性別を偽って入学していた事をレイヴンにあっさりと見破られしまい、シャルルは今は保健室にいた。レイヴンはいつものようにベッドに座り、シャルルはその反対側のベッドに腰掛けていた。

シャルルは手を膝の上に置いてそわそわとした様子で何度もレイヴンを上目遣いで見ていた。

「お前の素性については黙ってやる」

思いもよらない一言にシャルルの顔は一瞬、明るくなった。シャルル自身、弱みにつけ込まれてとんでもない要求をして来ると思っていた。

「だが、お前には話してもらおう事が幾つかある」

「……何をですか？」

「自己紹介の際に言ったな？『自分と同じ境遇の人間が2人いる』と。1人は当然、一夏の事だ。そして、ISを起動出来る男の2人は俺しかない」

「……はい」

「俺がISを起動出来る件は学校側が隠ぺいすると言う方針だ。つまり、学園関係者以外は俺の事を知らない」

「レイヴンさんは僕の会社の人間を疑っているんですね？」

「ああ」

「最近、父が傭兵を雇いました」

傭兵と聞きレイヴンの目元が少しピクリと動く。

「傭兵を雇ったとほぼ同時に僕は日本に送られたのでその人の詳しい事はわかりませんが十中八九、まともとは思えません」

「お前の意見はどうだっていい。その傭兵について他に知らないのか？」

レイヴンも薄々だがその傭兵の正体には気付いている。しつこく纏わりつくようにそして、自分の素性を明かさないようにレイヴンの情報を集める。

「知っているのはリム・ファイヤーという名前だけです」

今までは推測の域を出なかったがシャルルの口から出たその名前を聞いてレイヴンは小さく頷いた。どういう経緯でデュノア社に協力したかは不明だが、少なくともリムがレイヴンを抹殺に来るのは火を見るより確かであった。

空は茜色に染まり夕日が保健室の窓から差し掛かり室内を照らす。

「あの……何か知ってるんですか？」

「いや、心当たりは無いな。もう帰ってくれていいぞ」

ほごいた髪をまとめ直し、シャルルはベッドから立ち上がると保

健室を出て行く。

レイヴンの腹の虫が鳴った所で彼も保健室を後にして食堂にやって来た。

時刻は7時、時間も時間なので食堂内は人で賑わい、殆どのテーブルが満席となっていた。夕食を乗せたおぼんを手に分らふらと歩き回っていると、あるテーブルだけが異様に空いていた。

そこに座っているのはドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒである。

「隣り良いか？」

レイヴンが尋ねる。

「勝手にしろ」

と、答えレイヴンは席に着いた。

その瞬間に食堂内の視線が一気に2人の元に集中した。絶対零度のオーラを放つ軍人と正体不明の傭兵、この2人が一体どのような会話をするのか皆、興味津々なのだ。

「貴様もISを動かせるみたいだな」

「ああ」

「ちょうど良い相手が欲しかった所だ。私と戦え」

「断る。相手ならセシリアや鈴がいるだろう」

「ふんっ……量産機に2人がかりで戦って敗北する雑魚など戦う価値もない」

「……「うちそうさま」

夕食を食べ終えたレイヴンはおぼんを手に席を立った。

「どこへ行く？」

「部屋に戻る」

「逃げる気か」

「全く……調子付くなよクソガキ。お前はお前の言う雑魚と戦争ごっこでもしてるんだな」

吐き捨てるように言い放ったレイヴンはおぼんを返却口に返すとそのまま食堂から消えて行った。残されたラウラの全身からは凄まじい程の憤怒を漲らせ、赤い瞳はレイヴンがさっきまで座っていた席を突き刺すように睨んでいた。

「戦争ごっこだと……！？ 何も知らない大人が偉そうに！」

ラウラは人工的に産み出された試験管ベビーだった。戦う為に産まれ戦う為に育てられ戦う為に生きてきた。

軍人としてラウラのポテンシャルは最高の物であった。射撃、武術、格闘戦、暗殺と何から何まで他を寄せ付けない成績を持っていた。

暗く汚れ、血と灰にまみれた人生を送って来たこの少女にある転機が訪れた。

それはラウラを更なる奈落へと突き落とす物であった。ISの出現の際に適合性向上の為に行われた処置“ヴォーダン・オージェ”“擬似ハイパーセンサー”と言うべきか、レイヴンの世界で言うなら“

強化人間”と言う技術に近い。

反応速度、反射神経、同体視力に情報処理を爆発的に強化し高速戦闘に早めに適合するため、肉眼へナノマシンを移植する事となった。それを“越界の瞳”と呼ぶ。

不適合や危険性も無い。その筈だったがこの処置により瞳ひ金色に変色し、ISを制御不能にさせる事態に陥った。

それによりISの訓練で何度も遅れを取る事となり最強の座からはこうして引きずり下ろされたのだ。

闇から深い闇へそして深淵へと叩き込まれたのだ。

仲間から送られたのは侮蔑や嘲笑、軽蔑の目であった。

戦う為の存在が戦えなくなればどうなるだろう？。子供でも分かる、出来損ないの烙印を押されるだけだ。

だが、そんなラウラに光をくれたのが織斑千冬であった。凜然と堂々とした風体にラウラはただただ憧れの念を抱き、恍惚とした感情が常に走り回り千冬の訓練を忠実に進行し続けた。

その努力が実り、ラウラは再び部隊最強の座に返り咲いたのだ。

そして教えてくれたラウラの今までの人生は決して卑下する物ではないと、誇りを持つべき物だと。

だからラウラはここまで怒りを感じたのだ自分の存在意義である戦いをごっこ遊びと侮辱された事に。

（教官に汚点を与えた織斑一夏も私の存在意義を侮辱したレイヴンも許さない。必ず排除する！）

小さな体に大きな怪物が住み着いた少女はナイフを荒っぽくテールに置くと力強い足取りで食堂を去った。

「えっとね、一夏がセシリアや鈴に勝てないのは多分、弾の特性を

理解していないからだと思うよ。白式は確かに速い、けど弾は抵抗を受ける面積が小さいし軽いからより速く飛ぶんだ」

「なるほど……そうだったのか」

「アンタあれだけ丁寧に説明してやったのにまだ分かってなかったの!？」

「そうだぞ一夏、私が分かりやすく説明してやったのに」

「呆れますわ」

(……擬音だらけの説明が分かりやすく……か)

会話とは大事だとつくづく思い知らされる。言葉を投げたならちゃんと投げ返さなければならぬ。適当な方向に投げては会話は成立しない。

一夏は胸の内で何度も頷いていると、突如として砲撃音が空間に響き渡り、黄色い閃光が一夏目掛けて向かって来た。

「危ない!」

咄嗟の判断でシャルルは装甲を展開し閃光を跳ね退けた。

「チツ……邪魔を……」

漆黒のISに身を包んだドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒは右肩の大口径レールカノンの砲身を上方へ向け次弾を装填した。

「第3世代試作機、“シュヴァルツェア・レーゲン”」

固唾を飲み、セシリアは禍々しささえ感じるラウラのISを顔をしかめた。

「随分と荒っぽいんだね。ドイツの代表候補生さんは」

「時代遅れのリヴァイヴ……怪我をしたくなければ下がれ。私は織斑一夏に用がある」

「俺に……？」

「単刀直入に言う。私と戦え」

「やだね、戦う理由がない」

「なら理由を作ってやる」

装填を完了したレールカノンの砲口は再び一夏へ向けられラウラは躊躇なく引き金を引いた。砲身から蒸気が吹き出し、巨大な薬莖が地面に落ちる頃にはレールカノンの砲弾は既に一夏の眼前にまで来ている。

一夏は雪片を逆手に持ち下段から一気に振り上げて砲弾を両断した。

『コラ！ その生徒一体何をやっている！』

管制室のスピーカーから教師の声が響く。

「今日はこの辺で引き下がるか。命拾いしたな織斑一夏」

ラウラはISを待機状態へ戻すとカタパルトからピットへ戻って行った。

レールカノンの砲弾を切り裂いたのは偶然に過ぎない。強烈な衝撃を右腕に受けて一夏はぷるぷると手を震わせながらラウラの居た、カタパルトを見詰めた。

近々、行われるトーナメント戦で合う事になれば一夏はラウラを退けられるだろうか。

「一夏大丈夫？」

うつむく一夏に下から上目遣いで心配するシャルルに少し頬を赤くした。

「ああ、大丈夫」

「僕、先に戻ってるからね」

「あ、ああ」

一夏は白式を待機状態に移行しISスーツの姿になるとピットに戻った。

それから直ぐに寮へ戻り自分のベッドに寝転び天井を見上げた。

（そう言えばボディソープが切れてたな）

一夏はベッドから跳ね起きるとシャワールームの直ぐ隣にある棚からボディソープを取り出すとシャワールームのドアを開けた。

「シャルル、ボディソープ切れてただ………ろ………」

この時一夏は自分の目を疑った。
シャワールームで汗を流しているのは女子だったからだ。

「えっ……シャルル？」

「うん、うん」

「これ、ボディソープ」

「あ……ありがとう」

お互いブリキのオモチャの様にカクカクとした動きでボディソープを受け取りシャワールームのドアを閉めた。

しばらくしてシャワールームからシャルルが出て来た。いつも結んでいる髪を下ろしており女性らしさが際立っている。

シャルルがベッドに腰掛けてから1時間は経過して一夏はようやく話を切り出した。

「女の子……だったんだな」

「うん……」

「お茶でも飲むか？」

「うん、お願い」

レイヴンならいざしらず、まさか一夏にも自分の正体がバレてしまうとは思ってもなかった。

「ほら」

「ありがと……きゃっ!」

湯のみを差し出した一夏の手と僅かに触れシャルルは湯のみを地面へ落としてしまう。

「あつっ……!」

「ああ! 大丈夫? 一夏、ごめんね」

赤くなつた一夏の手を水に浸けて冷やしてやる。

「本当にごめんね。少し赤くなってる」

「あのさシャルル、何っーか……む、胸が当たってるんだが……」

「えっ……。わああ!」

慌てた様子で両手で自分の胸を隠し少し頬を赤らめながら一夏を睨む。

「一夏のえっち……」

「今のは仕方ないだろ! んで、何でまた男装なんかしたんだよ」

「親に命令されてね……」

「シャルルの親ってデュノア社の社長だよな」

「うん、僕はね一夏。愛人の娘なんだ」

愛人の娘、その言葉がどれだけ複雑で人間関係を濁らせるか一夏でも理解している。

「父と合ったのは2回くらいかな。会話も数回しかしてないしね。正妻には『泥棒猫』って罵られちゃったし」

こんな時でもシャルルは笑顔を作ろうとしているが、その仮面は壊れかかっていた。

シャルルの笑顔からはあらゆる負の感情が溢れ、一夏は何故かとつもない怒りを感じ、ギョツと拳を握った。

「たまたま僕にはISの適性が高かったからね。非公式のテストパイロットになったんだよ。それからデュノア社は経営危機に陥ったの」

「経営危機ってデュノア社はISの生産率世界3位だろ？」

「所詮、リヴァイヴは第2世代に過ぎないんだよ。デュノア社は第3世代を開発していたんだけど元々、遅れに遅れての開発だから圧倒的にデータが足りないんだよ。なかなか形にならなかった。政府から予算を大幅カット、そしてISの開発許可も剥奪されるって流れになったの」

「……」

「デュノア社は今、傭兵を雇ってライバル企業を攻撃させたり、ISからMTの開発に取り組んでいるよ」

「MT？」

「マッスルトレーサー、通称“MT” ISより戦力は劣るけど量産が利くし戦車や戦闘機よりも強力な兵器」

聞き覚えの無い兵器だが今の一夏はMTよりもっと重要な話がある。

「大体の事はわかったがそれと男装がどう繋がるんだ？」

「簡単だよ。注目を浴びる為の広告塔」

シャルルは自分に対する苛立ちに身を震わせながら苦い顔をしながら続けた。

「特異ケースとの接触がやりやすくなる。僕はね一夏、白式のデータを盗んで来いって言われたの」

デュノア社の社長はシャルルを手駒の1つとしか見ていない。たまたま利用出来るから利用しただけだ。親子愛など毛筋程も思っていない。

「でもいいや、話してすつきりしたよ。ありがと一夏、そして騙してごめん」

「そんなのありかよ……！ 確かに親が居ないと子は産まれないさ。けどよ、親が子供に何をしてもいいなんて道理は無い筈だ！」

「一夏、どうしたの？」

「悪いつい熱くなった、俺と千冬姉は親に捨てられたから……」

そう、さっき感じていた怒りはシャルルの父へではない。自分の無力に対してだ。

「ゴメン……」

「気にしないでいい。今さら合いたいなんて思っていないさ。それよりシャルルはこれからどうするんだ？」

「フランス政府黙ってないだろうしね。僕は代表候補生をおろされて本国に呼び戻し、良くて牢屋行きかな。デュノア社はさっき言った通りだよ。僕の事を元々居なかった事にするだろうね」

「それでいいのか？」

「良いも悪いも僕には選ぶ権利はないから仕方ないよ」

「……選ぶ権利がないなら俺が選んでやる。シャルル、ここにいろ」

「え……？」

「IS学園の特記事項であるだろ。『本校はあらゆる国家の法律に一切干渉しない』って。だからここにいれば最低三年間は安全だ」

今日の一夏は少し頭が冴えている。この敏感さをもう少し恋愛感情に向けてやればセシリア達も苦勞をしなかっただろう。

「凄いね特記事項って55項目くらいあるよ」

「俺は勤勉なんだよ」

「ふふっ、やっぱり一夏は面白いなあ」

作り笑いではなく純粋な気持ちでようやく笑ってくれた。シャルルに笑顔が戻ると一夏の頬も幾分か緩む。

「一夏、かばってくれてありがとう」

につこりと微笑む少女に一夏は顔を赤くし照れ隠しにポリポリと頭をかいた。

一夏とシャルルの間に会話が無くなると精神力にだいぶ疲弊した2人はもぞもぞとベッドに潜り込み、あっと言う間に眠りに落ちて行つた。シャルルは胸の高鳴りがしばらく続き、自分の後ろで眠っている男子の事を想い、体に火照りを覚えた。

これを『恋』と確信したシャルルはゆっくりとまぶたを閉じて夢の世界へ沈んで行く。

ファインド・アウト・マイ・マインド（前書き）

今回は一夏・シャルルVSラウラ・篝です。

AC5の発売が待ち遠しいな……。――。

そう言えば皆さん、ISの戦闘シーンをゾイドのBGMに変えてみたと言う動画をご存知ですか？ あれはなかなか臨場感があって私は好きなんですけどね。

ファインド・アウト・マイ・マインド

リム・ファイヤーの父、ピン・ファイヤーは傭兵としての腕前は一流と称するに値し、リムもそんな父に憧れており、そしていつか父を越えたいとも思っていた。

完全無欠の最強の傭兵、^{レイヴン}当のリムにはそう映っていた。

そんなある日だ。リムはいつもの様に家で父の帰りを待ってた。だが、リムの元に舞い込んで来たのは一通のメールだった。

レイヴンズ・アークから来るメールは『ミッション成功』か『ミッション失敗』の知らせのどちらかだ。当然、リムは前者の方を信じて疑わなかったし後者などありはしないと考えていた。

胸を踊らせメールを開いてみると、リムは絶句した。『ピン・ファイヤー死亡』。本文はそれだけであつた。

何かの間違いや父の手の込んだイタズラだと最初は考えていたが、後にアークから詳細を記したメールが届き理解した。

あの強かった父はもう居ないと。

ピン・ファイヤーを葬ったのは灰色の機体を駆るレイヴンだとリムは聞いた。

噂は常々聞いている。超新星のエヴァンジェを2回退け、相手が調整中の機体とは言えトップランカーをも打ち破った男だと。

ピン・ファイヤーの命日、それはリム・ファイヤーという怪物の誕生の日でもある。

それから程なくしてリムはレイヴンズ・アークに入った。憎むべき敵、レイヴンを討つ為に傭兵になる、リムはこの矛盾に気付いているのだろうか。

リムの駆る機体は父が搭乗していた機体、“バレットライフ”である。

若き傭兵は急激に力を付け企業から目を着けられる程にまで至った。そして、リムは長年に渡って憎み続けた男と対決の時を迎えた。

「待っていた……貴様と戦うこの時を」

アリーナであの灰色のACと対面しリムは操縦桿を強く握り締め、バレットライフの両手に装備されたフィンガーバルカンを斉射した。弾丸の雨を降らせるが灰色のACは巧みな操作技術で切り抜け、バズーカで反撃する。

リムの攻撃は悉くかわされ、レイヴンの攻撃は嫌らしいくらいに攻撃を命中させて来るのだ。

装甲は砕け、武器は破壊されて行きリムはレイヴンの力の前に敗北した。

「父さん……」

バレットライフから黒煙が上がる。リムが歯を食いしばると口の両端から血が流れていた。己の無力を呪い、リムはコックピットの中でむせび泣いていた。

残酷な現実、力こそが全てであり力が無い者は不条理に耐え、理不尽な暴力に屈するしかないのだ。
それが世界の常だ。

フランスが誇る巨大企業、デュノア社。

かつてはISの生産シェアの第三位であつたが技術の遅れと共に衰退し表舞台から姿を消した。

ヨーロッパの企業連の“イグニッション・プラン”からも除名され、ISの生産からMTの開発に思考が向いている。

デュノア社はパリの街の中心に位置する100階建てのビルである。巨大企業という看板を下ろした今、デュノア社は傭兵を雇い

入れて他企業の要人やISの破壊を依頼している。そのデュノア社の地下、そこはMTの開発施設として作られている。

そして、地下に用意されたACのテストルームにはリムのバレットライフが居た。

今し方、MTを5機を瞬く間に破壊した所である。リムの操作技術はあの時よりも格段に進化している。

操縦席からカメラを通じて外の映像を見詰めるリム。そのテストルームはレイヴンと対戦したステージと酷似していた。

『リム、まだ続けるか?』

「ああ」

研究員はリムの応答を聞くとキーボードを叩き、新たに3機のMTをテストルームに入れた。逆間接に楕円形のコアにライフルを搭載しただけの弱小MTだが低コストと大量生産が利き、更に無人で動かせるという利点があった。

そのMTは照準をバレットライフに合わせるとライフルを発射した。

「くっ……！ レイヴン！」

目の前にいるのはただのMTだが、リムの目にはあの灰色のACの鮮明な幻が映っていた。

「目障りなんだよ！」

両手のフィンガーと肩のチェインガンでMTへ向けると引き金を引き、弾幕を展開した。次から次へと降り注ぐ弾丸の豪雨はMTを蜂の巣へ変えるとそのまま爆発し、破片が辺りに飛び散って行った。

テストモードを終了してACを降りるとヘルメットを取り適当な場所へ投げ捨てた。

「お見事でしたリム。今回のデータを元に新たにMTを改善し――」

リムに話し掛けてきた研究員の頬に拳がめり込み、その研究員は転倒し机にぶつかり、机上のプラスチックやビーカーが落ちて砕けた。

「うるさい」

それだけ言い残すとリムは更衣室に入り、パイロットスーツを脱ぎ捨てた。

するとその青年の後頭部や背中には幾つものコンセントが埋め込まれてあった。

レイヴンズ・アークに登録されて直ぐにリムは強化人間の手術を受けた。これらの人工物は強化人間なら当たり前のように備わっている物に過ぎない。

ロッカーからスーツを取り出しそれを着ると、次に向かった先は社長室だ。

ノックをしてすぐに許可がおりるとリムはゆっくりとドアを開けて入室する。

「リム君、1つ依頼だ」

「話せ」

「娘のシャルロットがどうやら織斑一夏に女性である事がバレたらしい。つまらない情にほだされたバカな女だ」

「ほっ」

「依頼はシャルロットと織斑一夏の抹殺だ。それとIS学園にレイヴンらしき人物が確認された」

依頼のついでに怨敵の抹殺、これほど嬉しい話はない。最も、リムにしてみれば依頼がついでと見なしているだろう。

「了解……」

リムは凶悪な形相で微笑み、ソファから立ち上がった。

こうして復讐者は動き始めた。癒えぬ憎悪の炎を燃え上がらせてフランスを発ち、日本へ向かうのだった。

復讐の対象となっている当のレイヴンだが、今は第3アリーナでISの操作テストを行っていた。どのクラスもアリーナを使用しておらずレイヴンの貸し切り状態となっていた。

レイヴンのISの稼働時間は何度か話したように7分、それ以上はどうしても動かせず機能停止に陥ってしまうのだ。

しかしレイヴンにはそれ以上にもっと頻繁に感じる違和感があった。それはリヴァイヴを動かしている際、機体の反応が自分思う以上に遅れる事。

理由は簡単である。レイヴンのポテンシャルにリヴァイヴのスペックがついて来れていないのだ。

回避動作や射撃に至まであらゆる面で遅れを感じていた。

「一度、整備科に持って行く必要があるな」

「あら、レイヴンさん。1人で練習ですよ?」

「居候のオッサンも無理しなくていいのに」

アリーナに現れたのはセシリアと鈴であった。以前おこなった模擬戦以降、妙に2人の言葉にトゲを感じるレイヴンではあるが気に止めないようにした。

「で、お前等も訓練か？」

「ええ、今度の個人トーナメントは何としても優勝しなくてはいいけませんので」

「そうか、なら俺のようなオッサンは退散するでしょう」

「お待ちなさい！」

「ちょっと待った！」

2人の声が自然に重なる。

「前回の模擬戦のリベンジよ。やられたままじゃ気が済まないタチなの」

「わたくしもそうですよ」

鈴とセシリアがISの待機状態を解除した。ブルー・ティアーズの青い装甲が全身を覆い、ヘッドギアを装着し右手にEN兵器、ロングレンジライフル“スターライトMk?”を握った。

鈴を覆うのは茶色と桜色の装甲で、バックユニットの“衝撃砲”が特徴的なIS、“甲龍”だ。

両手には青竜刀を模した近接兵器“双天牙月”が所持しており、

左手の青竜刀は逆手に持っていた。

流石に専用機となれば訓練機や量産機に比べてヴィジュアル的にも良好で、レイヴン自身少し羨ましい気持ちもあった。

セシリアのライフルの照準はリヴァイヴに定められ、鈴はスラスターにエネルギーを蓄えていつでも接近を試みれるように備えた。

「やる気満々だな」

レイヴンはリヴァイヴに乗り右手にショットガンを左手にはスナイパーライフルを呼び出した。

するとその時であった。アリーナ内に響き渡る轟音と同時にレイヴンのリヴァイヴ目掛けてレールカノンの砲弾が向かっていった。しかしその刹那、左側面の装甲を狙った砲弾は空中で迎撃された。

見れば右手に握っていたショットガンを砲弾の軌跡の方へ向けて銃口から硝煙を上げている。

「砲弾を見ずに迎撃か……言うだけの事はあるな」

「ラウラ・ボーデヴィツヒ……！」

「どういふつもり？ あたし達のリベンジマッチに割って入って来るなんて」

「中国の“甲龍”にイギリスの“ブルー・ティアーズ”か。どちらもデータの方が強そうだったぞ。量産機程度に遅れを取るような者が代表候補生とはよほど人材に困っているようだな」

「何ですって！？」

ラウラの挑発に真っ先にカチンと来たのはセシリアであった。愛

国心が強いセシリアにしてみれば母国の侮辱は自分を侮辱されるよりも強く感情を刺激するのだ。

「さあ、下がれ。私はレイヴンに用がある」

「あたし達も用があんのよ！」

鈴は怒り奮闘のあまり背中の衝撃砲をラウラに放った。通常のアイマーなら一発で破壊する威力を誇る衝撃砲だが、ラウラは全く避ける素振りも見せず、手を前に突き出した。

するとどうだろうか、衝撃砲の砲弾は空中で飛散した。

「この程度か？ 数しか能が国の造る物は欠陥品か模造品しかないのか。それに古いだけが取り柄の時代遅れのIS。まあお前等のようながきには上等過ぎるオモチャだな」

嘲笑い、見下すような視線にとうとう2人の怒りの沸点が限界を越えた。

ここまでの暴言によく耐えたものだ。

「あんたさあ……ボコボコにヘコまないとダメみたいね」

「ボコボコなんて生温いですわ。蜂の巣にしてあげましてよ」「ほう……どれだけやるか見物だな。かかって来い」

「上等！ 蜂の巣にしてやる！」

また2人の声が重なった。

完全に蚊帳の外となったレイヴンは時間が勿体無いのでリヴァイヴを降りてアリーナの端で傍観に回っていた。

頭をボリボリとかきながら3人の戦いを見るレイヴン。その目は真剣な物ではなく気だるさや面倒くささを表していた。

所変わって、一夏とシャルルだがこの2人はこれからISの訓練の為、アリーナに向かっていた。

個人トーナメントで頼れるのは実力のみ、一夏は才能はあるが他の女子よりも圧倒的に練習量が足りていない。

シャルルの指導の甲斐もありようやく形になりつつあるがまだトーナメントで優勝を狙えるだけの力は無かった。

「来週から個人トーナメントか」

「どうしたの？ 何か不安？」

「不安だらけだよ」

「大丈夫だって僕が教えてあげるから」

「何か悪いな。お前も練習あるだろ」

「僕は夜にこっそりやってるから」

「ああ、だから時々帰って来るの遅いんだ」

平和でほのぼのとした会話を切り裂いたのは一つの爆音だった。方向はアリーナからだ。

「第3アリーナで代表候補生3人がドンパチやってるらしいよ！」

1人の女子生徒の話を聞いて一夏とシャルルは顔を向き合わせた。

代表候補生3人と言えばもはや説明は不要、セシリア達に決まっている。

2人は急ぎ駆け足でアリーナの傍観席へやって来るとそこには篤の姿もあった。

会場内には慌ただしい雰囲気が流れているが今見るべき物はアリーナの現状である。

セシリアと鈴のISのアーマーは所々、破損し満身創痕と言うのは見て取れる。

対してラウラのシュヴァルツェア・レーゲンは無傷とまでは行かないがブルー・ティアーズ、甲龍に比べてかなり損傷は軽微である。ブルー・ティアーズならいざ知らず、堅牢な防御力の甲龍を中破寸前にまで追い込むラウラのレールカノンの破壊力には目を見張るものがある。

そして勝敗はもう見えている。

「レイヴンさん！ 何で止めないんですか！」

アリーナの端で傍観するレイヴンに一夏が叫ぶ。

「コイツ等が勝手に始めた事だ俺は関係ない」

一夏が苦虫を噛み潰したように表情を歪めているとフィールド内でまた閃光が辺りを包んだ。

「衝撃砲とAICの相性がここまで悪いなんて……！」

甲龍のメイン武器である衝撃砲はシュヴァルツェア・レーゲンの特殊装備AICによって遮断されている。

前衛勤める鈴に対してセシリアは後衛からの大口径レーザーライフルによる狙撃を行った。

青いレーザーが銃口から放たれるとラウラは肩のレールカノンを発射に相殺、その都度爆音が相次いだ。

ブルー・ティアーズ、甲龍共にエネルギーは半分も残っておらずこれ以上の被弾は敗北を意味する。

ラウラは相手のエネルギー残量をおおよそで見抜き、腰から2本のブレードの付いたワイヤーを伸ばして来た。前衛に出ていた鈴はスラスターを前面に噴射しラウラから距離を置こうと離れるものの、ワイヤーの速度に追い付かれ呆気なく絡み取られた。

ワイヤーを撃ち抜かんとセシリアがレーザーライフルを構えるとラウラは先ほど捕まえた鈴を空中で振り回しセシリアにぶつける。

機体のエネルギー残量は2機とも0の数字を指している。シールドを失い機体の破損レベルがレッドゾーンに突入するとラウラはワイヤーを伸ばし1本は鈴をもう1本はセシリアを捉え、引き寄せる。丁度良い距離にまで近付けるとラウラは加虐的な視線で2人を見下ろし、足や腹、肩のアーマーに拳を入れて破壊を開始した。

シールドのエネルギーを失ってから更に攻撃を受けたならISは強制解除され、最悪の場合操縦者の命に関わってくる。

ラウラはそれをわかって攻撃を繰り返しているのだ。

レイヴンはまだ何もせず3人を見ている。

「クソッ！」

我慢の限界を超えた一夏は右の袖を捲り、待機時の白式が装着された腕を突き出し心の中で叫ぶ。

（来い白式！）

白光と共に現れる純白の装甲は瞬く間に操縦者の身体を覆い、背部にスラスターが展開される。右手には雪片式型を携え、刀身は蒼白の輝きを帯びた。

一夏は飛び上がり、アリーナのシールドを斬り破るとフィールド内に乱入し一方的な暴虐を続けるラウラに一直線に突進した。

イグニツション・ブーストからの最大出力での斬撃、単純な攻撃法ではあるが白式が使用すればその威力は計り知れない。

今の一夏に彼我との実力差は計算に無く助けようとする一心で動いていた。

「単調だな。絵に描いたような愚図だ」

またラウラは片手を突き出しAICを発動させる。空間にエネルギーを使って圧力を掛けて対象者の身動きから攻撃の一切を封じるシュヴァルツエア・レーゲン特有の装備。

「――！ 身体が……！」

一瞬にして一夏の身体は鉛のように重くなり身動きを制されてしまふ。

「死ね」

装填を完了したレールカノンの砲口が一夏の顔面に向けられる。

シールドエネルギーがあるとは言えここであの一撃をくれば確実にエネルギー残量は0になる。

歯を食いしばり目を瞑った途端、空からサブマシンガンの弾丸が降り注ぎ、ラウラのシールドエネルギーを奪って行く。

「一夏、離れて！」

シャルルの高速の射撃は一夏を拘束する見えない力を振りほどいた。

その瞬間にイグニッション・ブーストを発動、急激な加速でシュヴァルツェア・レーゲンを通り過ぎ、地面に横たわるセシリアと鈴を確保するとアリーナの端にそっと寝かせた。

「見苦しい所をお見せしましたね」

「黙ってる。傷に響くぞ」

何とか2人を救出したが時間を稼いでいたシャルルの形勢は不利な方へ向いている。

「世代差と言うやつを見せてやる」

AICでシャルルの身動きを止め、ラウラのプラズマ手刀が振り上げられた次の瞬間、一発の銃声が響きライフルの弾丸がシュヴァルツェア・レーゲンの肩の装甲を弾き飛ばした。

「おのれ！」

ラウラが振り向いた先にはレイヴンがライフルを構えてスコープからこちらを覗いていた。

「いい気になるなよ！」

再びレールカノンの砲弾を装填しレイヴンに砲身突き付けトリガーを引こうとしたが、ラウラはそれを躊躇った。

何故なら目の前には千冬が凜然とした態度で立ち、打鉄の刀をISも無しに握り切っ先をラウラに突き付けていたからだ。

「やれやれ、これだからガキの相手は困る。模擬戦は大いに結構だ

がアリーナのシールドを破壊する事態となつては教師として見逃す訳にはいかない」

場の空気が静まりラウラはレールカノンの砲身を上へ向けた。

「レイヴン、あなたも最年長者なんだから止めるなりしてくれ」

「警告はしたがその娘が聞かないんでな」

「……この決着は個人トーナメントで行う。それまで私闘は禁止する。いいな？」

「ああ……」

「教師には『はい』と答えろ」

鋭い目つきで一夏を睨む。

「は、はい」

「教官がおっしゃるなら」

ラウラはいさぎよくISを解除しアリーナを出て行く。

「よし、解散！」

模擬戦の後、セシリアと鈴は即座に保健室に運ばれた。保健室にはレイヴンとシャルルそして一夏が居た。

2人ともだいぶ手痛くやられた様子でずっと俯いていた。
命に別状が無いので一安心だが一夏は腑に落ちない事があった。

「レイヴン……さん！」

一夏はレイヴンの胸ぐらを掴むと怒りを露わにし睨み付けた。

「どうして2人を助けなかったんだ！」

「相手との実力差も考えずに突っ込むバカを助ける必要があるか？
尤も、そいつらから救援要請があるなら話は別だ」

「このっ！」

一夏が拳を振り上げるとそれをシャルルが止める。

「一夏ダメ！ らしくないよ」

「でも……」

「いいんです。確かにわたくし達はラウラさんの挑発に乘りました。
勝てない事くらいわかっていながら」

「セシリア……」

「でも今度は絶対に勝つよ。リベンジする相手が1人増えちゃった
けど」

「ダメですよ2人とも」

声がした方へ皆の視線が集中する。

そこにはいつも緊張してミスをする真耶ではなく教師らしい風体で立っていた。

「オルコットさんも凰さんのISも破損レベルがCを超えています。個人トーナメントの参加は認められません。それとレイヴンさん、あなたもISをしばらく使用を禁止します」

「理由を聞こうか」

「リヴァイヴの各駆動部がボロボロになっていました。無理な操縦のツケです」

「……了解」

「それはそうと、来週の個人トーナメン——」

一夏の言葉を遮り、保健室のドアが外れて正に雪崩のように女子生徒が大量に入り込んで来た。

「織斑くん！ デュノアくん！」

全員の声が見事に重なる。

「ど……どうしたんだ？」

「これ！」

2人の目の前に学年別トーナメントの連絡プリントが突き出される。

「今月開催する学年別トーナメントではより実戦的な模擬戦を行う
為ペアでの出場を必須とする」

「わたしと組も織斑くん！」

「わたしと組んでデユノアくん！」

「私と組んで下さいレイヴンさん！」

「俺は生徒じゃないからトーナメントには出れないぞ」

「悪いなみんな、俺はシャルルと組むって決めてるから諦めてくれ」

さっきまでの騒がしさが一瞬にして消滅し何人かが少し後ずさる。

「まあ、それならいいかな？」

「他の女の子と組まれるよりは良いし」

「男子と男子……グフフ」

意外にも諦めは早く1人また1人と保健室から出て行き、別のペアを探そうと皆右往左往するのだった。

「んじゃあ、俺らはもう戻るな。怪我、早く治せよ」

一夏とシャルルは保健室を後にした。

シャルルと組んだのは一夏は正解だと信じて来週の学年別トーナメントの日が来るまで鍛錬に明け暮れて過ごした。

トーナメント当日、更衣室にある電工掲示板に対戦相手の発表がされていた。

一夏とシャルルの初戦はラウラそして箒であつた。願つたり叶つたり、一夏もラウラ両名ともお互いと戦う事しか頭になかつた。

しかし、箒は心中穏やかではない。

ラウラはこの上ない戦力ではあるが、この少女が戦う姿は醜く、汚らしく映っていた。さながら中学時代の箒のように。

篠ノ之束がISを提唱した事により箒の家族は重要人物として見られ、全国を転々と移動させられた。

あらゆる事に嫌気が差して来てが剣道だけは止めなかつた。それは唯一、一夏と繋がっていられると感じれたからだ。

その折に箒がやっていた剣道はとても剣道とは呼べる物ではない。

“それは全てを叩き潰す暴力”

セシリア達と戦っていたラウラとかつての箒はまさに同じ目をしていた。

「私は強さを見誤らずに勝てるか……」

箒はボソツと呟き、いつも以上に鋭い目つきで電工掲示板を睨んだ。

一方、ピットでは一夏が落ち着かない様子で椅子に座っていた。

「一夏はボーデヴィッヒさんとの試合がずっと気になってるみたいだね」

「ま、まあな」

「気を悪くしないでね。ボーデヴィツヒさんの実力は恐らく一年生の中では最強、篠ノ之さんもIS適性はCだけど高い身体能力があるから無視出来る存在じゃない。ハッキリ言って強敵だよ」

「わかってる」

『試合開始まで残り5分、選手は出場を開始して下さい』

「行くかシャルル」

「うん」

一夏は椅子から立ち上がり白式を展開しカタパルトに乗る。

「カタを着けてやる！」

カタパルトから射出され白式はアリーナへ飛び出して行った。

レッドバタフライ（前書き）

ゴールデンウィークが3日しかねえ！。

ゴールデンでもなければウィークでもない……。

5月はもう祝日ないし6月も祝日無し。あーあ……休み欲しいな。
まあ休みが多かったら更新が遅れるんですけどね。

レッドバタフライ

地上をを高速で滑走する4機のIS、一夏の白式とシャルルのラファール・リヴァイヴ・カスタムとラウラのシュヴァルツェア・レーゲンに第の打鉄である。

シュヴァルツェア・レーゲンの砲撃が降り注ぎ、一夏はその猛攻を絶妙なスラスタの使用によって回避している。

砲身も砲撃も見える分鈴の衝撃砲よりずっとかわし易い。だが、もし一発でもくればシールドエネルギーの大半を失う事になる。ラウラのレールカノンはそれだけの破壊力があるのだ。弾速が遅いからと言って決して軽率に見てはいけない。

そしてシャルルだが今は第と交戦している。実力と相性を考えての構成である。

先に潰しやすい方を潰しておく、それが今回の作戦の一つだ。防御力を意識した造りの打鉄を纏った第はシャルル目掛けバカ正直に突進する。

「甘い甘い……」

シャルルは足を地に着けて右足を軸に半回転し第が真横を横切るとサブマシンガンを呼び出し、から空きの背中に斉射する。

しかし、第は幅の広いIS用のブレードを背中に背負い盾として扱いシャルルの攻撃を凌いだ。

「私を甘く見られては困る」

第はブレードを地面に力一杯に叩き付けて砂埃を舞い上がらせた。ハイパーセンサーによって直ぐに位置を特定されるが、一瞬の虚をつき打鉄は前進する。右に振り上げたブレードを振り下ろすと耳

をつんざく様な金属音が響き渡った。

シャルルは手の甲から黄色いブレードを瞬時に展開し、箒の攻撃を受け止めた。

右手が空いたシャルルは危険をかえりみず小型グレネードを召還し、箒の腹に向けた。箒の顔が青ざめたその時――。

「うおおっ！」

どこからともなく一夏が2人に激突し、拘束が解けシャルルのグレネードは空中へと飛んで行き爆発した。

素早く態勢を立て直したシャルルはブレードを取り出し、箒へ飛びかかる。

すると視覚外から2本のワイヤーブレードが飛んで来ると、シャルルの足を絡め、上空へと放り投げた。

ラウラはワイヤーを収納すると、プラズマ手刀を両手に展開し、一夏に向かって走り出す。元よりラウラの狙いは一夏であり、他など眼中にない。

ラウラのプラズマ手刀の連続攻撃を雪片でさばく。戦いが長引けば、白式はエネルギーを失い、攻撃手段の全てを失う事になる。

プラズマ手刀を雪片で弾き、もう一本を身がかがめる事でかわす。これでラウラの懐はがら空きとなった。

一夏の瞳が光り、雪片の刀身にエネルギーを送り込む。そう、この至近距離でブレード光波を使う気なのだ。

威力を誤らないよう、だいたいエネルギーの注入を加減した。

「これで終わりだ……！」

「バカが！」

“ここぞとばかりにシュヴァルツェア・レーゲンの特異システム”

A I C”が発動し一夏の動きは完全に停止した。

「この停止結界の事を忘れたな！」

ラウラはレールカノンを一夏に向けて不適に笑う。

「貴様が終わりだ」

ラウラがトリガーを引こうとしたその時だ。

「きゃああッ！」

今度は箒が投げ飛ばされ猛スピードで突っ込んで来る。ラウラを跳ね飛ばしA I Cの束縛から逃れた一夏は小さく安堵の溜め息を吐いてシャルルの下にまで後退した。

「お返しだよ」

普段よりずっと低い声色のシャルル、眼光も鋭くいつもの天使の笑みはどこにもない。

「一夏、もう少し持ちこたえて」

「わかった」

リヴァイヴは空中に舞い上がるとそこから打鉄に向かって急降下し2丁のアサルトライフルを掃射した。

弾幕を凌ぐように箒はブレードを振り回すが次々にやって来る弾丸を防ぎきる事は出来ない。

弾幕に気を取られている隙にシャルルは箒の間合いを侵略すると

アサルトライフルを即座にショットガンに切り替え至近距離で引き金を引く。

凄まじい衝撃を何度もその身に受けた筈の体は吹き飛び、アーリーナのシールドに叩き付けられた。

再度攻撃に出ようとするものの打鉄のシールドエネルギーは0を差し、駆動部から蒸気を噴射し打鉄は機能を停止した。

「ここまでか……」

悔しそうにうつむき筈は地面を殴りつけていた。

そして一夏の方だがラウラのA I Cにまた捉えられ身動きが取れないでいた。

レールカノンのリボルバーを回転させ砲弾を装填する。

「今度こそ最後だ」

「ラウラ、これはチーム戦だぜ」

一夏の顔をすり抜けてライフルの銃身がレールカノンの砲口へ押し込まれる。

砲弾は発射される出口を失い薬室内で大爆発を巻き起こした。これでシュヴァルツェア・レーゲンのメイン兵装のレールカノンは失った。

「お待たせ」

「ナイスタイミングだシャルル。結構大胆な事するんだな」

「い、いい気になるなよ……下等動物ども！」

ワイヤーブレードが左右から迂回し一夏を狙うと一方はシャルルに迎撃されもう一方は一夏に回避された。

2人の意識がワイヤーブレードへ行った刹那、シュヴァルツェア・レーゲンは驚くべきスピードで迫りプラズマ手刀を水平に振り抜きシャルルのリヴァイヴの装甲を切り裂いた。

レールカノンを失った事で攻撃力は大幅に削げたが代わりに俊敏性を与えてしまった。

ワイヤーブレードとプラズマ手刀を同時に且つ巧みに使うラウラはさつき以上の脅威を2人に与えた。

軽捷な身のこなしではあるが一夏は必死に食らいついていた。

そして2本のワイヤーブレードがついに一夏を捉えるとラウラの瞳にはあの時の加虐的な色が宿った。

「さよならだ織斑一夏」

ラウラの一言に一夏は次に何をするかを察し、雪片を振り回し力の限り暴れる。

ワイヤーが一夏の首を締め付け始めた途端背後からシャルルの援護射撃が入って来る。

一度は動揺したものの今のラウラは勝利を確信した目をしている。シュヴァルツェア・レーゲンの腰からあるうことか更に2本のワイヤーブレードが顔を出しシャルル目掛け襲いかかって来たのだ。

「捉えた！」

ラウラが大声を出し口の端を歪めた時、ワイヤーブレードはシャルルを捉える事なく地面に突き刺さった。

「なッ！ イグニッション・ブースト！」

瞬間的に爆発的な加速を生み出すイグニッション・ブーストをワイヤーブレードでは捉えきれないし今のラウラは4本のワイヤーに意識を集中させている為、プラズマ手刀は使えない。

故に懷はがら空きだ。

シャルルは肩の装甲を取り外し右腕に装着すると装甲はパージされ中から黒い光沢のある巨大な杭が現れた。

「盾殺し（シールド・ピアーズ）！」

第2世代型の兵器では最強の威力を誇る射突型ブレード、シュヴァルツェア・レーゲンにも十分過ぎる効果をもたらしてくれる。イグニッション・ブーストを使ったシャルルに反応は間に合わずラウラの下腹部にパイルバンカーの一撃を受けた。

一夏の拘束は緩みラウラはアリーナの壁に叩き付けられるとシャルルは追い打ちをかけパイルバンカーを打ち込んだ。

撃鉄は何度も上下に動きその度ガスが噴射され冷却する。

満杯にまであったラウラのシールドエネルギーはシャルルの盾殺しにより見る見るうちに失って行く。

（私が……負ける？ そんな……バカな。負けられない！ 絶対負けられない！）

失われかけたラウラの闘争心に再び火がつくと頭の中に無機質な機械的な男の音声が流れた。

『お前は力を欲するか？ 最強の何人も寄せ付けない力が欲しいか？』

ラウラの答えは決まっている。

「よこせ……最強の力を！」

豁然、シュヴァルツェア・レーゲンの装甲は赤黒く変色すると粘土のようにに溶け出しドロドロになり、地面に広がるとそこからラウラの体を覆い隠し新たな形を形成していく。

さっきまで確かにあったラウラの意識は今は完全に喪失し虚ろな瞳をしていた。

形の形成が完了したその機体はゆっくりと空中へ舞い上がる。機体色は赤黒から赤へ変わり全体的な機体構成はISと言う枠から逸脱していた。

それはサイズこそ違うが外見はまさに旧世代の遺物、レッドバタフライであった。

「排除、排除、排除、排除」

機体から聞こえて来た声は無機質な男性の声とラウラの声が入り混じった物であった。

「な、何だよアイツ」

クラス代表戦の時に乱入して来たISよりも禍々しい気配を放つ機体にたじろぐ一夏。

「わからない」

その赤い機体は手首の無い両腕をシャルルに向けると躊躇なくプラズマキャノンを放った。

「うわぁっ！」

第、ラウラと立て続けに戦いエネルギーを消費していたシャルルに今の一撃を耐える事は出来ず、リヴァイヴは停止した。

だが、その機体はまだシャルルを狙いプラズマキャノンとパルスキャノンを見舞った。リヴァイヴの装甲は溶け左腕を吹き飛ばされ右足も融解してしまいダメージレベルは一瞬にしてDを超える。

「シャルル！」

一夏は零落白夜を発動し雪片を振り上げ頭上から飛びかかる。しかし、あるうことがレッドバタフライから4本のワイヤーが飛び出し一夏の四肢に絡み付き捕まえた。

「しまった！」

動けない一夏にその機体は容赦なくグレネードランチャーを放つ。白式のシールドエネルギーもまた一瞬で0となりスラスターを1基破壊された。

白式、リヴァイヴ共に機能停止した2人に抗う術はない。

「排除、排除」

赤い機体は一夏をぞんざいに投げ捨てると照準をシャルルに向け砲口にエネルギーを蓄える。

もしまだプラズマキャノンを受ければダメージはコアにまで至るだろう、そうなればリヴァイヴは完全に破壊され修復は不可能となる。

赤い光で砲口が満たされ発射が完了した時、一発のライフルの弾が赤い機体の砲口に入り込み左腕は暴発し根本から失った。

「シャルル、一夏……2人とも撤退しろ」

現れたのはリヴァイヴに搭乗するレイヴンであった。まだ修復が完了していないリヴァイヴの脚部は既に火花を散らしている。

稼働時間がどうこの前にリヴァイヴが戦闘終了まで持ちこたえられる保証は全くない。レッドバタフライは目標をシャルルからレイヴンへと切り替えると肩からミサイルを撃つ。リヴァイヴは1発目を身をかがめて回避するとスラスターを噴射して機体を前方へと推進する。

しかし脚部のギアまた僅かに火花を散らした。スラスターの噴射炎を地上に定めてリヴァイヴも空中へと飛び上がる。

レッドバタフライは多種多様の高威力なキャノンがある代わりに近接武器を一切持っていない。そこに漬け込もうとレイヴンは何度か接近戦を持ちかけるのだが、レッドバタフライの砲撃の雨に近づく事すら出来ずにいた。

そしてリヴァイヴのディスプレイには現在の破損状況が映し出され、画面の右上では新しい項目が出来上がっていた。

『リヴァイヴの高速学習モード』と書いてあるのだ。レイヴンは躊躇わずモードを切り換えた。

すると突如としてレイヴンの脳内に膨大なデータが入って来た。初めてISに触れてからいくつもの模擬戦をし、コアに刻まれた戦いの記憶はリヴァイヴの反応速度を最適化しリヴァイヴの各所が光り出し、ギアは高速で回転する。

スラスターを噴射すると地面に波紋を呼んだ。レイヴンの動きを学習したリヴァイヴはちゃんとレイヴンの操作にも付いて来ているしレッドバタフライの砲撃の速度もしっかり学習した。

「目、覚まさせてやるよ」

2基のスラスターが炎を噴射しリヴァイヴはレッドバタフライの周囲を旋回しつつアサルトライフルで着実にダメージを与え赤色の

ボディに弾痕が残る。

青色に光るカメラアイがレイヴンのリヴァイヴをロックしレッドバタフライは残された腕部にプラズマ手刀を作るとその機体はまた形を変え始めた。

今度は頭と肩が繋がったような非人間型ではなく、スラッとしたちゃんとした人型の機体になった。

同時に肩と腰からワイヤーブレードが現れ失った腕部は代わりにレールカノンが搭載された。

これはもはやレイヴンの知るレッドバタフライとはかけ離れた物である。

4本のワイヤーブレードがリヴァイヴを捉えようと四方から伸びるとレイヴンはワイヤーとワイヤーの間をかくぐりレッドバタフライに接近する。

プラズマ手刀を振り上げるとレイヴンは左手で敵の顔面を殴り飛ばす。

少し機体が揺らめくがレッドバタフライはレールカノンを構え薬室に弾丸を込め砲身をリヴァイヴに向けるとレイヴンは膝蹴りで砲身の向きを強制的に変え、砲弾は空を流れた。

レッドバタフライは咄嗟の判断でプラズマ手刀を振りリヴァイヴのスラスターを破壊し、そのお返しにレイヴンはブレードで頭部を切断した。

両者共に飛行が困難となり徐々に降下しここぞとばかりにバズーカを召還しコアに撃ち込んだ。今度ばかりはレッドバタフライも完全に態勢を崩し、レイヴンは足元に潜り込むとブレードを逆手に付けて股から首にかけて縦一閃に両断した。

装甲は完全に裂かれ、中からラウラが出て来る。涙を流し目頭を赤くした少女は力無く前のめりに倒れた。

レイヴンは腕を伸ばしてラウラを抱えてやる。

「はぁ……バカ野郎」

ラウラの暴走により学年別トーナメントは中止となった。暴走の原因はシュヴァルツエア・レーゲンに搭載されたVTシステムである。操縦者の願望が最も強く働き破損レベルが設定以上に達した際に発動する禁断のシステムだ。

禁止になったのは操縦者の精神を蝕み廃人にする可能性が出て来たのと一度発動すれば手がつけられなくなるからだ。

奇妙なのはラウラの願望を具現化する筈が何故かレッドバタフライになった事だ。

「んっ……」

ラウラが目を覚ました頃には空は茜色に染まり校内には静けさがやって来ていた。

「起きたか」

「……………レイヴン」

「私は……どうしたんだ」

「敗北寸前に暴走して止められた」

VTシステムが作動していた時の記憶は殆ど無いが力が任せて暴れ自分がいかに弱い存在かを思い知らされた。

「私は弱いな」

「ああ、弱い」

「レイヴン、どうしてお前はそんなにも強いんだ？」

「生きたいからだ。生き残る為に何者にも巻かれず自分を信じた」

「自分を信じる……か」

「まあ、お前はお前なりの強さを見つける」

「こんな私に出来るのかな？」

「随分と弱気だな生意気娘、出来ないならお前はそこまでの女だ」

レイヴンはベッドから立ち上がると保健室のドアを開けた。

「下らないプライドなら捨てろよラウラ、その意志がお前を変える」

そう言い残しレイヴンは去ってしまった。

窓から青嵐が突き抜けラウラの髪がなびく。ラウラは眼帯を左目に着け微笑む。

胸の内に住み着いた闇は溶けてなくなった。戦う為だけに作り出された兵器としてのラウラは死んだ。

今より1人の女性としてのラウラが生まれたのだった。

水着を買いに街へ（前書き）

昔はトリビアの泉と水10って言う番組楽しみにしてたんですね。そう言えばまさかのミステリーって終わってたんですね、3ヶ月前に友人に言われて初めて気付きました。

ああ〜面白みたいなあ〜。

部活で友人に頼んで後輩に「邪王炎殺黒龍波アア!!」ってやってもらったよ

水着を買いに街へ

学年別トーナメントから数日、ラウラのレイヴンに対する行動に少し変化が出ていた。以前は全く保健室を訪れなかったが最近では毎日のように来ている。

朝会った時は、前なら睨み付けて来たのだが近頃では妙に頬を赤らめて挨拶して来るのだ。少なからずラウラがレイヴンに好意を抱いているのは端から見れば容易に理解出来るし、レイヴン本人も心境の変化に違和感を感じていた。

早朝、一夏が目覚ましまだハッキリとしない意識の中で隣のベッドに目を向けるとルームメイトのシャルルがいない。

不快感を抱いたものの、一夏は特に気にせず寝間着から制服に着替えて教室へ向かった。教室に向かう最中、一夏の進行方向よりラウラが歩いて来る。初対面でいきなり平手打ちをされた以外に不意打ち等と良い印象が全く無い。

一夏は関わりを避ける様に視線を逸らして歩く。

「織斑一夏」

名前を呼ばれ一夏は足を止め、また平手打ちを受けないように警戒心を高めて振り返った。

「……………な、何だよ」

「…………先々のお前に対する筋違いな非礼は謝る。すまない」

意外な言葉に一夏は戸惑いを見せ、頭をポリポリと掻いた。

「おう…………こっちもそんなに気にしてないから」

「本当か？」

「ああ、本当だとも」

「そうか……ではまた教室で会おう一夏」

ラウラは長髪をなびかせて去って行くと一夏は何事も無かったように教室に入って行った。中はいつものごとく騒がしく、自席に座り担任の千冬が来るのを待った。

チャイムが鳴ると同時に副担任の真耶が入って来るなり何の前置きも無しに重大発表を始めた。

「えつと……このクラスにまた転校生が来ます。って言ってもみんながよく知る人なんですけど……ね」

歯切れの悪い紹介に全員が首を傾げていると教室のドアが開き、1人の少女が入って来た。黄金色の髪と翠玉のような色の瞳が特徴の少年、シャルルだった娘がそこにいた。ズボンからスカートに変えるだけで一気に女性らしさ出る。

「シャルロット・デュノアです。改めてよろしく申し上げます」

清楚な少女は深くお辞儀をした。

「デュノア君は……女？」

「えつ……女？ ナオン？ ちゃん姉？」

「はい、僕はれっきとした女だよ。諸事情で性別を変えていたけど」

「ちよつと待ったあ！ デュノア君はこの間まで織斑くんと同室だったよね！」

1人の女子が勢い良く発言すると勘の良い生徒達は直ぐに何が言いたいかを理解した。

「そう言えば昨日は男子用に風呂が解禁になったよね」

ある1人の発言により教室が静まり返ると教室の右端と後ろの方からセシリアと箒からとてつもない殺気を漲らせ一夏を睨んだ。

「一夏ア！ まさかお前がそこまで墜ちていたとは！」

箒は木刀を振り上げ、セシリアは無言でレーザーライフルにエネルギーを充填した。

「おいおい……冗談キツイぜ……冗談だよな？」

「死ねえ！」

その後、一夏が2人から死に物狂いで逃走し校内を駆け回った後に千冬の地獄の説教を受けたのは言うまでもない。

日曜日、今日は当然ながら学校は休みで一年生は来週に迫った臨海学校に向けて水着を求めて街を右往左往していた。

そして、教師陣も同様に水着を買ったために街に出ていた。

街のあるデパートでは千冬に真耶それにレイヴンが水着コーナー

にいた。

レイヴンが来た理由は街の風景を見たいが為である。女尊男卑と言われているが男性があからさまに冷遇されている訳ではない。と言っても男性の立場が弱いのは明確な事実であった。

レイヴンはこの風潮に嫌悪感を抱き、その風潮に従う弱い男達も堪らなく嫌いであった。

「ところでだがレイヴン、あなたには明後日の林間学校に同行してもらうぞ」

「何故だ」

「あなたの管理は私達に任せられているのに1人置いていくのはどうかと思うが」

「俺は一向に構わないが」

「よし、決まりだな」

同行する事を承諾してしまったがレイヴン自身、酷く気が進まなかった。

ここ数日間、毎日感じる胸騒ぎが彼を捕らえて離さない。出来る事なら一夏達を巻き込みたくないというのがレイヴンの望みだがそれは淡い考えだ。

女性用水着のコーナーから外れてレイヴンはエレベーターの隣りに設置された椅子に腰掛けて周囲の様子を見ていた。

しかしどこを見ても『女性専用』や『女性限定』などの看板が必然的に目に飛び込んで来る。それにどこか情けない風体の男もちらほら見える。

レイヴンは目を瞑り俯きそのまま固まった。このまま人間観察な

ど続けていても奇立ちを覚えるだけで気晴らしにもならない。
自分が元居た世界が妙に恋しくなるが何が原因でこの世界に来たのかも戻れるのかも一切分からない。

「あ、レイヴンさん……」

聞き覚えのある声がして目を開いてみると案の定、目の前には一夏がいた。

「一夏か。お前も水着を買いに来たのか？」

「いえ、俺はシャルロットの付き添いですよ」

「シャルロット？」

「シャルルの事ですよ」

「ああ……女という事を公言したのか」

「あれ……？ レイヴンさんもしかして知ってたんですか？」

「ああ」

「そうですか……じゃ——」

「一夏！ ちょっとこっちに来て」

言葉を遮り、シャルロットが一夏の手を掴む。

「お、おい！ どうしたんだよいきなり」

「ちょっと見てほしい水着があるの。あ、レイヴンさんこんにちは。それじゃ!」

一応、挨拶を済ませるとシャルロットは一夏を連れて水着コーナーの更衣室に消えて行った。

いつも冷静なシャルロットが妙に慌てていた事に疑問を覚えてみるとレイヴンが座っているベンチから少し離れた箇所にある自動販売機の陰から2つの視線を感じた。

上手く隠れているつもりかは知らないが1人は茶色いツインテールの片方が思いつ切り飛び出しもう1人はやや縦にロールがかかった長髪を丸見えにしている。

(プリンシバル……じゃなくてセシリア・ウォルコットか。……いや、オルコットだったな。もう1人は例の酢豚娘か)

2人の視線の先は一夏達が入って行った水着コーナーである。身を隠しての追跡、尾行以外の何物でもない。

「おい、そこに隠れているセシリアと酢豚娘」

名前を呼ばれて真っ先に飛び出して来たのは当然、鈴であった。

「誰が酢豚娘よ!」

「すまん、名前を覚えていないんだ」

「鈴! 凰鈴音! 覚えときなさいよ!」

「わかったから叫ぶな。せつかくの尾行が台無しになるだろう?」

レイヴンに指摘され鈴は思い出したように両手で口を覆ったが鈴の声は店内に響き、幾分か注目を浴びていた。

「そう言えばレイヴンさん、あなたはさっき一夏さんとシャルロットさんと合っていましたよね？」

「そうだが」

「どこに行ったかご存知？」

「2人仲良く更衣室に入って行ったぞ」

「はぁ……？」

阿呆のように口をポカンと開けた2人は顔を見合わせてからゆっくりと更衣室に目を向けた。

「よし、殺そう」

「ですわね……」

その同時刻、鈴とセシリアがメラメラと殺意を燃やしている最中一夏は脈動する心臓を押さえつけようと必死に胸に手を当てていた。何故ならそれは狭い個室でシャルロットと共にいるからだ。一夏のちようど真後ろ、距離にしたら数十センチも離れていない所でシャルロットは既に脱衣し始め水着に着替えようとしている。

（落ち着け……落ち着け織斑一夏。後ろで着替えていようが関係ない無心になるんだ）

そう言い聞かせるがやはり一夏も健全な男子高校生、この状況はやましい精神を面白い程にかきたて、いけない方向に揺さぶって行く。

（ちょっと見ようかな……。いや、ダメだシャルロットの信用を裏切るような真似はダメだ。——！ そうだ、鏡があるじゃないか）

顔を上げれば一夏の目の前には全身を写す為の鏡がある。

（まあ……鏡に写っちゃうんなら仕方ないよな……。？。ううゝ！ 見えないイ、後ちよゝつとで見えるんだが見えないイ！）

もはや煩惱を隠そうともしなかったその折に一夏の瞳には確かにそしてしっかりと見えた物があつた。青と白のしましま柄の下着だ。（見えた！ 見えたぞ！）

「ねえ一夏？」

「ど、どうした？ 良いパンツだな」

「え？」

「いや、何でもない！ 可愛い水着だなんて思ったただだよ」

「ホントに！？」

一瞬眉間にシワを寄せたシャルロットも可愛いと言われ固い表情

がほどれいつもの笑顔に戻った。

「じゃ、じゃあこれにしよう……かな」

「うん、それが良い。だから早く着替えて外に出よう。若い男女が密室で2人つきりつてのは不味すぎる」

一夏は再び壁の方に向くとシャルロットは着替えを始める。数秒間だがその僅かな沈黙が何故だか気まずく感じられる。

「着替えたよ一夏」

「じゃあ出ようか」

一夏はカーテンを勢い良く開け更衣室を出るとそこには腕組みをしたレイヴンとISを部分展開したセシリアと鈴がいた。

「あ」

「……レイヴンのオッサンの言うとおり、本当に一緒に更衣室に入っていたとはね……」

鈴の瞳には光がなく虚ろな目をし、セシリアは顔を引きつらせている。

「よし、殺そう」

「え……！ マジ！？」

鈴が双天牙月を振り上げたその時、軽い音と共に鈴とセシリアの頭にハンガーの一撃がお見舞いされた。

「全く店内でISを出すなバカ者」

「げっ！ 織斑先生」

「何だその失礼な反応は。今回は特別に見逃してやるからさっさと散れ、休日も説教されたくないだろう？」

「はあい……」

仕方無くISを待機モードに戻し、2人は逃げるように水着コーナーから出て行った。

「そしてその2人、男女が更衣室に一緒に入るのは感心せんな。学園に帰ったら教室の掃除をするように」

「は、はい」

「わかったよ千冬姉」

「はあ、まあプライベートだし今日は多目にみてやるか。行け」

一夏とシャルロットも消えてその場には教師2人とレイヴンの3人となった。

「やれやれ……」

「ところで2人とも用件は済んだのか？」

「私はもう済みましたよ」

「ちょうど良い、レイヴンにも聞いておこうか」

「何をだ？」

「こっちの黒の水着と白の水着どちらが良い？」

白い方はヴィジュアル面よりも機能性に主眼を置いた作りになっており競泳水着という印象が強く、黒の方は露出度の高い妖艶さを意識し作られている。

「黒だ」

一分の迷いもなくレイヴンは黒い方を選んだ。

「黒の方だな」

レイヴンの言われた方を持ち、千冬は白い水着を戻した。

「お会計を済ませて来ますんで少し待ってて下さい」

「わかった……」

レイヴンは壁にもたれて水着を選んだ際に少々、自分の性的な欲求を露骨に出した事を反省していた。

さかのぼる事20分前、制服姿でデパート内をラウラは歩き回っていた。

今朝方にレイヴンが外出するのを目撃しラウラもセシリア達同様に尾行をしていたのだ。だが、目標を完全に見失ってしまい宛ても無くただぶらぶらと歩く結末になってしまったのだ。

ラウラ自身水着など興味など無く臨海学校も学校指定の名前入りのスクール水着を着用するつもりだった。

しかし――。

「水着は慎重に選ばないとねえ」

「そうそう、もしダサイのか着てたら一瞬で好きな人に嫌われるし」

不意に耳に入って来た言葉にラウラは胸を貫かれるような衝撃が走り、彼女は即座にケータイを取り出した。

「もしもし？」

『はい、こちらクラリッサ・ハルフォーフ大尉です』

電話をかけた先はラウラの所属するドイツ軍特殊部隊“黒ウサギ隊”の本部である。

電話に出たのは黒ウサギ隊の副隊長のクラリッサである。

「クラリッサ、少し聞きたい事があるのだが」

『何でしょう』

「私が気にかけている男なのだが……」

『確かレイヴンという謎の傭兵でしたか？』

「そうだ、そこでだクラリツサ男を落とす水着とはどういった物が良いのだ？」

『おお！ 隊長も遂に男性に興味をお持ちになるとは！』

ラウラの電話口から隊員達の騒ぐ声が常に聞こえて来る。

『ちなみに隊長が所持してらっしゃる水着は？』

「スクール水着だ」

『スクール水着！？ あのような旧世代の遺物では男は落とせません！ 確かにマニアには有効でしょうがスク水ではイロモノの域を出ない！』

突然クラリツサの声が荒くなりラウラは思わず電話を耳から離してしまう。

『隊員、男は萌えで落とすのです！』

「萌え？」

『はい、取りあえずシュヴァルツェア・レーゲンに萌え系のデータを転送しておきますので臨海学校までには目を通して置いて下さい』

「わ、わかった……萌えか」

『それと隊長、私にいい考えがあります』

クラリツサ怪しく瞳を光らせニヤリと笑った。

買い物も済み、一夏そしてシャルロットは繁華街を外れて住宅街を歩いていた。

人気も無く寂しい雰囲気が漂うが夕方の時間帯は必然的に人が少なくなり始める。

通行人はせいぜい会社帰りのサラリーマンくらいである。そんな人通りの少ない町に一夏の自宅がある。

久しぶりに学校を出たのでついでに空気の入れ替えをしようと戻って来たのだ。

そんな時だ、一夏の家の前に長身の青年が家を見詰め立っている。

「誰だろ……。あのーすいません」

自宅の前に立っている男に話し掛けるとその男はゆっくりと顔を2人の方へ向けるとジロジロと舐め回すように見た後、腰に手を当てた。

「織斑一夏にシャルロット・デュノアだな？」

「ええ……」

「なるほど」

男は腰から黒光りする拳銃を取り出すとシャルロットを狙い、躊躇いを見せず引き金を引いた。少女に向かって一直線に進む弾丸は空中で白式の装甲に阻まれた。

一夏はシャルロットを下がらせ雪片を構えて威嚇する。

その男は拳銃を腰にしまいシャルロットに視線を送る。

「お前達は専用機持ちだったな……」

2人が専用機を所持していると知っていて尚、余裕を見せ付ける。ISなら人一人殺す事に難は無いが一夏は攻撃する事を踏みとどまった。確実に殺してしまうからではない、その男から発せられる異様で歪んだ圧力が一夏の精神を縛り付けているのだ。

「流石にAC無しでは殺すのは無理だな。デュノア、お前の親父からお前の始末を任された。近い内にまた会いに行くから覚悟しろ」

それだけ言い残して男は去って行った。

シャルロットは口を抑えたままその場にうずくまり全身から嫌な汗を流していた。

尋常ではない様子を見た一夏は白式を戻しシャルロットに駆け寄る。

「大丈夫かシャルロット！」

「うつ……。だ、大丈夫……だよ」

難とか笑顔を作っているが無理をしているのは明らかであった。吐き気を抑えたシャルロットが覚束ない足取りで立ち上がる頃には汗はひいていたが曇った表情は完全には消えていない。

後に何度もその男について問いたとしてもシャルロットはくぐもった声でお茶を濁すだけで結局なにも答えてくれなかった。

多少鈍感な一夏でもあの男が危険人物なのは一瞬で理解出来た。正体の分からない相手に打つ手は無いが一夏は心にシャルロット

を守る覚悟の火を灯していた。

海だ！ 水着だ！ 紅椿だ！（前書き）

投稿したその数時間後に間違えて消してしまい、直ぐに書き直しました。

バックアップが無いので1から書くハメになり1回目とは少し違う所や雑な所があるかもしれません。すいません。

テスト1日前に何やってんだろ……俺。

ま、まあテテテテストなんてぜ、ぜぜぜ全然こ、怖くねーし。

す、数学の問題なんてらららら楽勝だし。

0点なんて取る訳ないじゃん

海だ！ 水着だ！ 紅椿だ！

臨海学校の前日、一夏は準備を既に終わらせ今は中学からの親友の五反田弾の家に来ていた。弾の部屋で格闘ゲームをしながら2人は何気ない会話を交わしている。

「ところで弾」

「ん？ 何？」

「明日から俺、臨海学校なんだよな」

「臨海学校！？ IS学園の！？」

「他にどこがあんだよ」

ゲームのコントローラーを放り出して一夏に迫る弾。その隙に弾の使うキャラにダメージを与えあつという間に倒してしまった。画面には『lost』と表示されているが弾にしてみればそんなのはどうでもいい。

「IS学園って言えば可愛い女の子がいっぱい居るんだろ？ お前はその子等の水着姿を独り占めしようってか」

「まあな、今日来たのも臨海学校の自慢だしな」

「……お前最近、性格悪くないか？」

「そうか？ 学校じゃ先輩には可愛いだし同級生からは格好いいだ

ぜ」

「腹立つ……」

「女の子を一瞬で虜にする……“一夏ゾーン”だな」

「チクシヨウ！ 何で俺はISを動かせなかったんだあ！」

弾が1人勝手に叫んでいると荒々しい足取りで廊下を歩く音が聞こえる。

そして次の瞬間には弾の部屋のドアが力強く開けられた。

「兄さん！ 何1人で騒いでんのよ！」

入って来たのは弾の妹の蘭だった。

シャツ一枚に前をだらしく開けた半ズボンを着用しており、シヤツからは下着がうつすらと透けて見えていた。

「——！ 一夏さん！」

「やあ、お邪魔してるよ蘭」

「何で誰か居るって言うてくれなかったのよ」

「なあ妹よ。身だしなみは毎日気にするのが当然だぞ。家だからってだらけきった生活はダメだ。俺はお前がいつ変な男にほだされなにか心配だよ」

「兄さんはいつになったらあたしを名前で呼んでくれるの？」

「お前はいつになったら俺を可愛くお兄ちゃんって呼んでくれるんだろうな」

「もういいよ。ところで一夏さんはお昼は食べましたか？」

「いや、まだだけど」

「じゃあウチで食べていって下さい。出来上がったら呼びますよ」

「そうか、なんか悪いな」

「気にしないで下さい」

ニコニコと笑顔で蘭は部屋を出て行き、ドアを閉める一瞬だけ弾を睨み階段を下りて行く。

「妹に邪魔されたから話を戻そうか」

「何の話しだっけ？」

「臨海学校だよ！ お前が女子の水着見てウハウハ言う臨海学校だよお！」

「ウハウハって人を変態みたいに言うなよ」

「うるせえ！ 男はみんな変態なんだよおお！ ゲホッゲホッ！」

「叫び過ぎだって」

両膝を着いて肩で息をする弾。

「叫んだ事だし飯行くか」

「え、まだ呼ばれてないけど」

「水飲みたい」

五反田家は定食屋を営んでおり1階は食堂となっている。2人は階段を下りると店内の空いている適当な席に着いた。

時刻は3時を過ぎている。この時間帯は極端に人が少なく今店内にいるのは弾と一夏、そして店長にして弾の祖父である五田家蔵がいた。

老人とは思えない屈強な肉体と良い色に焼けた肌が特徴的な男だ。髭は伸ばし放題で口元は完全に髭で隠れている。

「む？ おう、一夏か久しぶりだな」

「お久しぶりです蔵さん」

「ちょっと待ってるよ。直ぐにレバニラ炒め作ってやる」

読んでいた新聞を座っていた椅子に置き腕まくりし料理の準備に取りかかった。

「そんで？ IS学園で彼女とか出来たのか？」

「んなもん作る暇もねえよ」

「よりどりみどりだろ。俺の藍越学園なんて男だらけだぞ！ 羨ましいなクソ！」

「やかましいぞ弾！」

「はい、すいません」

威勢良く立ち上がって叫ぶものの敵に一括されて瞬く間にしぼんでしまう。

「よし、蘭！ メシが出来たぞ運んでくれ！」

「はい、今行くよー」

2階から蘭が下りて来る。束ねていた髪をほどき服装も外出用に着替えている。

「もう下りてたんですか」

「ああ、弾が水飲みたいって言うから。それより蘭はこれから出掛けるの？」

「い、いえ。これくらいは女として当然の身だしなみです」

「俺が注意したからなんだけどな」

小声で呟くと蘭は弾を睨み付けて黙らせるとレバナラ定食を2人の所へ運ぶと蘭は弾の正面に座った。

「IS学園は大変じゃないですか？」

「そうだな。何かと大変だぞ」

「さっき一夏ゾーンとか叫んでたの誰だっけな」

白米を頬張りながら弾はまた小さく呟いた。

「まあ鈴が転校して来てくれたからだいぶん安心出来るな。話し相手が出来て良かったよ」

「鈴って……酢豚の人……凰鈴音ですよネ？」

「ああ」

昔から蘭は鈴に対しては異常に対抗心を抱いていた。だが本国に帰還していた鈴が再び日本にそして一夏の元に戻って来るとあっては蘭も黙ってはられない。

「お爺ちゃん！」

「んあ？」

「あたし来年からIS学園に行く！」

「ああ！？」

真っ先に反応したのは弾であった。

口に含んだ水を吹き出し咳き込みながら言った。

「お前本当に言ってるのか！」

「当然、止めないでよね」

「それより蘭のIS適性はどんなんだ？」

蘭は待っていましたと言わんばかりに適性結果の表を一夏に見せ付けた。

適性結果はなんとAである。ちなみに弾と厳はFで母の蓮はCという結果が出ていた。

「全ての問題は解決です」

「Aか……弾はFなんだな」

「当たり前だろ。ISは女の人にしか動かせないんだから」

「ISを動かせる人でC以下なんて居ませんよ」

「……ん、居ない事もないんじゃないか……」

不意に一夏の脳裏にレイヴンの存在がよぎった。忘れがちだがレイヴンはISを動かせるか動かせないかギリギリのラインの適性Eだ。

「一夏、大事な話しあるからゲーセン行こ」

「何だよいきなり。顔怖いぞ」

「とりあえず話しはゲーセンに着いてからだ。あとホッケーでお前をボッコボコにしてやるよ」

「お、ホッケーか。いいぞ」

定食を食べ終わり2人は店を後にしてゲームセンターへと向かった。

数ヶ月ぶりのホッケーの勝負は悲しくも弾の惨敗という形で幕を閉じた。

臨海学校当日、IS学園の一年生を乗せた大型バスは渋滞にも見回れる事なく順調に進んでいた。

トンネルを抜けるとバスの窓の向こうには青い海と白い砂浜が広がっていた。

生徒達はより胸を踊らせる最中、レイヴンは海になど一切興味を示さずにアイマスクを装着し熟睡していた。

千冬は予定表を眺めながら騒がしくなりそうな行事の項目を見るたびに深い溜め息を吐いていた。

バスは旅館の前に停車しぞろぞろと下車すると即座に整列した。

千冬の指導の賜物である。

「さて、諸君は今から3日間この旅館にお世話になる。旅館の人の仕事を増やさないように。いいな」

「はい！」

皆の声が綺麗に合わさった。

「では部屋割りのプリントを配布する」

千冬の指示で真耶は大量のプリントをせっせかと配っていった。プリントを見詰める一夏は口をへの字に歪めて何度もプリントを見

直していた。

それは一夏とレイヴンの名前だけどこにも記されていないのだ。

「おりむゝ、部屋どこ」

ゆつたりとした口調で話し掛けて来るのは布仏本音、通称“のほほんさん”だ。

有り余った袖をバタバタと揺らし垂れた目をしており全体的に穏和な雰囲気醸し出している。

「俺もわかんないんだよ。廊下で寝るとかか？」

「廊下で寝るくらいなら俺は野宿を選ぶぞ」

「織斑とレイヴン、ついて来い」

千冬に連れられて向かった先は教員用と札のかかった部屋であった。

「織斑は私と同室だ。あなたは隣りの部屋だ」

「わかった」

一夏を一人にすれば夜間にその部屋を訪ねてバカ騒ぎ者がいるだろうが、千冬と同室であれば近寄りたくても近寄れない。

そこまでの胆力を持ち合わせた生徒はなかなか居ない。

千冬と一夏のちょうど隣りの部屋には真耶がいた。部屋の端でスツケースの中から水着を出して海に行く支度をしている。

「あ、レイヴンさん。同室になりましたけど……スケベな事は厳禁

ですよ」

「ああ」

真耶の言うことを受け流しレイヴンも荷物を畳の上に置き、座布団を枕代わりにその場で横になった。

「レイヴンさんは泳がないんですか？」

「気が向けば行く」

「そうですか。わたしは先に行っておきますから後で絶対に来て下さいね」

「気が向けばと言っただろ……」

しかしレイヴンが発言した頃には真耶の姿は無かった。体を起こしスーツケースの中にある海水パンツを引っ張り出し畳の上に広げた。

部屋の窓からは太陽の光によって反射し煌びやかな海が見えている。浜辺には早くも何人かの生徒がビーチバレーや日光浴を楽しんでいる。

まだ眠気が残るがレイヴンは海水パンツを握ると部屋を出た。

所変わって、一夏の方だが彼は既に浜辺に出ており太陽の日照りを遮るように腕で顔を隠した。

同年代の男子としてはずいぶん鍛えられて腹筋は6つに割れている。

「わあー織斑くん身体、格好いい」

「織斑くんビーチバレーしよ」

「ああ、ちよつと泳いだらすぐ行くよ」

身体を捻り折り曲げたりと準備体操をしていると突然背中に鈴が飛び付いて来た。

「準備体操なんてマメなことするじゃない」

「お、おい。いきなり飛びつくなよ」

「鈴さん！」

よく通る甲高い声がしたかと思うとパラソルを砂浜に突き刺しサンオイルを持ったセシリアが立っていた。

「何をしていますのー！」

「展望台……？」

「……。一夏さん……よろしければ背中にサンオイルを塗ってくださいませんか？」

「え？ ああ、わかりました」

パラソルの陰に入りセシリアがうつ伏せ寝になる。体の重みで潰れた胸はセシリアの脇下の陰から密かに見えている。

一夏は鼻の下を伸ばしながらオイルの入ったビンを受け取った。周囲から羨む視線を一身に浴びながら一夏は手のひらにオイルを垂らした。

一夏は手からオイルをセシリアの背中に落とすとゆっくりと広げる。

張りと弾力のある美しい白い肌に更に鼻の下が伸びる一夏。鈴としては全くおもしろくない。

「お前の肌本当にスベスベだな。なんか思わずアレやりたくなるな」

「アレ？」

「ほら、マッサージとかで垂れた肉を上げる為にペチペチやるアレ。あ、俺マッサージ得意なんだよな。良かったら後でやってやるつか？」

「本当ですよ！是非お願いしますわ」

「食い付きいいな……」

「あのさ、いつまでヌルヌルやってんのよ」

痺れを切らした鈴は一夏からサンオイルを取り上げるとセシリアの足や臀部と至る所にオイルを撒く。

「アタシが塗ってあげるわよ。ペタペタってね」

「ちょっと……鈴……さん。んあっ！ そんな乱暴に……されては……！」

「暴れないの！ あんた本当に胸デカいわね」

こそばしているのか塗っているのか分からないがしばらく絡み合

った後、セシリアは息を切らしパラソルの支柱にもたれかかった。

「はい、終了。全身ツルツルのテカテカにしてあげわよ感謝しなさい」

「鈴さん……後で覚えてなさい！」

「賑やかでなによりだ」

「「ほら、マッサージとかで垂れた肉を上げる為にペチペチやるアレ。あ、俺マッサージ得意なんだよな。良かったら後でやってやるか？」

「本当ですよ！是非お願いしますわ」

「食い付きいいな……」

「あのさ、いつまでヌルヌルやってんのよ」

痺れを切らした鈴は一夏からサンオイルを取り上げるとセシリアの足や臀部と至る所にオイルを撒く。

「アタシが塗ってあげるわよ。ペタペタってね」

「ちょっと……鈴……さん。んあつ！そんな乱暴に……されては……！」

「暴れないの！あんた本当に胸デカいわね」

こそばしているのか塗っているのか分からないがしばらく絡み合った後、セシリアは息を切らしパラソルの支柱にもたれかかっていた。

「はい、終了。全身ツルツルのテカテカにしてあげわよ感謝しなさい」

「鈴さん……後で覚えてなさい！」

「賑やかでなによりだ」

「レイヴンさん……。泳ぐんですか？」

「気が向けばな」

そう言っただけレイヴンはセシリアの立てたパラソルの陰に入り砂浜に寝転がった。

「一夏ー」

次に現れたのはシャルと全身にバスタオルを巻き付けた何かだった。

この場にいた全員がシャルの隣りにいるバスタオルの塊を凝視した。タオルの隙間からは長い銀髪が飛び出している為、誰だかは一瞬で見当がつく。

「ほらラウラ、レイヴンさんに水着姿見せるんでしょ？」

「ちよっ……ちよっと待て。まだ心の準備が……」

「迷わない迷わない。早く」

「わ、わかった」

体に纏っていたバスタオルを払いのけ中からは水着を着たラウラが現れる。

黒い色彩の水着は水着というよりも色情的な下着の印象が強く、体を隠す面積が少ない。髪は2つに分けてくくり、通常の凜然としたラウラはどこにも居らず、恋い焦がれる乙女がいた。

「ど……どうだレイヴン」

頬を赤らめもじもじと膝をこすりあわせレイヴンの反応を待つ。

「ずいぶんと愛らしくなったじゃないか」

「愛らしい？ 可愛いのか？」

「ああ」

心臓を弾丸で貫かれたかのような衝撃がラウラの体を駆け巡る。レイヴンに対して気にかかる程度の気持ちしか抱いていなかったが今はそれは強い恋心にまで発展した。

ラウラの恍惚とした恋情が一人歩きしていた。

「私が愛らしい……」

「何だまだ泳いでいないのか」

声が出たかと思いきその方向へ振り返るとそこには黒い水着を着た千冬がいた。

ビーチのほぼ全員の生徒がその姿を見て『おお』と声を上げた。引き締まった体は男子の一夏から見ても格好良く、大人の女性独特な色気は千冬は実弟の一夏ですら妙な情感をほのかに沸き立たせた。これだけでも皆は歓喜と感心の声を漏らしていたが最後に登場した真耶を見て驚嘆の念を感じた。

「やっぱり胸がキツいな」

張った胸に押されて水着ははちきれんばかりに引つ張られ一夏の鼻からとうとう鼻血が少し垂れるとバレないように急いで拭った。

「粗末なおっぱい……そっぱい」

鈴は自分の胸を見詰めると真耶の胸と見比べた。砂山と富士山、2人にはそれだけの差が見え、鈴はしゃがみ込み浜辺の砂をずっといじっていた。

ラウラは未だに惚けた表情で浜をゴロゴロと寝ながら転がっていた。

（あれ？　そう言えば箒の奴どうしたんだ？　まあいつか）

太陽の光がさんと降り注ぐ浜で体力を使い切るまではしゃぎ、全員が撤収したのは6時を過ぎた頃であった。

夕食を終えて一夏とレイヴンは温泉に入っていた。圧倒的に女子が多い為、男子が入浴出来る時間は限られている。

男湯と女湯の間にあるのは竹で編み込まれた柵だけで他に遮る物は何もなく女湯にいる女子生徒の何人かはレイヴンと一夏が何か貴

重な話しをしないかと柵に耳を当てて聞いていた。

そしてレイヴンだが頭にタオルを乗せて肩まで浸かり安堵の溜め息を吐いた。

レイヴンが入った後に一夏も湯船に浸かった。

「ああ……やっぱり日本人は風呂だよな。しかも露天風呂つてのが最高だな」

ようやくレイヴンと2人になり一夏はずっと聞きたかった事を意を決して尋ねた。

「レイヴンさん」

「何だ？」

「あなたが倒れていた時、あなたの近くにあったあの兵器。あれは何ですか？」

今、アーマードコアの存在と名称を共に知る者は僅かである。I S学園の上層部を除いては千冬と真耶しか知らない。

当然ながら生徒の中でACなんて物の存在を知る者など居ないだろう。レイヴンの目の前にいる1人を省けば。

レイヴンは少し悩んでいた。ACはここではペラペラと安易に他人に話していい物ではない、しかし一夏は既にACの姿だけならハッキリと見ている。

頑なに口を拭うのもそろそろ限界である。

「あの兵器は俺の世界での最強兵器“アーマードコア”だ」

「……アーマードコア」

「これで十分か？ 悪いがこれ以上は話す事は出来ない」

「いえ、レイヴンさん。最後に一つ答えて下さい」

「……………いいだろう」

「あの兵器でレイヴンさんは人を殺した事がありますか？」

「あるに決まっているだろ。一夏、俺は皆が思っている程良い人間じゃない。多くの人間をこの手で殺めてきた人間だ」

罪悪感は見えない。そんなレイヴンの様子に一夏はたじろいだ。

「先に上がしてもらいますよ」

「ああ」

頭に乗せていたタオルを取り一夏が浴槽から出るとふと、女湯の前にある柵を見た。

変哲も無い柵に見えるが一夏にはハッキリと見える。竹が破けて柵に小指が入る程の穴が空いている事に。

（ど、どうする織斑一夏 これはチャンスだぞ）

固唾を飲み込みタオルから水が染み出すくらい握り締めたその時だ一夏の脳裏に天使のような声が響いて来る。

『ダメですよ一夏、覗きなんてしては』

『おいおい、一夏アこんなおいしいチャンスは二度とねえぞ。覗いちまえ』

次に悪魔の囁きが一夏の心を揺さぶる。

『一夏、あなたは優しい人です。それに覗かれた人の気持ちになつてみなさい。きっと悲しみますよ』

「くっ……！」

『迷ってんじゃねえ一夏！ 覗きくらい感情でやれ！ 己のエゴで覗け！ 無慈悲なまでにい！』

「理性か……エロか」

握り締めたタオルを肩にかけると一夏は空を見上げて笑う。

「比べるまでもねーな」

誘惑を振り切って一夏は更衣室へと戻って行った。

「アイツはさっきから何をボソボソ言ってるんだ？」

一夏が上がった後にレイヴンも温泉を後にした。浴衣を着て廊下を歩いていると千冬の部屋の前に鈴と箒、セシリアにラウラとシャルがドアに耳を添えて聞き耳を立てていた。

「何をしてい——」

「シッ！」

鈴が口に指を当てて合図を送る。
好奇心が沸き立ち、レイヴンもその5人と一緒に耳をドアに当てた。

『んっ！ 一夏、少しは加減しろ』

『うん、この分だとかかなり溜まったてたみたいだな』

『お、おい。そこは……優しく……ぬふう……』

『千冬姉、次は——』

『いや、ちょっと待て一夏』

急に会話が止み、5人の少女達はよりドアに耳を強く当てるがレイヴンはドアから離れ自分だけさっさと部屋に戻ってしまう。

その直後、千冬の部屋のドアが勢い良く開き全員が扉に顔を打った。

「盗み聞きとは良い趣味だな」

仁王立ちで部屋から現れる千冬を見て顔が青ざめ蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。

しかし鈴は首根っこを掴まれ部屋に引き込まれ箒は帯を握られ、セシリアは浴衣の裾を踏まれて転倒、その際に顔を床にぶつけてしまった。

余った足でラウラとシャルの足を引っ掛けて転かし瞬く間に代表候補生達は千冬に捕まり、ズルズルと部屋の中に連れて行かれた。
一方、さっさと自室に退散したレイヴンだが部屋に戻った事を心

底後悔していた。

部屋にはビールの空き缶が散乱し畳の上には胸元を大きく開き寝転がる真耶がいた。

「あるえ？ レイヴンちゃん戻ってたんねすか？ やっぱりお酒だけは止められまへんね。うふえへへへへへ」

レイヴンは首を黙って横に振り真耶を抱えて部屋の隅に置くと布団を敷き、真耶をそこへ寝かせた。

「レイヴンさんも飲みましようよ」

「俺は下戸だ」

「ふへえゝ意外ですね」

缶に入ったビールを一気に飲み干すとボタンと気の抜けきった顔で倒れた。

襟元を乱し裾は太もが見えるまでに跳ね返ったりとだいぶはしたない風体ではあった。本当に寝たのかと真耶の顔を覗き込むと彼女は目をパツと開き、上体を起こしレイヴンに詰め寄る。

「今エッチな事考えましたあ？」

「チッ」

少し苛立ちを覚えたレイヴンは真耶の頭にゲンコツを落とす。

「ひいん！」

「目、覚めたか？」

結局、2人が床についたのは夜中の2時を回った頃であった。

翌朝、目が覚めた時には寢床に千冬の姿は既に無く一夏はふらふらと廊下を歩いていると縁側に箒が突っ立っている。

目線の先は庭の方だ。

「箒？」

「一夏か」

一夏も庭に目を向けると地中からウサミミが飛び出している。しかも丁寧な『引っ張ってね』と書かれた札が立てかけてあるのだ。

「あのさ箒、これって……」

「私は知らん」

素っ気ない態度で箒はウサミミを放置し行ってしまう。仕方なく一夏は庭に出るとその耳を手で掴み、引いた。すると地中から煙りが噴射された。

「何だこれ！」

「アハハ、引っかった〜」

声が出た方向を見ると木の枝の上にはウサミミ型の力チュー

シヤを付けた女性が座っている。

「いっくん久しぶり〜。とうっ！」

「東さん」

奇抜な行動を取るこの人こそがISの開発者、箒の姉である篠ノ之束である。

「いや〜本当に久しぶりだ〜ね〜。んじゃまた後で会おうねいっくん」

質問を投げかける暇すら与えず束は林の中へと消えて行った。嵐のような存在感を誇る束の奇行を予測出来るのは世界中どこを探しても居ないだろう。

一夏はしばらくの間、呆然と立ち尽くしていた。

臨海学校の2日目はISの戦闘データのインストールと整備に1日を費やす。

一般の生徒達は昨日の浜辺に整列しており専用機持ちは人気の無い岩場に召集された。そこには何故か箒とレイヴンの姿がある。

「今日は専用機持ちのみで行動する」

「織斑先生、箒は専用機持ちじゃないんですけど」

「ああ、その件だが――」

「ちーちゃん！」

突然、束が現れると千冬の背中に飛びついた。

「久しぶりだねちーちゃん！ あたしは寂しかったよ。ちーちゃんは寂しかった？ 寂しかったよね？」

何年経っても束は変わらない。千冬は束の頭を掴むとそのまま引き離し宙に浮かせた。

「痛い痛い痛いよちーちゃん」

「あのお、織斑先生その人は？」

聞きづらそうにシャルが尋ねると千冬は握っている束を離した。

「篠ノ之束だ」

その名前に皆が驚愕の声を上げる。

「はいはい。あたしが天才美少女の篠ノ之束だよん。よろしく」

「さっそくだが束、本題に入るぞ」

「うん、りょーかい」

ポケットからリモコンを取り出すと束はスイッチを2回押した。すると空からは卵型のラボと鉄の箱が落ちて来た。

鉄の箱が地面に突き刺さると自動的に浮き上がり四面の壁が外側に倒れ、中から赤い色をしたISが出て来た。

「これが箒ちゃんの第4世代型IS“紅椿”」

これを聞き驚いたのは箒が専用機を持つという点ではない。箒のISが第4世代型だからだ。

現在、各国家は第3世代型の開発に鎬を削りあっている。そこに突如として第4世代型などが現れる事は今までやっていた第3世代の開発は全て無に帰すのだ。

「さあさあ箒ちゃん、Y o uの専用機だよ。早く乗って乗って」

「はい」

「あ、いっくんも白式だして。紅椿と一緒にデータのインストールするから」

「はい、わかりました」

白式を展開し紅椿の隣りに並ぶと束はラボから大掛かりな機械を持ち出し2機の至る所にコードを接続するとキーボードを凄じ速さで打つ。

「ところで束、レイヴンがどうやって来たか少しは調べてくれたのか？」

「うん、調べたよ。あ、ちょっと待ってね」

パチンと手を叩き何かを思い出したかのようにラボに入った。

「ねえみんな。こんなの拾ったんだよ」

ラボから出て来ると束の腕には奇妙な虫が抱かれている。淡い青色の円形のボディをメインに黄色い複眼と口の下には何本もの足が生えている。

「いやあ、この子本当に可愛いんだよ」

束はその生き物をギュツと抱き締める。

しかし千冬とその場にいた全員が後退り、レイヴンも顔を引きつらせてたじろぐ。

「あ…… AMIDA……」

「これはレイヴンさんの世界の物なんだ。AMIDAちゃんか。やっぱり可愛いな。そう言えば最近、すごいコンピューター手に入れたんだよ。インターネサインって言ってね。これもレイヴンさんの世界の物？」

「それは聞き覚えがない」

「で、レイヴンはどこから来た人間何だ？」

「うーん、だいぶ無理矢理な理論になるからあまり言いたくないんだよね。レイヴンさんは近未来の平行世界の人間って考えるのが妥当かな？ インターネサインを調べようとしたんだけど構造が不明だし分解も出来ないし、あたしもうお手上げ」

そうこうしている内に紅椿と白式のインストールは完了し自動的にコードが外された。

「終わったんだね」

「はい」

姉を嫌う箒は必要最低限の受け答えしかせず出来るだけ会話を長引かせないようにした。

紅椿を待機モードに戻そうとすると束は箒を呼び止めた。

「ちょっと待って箒ちゃん。せっかくだしテスト飛行しよ」

「わかりました」

「えっとね。武装は刀が2本、右手の雨月と左手の空裂だよ。どんなのかはお楽しみに」

箒は空を見上げるとスラスタから炎を噴射し空中へと飛び上がった。

白式のイグニッション・ブーストを凌駕する加速力で紅椿は一瞬の間に雲を突き抜けた。さっきまでいた岩場は米粒のように小さくなっている。

平均速度、旋回、ブレーキ性能、どれを見ても従来機の上を行き、最新鋭だった白式の性能を置き去りにしていた。

ようやく手に入れた専用機、箒の口元は自然と緩みそれと同時に驕りの心も芽生えていた。

『それじゃあ箒ちゃん。武装のテストだよ』

プライベート・チャネルから束の声が入って来ると箒は小さく頷き、右手の雨月を握り打ち振る。刀身から幾本の赤色のレーザーが撃ち出され雲を貫いて行く。

次に空裂を振り抜くと光波が放たれ何もない空を飛んで行った。射程距離や出力は零落白夜による白式のブレード光波よりもある。

『箒ちゃんもう良いよ戻って来て』

束の指示に従い箒はゆつくりと下降し、岩場に着陸し待機モードにした。

誰もが呆氣にとられる規格外の性能、使い方を誤れば世界のパワーバランスを崩しかねない。

「完璧だね。あたしの予想以上だよ」

「篠ノ之の専用機も届いた事だ。さっそく今日の本題に入——」

「織斑先生！」

息を切らして血相を変えて走って来る真耶だが、妙に足取りが覚束ないのは昨夜に飲み過ぎたのが原因である。

「どうした山田先生」

「一級特務指令です」

真耶の放った一言に千冬の表情が険しくなった。代表候補生達もその不穏な空気を早くも察し、顔付きが真剣になる。

青い空には鉛色の雲が覆い、風が少しだけ強く吹き始め、暗影がこの場を包み込んで行く。

不安を誘う臨海学校の長い2日目の始まりだ。

銀の福音、赤い星そして灰色の鴉（前書き）

すんごい更新が遅くなりました。

いやゝ福音戦はなかなか時間がかかりますね。

そういえばですね体育祭の競技で超嫌いな奴と一緒にチームになったんですよ。

チクショー！！ あれは学校の陰謀だあ！ 俺を過労死させようとしてるんだあ！

銀の福音、赤い星そして灰色の鴉

急遽ISの調整を中止させて一般の生徒は自室での待機を命じられ、代表候補生は宴会用の座敷に召集された。

部屋の中央には大きなディスプレイが置かれ、奥の間では教員達がコンピューターと向き合っている。

「2時間程前、米軍の最新鋭軍用IS“シルバリオ・ゴスペル銀の福音”が本部の制御下を離れ暴走した」

現状を短くまとめて伝えるとこの手の緊急事態にも対応出来るように訓練された代表候補生等は互いに意見を出し話し合っている。
一夏や筈はいきなりの事態にまだ頭の中が混乱状態で何が何なのか殆ど理解していなかった。

「今はハワイ沖を巡航しているらしく福音に最も近い位置にいる我々が対処にあたる事となった」

「教官、よろしいですか？」

「言ってみろ」

「敵機のスペックと武装の詳細をお願いします」

「よかるう。しかしこの情報は極秘だ。他言すれば諸君には最低3年の監視がつく。良いな？」

「了解」

「福音は単体で大多数を殲滅する事を主眼に置いたIS、武装の詳細は不明だ」

武装の詳細がわからないとあれば更に用心する必要がある。皆の顔が曇りディスプレイに映し出された福音の外見を凝視していた。

「作戦を説明する。機体本体の防御力は高く、戦闘を長引かせるのは危険だ。そこで紅椿が白式を乗せて戦闘モードに入る前に斬る。以上だ」

「白式って……俺がやるのか!？」

「織斑、これは実戦だ。覚悟が無いなら降りても構わない」

覚悟、その言葉が一夏の胸に突き刺さりそれと同時に以前、シャルを抹殺しようとした男の顔が頭をすり抜けて行く。

この程度で怖じ気づいてはあの男からシャルを守る事は叶わない。

「やります。その任務は俺が引き受けます」

「よろしい。篠ノ之はどうだ？」

「異存はありません」

「よし、作戦開始は30分後だ。他の者もいつでも出撃出来るように整備は怠るな。以上、解散」

全員が座敷を出て行ったのを確認すると奥の間からレイヴンが顔を出した。

「レイヴン、あなたにはすぐに学園に戻ってもらう」

「何故？」

「これを見てくれ」

ディスプレイに映されたのは人型の黒いAC、米軍の駐屯基地を襲撃した機体と酷似しており、飛行場所は福音のテストを行っていた基地周辺の海域である。

レイヴンはその機体を見ると誰かを確信したが声に出さずそっと胸の奥にしまい込んだ。

「あなたのACの整備は済んだ。いつでも動かせる。あなたは最悪の場合の時の切り札になってもらう」

「了解……」

レイヴンが部屋を後にすると千冬は再びあの黒いACに目を向けた。十中八九この機体が今回の暴走事件に関与している。

駐屯基地の襲撃から今回の襲撃までに2ヶ月は空いている。その間に何の補給も無しに稼働出来る程万能な兵器ではない事はレイヴンのACを解析して判明した。

この黒いACとパイロットの背後には援助をするだけの大きな組織があるというのは明白である。

千冬が最も恐れているのは福音よりもACとパイロットの技量だった。

入って来た情報を見る限り、福音のテストを行った基地は万全の警戒態勢にあった。もちろんISも警備に回っている。それらを打破し福音を暴走させる、意図は不明だがこれで2度もISが撃破された事になるのだ。

回収されたISの破片とACの落とした薬莢を解析し出された結論はISとACは相性が酷く悪いという物だった。

この世界に現存しない物質が使用されたACの実体弾は1発当てるだけでもISのシールドエネルギーを笑える程に奪って行き、EN兵器はISのシールドへの貫通力が高く、絶対防御を強制的に作動させてしまうのだ。

ISでACの破壊が可能というレイヴンの言葉に千冬は疑いすら感じていた。

「レイヴン……間に合ってくれ」

千冬はあの男を信じ黒いACの存在を全てレイヴンに託した。今はそうするしか出来ないのだ。下手に戦力を出せば無駄な死者が出る。

「織斑先生、作戦開始まで後5分です」

「ああ、わかった……」

白式と紅椿は既に沿岸で待機し、いつでも出撃が可能だ。

「一夏、早く私の背中に乗れ」

「おう」

篝の声は妙に弾んでおり表情もだいぶ緩んでいた。

「お前は私が必ず運んでやる」

『お前達準備は良いな?』

「いつでも大丈夫です」

『よろしい、では作戦開始する』

白式を乗せた紅椿はゆつくりと浮き上がり一定の高度にまで達すると2基のスラスターを最大出力で稼働させ、爆発的な加速を付けて空を一直線に飛翔して行く。

空に一本の雲の軌跡が残り紅椿はとつくに遙か彼方に消えて肉眼では見えない位置にいた。

一夏は雪片を手離さないようにしっかりと掴み刀身に機体のエネルギーの殆どをつぎ込んでいた。一撃必殺が今回の作戦のメインでありチャンスは一度、失敗すればその時は死の可能性が待っている。突風のような風を受け続けてからしばらくして両者は空中を高速で飛ぶ機体をハイパーセンサーが確認した。

映像が画面に拡大されその機体が福音である事を確認すると一夏は閉じていたスラスターを展開し戦闘態勢に入る。

敵はまだ2人の存在に気付いておらず見えない目標に向かって飛んでいた。

「チャンスは一回だ。いいな？」

「わかってる」

福音を肉眼で確認出来るだけの距離まで接近すると一夏は紅椿を降りて惜しまず、イグニッション・ブーストを使用した。

紅椿の加速にイグニッション・ブーストの推進力が上乗せされ更に白式のスラスターを極限にまで噴かし白式のスピードは音速を超えた。雪片の刀身はエネルギーを過剰に注入されて炎のように揺らめき、ブレード光波を撃てる段階にまで来ていた。

しかし一夏は光波を撃たずただおもむろにエネルギーを流し込み続けた。

「今だッ！」

十分に近付き一夏が雪片を振り上げたその刹那、福音の目が青く光ったと思うと急停止して一夏の腕を掴み、横っ腹に回し蹴りを見舞った。

態勢が崩れると福音は頭部に生えた巨大な2基のバックユニットの小型ハッチを開いた。そこに内蔵されていたのは数え切れない程の砲門であった。

銀の福音の唯一にして最大の武器、それが“銀の鐘”^{シルバー・ベル}だったのだ。意志の無い兵器は容赦ない連続砲撃を一夏に浴びせた。

多大な衝撃と共に白式は海中に没し福音は次なる標的、紅椿を視認する。

一夏のエネルギー残量は絶望的な物だろう。箒は一对の刀を呼び出し左右同時に福音に斬りかかった。

福音は箒の斬撃よりも速く銀の鐘の砲弾を斉射した。1発の砲弾を受けて態勢が大きく崩れるとそこに無数の砲弾が無慈悲なまでに撃ち込まれた。

1発1発の命中率も攻撃力もさして警戒する程の物でもない。

銀の鐘の真に恐ろしいのは圧倒的な物量で迫る弾幕ではない。近接信管を組み込んだ多大な爆風とガードを打ち破る程の衝撃力である。

大多数を単身で殲滅する事をコンセプトに開発された軍事用ISの性能は伊達ではない。箒はこの時、敵機の総合力が現在の紅椿を凌駕している事を確信した。

今の箒では紅椿を扱いきれないのだ。

「一夏！ まだエネルギーは残っているか！」

『ああ、本当にこれが最後だ。ちゃんと動きを止めてくれよ』

プライベート・チャネルから流れる一夏の声を聞き、僅かに安堵する。

「任せろ。コイツは私が封じる」

箒は雨月と空裂の柄と柄を連結させて頭上へと持って行き、巧みに両手を使い刀を空中で回転させる。

徐々に速度が増して行くに連れて紅椿の周囲には真紅の光が見え隠れした。

するとどうだろうか、紅椿は四方八方に赤いレーザーと光波を辺り構わずに放ったのだ。福音も対抗するように砲門を開き全身を回転させ光弾を撒き散らす。

空中には銀色の光と赤色の光が飛び交いその度に爆発と轟音が相次いだ。

だが、その攻防も長くは続かなかった。

先に音上げたのは箒の方だ。まだまだ改良の余地がある紅椿は白式に負けず劣らずの燃費の悪さが目立ち、先ほどの攻撃でエネルギーを大幅に消費したのだ。

二刀の連結を解き、箒はレーザーを放ちつつ接近する。射撃戦で勝てない以上、近接戦闘を挑むしか他ならない。

空裂を坂手に持ち、福音を斬り上げた。

更に上空へ浮き上がるとそのまま追撃するが、福音はのけぞった姿勢から無理に態勢を戻し攻撃を回避する。箒の刀は有らぬ空間を斬り大きな隙が出来た。

福音はそれを見逃さず光弾を紅椿へ撃ち込んだ。

煙りの中から箒が落ちて来る。福音は落下する箒の首を掴み砲口を頭に突き付けた。今の紅椿のエネルギー残量は50、福音の光弾

を受ければ残量は0になり試合ならそこで終了なのだがこれは実戦だ。

仮にそれ以上のダメージを受けたなら操縦者の命の保証は無い。砲口が銀に輝きエネルギーを溜め込み今にも発射する寸前、箒は目を見開いた。

「ようやく近付けたな」

空裂を福音の砲口にねじ込み砲門が暴発する。

「落ちろ福音！」

突き刺した先から何発もレーザーを撃ちとうとうバックユニットが1基、破壊された。同時に紅椿のエネルギーもたった今、尽きた。福音の目が青く光り動かない箒に向かって光弾を放とうとした時だ。水面が盛り上がり、爆ぜると白式の蒼白のブレード光波が高速で迫った。

回避が追い付かず福音の最後のバックユニットを断ち切り、海中へと落ちた。

「箒を離せ！」

「一夏！ 無茶だ！」

雪片はエネルギーを使い果たし単なる実体剣となっている。福音に迫る一夏、雪片を振りかざし力任せに振り抜くが敵機にはまだ奥の手がある。

突如として身体の装甲が開き、中にはずらりと砲門が並んでいた。一夏は息を呑み急遽、回避に回ろうとするものの間に合わなかった。光弾の直撃に白式もエネルギーを切らした。

一夏が再び落ちて行くのを確認し福音は箒を投げ捨て、砲撃を開始した。

「箒！」

一夏は白式のスラスターを噴かし落ちる箒を抱えた。背中には無数の光弾が迫り、白式にシールドは無い。

純白の装甲を砕き、スラスターを破壊し白式を蹂躪する。

防御の大半がシールドに依存するISがシールドを失う事は防衛の装置を一切失ったと同然である。

頼りないISの装甲は粉碎され、光弾が一夏本人に直撃する。耐え難い激痛が一夏の脳をかき乱し思考をへし折り、意識をねじ曲げた。

肌が痛々しく焼け骨が悲鳴を上げ、身体の全ての細胞が死を訴えて来るのだ。

一夏は紅蓮の火に包まれて白式と共に海へと落ちて行った。

記憶には泣き叫びながら自分の名を呼ぶ箒の姿が鈍く映っていた。

一夏を海中に沈めた後、福音は再び非行を開始して空の彼方へと消えて行った。

後々に救護班により一夏は助かったが意識不明の重態であった。

今は旅館の座敷で眠っている。

横たわる一夏の隣りには鎮座して待つ箒の姿があった。涙が頬をつたって手の甲に滴り落ちた。

「一夏、お前は何故私を助けた時笑っていたんだ？」

実戦での敗北にいかなる弁解も容認されない。勝利と敗北、生と

死それが究極の答えなのだ。

箒の涙はいつの間にか止まり、その眼差しには揺るぎない闘争心が宿っていた。

自分の身すら守れなかった惨めな自分を詰り、立ち上がり待機状態の紅椿を額に押し当てて念じた。

かつて剣に憑かれ剣に狂い、剣に命を捧げたあの箒がそこにいた。

「お前が繋いだ私の命、無駄にはしない。必ず勝ってみせる」

そう思い定め座敷を出ると部屋の前には鈴達、代表候補生が居た。

「行くのか？」

ラウラの問いに箒は答えた。

「当然だ」

「命令違反になるぞ」

「構わない。どんな処分も受けるつもりだ。だから止めないでくれ」

「あんた1人でやるの？ 無理に決まってるでしょ」

「だから何だ？」

「あたしも手を貸してあげる。命令違反だけど」

「わたくしもですわ。このまま手をこまねているのは性に合いませんの」

「僕も行くよ。一夏の為だね」

「……やれやれ、あのヘタレの何がいいのやら。だがお前達が行くのなら私も同行するぞ」

「みんな、ありがとう……」

「で、敵の居場所の確認は？」

「既にやっている。場所はここから30km先で浮遊している。――
気に奇襲をかける」

「わかった。今度こそ福音を止めてみせる」

福音のテストを行っていた米軍基地跡に1機のACが舞い降りた。施設はACの襲撃と福音の暴走で完全に破壊されて至る所に黒煙が上がっていた。

潰れた戦車の近くには瓦礫に押しつぶされた兵士が倒れ、研究所跡には肉片などが飛び散り死臭が漂っていた。

黒いAC“ジオハーツ”は瓦礫を踏みながら辺りを搜索した。

「ジノーヴィー、やはり旧世代の遺物はここにもない」

『そうか、ところで福音はどうなった？』

「暴走はさせた。しかしこんな事に意味はあるのか？」

『仕方ない依頼なんだ。遂行するのが我々の使命だ』

「ああ、何か分かればまた連絡する。通信終了」

見える限り瓦礫と死体しかなく探し物は全く見つからない。アグラーヤは諦めて切り上げようと飛び上がった時、瓦礫の中からレーザーが発射されたがアグラーヤの操作技術により呆気なくかわされた。

出て来たのは装甲を殆ど失い、目も当てられない程に衰弱していた。エネルギーも底を尽いたようでシールドを張っていない。手にはレーザーライフルを持っているだけで他の武装はアグラーヤに破壊され無くなっている。

ジオハーツの赤い目が光りISと操縦者の状態が画面上に出された。

アグラーヤは左腕のハンドグレネードをそのISに向けた。

「お前になんか殺されてたまるか……！」

あのまま黙って瓦礫の下で埋もれていれば生き長らえる事は出来ただろう。今彼女を突き動かしているのはIS操縦者としてのプライドだけであった。

その操縦者はスラスターを噴射するが哀しくも出力不足で浮き上がる事さえ出来ないのだ。

アグラーヤは目を細め、引き金を引きグレネードを発射した。人間の等身程ある炸裂弾はその操縦者目掛け飛んで行き命中する。

爆風が吹き荒れ、凄まじい熱量により身体は一瞬の内に消滅し黒い影だけが残っていた。どこの基地を襲撃しても骨の無い連中ばかりでアグラーヤは飽き飽きしていた。

そして頭の中でベイロードシティの屋上で戦ったあの男に思いを馳せていた。

ジノーヴィーを省き、アグラーヤの血を騒がせたのはあの男が最

初で最後だった。

「刺激の無い世界だ。生存者は0、作戦を終了し帰還する」

物悲しさを抱えアグラヤーはブースターを噴出し空中へ舞い上がるとそこからオーバードブーストを展開し亜音速で空を翔て行き、見えなくなる頃には黒煙も収まり腐臭が立ち込めていた。

上空で胎児のような格好で浮遊する銀の福音の周りには薄い膜が張っており所々に稲妻がほとばしっていた。

第と一夏の奮闘により破壊した2基のバックユニットは完璧に再生していた。

福音の目が急に光り顔を上げた途端、頭部と腹部にレールカノンの砲弾が直撃した。

「初弾命中」

ラウラが現状を報告しシャルとセシリアは左右から迂回しながら福音に向かい、レーザーライフルとアサルトライフルで牽制した。福音を覆っていた黒煙が弾け、起動すると福音は全身の砲門を開き、全方位に光弾を掃射する。

レールカノンの直撃を受けても無傷でいる福音の装甲は圧巻と言える。

光弾は2人に対し逃げ場が無いくらいに撃ち込むと、シャルは盾を使い強烈な反動を受けながらもなんとかダメージだけはやり過ごし、セシリアはレーザーライフルの出力を最大限にし自分に迫る光弾だけを薙払った。

福音が狙いをシャルに絞り動き出すとラウラのワイヤーブレードが絡みつきそれを邪魔する。レールカノンの砲弾を装填し身動きの取れない福音をゆっくりと近付けたその時だ。

「ラウラ逃げて！」

シャルの叫びが届く前に福音は腕部の砲口をラウラに向け撃つ。衝撃砲を超える反動をその身に受けつつラウラは反撃としてレールカノンを放つ。

空中でまた爆発が起こり、煙の中からはシュヴァルツェア・レーゲンと福音の両機共に出て来る。ワイヤーブレードは引きちぎられたようで福音は、腕や足に付いたワイヤーを払い海に捨てた。

福音の意識が3機に行っていた最中、遙か上空からは甲龍の衝撃砲の雨が降って来る。

機械の目は空を向き全身から光弾を撃ち衝撃砲の迎撃を開始した。砲弾の発射弾数は福音が完全に勝っている。

甲龍が雨とするなら福音は豪雨である。

光弾の方向が全て鈴に向かった時、セシリアは急速で福音に接近し最大級のレーザーライフルを叩き込んだ。

流石に装甲は赤熱し少し溶け態勢が崩れると損傷した箇所にはラウラのレールカノンを至近距離で受けた。攻撃はまだ続くレーザーライフルとレールカノンの被弾により福音の装甲は微弱な物となった。シャルは盾をパージしパイルバンカーが顔を出した。溶けて弱点となった腹部に狙いを定め、鋼鉄の杭を力任せに振るい打ち込む。撃鉄が上下し高压ガスを噴射しリボルバーが回転し次の杭を打ちそうしてまた別の杭をぶつけた。

「第、今だ！」

海中より紅椿が飛び上がる。両手に持っている刀は両方とも赤い

エネルギーを宿し切れ味を極限にまで高め、幕は勢焰を漲らせ降りかった。

「一夏の仇だ。潰れる！」

すれ違い様に右手の雨月と左手の空裂を打ち振りバックユニットを再び破壊した。

これで腹部の戦力が大幅にダウンする。

好機と睨み、ラウラはプラズマ手刀で斬りつけ、光弾の大半を受けた鈴は負傷しながらも衝撃砲を撃った。

遠雷のような砲声が轟き、福音は糸が切れた人形のように力無くして墜落し海へと沈んで行った。

皆が安堵感に包まれ緊張の糸が途切れ表情が和らいだ。しかしその表情は長くは続かない。

海面に波紋が広がりそれは徐々に強くなって行く。微かだが5人の耳にはしっかりと届いている、ISコアの鼓動の音が。

波紋はやがて津波のように荒々しくなり海水の中には白銀の光が射光する。

海面にはぶくぶくと泡が沸き、沸騰しているのが分かる。厳戒態勢に入り5人は光を中心に円陣を組み、いつなとき福音が現れても構わないようにした。

だが妙な悪寒が背筋を撫で、心臓を鷲掴みにされるような不快極まる感情が溢れていた。

沸騰が収まり全員がそこを凝視した時だった。水柱が天高く噴き上がり、周囲に一時的な雨を降らせ海の水を押しやり、海底には福音が屹立としていた。

そう“光の翼”を生やして――

荒れ果てた大地、散乱する鉄屑と片膝を着いて全身が破損したA
Cが至る所に放置され、空は黒く沈んでいた。

そんな所に一夏は居た。目の前の惨状に顔をしかめ無意識の内に
涙を流していた。

「少年よ涙を止めて」

「誰だ」

袖で涙を拭い声がした方を向いた。そこには20歳前後の青年が
いる。

黒い髪には艶があり凜然とした態度で立っている。一見すると穏
和であるが眼光は人を射抜くように研ぎ澄まされ、気質は鋭く極め
て果断な雰囲気醸していた。

「私は古い戦士だ。過去の遺物にその記憶を刻まれ何の悪戯かは知
らないが私は君の白式の中に存在する」

「えっ……？」

一夏はその青年の言っている事の半分も理解出来ていない。

「少年、君は何故強さにしがみつく？」

「俺は……」

そこまで言うで一夏の眉間にシワが寄り歯を食いしばった。自分
の過失で筈を危険にさらし皆を心配させ作戦を失敗させたのだ。

「俺は目の前の仲間を守る力が欲しいだけだ！」

動かないACの装甲を殴りつけ一夏は青年を睨んだ。

「理念無き強さは無力に等しい。少年、陽の当たる場所へ導いてやるのか？」

青年はそつと一夏の手を握ると青年は姿は無く一夏はいつの間にか白式を纏っていた。

——君の成長が私を呼び覚ます。

その言葉が頭に響き一夏の視界一杯に眩い光が満たされ身もその中へ包み込まれて行った。

光の翼を得た福音の機動力はあらゆるISと一線を画していた。

「不味いぞ。第二形態移行だ」
セカンド・シフト

「それだけじゃない。福音のコアが異常なエネルギーを放出している。コアの温度に至っては1000を超えているよ」

「それがどうした。奴がおかしな性能なのは承知の上だ」

海水を蒸発させ福音は筈に向かって飛来すると筈は刀を十字に合わせ福音の突進を受け止めた。

スラスターの炎を噴射し福音を押し始めると敵機は無数の光弾を

砲発した。

箒を弾き飛ばし福音は光の翼の上に銀色のスフィアを形成した。

『フォトンドライブ
光子砲………』

機械的で無機質な女性の声を発するとスフィアは巨大なエネルギーキャノンとなって発射された。箒は紙一重で膨大なエネルギー体を回避し空を流れて行ったそのレーザーは無人島に当たり、岩場を跡形もなく消し飛ばしたのだ。

破壊力はラウラのレールカノンなど比ではない。直撃でもすればエネルギーの大半を奪うだろうし最悪、一撃で0になる。福音は再びスフィアを形成し今度はシャルに向かってエネルギーキャノンを放つ。

「くっ………！ 逃げ切れない！」

シャルは盾を前に突き出し身を守るがその盾は一瞬にして溶けて無くなってしまった。桁外れの火力と規格外の弾幕、セカンドシフトに移行した福音を相手に勝てる見込みは0に近かった。

「いくら軍用のISと言ってもこれほどの性能は異常ですわ………」

福音のセンサーがセシリアを捉え、あのスフィアを形成してキャノンを砲発する。

セシリアはレーザーライフルを最大出力で撃つとビットを同時に展開して一方向へ向け斉射した。

だがブルー・ティアーズの一斉射撃もフォトンドライブの前に成す術もなく突破され、いち早く回避に徹したセシリアは肩のアーマ―を持っていかれるだけで済んだ。

「どうするの。このままじゃ全滅するわよ！」

「私のワイヤーブレードでもう一度拘束を試してみる」

ラウラはレールカノンで牽制しシャルのアサルトライフルや鈴の衝撃砲の援護を受けつつ再生した6本のワイヤーブレードを福音の両手両足と首をを縛った。

普通なら無理に動けばパーツが破損したり肉体にも甚大なダメージを与えるが相手が相手だ。幾度となく予想を上回った行動を取ってきたのだもはや常識など福音には通用しないのだ。

福音は甲高く頭の中をかき乱すような奇声を上げると身体にワイヤーが絡まっている事など一切構わず猛獣のように暴れた。

ワイヤーで繋がったラウラは上へ下へ振り回され、しまいには6本のワイヤーブレードを引きちぎった。

「やはり駄目か」

そうこうしている隙に鈴は衝撃砲を撃ちつつ双天牙月を両手に斬りかかる。

福音は空中を遊泳するかのよう縦横無尽に動き、その度に鈴の青竜刀は空を打つ。

鈴から一度距離を離し福音の翼にはあの球体を作り出しエネルギーキャノンを甲龍にぶち当てた。流石は代表候補生というだけの事はある、キャノンが当たる際に咄嗟の判断で鈴はシールドを展開しなんとか直撃だけは避けた。

しかし深刻なダメージを受けたのには変わりなく背中への衝撃砲が1基、消滅しているのだ。エネルギーの残量は200と福音を相手にするには余りにも心許ない数値だ。

「鈴さん！」

セシリアが叫び福音へレーザーライフルの照準を合わせたものの機影は射界から忽然と消え失せたかと思うと福音は既にセシリアの死角に回り込んでおり、背後からライフルの銃身と肩を掴まれ動きを拘束された。

逃がすまいと福音はその状態からフォトンドライブの放射態勢に入ったのだ。

セシリアはビットを出し福音にレーザーを撃ち込むがものともせずエネルギーを充填していく。この距離での直撃は命に関わる。

ラウラはレールカノンをシャルはショットガンやグレネードを駆使し懸命に引き剥がそうとするが一向に離れる気配が無い。

セシリアの背中に悪寒が走り死の足音が聞こえる。武器にも記憶は宿る、機械であっても殺意を示して人を殺すのだ。

「どけっ！ シャルロット！ ラウラ！」

2人の間を疾風のように紅椿が駆け抜けて行き箒は光波を福音の腕に打ち、僅かに拘束が緩む。箒はスピードを緩めずセシリアに突撃すると遂に福音の束縛から逃れる事が出来た。

だが形作られたスフィアはエネルギーキャノンとなり発射された。そして向かった先は箒であった。

刀を十字に組んでガードはしたがそんなものはもはや無いに等しい。

高圧エネルギーの直撃を受けて紅椿のシールドのエネルギー残量は一瞬で無くなり箒は適当な島の岩場に打ちつけられた。

装甲が残っているだけでも奇跡と言えよう。

「箒さん！」

福音を鋭い目つきで睨みレーザーライフルに今あるエネルギーを

全て注ぎ込んだ。

後の事などセシリアの頭には無い。

「当たれえ！」

青いレーザーは福音を吹き飛ばし、脚部や胸部の装甲を少しだが融解させる。

軽微な損傷に見えるがここでようやく福音の堅牢なシールドを貫通させ実体にダメージを与えるに至ったのだ。

現在、戦えるのはシャルとラウラ。セシリアや鈴は少し休めば再戦は可能だ。

問題は筈だ。福音のキャノンの一撃を受けてから通信が途切れ声が全く聞こえないのだ。筈の心配もしたい所だがシャルもラウラもそんな余裕はどこにも無く、豪雨の如く降り注ぐ光弾や時折、放つて来るフォトンドライブの回避に手が一杯なのだ。

福音の目がまた光り光弾の数を一層、増やす。

「ラウラ、もう保たないよ！」

「耐えろシャル！ アイツ等が回復するまでなんとか私達が繋ぎ止めるんだ！」

「じゃあとりあえず福音をみんなから引き離そう」

「了解した」

ラウラとシャルは二手に別れ福音はラウラに狙いを絞り込んで追跡を始めた。

シャルはラウラが落とされないように援護しラウラは皆が回復するまでの時間稼ぎとしてスラスターを常に最大出力で噴かし右へ体

を傾け左へ急加速し背後から飛んで来る光弾を紙一重でかわし続けた……。

岩場に打ち付けられた箒は力を入れる事もままならず両手の刀は完全に手から離れ落ち、粒子となって消えた。

（一夏……すまない。守る事はこんなにも辛く痛いのだな……）

薄れて行く意識の中、箒の視界は既にぼやけていたが彼女の視線の先には確かに純白のISが見えた。

「あれは……？」

「よっ、箒」

「一夏……！」

箒は思わず目を開けるとそこには錯覚でもない一夏が確かにいた。白式の駆動部分や胸には青いカラーリングが施され4基のスラスターの内、2基のスラスターには“ホルスの眼”刻まれている。なによりも一夏の顔が前より一段と逞しく見えた。

「一夏、傷はもう大丈夫なのか？」

「ああ、みんなには止められたけど行かないとな。あの人と約束したし」

「あの人？」

「いや、何でもない」

幕に優しく微笑むと突如、一夏の頭に電撃のような物が走り振り返ると空から無数の光弾が降りかかっていた。

「雪羅、シールドモードだ」

空間に大きく円形の半透明な障壁が作り出され光弾は弾かれて行く。

「スクラップにしてやるよ」

一夏は足の幅を広く取り、踵からフットロックが下ろされ体を地面に固定する。

背中のスラスタは折りたたまれ代わりに6カ所の放熱ファンが開き、一夏は左腕を突き出し福音に狙いを定めると手のひらから砲口が飛び出る。

砲口に荷電粒子が収束されて行く間に福音は翼に光子を集めている。

一夏の荷電粒子砲の重点が完了した。

「メタルのクズが……!!」

荷電粒子砲とフォトンドライブは全く同時に発射された。白い粒子の光線と銀の光子の光線が空中で拮抗し互いに一步も譲らない。

一夏の体を支えるフットロックは徐々に地面に沈み込み、福音もまたさつきよりも少し後退っていた。

ファンからは常に噴気し砲身が赤熱し始めた。放射時間が短い荷電粒子砲の限界が早くもやって来た。

一夏は苦虫を噛み潰したような顔をして2基のスラスタを展開し代わりに2基の放熱ファンを閉じた。それにより砲身が熱くなる早さも増すが一夏はスラスタに刻まれたホルスの眼を福音に向け

る。

するとホルスの眼が開き中から黄色い閃光をほとばしらせるとそこからレーザーキャノンが撃ち出された。

レーザーキャノンの援護と荷電粒子砲により拮抗していた形勢は瞬く間に崩れ去った。フォトンドライブは押し切られ3つの光線が福音を飲み込んで行く。

一夏は荷電粒子砲の発射態勢を解除し砲口を格納し左腕を押さえた。出来て直ぐに加減無く撃てば肩がイかれるのは必至、一夏は痛みに耐えながら幕を見る。

「じゃあ、行ってくる」

白式が飛び上がり空に浮かぶ煙の塊と同じ高度にまでやって来ると右手に雪片を呼び出し、肩に担いだ。

黒煙が風に流れて行き福音の姿が再度、確認される。機体の至る所が融け、内装が丸見えとなり頭部も半分以上が融解し奥から青い光を放ち、剥き出しとなったカメラが目のようにギョロギョロと動いていた。

美しい銀の機体は醜惡な姿になり果てていた。すると福音はあるうことか一夏を目の前にして胎児のような格好になり体の周りに薄い膜を張った。

それにより失った装甲は凄まじい速度で再生を始める。

「やらせるか！」

雪片から蒼白の刀身が生成され福音に切りかかった。シールドを無効化する雪片は福音の膜をいとも簡単に切り裂き、機体を斬りつけるが破損した先からまた直ぐに再生を開始するのだ。

「何だこのIS……滅茶苦茶な性能だ」

「一夏、どいて！」

なんとか戦闘が可能なまでに回復した鈴が颯爽と現れ福音に衝撃砲を何度も撃ち込み、再生を遅れさせる。

機体の融けた箇所は修復され福音は光の翼を広げると背後からレーザーライフルが背中を撃ち抜き、ビットが四方から福音を狙撃する。

「少し遅れましたわ……」

度重なる攻撃を受け続けた福音は見た目以上にダメージが行き渡り、シールドエネルギーもたいぶ減っていた。

それにさっきのセシリアのレーザーライフルの被弾によって再生機能が破壊された。

「ようやく来たか織斑一夏」

「一夏、早く片付けようよ」

「ラウラ、シャル」

「私もまだ戦えるぞ」

「箒……みんな行こう」

互いを確かめ合うと6人は各持ち場に付いた。ラウラは地上からの砲撃を、セシリアは空中から狙撃。シャルと鈴は中距離から牽制を仕掛け、一夏と箒が前線でトドメを刺す。

破損した福音はエネルギーを光の翼に蓄え光弾を辺り一面に撒き

散らした。

まさに乱射乱撃、だがこれだけ荒い攻撃も福音の砲弾なら高い効果を発揮するのだ。

福音は鈴へありつたけの弾丸を降り注がせる。

「鈴っ！」

シャルは盾を取り出し鈴を庇いつつ自分の身を守るが立て続けに光子砲を受け2人は海中に叩き込まれた。

なりふり構わず福音は視野に入る物全てに攻撃を与えた。

箒が福音に掴みかかり、動きを止めたが至近距離から光弾を受け、紅椿の装甲が徐々に失って行き力が入らなくなって来た。

「まだまだ……まだ行けるだろう！ 紅椿！」

無くなりつつあった力が再び蘇り、機体が黄金に光ると紅椿のシールドエネルギーが回復しディスプレイには“絢爛舞踏”という表示がなされていた。

「これが紅椿の唯一仕様……絢爛舞踏」

紅椿は力を取り戻し、箒は一对の刀を呼び出すと福音を蹴り、少し距離を空けると福音を力任せに斬り上げて体を更に空中へと浮かせた。そこへ放たれるレールカノンとレーザーライフルの二重奏によって福音の翼の光が鈍くなる。

「一夏、今だ！」

「これで最後だあ！」

左腕の激痛は口の中の肉を自ら食いちぎる事で紛らわせ一夏の痛覚は麻痺した。

口から血が垂れ、一夏は左腕のレーザークローが福音の頭にめり込み動きを捉えたと思うと、零落白夜が発動し雪片の刀身が胸を貫かんと火花を散らしている。

宙でもつれ合う2機はやがて海岸に落下すると一夏は目を見開き両手で柄を握り、今ある力を全て腕に込めた。

「止まれえ！」

胸の装甲に亀裂が入り、雪片の切っ先が福音に深く突き刺さるとエネルギー残量が一瞬にして減り、0という数字を写していた。光の翼は粒子となって消滅し福音は完全に停止した。

「終わった……な」

「そうだな」

「これでやつと帰れるね」

全員が集結し福音を囲って見詰める。

一向に動く気配の無い福音を見て6人の顔に初めて安堵感が戻って来た。

「……これ千冬姉に怒られるかな……？」

「あつ……忘れてた。あたし達命令違反したんだった」

「うう……反省文50枚は必至ですわね」

反省文や説教などと嫌な事を考えてしまうが皆の顔はだいぶ緩ん

でいたまさにその時だった。

ISのスラスターとは全く違う噴射音に一同が耳を傾け、音の方を向くと青い炎を噴気孔から放出しながらゆっくりと下降してくる機体がある。

一夏はそれを見るとACであると判断しラウラは黒ウサギ本隊からの情報で聞いた物と照らし合わせ、シャルはそれが他ならない殺意を示していると直感した。

ここにいる全員がこの黒いACに対して警戒をする。

「やはり福音程度では1人も殺せなかったか。亡国機業も面倒な仕事を押し付けてくれる……」

ファントム・タスク

降臨した黒いACジオハーツは目的である一夏に視線を注いだ。

現状、戦闘可能なのはラウラと一夏、セシリアに第の4名。そして第は刀を振りかざし誰よりも速くジオハーツに斬りかかった。

アグラーヤはブースターを前方へ傾け機体を僅かに後退させる事で第の一撃を回避しそれと同時にハンドグレネードを近距離で放つ。爆炎に包まれた紅椿は凄まじい速度で吹き飛ばされ岩盤に打ち付けられ動かなくなる。ジオハーツは右腕のショットガンを素早く構え、ラウラへ掃射し背中のトリプルミサイルがセシリアを襲った。一瞬の内に3人を戦闘不能にさせジオハーツは一夏に迫る。

「任務なんぞな。来てもらうぞ」

ACの巨大な鉄の手が迫り、一夏は固唾を飲み込みすると――。

「一夏、伏せて！」

背後からシャルの声が響くと一夏は反射的に身を地に這わせた。リヴァイヴの全装甲が展開し中からはマイクロミサイルが顔を出

す。

「ビッグバン・サテライト！」

全身の砲門から一斉に200発のマイクロミサイルが飛び出しジオハーツ目掛け飛んで行く。

アグラーヤは背部の装甲を開き2基のオーバードブーストを噴射し機体の速度は一気に800kmに達しシャルの視界から消えた。誘導性が低い素直な弾道のマイクロミサイルの目標が急激なカーブにはついて行けずもう何十発のミサイルはどこかあらぬ方向へ流れて行ったりミサイル同士でぶつかり合い、そしてショットガンで迎撃されて結局、シャルの最後の奥の手は虚しく効果を發揮せずに終わった。

「まだ奥の手を残していたか。だがこれで最後だな」

折り畳んだチェインガンを展開するとアグラーヤは照準をシャルに定めた。どうせ彼女はリムの抹殺対象、今ここで始末しても支障は無い。

「ん？」

アグラーヤは引き金を引く事を止め、レーダーを見ると自機の背後から膨大なエネルギー反応がある。

独特の風切り音と共に赤い閃光を纏いレールガンの弾丸がジオハーツの右腕ギリギリを掠め、砂浜に撃ち込まれ爆風で砂利が勢い良く舞い上がった。

レーダーを頼りに振り返ると空中には灰色のAC“ネクサス”が居た。

「ケホッ……ゴホッ……。なんとか間に合ったか」

ネクサスに搭乗しているのは他でもないレイヴンである。

真人間でありながら空中からキャノン発射、それは長年の傭兵としての経験と絶妙なバランス感覚、そして天才的なベクトル調節があつて初めて可能な技だった。

『OB正常稼働、FCSの調整終了、腕部、脚部共に調整終了。全てのチェックを終了します』

搭載されたAIが機体の状態を最適化し搭乗者に伝える。

『メインシステム戦闘モード起動します』

レイヴンは吐き出した血を拭き取り、OBの大出力により鋼の巨人は高速で宙を駆け、着地するとガトリングをジオハーツに向かって斉射し、その中にバズーカの砲弾も混ぜて撃つ。

ジオハーツは右に旋回しネクサスも同じように動き、互いを対角線状に起きながら2機は後退する。

レイヴンは近くに一夏達が居る事を確認してOBを噴かし海の方へ向かうとその後をジオハーツが追いかける。

空中で機体を反転させ、IS用ではないマイクロミサイルを放射するもののチェインガンに全て迎撃された。

息をつかせぬ攻防を繰り返しレイヴンは適当な無人島に到着すると地上に足を固定しレールガンの砲身を伸ばし弾丸を放つと同時にOBで機体を無理矢理その場から動かした。

弾丸をハンドグレネードで邀撃し黒煙が広がる。両者は森の中へ移動し、ジオハーツのショットガンを受け、APが少しずつ減って行く。

バズーカは悉く回避され、遂にはトリプルミサイルがネクサスに直撃し装甲が爆ぜた。

軍配はアグラーヤの方へ上がろうとしている。しかし彼女は酷く不満げな表情で敵機を睨んでいた。

『この程度か……アーク時代最強のレイヴンはこの程度の力なのか！ 本気を出せレイヴン！』

約4ヶ月、レイヴンがACに触れていない期間だ。アグラーヤはその4ヶ月の間も死と隣り合わせの日常を送って来たのだ。

僅かな期間だがそれが結果としてレイヴンを劣化させ、アグラーヤを強化した。

2人の力関係は既に逆転していた。

一度は勝利したとは言え相手は超一流のパイロット、レイヴンの衰えた技量では勝つ事は難しい。

レイヴンの呼吸は段々と荒れ始め、動きが粗雑になって来る。機体の中でアグラーヤは幻滅したようにネクサスを見詰めていた。撃てば当てる機会は十分にあったがアグラーヤはそれをしない。

『本当に私はコイツに負けたのか……？ 弱いお前を私は見たくない。お前はレイヴンじゃない！ 単なる墮落した負け犬だ！』

チェインガンの的確な射撃を最小限の動きでかわすが、やはり少し被弾する。かつてのこの男なら無傷で回避して反撃に出ていただろう。最初の空中でのレールガン発射もそうだ。

衰えてもあのような芸当が出来るのは確かに賞賛に値するが昔ならばあの一撃を決して外しはしなかっただろう。

『終わりにしよう。ガラクタには用は無い』

ハンドグレネードとショットガンの弾雨はネクサスの灰色の装甲板を撃ち抜き、砕き、溶かし、破損させて行く。

『AP30%減少、機体ダメージが増大しています』

AIの声と外からの爆音とが頭の中で混ざり合う。戦いの最中、レイヴンが引き金を引こうとする度に一夏達の顔が脳裏をよぎり、集中力をかき乱す。この4ヶ月、レイヴンは戦いから離れ心が緩み、多少ながら一夏の影響もあり人を殺める事に抵抗が生まれていた。

馬鹿馬鹿しい話した。傭兵が人を殺さずしては自分すらも守れない。多くの命を奪い、それでいて今更戦いから逃げる事は絶対に許されない。

レイヴンの選択は2つに1つ、ヒトを捨てて昔に戻るか、昔を隠してヒトを装うかだった。

ジオハーツの弾雨から一先ず逃げ切り、森林へ身を隠すとレイヴンはコックピットの中で幾度も深呼吸をして俯いていた顔を上げた。レイヴンの答えは決まった。

その表情には彼に鬱陶しくまとわりついていた迷いは淡雪のように消え失せて、代わりに闘争心と殺気に満ち溢れていた。

冷徹な黒い双眸には凄みが帯びており、レイヴンの冷酷無比な本性が剥き出しになっていた。

ミッションで殺した者、私利私欲で殺した者、嫌悪で殺した者、ありとあらゆる憎悪を全て受け入れてレイヴンは画面に反射する自分を見据えた。

「ラウラ………すまない。俺はヒトを捨てた」

失った鴉の翼は既に再生していた。

操縦桿を握り直しリーダーに目をやるとなんと、ハンドグレネードの砲弾が目の前まで迫っていた。

爆発が巻き起こり、壁にしていた大木は火炎に包まれて倒れた。

『呆気ない……』

アグラーヤは哀愁を帯びた瞳で立ち込める黒煙をひたすら見詰めていた。

嘆息をもらしてジオハーツがネクサスに背を向けて動き出すと煙の中から確かにA.C.の稼働音が聞こえる。

金属と金属がこすれ合い、煙の中でほのかに橙に光る光線が目に入った。

オーバードブーストの噴気孔に莫大なエネルギーを溜め込みそれを解き放ち、ネクサスは黒煙を弾き飛ばし高速でジオハーツに接近すると左腕に格納していた高出力のブレードを振り払い、ジオハーツの頭部を切り落とし駆け抜けた。

射程の短さを代理に高い威力と切断力を誇るブレード、通称“ダガー”。

ガトリングを捨ててまで展開した効果はちゃんとあった。

『この感覚……』

鴉が復活した事を悟り、アグラーヤは不敵に笑う。

『そつだ……それでこそお前だ』

背部と脚部から青い炎を吐き出し、ジオハーツは地を駆けるとネクサスもそれに対応して動き出す。

肩のポットを開いて7発のマイクロミサイルを撃ち出す。アグラーヤは機体を前屈みにする事で4発のミサイルをかわし、O.B.による超加速で誘導弾の真下を通り抜けるとチェインガンを掃射しつつ、トリプルミサイルを絡めて撃つて来る。

ネクサスが左へ回り込みながらバズーカでミサイルを撃ち落とすとそこから空へ飛び上がった。

ブースターの炎を前方へ傾けて肩のレールガンを展開しまた空中から砲撃する。

強烈な反動でまた吐血しそうになるがレイヴンは口に溜まった血を飲み込み、意識を保たせた。

赤い閃光はジオハーツの右腕をもぎ取ると相手は反撃にハンドグレネードを撃って来た。

レールガン発射の反動制御中にグレネードを受けてネクサスは空から叩き落とされた。今まで受けたダメージと今の攻撃によりコアに僅かな穴が空く。

落下の衝撃でレイヴンはコックピットに頭をぶつけて額から一筋の血が流れ落ちる。

『AP50%減少、コア損傷』

灰色の鉄鋼板はグレネードの熱量に負けてただれている。

腕と頭を失ったジオハーツもまた限界は近かった。

『レイヴン……面白い。行くぞ！』

アグラーヤはトリプルミサイルをパージし武装をハンドグレネードとチェインガンに絞り込め機体を出来る限り軽くした。彼女に漸次、死が近付いて来るに連れてアグラーヤの集中力は飛躍的に増して行き、レイヴン以外には全く気が向いていないのだ。

バズーカの弾はミサイルを邀撃した際に使い切り、弾倉の中は空になりバズーカをパージした。接近戦を最も得意するレイヴンはレールガンに使うエネルギーをブレードへ回す。

2機のACの激闘で辺り一面は焼け野原に変わり果て、生い茂った大木は根こそぎ倒されている。

装甲が融解したネクサスのコアからは液化化した鉄鋼が地面に滴り落ちる。

刹那、アグラーヤはネクサスのコア目掛けてハンドグレネードで砲撃しレイヴンは橙の刀身を生み出してグレネードの砲弾を見事に切り裂いた。

2つに分けられた砲弾は左右別々に飛んで行きネクサスのちょうど背中を過ぎた所で爆発した。

休む間もなく、チェインガンの連射攻撃が雨のように強襲する。

ブースターの噴気孔を右へ向け、左へ傾け、機体を空に持ち上げて卓越した操作技術で弾幕をかい潜る。

ジオハーツは後退しながらその中にグレネードを同時に発射させる。ネクサスの肩のミサイルポットが開くと、アグラーヤはチェインガンの照準をポットへ弾丸を放ち、内部のミサイルを誘爆させてマイクロミサイルを破壊した。

するとここぞとばかりにレイヴンはOBにエネルギーを送り込み大型の2基の噴気孔を開け放ち、チェインガンの弾幕を受けながら蓄積した大出力エネルギーを解放した。

ネクサスの外装には小さな穴が至る所に生じ、機体内の温度が50°を超えて各駆動系が異常過熱が始まる。

ブレードを構え、橙色のレーザー刃を生み出すと危険を察したジオハーツは、中空へと飛び上がるがネクサスも直ぐにメインブースターの推進力を加え、青い炎を真下に向けて追跡し、ジオハーツを斬るのに十分な距離にまで接近した。

アグラーヤは自らの機体の破損など省みず、ハンドグレネードを撃った。苛烈を極める衝撃は互いのパイロットの体を蝕み、膨大な熱量と爆発力はネクサスのコアを破損させた。

しかしレイヴンは常にジオハーツを見据え耐え難い衝撃にも眉すら歪めず構えていたレーザーブレードを一気に打ち振るった。

装甲にエネルギーの刃が斬り込まれたかと思うとそこから一瞬の内に切断し耳をつんざくような音が響き、黒い破片が辺りに飛び散った。機体中から火花が飛び散り、ACの耐久レベルを完全に超える。

『ジノーヴィー……私はここまでだ………』

落下したジオハーツは直立しようとするめきながら数歩、歩くとその場で両膝を付き前のめりに倒れ機体は崩壊を始めた。

爆発の破壊作用で間接部や外装は潰れ、灼熱の火炎に包まれ黒煙を上げながら機体は四散する。

烈風が巻き起こり破片が面も上げられない程に飛び散り、融解しかけた装甲が足元に転がった。

漏れた油に引火して炎は更に大きくなり、立ち込める黒煙はそれからしばらくして収まる。

レイヴンは残骸となったジオハーツを見て彼女が最後に残した言葉を頭に浮かべていた。歓喜と哀愁の両方の意味を込めたその声色の理由を知る者は誰も居ない。

『作戦終了——戦闘モード解除』

ネクサスの頭部のカメラの光が消えて通常モードへ移行する。激戦を繰り広げた跡地にはA Iの無機質な音声が轟いていた。

戦いが終わって……（前書き）

えーっと更新がだいぶ遅れた割にかなり短いです。

番外編をやるつもりでしたがグダグダになったのでまた別の機会にでも書こうと思います。すいません。

よーし次回はちゃんとやるぞー！

戦いが終わって……

福音を停止させた6人の戦士は満身創痍で帰還したがそこで待っていたのは安らぎや労いの言葉ではなく、千冬からの大目玉であった。彼等は待機命令から反して勝手な行動を取ったのだから当然の処置ではある。

アグラーヤの攻撃を受けた箒やラウラは頭が右へ左へ揺れて視線は全く安定せず意識は朦朧としていた。見るに見かねた真耶はそこでようやく千冬の説教を遮った。

「あの……織斑先生、もうそれくらいにしてあげては……だいぶ疲れているみたいですし」

「はあ……わかった。帰ったら反省文を覚悟しておけ。あと、よくやったなお前達」

ちょうどその時、頭上からあのACのブースターの音が響き、一同は上を見上げた。

中破した灰色のACが着地すると背中中のハッチが開いて座席がゆっくりと出て来る。中にはパイロットスーツ姿の人物が立っている。座席から飛び降りてヘルメットを外し、そこでようやくその人物の正体がレイヴンであるとわかった。

「任務完了だ」

「ご苦労様、あなたも休んでくれ。体にだいぶ無理をさせたでしょう」

「そうさせてもらっ

ヘルメットを片手にレイヴンがふらふらと歩き始めると一夏が呼び止めた。

「レイヴンさん」

「何だ？」

「あのパイロットの人はどうなったんです？」

「死んだ。いや、殺した」

それだけ言い残しまた歩を進めると一夏はレイヴンの肩を掴み顔をこちらに向かせると力一杯に殴った。

強靱な肉体のレイヴンも少しよろめき、口の端が切れて流れた血を手で拭くと鋭い眼光が一夏を睨む。少し気圧されるが一步も退かずレイヴンを睨み返した。

「何で……何で殺したんだ！」

その場は静まり返り、全員の視線がレイヴンの方へ集まる。

「バカが……ACには絶対防御なんて都合の良い物はないんだ。戦場に出れば生きるか死ぬかだ。殺さないなんて下らない綺麗事はうざったらしくて反吐が出る！」

「俺は……あんたが理解出来ない！」

「織斑、もうよせ。実戦には常に死が付きまとう。レイヴンの行為は当たり前な事だ」

千冬に制されて一夏は押し黙り列に戻るが明らかに腑に落ちない顔をしていた。

対してレイヴンは表情を一切、変えないまま旅館の中へ消えて行った。一夏の目にはレイヴンは単なる殺人鬼にしか映っていない。生きる為に戦い、残る為に殺す戦場は普通ならトラウマや怨念、憎悪が渦巻く二度と行きたく無い世界だが傭兵にとってそこは住処であつた。一夏はもちろんの事、千冬ですらレイヴンの意志に正常に向き合う事は難しい。

恐らく、この中で彼を少しでも理解出来るのは人一倍に戦いを知るラウラだけであろう。各自解散して更衣室へ入り、そこで汗を流す。一夏がそこへ入ると中にはパイロットスーツを上半身だけ脱いだレイヴンがベンチに腰掛けている。

両者の間に会話は無く、一夏は血の味がする口をスッキリさせようと洗面所の蛇口を捻り、水を口にふくんだ。

すると一夏の口内に激痛が走り、たまらず水を吐き出した。口を開けて鏡に写して覗いてみると、肉が痛々しくえぐれていた。

（うつひゃー、そっぴや自分で食いちぎったんだっとなー）

「一夏」

ベンチに座っているレイヴンから声をかけられ振り返った。

「何ですか」

一夏の反応はかなり素気なく、会話を拒んでいるように見えた。

「お前に1つだけ言っておく」

「傭兵様のありがたいお言葉ですか」

皮肉めいた発言だがそれを無視してレイヴンは言った。

「戦場に身を置くIS操縦者なら必ず人を殺める時が来る。その時までには覚悟を決めておけ。リムからシャルルを守るんだろ？」

リムという名前には聞き覚えは無いがレイヴンがどの話しをしているかは瞬時に理解出来た。水着を買いに行った帰りにシャルを殺そうとした男の事だ。

「何故あなたがそんな事を？」

「アイツが俺に相談に来た。まあ安心しろリムの狙いは俺だ」

パイロットスーツを脱いで浴衣に着替えたレイヴンはそのまま更衣室を後にすると一夏はロッカーを殴りつけた。

シャルに頼りにされていない。そんな気がして仕方がないのだ。自分への憤りが今にも爆発しそうで一夏はそんな自身が堪らなく嫌であつた。

「どうすりゃ良いんだ……」

夢に出て来た青年を思い浮かべるがあれ以降、彼から話し掛ける事は一度も無い。

新しい機体を得たが一夏がまだそれを使いこなしていないし荷電粒子砲の制御もホルスの眼が描かれたスラスタに搭載された擬似人格システム“霧影”に殆ど任せている。機体が変わってもレイヴンとの力の差は縮まって居ない。

雪羅の性能に頼り切っている事を一夏は痛感していた。

所変わって、女子の更衣室だが男子更衣室よりは幾分か賑わっ

ていた。

「勝ったのに妙な気分ね」

「あの機体のパイロットの話しか？」

「あたしは一夏程あまちゃんじゃないつもりだけど……レイヴンのおっさんがちよつと分かんないな」

「……………軍人をやっているらば殺す機会はいくらでもある。ましてや私のように作られた兵士ならな。教官の言うとおりあれは実戦だ。相手も死ぬ覚悟くらいはあったろう」

箒以外は訓練を受けた代表候補生、当然ながら戦いの最中に殺人など当たり前と習っているし戦いの醜さや残酷さも耳にタコが出来る程に聞かされた。

「今からごはんなんだし暗い話しは止めにしようよ」

シャルに言われて場の空気が少し緩んだ。

「そうですね。辛気くさいのは嫌いですわ」

もう全員の着替えが済み、更衣室を出て行った。

その夜、千冬は旅館を出て浜辺に来ていた。そこには先客があり彼女はその先客の隣りに立った。

ウサギの耳のようなカチューシャが特徴的な東は三角座りで満月が反射する夜の海を見詰めていた。

「東、少し話をしようか」

「ちーちゃんからのお話しはいつでも喜んで聞くよ」

「白式は確か純白の機体だったが何故か所々に青いカラーリングが施されていたな。何故そうなったか気付くのに時間がかかったよ」

「ありやりや、流石ちーちゃんだね。でもいつくんは一生気付かないかもね」

「東、インターネサインのデータを白式に入れたな？」

「ほんの極々一部だけだよ。あのデータ量は凄いらね。一生かかっても調べきれないよ」

「何のデータだ？」

「その時代から500年前の傭兵の戦闘データだよ。インターネサインのデータベースの中身はサイレントラインやレイヤードって言う興味深い物のオンパレードだよ」

「……」

「ねえ、ちーちゃん。天才って辛いね」

「いきなりだな」

「知りすぎたらこんなにも世界ってつまないんだね」

いつも鬱陶しいくらいに明るく振る舞う束だったが今の彼女はやけに静かで瞳の奥には淋しさが色濃く映っていた。

空に輝く満月は雲に隠れて浜辺に暗闇がやって来る。2人はそれからしばらく会話を交わさず海を眺めていた。

蠢く影（前書き）

いやーテスト前だとはかどるなあー！

もしかしたらレイヴンをメインなのってこれが初めてかもしれない……。

ん？ 一夏？ 誰ですかそれは。

先日の友人の会話 ←

友人「楯無さん、可愛いなあハアハア」

作者「会長の何がいいわけ？」

友人「青い髪とかかなあ……うっは〜可愛いいい」

作者「青い髪……トリコじゃダメか？」

友人「トリコ………ウホッ………」

蠢く影

臨海学校が終わってどこか寂しさを覚えるものの、次に待っているのは夏休みである。変わらない日常に見えるが世界は今、大きく変わろうとしていた。

現在、ISはACに二度も敗北し最強兵器という言葉が陳腐化している。

ACは謎が多くサンプルも手に入っていない為、複製は不可能だがあれがもし男性にも扱えたとすれば。

と、考えると各国の首脳達はせっかく確立させた女尊男卑の制度が崩れてしまう可能性を恐れ、女性陣は女尊男卑の制度を更に圧制した。

政界は女性のみになるだろうし法律も女性を中心に考えた内容になる。ISを動かせない男達は女の理不尽にただただ犬のように従うしかないのだ。

通常兵器で挑めば一瞬にして殲滅され、それこそ奴隷より酷い扱いが待っている。しかし今の不条理を呑み込み、へつらいを浮かべていれば今より酷くはならない。人は暴力に極端に弱い。弱者、この世界ではそれは全人類の男を指す言葉であった。

変わって行くと例えばIS学園の鈴のいるクラス、1年2組にも変化が訪れていた。いや、厳密には戻ったというのが正解だろう。

何度か2組と1組の合同練習、それは担任が謹慎処分を受けていたからである。

入学式から次の日、1組や3、5組は真面目に授業をしていたが、2組だけは何かドッチボールをしていたのだ。しかも教室でだ。担任、エドワース・フランシはその所為で謹慎となっていたが、臨海学校が終わって彼女は帰って来た。

いつもは目立たない2組の教室、そこに荒々しい音と共に長身で美人な女性が入って来る。

「オラア！ 久しぶりの学校だオラア！」

強烈なインパクトを放ち教卓の前に立つと黒板に『夏休み』と書き始めていた。

「いいか！ 今月の下旬から夏休みに入る。そこでもし単位が取れていない奴は夏休みに学校に来なくちゃ行けない。わかるか？ お前等がへマしたらアタシも夏休みが無くなんのよ！」

ちなみにIS学園のテストは比較的簡単だ。滅多な事がなければ赤点なんて取る事はないし、それに成績の殆どはISのトーナメントに左右されるので筆記テストはおまけに近い。

「じゃあ、初めての授業の前に謹慎中に何をやっていたか話す。よく聞け！ オラア！」

生徒達はこのイロモノ担任を珍獣を見るような目で見詰めている。

「まあ、アタシがやってたのはダーツゲームと吹き矢の練習かな。おかげで的のド真ん中に常にかかるようになったわ」

「先生！」 教室の端から手が上がる。

「はい、何だ。中国の代表候補生にして酢豚の探求者、凰鈴音さん」

「授業を早く初めてくれますか」

「なるほど……授業か。アタシも本来ならアンタ達に話したい事は山のようにあった。だがしかし！ その話は全て織斑先生が説明

したらしくアタシの出番は見事に消えたのよ！ 分かる？ 酢豚ガール」

「えっ……だから」

「いいの！ 言わなくてもアンタの悩みは分かっているわ。好きな人がいるのに周りのキャラに埋もれて出て来れないのね！」

大方、正解という所がまた更に腹が立つ。エドワースの話しは徐々にズレて行き最終的には自分の趣味の話始めていた。

2組の授業はこうして終わって行くのであった。

レッドバタフライとの戦闘で深刻なダメージを負っていたレイヴンのリヴァイヴの修復はなんとか終了し、テスト飛行も行った。ISは自己進化の過程でレイヴンの動きを学習していくが、それはその場しのぎのインストールに過ぎず数日すれば学習内容は殆ど失われししまうのだ。

レイヴンのリヴァイヴも例外ではなく、また元の反応の悪い機体に逆戻りしていた。

そこで彼はリヴァイヴを整備科へ持つて行った。整備科はIS学園の地下に位置しており、企業や国家の試作品もテストを行う為に置かれている。

「あら、レイヴンさん。織斑君のクラス代表就任パーティー以来ですねー」

「……お、おう」

眼鏡をかけた良くも悪くもない容貌をした少女、二年生の黛薫子である。

（誰だコイツ……全く思い出せん）

「レイヴンさん、あたしの事覚えてます？」

「……………すまない。誰だ？」

「あら……女の子の名前は覚えておくもんですぜオツチャン。黛薫子ですよ。二年生の」

「……へ、へえ……そうか」

「本当に忘れてるんですね。まあいいや、今日はどんなご用件ですか。取材ならいつでもOKですよ」

「いや、今日はリヴァイヴに俺の戦闘データをちゃんとインストールしようと思ってな」

「なるほど。それならあたしにお任せあれ。おい本音、ちょっと来て」

「はあゝい」

気の抜けた声を上げるのは本音ごと、のほほんさんは余らした袖をバタバタと揺らし歩いて来る。

「あるえゝ？ レイヴンさん何しに来たんですか？」

「リヴァイヴの調整」

説明が面倒なのでレイヴンはだいぶ省いて言った。

「じゃあレイヴン、このリヴァイヴの戦闘データをインストールするんでちよつと待ってて下さいね」

「ああ」

床に散らかる工具箱を足で避けて薫子はリヴァイヴを運び整備室へと入って行く。

レイヴンが待合室のシートに鎮座している最中、本音はシートに寝転がりうねうねと体を動かしたり、袖を必要以上にくるくると回したりと非常に落ち着きがない。

薫子に呼ばれてから1分たりともジツとしないのだ。反対にレイヴンはワニのように動かない。

何か考えているのか何も考えていないのか定かではないが、隣りでゴロゴロしている少女よりはちゃんと思考がある。

「布仏」

「はあい？ のほんで良いよ名字だとなんかイカツイから」

「じゃあ本音」

「何？」

「コーヒーでも飲むか？」

「うん！」

シートから立ち上がり待合室に設置されたコーヒーメーカーにカップを2つセットしてボタンを押した。

「ほら」

出たばかり熱いコーヒーを本音に渡した。

「いただきます」

本音はカップに口をつけてコーヒーを飲み込んだ時だ。

「ぶへっ！ レイヴンさんひどいですよ。あたしブラックは無理なんですよ」

「なら、最初に言え」

頬を膨らませながら本音はコーヒーメーカーの下にある角砂糖が入った瓶を取り出し蓋を開けた。

中にある砂糖を摘み、コーヒーの中に入れて行く。

（コイツ……一体いくつ入れる気だ……）

本音のコーヒーカップを凝視して入れた砂糖の数を数える。

（5……6……7……8……8個だと！？）

角砂糖を8個も入れたコーヒーをスプーンでかき混ぜて本音はそ

れを美味しそうに喉を鳴らして飲む。

（角砂糖を8個も入れて何故平気で飲めるんだ？ そんなもの人間が飲める物じゃないぞ）

「プツハー、まるで砂糖の宝石箱や〜」

（当たり前だろ……）

「レイヴンさん、さつきからあたしの事をエロい目で見てますねエツチツチ〜」

その瞬間、レイヴンの拳骨が本音の頭に入った。

「ひんっ！ 痛いですよ〜」

「安心しろこれ以上バカにならん」

「うつ……傷付いた……」

そんなやり取りをしていると整備室から薫子が顔を出した。

「インストール終わりましたよレイヴンさん」

「わかった」

薫子の後が続いてレイヴン、本音は整備室の中へ入った。内部は広大でアリーナの倍の広さはあった。

そこにはIS学園の二年生や三年生の代表候補生の専用機や企業の試作品などが並んでいた。改めてISの武装のバリエーションに

感服した。

そんなレイヴンのリヴァイヴは整備室の中央に置かれていた。数名の生徒が白衣を着てリヴァイヴにコードを抜いたり、新しいコードを差し込んだりと大掛かりな作業をしている。

思い返せばこれだけ大人数でやる事を篠ノ之束は1人でこなしていたのだから感嘆するしかない。

「レイヴンさんのリヴァイヴ何ですけどね……あなたのポテンシャルに合わせてだいぶ進化したみたいなんですよ」

そう言って見せられたレイヴンのリヴァイヴはだが、特別変わった所も無い。

カラーリングが緑色から濃い紫色になったくらいだ。

「何か変わったのか？」

「中身は変わりましたよ。あ、レイヴンさんはイコライザに興味あります？」

「追加武装の事か？」

「そうですよ、企業のゴミ……じゃなくて産廃……じゃなくて試作品があるんですよ。付けてみませんか？」

薫子を含めて他の生徒の笑顔がヤケに怪しかったがレイヴンはそれを承諾した。

するとその場に居た全員が笑顔を浮かべ嬉しそうにイコライザの取り付けを始めた。リヴァイヴの肩に装着された装甲を取り外し倉庫へしまうと、倉庫から紫色の楕円形の装甲が出て来た。

楕円形の装甲を空いた場所に取り付け、完成した。

「意外と早いな」

「ツギハ社が開発した近接特化型、装甲ブレード“バスターブレイカー”です」

一見すればただの装甲にしか見えず、どうも凄みが伝わって来ない。

「とりあえず、テストしましょう」

「そうしよう」

紫色のリヴァイヴを纏ったレイヴンはカタパルトから射出されアリーナの空を飛び回る。妙な重量感と操作性の悪さを感じたが慣れれば問題はない。

イメージ通りに動かず、ちょっとした事で足を曲げて転けていたのがまるで嘘のようである。操縦者との同調率も上がった為、ISの起動時間が7分が10分へと伸びた。

『レイヴンさん、どうですか？』

オープン・チャネルから薫子の声がする。心なしか以前よりも声が通っているような気がした。

『問題ない。しかし、このバスターブレイカーという奴はやけに重いな』

『レイヴンさんならそれくらい大丈夫でしょ？』

『まあ……な』

テスト飛行を終了して武装のテストに移行しようとした時だ。

「レイヴンさん！」

「おっさん！」

声がした方を見るとセシリアと鈴がISの展開を済ませて立っている。

「何をしている？」

「ラウラに邪魔されたりいろいろあったけど今日こそリベンジよ！」

武装のテストには持って来いの相手だ。

「ちょうど良い。かかって来い」

セシリアはレイヴンから距離を置いて、足を地面に固定するとレーザーライフルでの狙撃に専念した。鈴がすべき事はレイヴンの牽制とセシリアが狙撃に集中出来るようにレイヴンの注意をこちらに引きつける事だ。

強化した甲龍のスラスタはレイヴンのリヴァイヴよりも速く、容易に接近出来た。

レイヴンは手から小型のブレードを出して鈴の双天牙月を防いだ。そしてここぞとばかりに最大出力の衝撃砲をリヴァイヴへ撃ち込んだ。量産型程度の装甲なら瞬く間に破壊出来ただろうが、衝撃砲

の砲弾はバスターブレイカーに遮断されていた。

鈴が一度距離を取ろうとスラスターを前方へ傾けたその刹那、楕円形の装甲の内側から上下に一本つつ装着されたブレードが甲龍を挟み込んだ。

バスターブレイカーの真の恐ろしさは衝撃砲を弾く防御力ではない。雪片に匹敵する切断力を備えた鋏である。

遠方からセシリアの狙撃もリヴァイヴの盾で防がれる。挟んだ甲龍を地面に叩き付けるとアサルトライフルを2丁、呼び出して起き上がらない鈴に斉射する。

「後、3分か……」

リヴァイヴはスラスターと4基のバーニアを吹かしてセシリアへ接近した。

レーザーを難なく回避して眼前にまでやって来るとセシリアはインターセプターを召喚し、斬りかかった。

レイヴンはインターセプターの細い刀身の側面を蹴り、軌道を変えてから空きになった体にクレネードランチャーを放ってトドメを刺した。

「随分とマシにはなったな」

「ああゝ！ 何で勝てないのよ！ あれなの！？ 補正っていう魔法の言葉なの！？ ポポポポーン！」

鈴が地団駄を踏みながら頭をガシガシと掻き回す。

「注意力が散漫過ぎる。集中しているつもりか知らないが、意識がだいぶセシリアへ行っていた。セシリア、お前は狙撃手なんだ。もっと援護してやれ」

「はあい……」

かなり訓練したつもりだったが以前よりも簡単に一蹴されて2人は相当しよぼくれていた。

テスト飛行と模擬戦を終了するとレイヴンは真っ先にリヴァイヴから降りた。

それは例の追加武装のバスターブレイカーと4基のバーニアが異様に重いからである。攻防一体の兵器であるバスターブレイカーは切断力、燃費だけを見れば非常に良好と言え、尚且つどの機体にも装備可能という利点があった。

しかし欠点は幾つもある。まず、レイヴンが常々感じるようにバスターブレイカーはかなり重く、それによりどのISに装備させても機動力が40%ダウンを招いてしまった。

そこで機動力を取り戻す為に4基のバーニアが取り付けられ、速さは戻った。

だが、バスターブレイカーの操作の難しさに加えてスラスターと独立したバーニアの操作も行う為、歴代のISで最も扱いが難しい物となってしまったのだ。

扱いやすさが売りのリヴァイヴの面影はもうどこにも無い。

「流石、レイヴンさん！あの産廃をちゃんと扱えるのはあなたくらいですよ」

「もう少し軽ければもっとちゃんと動かせたんだが……」

「いえいえ、十分ですよ。本音が運転した時は衝突したり転んだりメチャクチャでしたよ」

「別に俺じゃなくても良いんじゃないか？ 織斑先生や山田先生が

いるだろう」

「織斑先生は案外こういう邪道武器が苦手なんですよ。動きは完璧なんですけどね」

（あの女にも苦手な武器があったのか……）

レイヴン仕様となったりヴァイヴの試運転はこれと言った事故もなく無事完了した。

使い手が見当たらずお蔵入りとなったバスターブレイカーはレイヴンが貰い受ける事になった。難点はあるが新武装が増えてレイヴンは内心かなり喜んでいた。

整備科も邪魔な武装もなくなって万々歳であった。

今日の授業が終えたシャルは自室で授業の復習をしていた。普通の生徒ならベッドに寝転んでそのまま寝るか、ルームメイトと談笑しているか時間を潰しているだろう。

シャルのルームメイトであるラウラは今は部屋に居ない。最近、毎日のように保健室に通い、レイヴンと合っている。

向こうはラウラの好意をわかっている為、煙たくあしらったりはしないが特別な感情を抱いたりもしない。

他の生徒同様に見ているのだろう。

ペンを回しながらノートの内容を暗記するシャル。その時だ、彼女の携帯電話に着信があった。

画面にはブロシュ・デュノアと書かれている。シャルロットの実の父の名前だ。

彼女は着信に出るか否か悩んだ末、その電話を受け取った。

「もしもし？」

震えた声で聞くと電話口の向こうから低い声が響いて来る。

『久しぶりだな。シャルロット』

「な……何のようですか？」

『可愛い娘への電話に理由があるか？』

「いいえ……」

——よくまあ、ぬけぬけ……と。

シャルがそう思いながら電話を強く握る。

『シャルロット、本国へ帰還しろ命令だ』

「何故ですか？」

『次の仕事だ』

「お断りします。私はまだここでの命令を終えていませんので」

『織斑一夏への接近はとうの昔に失敗しているだろう？』

「——！？ だから私を抹殺しようとしているのですか？」

『ほう……その様子だとリムにはもう接触したみたいだな。今はリム達か……。で、レイヴンが助けてくれたのか？』

「あなたには関係ありません。とにかく、私は本国に戻る気はありません」

ブロシュの言葉にも恐れずに言い返すがここで彼の声色が変わった。

『少し目を離している間に随分と偉そうだな望まれて生まれてもない癖に』

望まれていない、その言葉がシャルの胸を見えない刃が突き刺した。

愛人の子であるシャルは正妻から疎まれ、いとも白い目で見られてきた。

『シャルロット、お前は私の所有物だ。決定権も拒否権もない。私がどうしようと勝手だ。望まれないならせめて物として役に立ってみせろ』

「あなたは外道です！」

初めてシャルは声を荒くした。

『外道で結構、断るならもうお前とは絶縁だ。さようならシャルロットさん』

電話が切れるとシャルはケータイを落とし、その場に泣き崩れた。絶縁と言われたからではない、帰る場所を失ったからでもない。シャルは肉親にすら不要と真っ正面から言われたのだ。

15の少女には苛烈極まる暴言である。

「一夏……僕はどうすれば良いの……？」

どこまで人の心を踏みにじれば気が済むのか。怒りの感情はとうに通り過ぎてシャルには悲しみしか残っていなかった。

とあるモニタールーム、そこが日本である事は確かではあるが明確な位置は全く分からない。

そこには3人の女性と2人の男性の姿がある。女性の1人はまだ少女と呼べる年齢であるとの2人は二十歳を超えおり年齢の幅は狭かった。残りの男性陣も年齢の幅は狭く、お互い20代後半と言ったところだ。

「デュノア社の社長から命令だ」

やや荒っぽい口調が目立つオータムという女性は電話を切りその場にいる全員に告げた。

「MTの部隊も派遣するから後一週間待てとリムに伝える」

「君が伝えたらどうだ？ 実力は買うが私は彼を好まない」

蒼白い髪とつり上がった鋭い目が特徴的な若い男性、ジャック・O。

かつてレイヴンズ・アークを統括し、その半年後にレイヴンを至上する組織、バーテックスを主宰した若きカリスマである。

レイヴンとしての実力もさることながら彼の突出すべきは事務的

仕事だ。

「じゃあエヴァンジェ、テメーが行け」

壁にもたれて腕を組んでいるその男性こそ、レイヴンと同時期に傭兵となった男である。アーク時代の初々しさは無く落ち着いた雰囲気醸し出している。

目つきは悪く右のまぶたから唇にかけて大きな傷跡がある。

「……」

エヴァンジェは答えずオータムを睨み返した。

「チツ！ 何だコイツ等」

苛立ちを覚えながらオータムはモニタールームを後にした。

「わたしのオータムが失礼したわね」

さっきの荒々しい女とは打って変わり話したのはスコール・ミューゼルという凄艶な美女。抜群のスタイルとその美貌に男なら誰でも振り返るだろう。

そんな彼女の後ろでジツと椅子に座っているのはエムと名乗る少女だ。

一夏達より1歳か2最年下くらいで、何よりも驚きなのが顔が千冬と瓜二つなのだ。ナイフを片手に机をガリガリと削り虚ろな目でその後を指でなぞる。

彼女の行動は仲間であるスコールやオータムにも分からない時があった。

「そう言えば残りの2人はどこです？」

「ジノーヴィーと鳥大老は自室だ」

「わかりました」

「IS学園の襲撃はまだか？」

「さっき言った通り、MTの到着と……言い忘れました。もう1機来るACの到着を待てと」

「なるほど、君が言うならそうさせてもらおう。では私は失礼させてもらう。それとだ織斑一夏を捕らえてくれ」

「襲撃にはオータムを向かわせます。あの子にそれは伝えておきます」

「感謝する」

ジャックがモニタールームを後にするとエヴァンジェも彼に続いて部屋を出る。

「ジャック、本当にあの者達を信じて良いのか」

「インターネサインの破壊までは協力するつもりだ。それに奴らは少なからずインターネサインの存在を知っている。そして何よりもデュノア社からの支援がある」

ACと言えども単体でいつまでも戦える訳がない。何か大きな組織のバックアップが必要不可欠なのだ。

「お前も私達の意見に同意した筈だ。かつてアークを追放されてまでクレストと直接契約を結び、ジノーヴィーの意志に同調したのは誰だったかな」「その話しは関係ない」

「いずれにせよ奴らと最後まで意見が合うとは思えないな」

「だが――」

エヴァンジェが何かを言おうとした時、2人の目の前にあるドアが勢い良く開きオータムが飛び出して来た。

「だから来週まで待機だつて言っただろうが！」

「いつまで待機させる気だ。あのクソ社長は！」

フランスを発つて1ヶ月近くも経つがリムには未だに待機命令が出ている。

一刻も速くあの男を抹殺したいリムの苛立ちはピークに達している。亡国機業内でも最近のリムの身勝手な行動が目立つ。

組織の人間からは粗暴で短慮な輩という印象付けではあるがそれは間違いである。

狡猾で戦いの時にこそ冷静沈着で視野を広く、誰よりも周りを良く見る事が出来る男だ。だからこそリムは特攻兵器の雨の中生き残れたのだ。

「リム・ファイヤー。一週間、後一週間で念願の復讐が果たせる。楽しみはもう少し後に取って置くことだ」

「何を偉そうに……！」

オータムを突き飛ばし、部屋へまた籠もるが手荒に扱われ短気なオータムはリムの部屋のドアを力一杯に蹴り飛ばしてモニタールームへ向かった。

「殺してやる……あの男を殺してやる……。宿敵だから何だか知らないがエヴァンジェゴときに獲物は譲らねえ……」

部屋からはリムの怨念のように呟く声が常時、漏れて来るのであった。

復讐なんてラクショーだね（前書き）

今回はまあまあ緩い回です。

この前庭に栽培したプチトマトが生っていたんでちよつともぎ取って食べました。

無農薬は確かに美味しいです。ちなみにそのプチトマトが頻繁に私の弁当に漬れて入っている事があるんです。

いやーテスト前は本っ当に執筆はかどるなあ。

復讐なんてラクショーだね

フランスを代表する大企業、デュノア社の本社の社長室にはシャルロットの父であるブロシュが椅子に腰掛けて大きなガラスの窓の方を向いて電話を片手に資料を持っている。

多少、精神に異常をきたしている彼ではあるが仕事はしつかりと出来ている。今はライバル社が居ない為か本人は暇があればのんびりと俳句を考えたり、盆栽の手入れなどをしている。

本国への帰国命令を意外にも断られたが別段、気にかけてはいない。むしろ喜んでいるようにも見えた。

「ああ……わかった。それは助かる……亡国機業はIS学園へ向かって攻撃を開始しようとしている。成功すれば君は世界を敵に回し兼ねないぞ?」

電話口からは若い女の声がするが良く聞こえない。

「随分と強気だな。あながち過信でも無さそうだ……。下準備は私と亡国機業……いや、旧イタリア軍の亡霊どもに任せてくれ。君はあれの解析に励んでくれれば良い。それではまた……」

受話器を置き、邪魔な前髪を全て後ろへ向けてゴムで束ねるとブロシュは社内の無線を使って地下の研究所に連絡を入れた。

「愛娘がもう少しで帰ってくる。研究の準備を始めろ」

『わかりました。しかし本当に娘さんを強化人間なんか——』

「命令だ」

『は、はい』

「それと……“アレ”の調子はどうだ？」

『実戦投入可能ですが、まだ80%の完成度です』

「よろしい、引き続き復元を続ける」

『はい』

プロシユは先ほどの資料を何度も見直しながら頬を緩ませた。
今やデュノア社は違法行為を山のように行っている。IS開発の
打ち止めとイグニツション・プランからの除名はプロシユにしてみ
れば嬉しい誤算であった。

何故ならそれはヨーロッパの国々の目に止まらなくなるという利
点があるからだ。

ISの開発に鎬を削る中、まさか大企業が未知の兵器であるMT
の開発や過度の人体実験を行っているとは誰も思わない。

デュノア社の実態はまるでキサガを彷彿させる物があつた。そ
してプロシユには陰湿や外道として有名なミラージュやクレストの
社長がちっばけに見えてくる程に精神が歪んでいた。

レイヴン以上に冷酷で合理的で私情的であつた。

シャルが保健室に通う回数がラウラの次に多くなった頃、その日
はいつもベッドに腰掛けて話を聞くレイヴンだったが、今日はど
うしてか立ったままで視線を外の景色に向けていた。

「シャルル、最近よく相談に来るな」

「ええ……」

「で？ 俺に話して少しは解決出来たのか？ 出来ていないだろう」

「そんな事ないですよ。とても助かってますよ」

「もうここに来るなシャルル。お前の心にはもつと別の感情がわだかまっている。俺では向かって来る敵を殺すくらいしか出来ない」

「レイヴンさん……」

「お前の本当の心の拠り所に支えてもらえ」

心の拠り所、シャルの頭に電光が走り一夏の顔がよぎった。

「失礼しました……」

椅子から立ち上がって保健室からシャルが一礼して出て来る。後ろで束ねた髪を揺らしながら寮へ戻る途中にシャルは中庭を通る。並木道を歩いていると樹木に一夏がもたれかかっていた。

「一夏……」

「……レイヴンさんの所に行ったのか？」

「う、うん」

「なあシャル……何でお前の親父の事、話してくれなかったんだ」

「えっ……あれは……」

一夏はシャルの腕を掴み、顔を寄せる。

「俺はそんなに頼りないか？ 人も殺せない臆病者はかやの外つてか？」

「そんなつもりは……」

「確かに俺はレイヴンさんみたいに強くねえよ。戦略が立てれる訳でもない。ならよ……せめてお前の不安も一緒に背負わせてくれよ……」

「一夏、ごめん。僕はもう……どうしたらいいかわからないんだ」

「え……？」

目頭を熱くしてシャルは大粒の涙を流していた。他人の事を過剰に気遣い自分を押し殺し、散々溜め込んでいたものが遂に破裂したのだ。小さく声を上げて次々に流れる涙は一夏の制服を濡らした。

「シャル、話してくれないか？」

「ひっく……うん」

泣き声になりながらもシャルはようやく口を開いた。無理に微笑まず俯いた状態で昨日のブロシュからの電話の事、リム・ファイヤーの事を一夏に全て話した。

胸の内がスツキリとしたと同時に涙は収まって笑顔が僅かに戻っ

た。

だが、一夏は笑っていられる程出来た人間ではない。腹の中が煮えくり返り手の甲に血管が浮かび上がっている。

果てしない憤怒が一夏の理性を握りつぶそうとしていた。もしここにプロシユ本人が居たなら一夏は間違いなく斬りかかっていただろう。今の彼はそれだけの怒りを覚えていたのだ。

何度か深呼吸をしてなんとか憤りを抑えるとシャルを見詰めた。

「リム・ファイヤーの狙いはレイヴンさんで奴はシャルを無理矢理、フランスに連れ戻そうとしてるんだよな？」

「そうだよ……」

「この話しは俺とレイヴンさん以外には……」

「してない」

「そうか。コレってお前個人の話しじゃ済まなくなるぞ。ACが学園の近くの街で暴れたら多くの人が死ぬ」

「やっぱり織斑先生に言った方が良い……かな？」

「ああ」

千冬へこの話しを持ち掛けるのは確かに正解である。政府に連絡を入れればシャルの身の安全は確保であるだろうし、デュノア社に対して抜き打ち審査を行いデュノア社を解体させる事も不可能な話ではない。

しかしいくら世界王者の雷鳴であつても暴れまわるACから数千の命を守りきる事は出来ない。どこから現れるか分からないリム・

ファイヤーである為に十中八九、学園と街の付近が戦場になる事は避けられない事実でもあった。

デュノア社から送られたMTの大部隊と助っ人としてのもう1機のACと傭兵^{レイヴン}が日曜日の朝方にリム達のいる拠点とIS学園の丁度、中間地点に到着した。

その正体は今回のパートナーであるリムですら知らず、ブロシユからは『君が良く知る人物』と聞かされてはいるのだが当人には皆目見当がつかない。

今朝の天気は快晴、襲撃を行うには不具合な天候だが平和ボケしテロや襲撃に全く慣れていないこの国の管理機構など亡国機業は最初から戦力に数えていない。

リムのAC“バレットライフ”の整備は万全だ。この世界の技術を応用してチューンを施したお陰で機動力や消費エネルギーも少しは改善された。

その両腕部に備わるフィンガーバルカンの銃身は天井のライトに当たり、鋭く光っていた。

強化人間の手術をとうの昔に受けたリムは専用のパイロットスーツに着替えてピットで待機していた。

『作戦を説明します』

空中に映像が投影され、スコールがそこにいる。ピットのベンチに座っているのは今回の戦力の要であるリムとオータムだ。

『目標はシャルロット・デュノア及び織斑一夏の捕獲そしてIS学園の破壊です。向こうは腐ってもIS操縦者の育成場、代表候補生

と教員には留意が必要です。ここから先にある工業地区で味方A Cと合流を果たした後、市街地を進みI S学園へ向かいます。作戦は以上。何か質問はあるかしら？」

「無い」

リムはヘルメットをかぶるとピットから出てバレットライフのcockピットに飛び乗った。座席に腰掛けると配分から3本の太いコードが首筋と背中、腰へ接続された。

その時に一瞬だけリムの瞳が青く変色し、また直ぐに元通りになった。パスワードを入れてロックを解除すると頭部のカメラが光り、バレットライフは立ち上がった。

『通常モード、キドウ』

頭上のハッチが開くとエレベーターが動き出しバレットライフは外に出て来た。

周囲は森林と山しかないが、こんな巨大ロボットを乗り回していれば直ぐにでも見つかってしまう。4本の足を虫のように動かしてバレットライフは歩を進めた。

「レイヴンなど滅びればいいのだ……」

リムはcockピットでそう呟き迷彩柄のA Cが森林を抜けた頃、デユノア社から送られたMTの部隊が光学迷彩を解いて姿を現した。逆間接にライフとミサイルしか装備していない低コストMTをメインにまるで笠を被っているようなフォルムの狙撃用MTと重装備型のMTがバレットライフの後に続いた。

その様子をモニタールームでスコールとジャックそしてエヴァンジェが見物していた。

「合計数40機のMTか。よくあれだけ複製出来た物だ」

「感心すべきはデユノア社ですよ。プロシユが私達に協力してくれる事で計画は大幅に前倒しとなりましたからね」

「君達の計画……」

「お互い深く詮索するのは止めましょう。あくまで利用しあっている仲なんですからね」

「そうだな。私も君達の計画がどんな物か知った事ではない。しかし、私達の計画の邪魔となるなら容赦はしない」

「こちらこそ」

スコールもジャック余裕を見せ付け決して弱点を晒そうとはしない。そんな中、ただ1人エヴァンジェだけはモニターを食い入るように見詰めていた。

「リム・ファイヤーが気になるのか？」

「まさか……」

エヴァンジェはモニターから目を離して部屋を出て行く。その口元は頬までつり上がり、邪悪な笑みを浮かべながら呼吸に近い程、小さな声で言った。

「前座は下がりリム・ファイヤー……」

最初からエヴァンジェはリムがあつた男に勝てるなど毛筋程も思っていない。

「ずいぶん奴は嫌われ者だな」

「ジノーヴィーか」

「君の目から見てこの組織をどう思う？」

「実に合理的だ」

「なるほど、残念だが私はこの組織に信頼を置けない。恐らく亡国機業は何か重要な物を隠している」

「そうであるならいずれ分かる事だ。今は奴らの援助無しには動けない。アナタの意志には賛同だが行動を共にするつもりは無い」

いつも以上に真剣な眼差しのジノーヴィーを横切つてエヴァンジェは廊下の奥へと消えて行った。

丁度その頃、リム・ファイヤー率いるMTの部隊は味方ACがいとされる工業地区にやつて来た。そこはバーテックスとアライアンスの戦争の際に若き傭兵^{レイヴン}を騙し討ちにした地形と非常によく似ていた。

結果、リムはその傭兵に返り討ちにあつてしまつたがその事は胸の奥にしまい込んであの男に対する憎悪で覆い隠した。

合流するのはいいのだが、肝心の味方ACがどこを見ても見当たらないのだ。

オータムは既にここを通過して街の中に堂々と入り込んでいる筈だ。

『聞こえるか？ 誰か応答しろ』

無線で工業地区全体に聞こえるように呼び掛けるとある倉庫のドアが音を立てて開いた。

『まんまと騙されてくれたな。お前に合流地点を指示したのはこの俺さ。そうとも知らず……おめでたい野郎だ。だが安心しなすぐ楽にしてやるよ』

現れたのは軽量逆間接型の脚部AC“サウスネイル”である。3連リニアライフルと軽量スナイパーライフルと最悪の相性の武器を両手に持ち、背中には中型ミサイルを2基と肩に連動ミサイルを搭載した機体である。

『ズベン……！』

『久しぶりだなリム、あの時は俺を噛ませ犬みたいな扱いしやがって。この俺がテメーをケチョンケチョンにしてやるぜ！』

この男、ズベン・L・ゲヌビはかつての若い傭兵^{レイウン}を討とうとリムを雇ったのだが簡単に見放され、捨て駒として扱われた過去がある。仮にその傭兵を討てたとしても劣悪な操作技術のズベンがあの過酷な戦いを生き抜けるとは到底思えない。

『こつち来てからは大変だったぜ。サウスネイルの複製に時間がかかったちまった』

(……まず武装を変えるべきだな)

『死ね！ リム・ファイヤー！ IS戦を網羅した俺に死角は無い』

！』

『全機後退しろ。この雑魚は俺が始末する』

MT部隊を下がらせ、バレットライフは背中のマイクロミサイルと連動ミサイルポットを開き、空中をふわふわと浮遊しながらライフルを撃つて来るサウスネイルに大量のミサイルを撃ち込んだ。

IS戦を網羅したと豪語する事はあつてか何発かは回避したが殆どのミサイルがサウスネイルに命中した。

以前より操作技術は僅かに良くなっているがリムはその数十倍は進化している。

スナイパーライフルがバレットライフを捉えたかと思うと高出力のブースターを噴射して地上を滑走し、射界から外れてしまう。地上戦を主眼に置いた四脚型と空中戦を主眼に置いた逆間接型、本来なら頭上を取れるズベンが有利なのだが、いかんせん彼はその状況を全く生かしきれていない。

リニアライフルを3連射しつつスナイパーライフルを撃つのだがものの見事に外している。ズベンは一度地面に着地してからまた空中へ飛び上がった。

「おっと……こりゃいけねえ戦闘モードにするのを忘れていた」

カメラアイが赤く光りだしさっきまでぐらぐらと安定しない腕部がしっかりと静止してスナイパーライフルはバレットライフに狙いを付けた。

『メインシステム戦闘モード起動します』

『勝ち目が無いからって逃げるなよ？』

『どの口がそんな事をほざいているんだ』

ライフルが撃たれ1発の貫通弾はバレットライフのコアに当たるか否かという所を突き抜けて行つた。

戦闘モードにしてもあの命中率、リム自身ズベンを殺す気にもならなかった。

機体のテストも兼ねてと思っていたがそれすらにもならない。これならテストACの方がまだ強い。もしもの事があればと控えていたMT部隊だが、援護の必要無しと判断してパイロットはMTから下乗し、整備に取りかかっていた。

滞空するサウスネイルにチェインガンを撃ち、コアの装甲を吹き飛ばした。

腰には火花が散り、あの攻撃で損傷したのが見て取れる。

『じよ、冗談じゃ……』

再びミサイルがサウスネイルに襲い掛かる。反撃に中型ミサイルを発射されたがそれかわされ、ミサイルの直撃を受ける。

『おい、早く加勢してくれ！ あ、仲間居ないんだつた』

リムに攻撃を当てられない事を悟つたズベンは標的を気を抜ききつたMTへと変更するとすぐさまリニアライフルとミサイルを撃ち込んだ。パイロットが乗って居ない逆間接型のMTが5機、炎を上げて爆発した。

「これ以上付き合いきれん……死ね」

チェインガンとミサイルをしまい込んでバレットライフのメイン兵装のフィンガーの照準をサウスネイルへ定めた。

トリガーを引き、計10ヶ所の銃口から弾丸が発射された。福音さながらの弾雨はサウスネイルのコアを破損させ、右腕を破壊する。頭部のカメラアイを弾が貫き、視界が遮断された。全身から火花が散り、煙が吹き上がる。

『こんな筈じゃ……』

サウスネイルは空中で爆散した。

紫色のカラーリングの各パーツが工業地区に散らばっていた。

『被害は？』

ズベンなどに興味が無いリムは何事も無かったかのように部隊へ連絡を入れた。

『MTが5機大破です』

『了解』

ズベンの相手をしていた為、予定よりかなり時間をくってしまった。

『おいリム！』

無線からオータムの声が響くとリムは面倒くさそうに応答した。

『到着が遅れてるぞ！』

『後でプロシュとスコールに伝えておけ、ゴミが待ち伏せしていた』
『と』

『は？ まあ……いいが。こっちはもうIS学園付近にまで来てるんだ。その倉庫に輸送ヘリがある筈だそれを使え』

『了解……』

通信が終了しオータムの言うとおり倉庫の中を確認してみると輸送ヘリは殆ど破壊されていた。そのパイロットもまた殺されていた。

『ズベン……どこまでも邪魔な奴だ』

バレットライフ単機なら到着にさほど時間はかからないがMTの足は酷く遅い。

『残ったヘリで一緒に来れる奴は来い。残りは歩きで俺を追え』

コアのブースターを噴出するとリムのバレットライフは先に行ってしまった。

その後を3機の輸送ヘリが追いまたそこから更に後ろをMTが追いかけていた。

IS学園に刻一刻と復讐者の魔の手が伸びていた。

IS学園攻防戦（前書き）

まあまあの早さで更新出来ました。

油物食べ過ぎて胃が重いです。はい

IS学園攻防戦

夜中の12時を回った頃、職員室の時計のベルが鳴り響く。教員達はもう寮の方へ帰ってしまい職員室には1組の担任の千冬しかなかった。

放課後に一夏とシャルからリムの話を聞いて彼女は1人で対策を練っていた。

学園上層部には既にこの件の連絡は入れている。千冬は自分の生徒がここまで苦しんでいるのに気付いてやれず、自嘲気味だ笑みを零しながら書類にペンを走らせていた。

敵の目的がシャル1人なら学園内に彼女をかくまい、代表候補生と教員、もしくはレイヴンを使ってリムを挟撃すれば大した苦戦は無いだろう。だが、一夏の話を聞いているだけではどうも狙いはシャル1人では無い。そんな意味合いが込められていた。作戦を考えコーヒーを一口、口に含むと千冬の頭に閃光がほとばしり、忘れかけていた記憶が蘇って来た。

さかのぼる事、2ヶ月から1ヶ月前の話だ。鈴と一夏の対戦での不祥事、その際に発生した解読不能の暗号の正体を聞きに行ったのは紛れもなく千冬である。

そしてそこで彼女はリム・ファイヤーとのいきさつをある程度は聞いていた。

霧のようにぼやけたレイヴンとの会話の記憶が見る見るうちにハッキリとして来る。

復讐、仇討ち、レイヴン、その単語だけでリムの真の標的が誰なのか容易に予想出来た。千冬は少し頭を押さえて首を2、3度横へ振った。現役引退による勘の鈍り方が意外な所から顔を出して来た。

——情けない。

千冬の心から染み出した言葉はそれだけであった。

今まで書いていた作戦を何もかも破り捨てて、新しい紙を机に置

くとまた作戦を考え直した。リムがどのような男かは千冬は知らない。だが彼女の経験上、復讐に取り憑かれた者は安直で読みやすいという傾向があった。

しかし、千冬はそんな確信の無い物を今回は使わない。暗中模索しながらリムへの対策を練り上げていた。

シャルの戦闘不参加は確定ではあるが問題は敵戦力だ。アグラーヤの背景にある組織は結局分からずじまいに終わったが、リムの背景にはデュノア社がある。

IS開発は止めてMTという兵器を主眼に置いて開発を進めると千冬は聞いた。MTの詳細はまだ知らないがACやISに比べて遥かに劣る戦力というのは知っている。

リムの他にMTが同行しているというのはまず、間違いない。千冬の目つきは徐々に鋭くなり、書類に穴が空く程に睨み付けていた。明日の職員会議にこの議題を上げてシャルを、いや、IS学園を守るように呼び掛けなければならない。

またカップに手をかけるとコーヒーは冷め切ってしまった。新しいのを入れようと席を立つと湯気が立つコーヒーを千冬の机に置かれた。

「ありがとうございます」

振り返るとそこに居たのは真耶ではなく意外な事にエドワース・フランシイであった。2mはある巨体の彼女は千冬の座る席の反対側の椅子に座った。

「何か悩み事ツスか？ オラオラ」

「フランシイ先生、まだ居たのか」

「まあね。ウチの生徒の1人が個性が無いつつって悩んでたから考

えてやってたの」

「鳳か？」

「お、流石に鋭いね」

「アイツは確かにあのメンツの中では地味だからな。最近、奇怪な行動が多いと思ったらアナタの入り知恵か」

「そうよ。腐ってもウチのクラスの代表だし頑張っただけだって言うのもあるかなあ」オラ」

しばしの沈黙、あのエドワースであっても千冬の前では少しは改まっている。

「明日の職員会議でも話すが――」

千冬が話しを始めようとした時だ。微かにだが2人の耳に砲声が入って来た。

シャルの相談を受けていた千冬は即座にリムの襲撃だと判断し、エドワースはテロリストと予想した。

「襲撃だ」

2人は急いで席を立ち上がり、エドワースは寮に放送を入れた。

「フランシ先生、アナタは急いで一年生の代表候補生を召集して下さい」

「リョーカイ」

千冬がまず向かったのは保健室である。

襲撃などいつ来るか分からないのが普通だ。作戦を練っている時に来ても不思議な話ではない。

千冬は保健室のドアを荒っぽく開けるとレイヴンは既にパイロツトスーツに着替えていた。

「リム・ファイヤーの襲撃だな。あの方向は市街地だ」

「市街地……わざと被害が出る場所を……！」

時計の針は1時を差している。市街地から少し離れた場所には民家が並んでいる。

そこには五反田弾も居れば一夏の旧友が多数、住んでいるのだ。もしそこへA Cが入れば言わずとも分かる。

そこは戦火に見舞われ、甚大な被害を被るだろう。夜間であつても市街は賑やかさを絶やさず常にネオンの光に満ち溢れている。しかし今は火炎と煙りそして埃が舞う戦場となっていた。

「織斑先生！」

保健室にやって来たのは真耶である。

「山田先生」

「代表候補生の召集が完了しました」

「わかった」

IS学園の講堂に集められた一年生の代表候補生等と一夏と篤、殆どが詳細を知らないが真耶の慌てようと千冬の焦りを見てだいた

いが危機を察していた。

「手短に話す。デュノア社の刺客が学園に迫っている。狙いはデュノアだ」

事情を知らないセシリアや鈴、箒は首を傾げているが質問をしている時間もない。

「作戦はレイヴンは敵ACの排除。デュノアはここで待機しろ。他はAC以外の敵勢力の掃討。近くには民家がある。必ずそこへ戦火を行き渡らせるな。いいな？」

「はい！」

「だいぶ荒いが作戦は以上だ。詳細は後で通信で伝える」

一年生と二年生の代表候補生が敵の掃討、三年生は学園の防衛。教員陣は人命救助と生徒のサポートが今回の仕事だ。

皆が席を立とうとしたその時、レイヴンはスツと手を上げた。

「どうしました。レイヴン？」

「織斑一夏を今回の作戦から外してくれないか」

思いもよらない一言にその場は固まり、名指された一夏は口をポカンと開けたままにしている。

「今回はIS戦じゃない。敵はMTだ。あれには絶対防御なんて物も無いし、脱出機構も無い。撃破すればほぼ確実にパイロットの命を奪う。ハッキリ言って敵の命を逐一気遣う一夏は邪魔なだけだ」

レイヴンの言う事は大方合っている。

恐らく一夏はMTを完全に撃破する事はしないだろう。破壊仕切れずに生き残るMTをレイヴンは一番恐れていた。

それが味方を殺す結末になるのなら初めから一夏を入れない方が先決である。

「……………わかった」

「え……………」

「織斑一夏は今作戦から外させよう」

かなり面食らった顔をしているが珍しく何も反論する事も無く一夏は命令を受け入れた。

「デュノアと織斑はこの場で待機しろ」

「はい……………」

説明が終了し、各々がISを展開して既に所々、燃え上がっている市街地に向かって代表候補生等は飛び立った。

講堂には今は一夏とシャルしかない。

仲間の背中を見送った2人は千冬の指示通り講堂で待機する。今現在、講堂はIS学園の二年生の4名が警護に当たっている。仲間のISのスラスターの噴射音が聞こえてからACのオーバードブーストの轟音が一夏達の頭上を通り過ぎて行く。

レイヴンが戦場に赴いた。

彼の实力を知る者全てが勝利は確定したと考えていた。だが、それは余りにも楽観的で愚かな考えであった。

レイヴンのネクサスが駆けつけた頃には市街地で4機のISがMTと交戦しているのが見えた。逆間接型のMTがライフルを空を自在に飛び回るISに撃つもののかすりもしない。

ISとACの相性が悪いのと同様にMTとも相性が悪い。畢竟するにMTの一撃もISからしてみれば命取りの威力になるのだ。尤も、性能差で当たる事は殆ど無いだろう。

街にそびえ立つビルには煙りが上がり人々の悲鳴や断末魔が絶えずこだましていた。無慈悲に消えて行く人の命、醜く冷淡で無惨、これが戦争である。街には今にも告白をしようとしていたカップルがいたかもしれない。笑顔に溢れた家族がいたかもしれない。だが、それは冷たい鉄の弾に撃ち碎かれ蹂躪していった。

恋人が死ねば漫画なら悲しみにくれる時間があるが、現実にはそんな時間は1秒たりとも与えてくれない。

MTの1発のミサイルが目標を失って街の大通りに落ちて爆発を巻き起こした。

これで数十人が肉片と化した。政府からの救援にはまだまだ時間がかかる。良い意味や悪い意味も含めて来た時には何もかもが終わっているだろう。

レイヴンのACが到着して作戦領域内に入ると大衆はネクサスを見て更に悲鳴を挙げて逃げ出した。ACを初めて見る民衆はこれを敵だと即座に判断した。

それは、既にバレットライフの存在を認識していたから、と思っても問題ないだろう。民衆にしてみればネクサスが味方であろうが敵であろうが関係ない。

結局はここで戦いを始める殺人兵器なのだから離れるに越した事はないのだ。

『メインシステム戦闘モード起動します』

AIがそう告げるとレイヴンはフィールドを確認し、ブースターを吹かして空中に飛び上がった。元来、ACは市街地での戦闘をコンセプトに開発された兵器である。

ここはACにとって恰好の場所であった。

ビルとビルの間を飛行していると突如として背後に敵反応がレーダーに表示された。ビルに大穴を空けて、バレットライフが現れるとネクサスは真横にブースターを吹かし、曲がり角に逃げ込んだ。バレットライフは地上を走り、ネクサスは後ろ向きのままバースーカやガトリングを混ぜながら牽制する。

道路にはまだ、避難していない者がいるが2人はそんな事を気にも止めず、戦闘を開始した。

『この時を待っていたぞ……レイヴン！』

『だいまシにはなつたなクソガキ』

OBの超加速で街を走り抜けながらネクサスは7連マイクロミサイルを放ち、バレットライフのインサイドが開くとミサイル誘導装置のデコイが射出され、ネクサスのミサイルは有らぬ方向へ飛んで行った。

4本の足で地面を蹴り上げてバレットライフは空中からマイクロミサイルと連動ミサイルと併用し、空中から放った。

右方向のビルにバースーカを撃ち込んだネクサスは更にそこへ蹴りを入れて穴を空けるとすかさず、穴を通って隣りの道へ逃げた。

リムがアグラーヤ以上とは言わない。

しかし、リムの底知れない憎悪が彼を駆り立て脅威的な圧迫感でレイヴンに迫っていた。一時、リムから離れたレイヴンは舌打ちをしてコックピット内の壁を叩いた。

今回の戦い、リムに市街地に入り込まれた時点で負けたような物なのだ。

仮に街を破壊せずIS学園にそのまま引き入れていけば生徒や学園に被害が出る。IS学園に引き入れなければ今回のように市街地での戦闘を強いられる。

どの道、甚大な被害は避けられない結果であった。

『出てこいレイヴン！』

気を逸りに配らせながら道を歩いていると頭上にネクサスの反応があった。

カメラを上に向けるとビルから飛び降りたネクサスが迫り、バレットライフにのしかかった。ガトリングを足元に撃ち、敵の装甲を弾き飛ばすと相手はフィンガーを斉射し、ネクサスは直ぐにその場から離れ紙一重で攻撃を回避した。

『今度こそ終わらせてやる……俺が倒して来た奴と同じくな！』

MTの掃討に大した時間を有しなかった代表候補生達ではあったが燃え上がるは気分を良くする物ではなかった。

「レイヴンは？」

「敵ACと交戦中みたいですよ。加勢しにいきますか？」

「いや、あの2人の戦いに首を突っ込むのは止めよう」

そう言った途端、街の外れから1発の弾丸が鈴の甲龍の腰のアーマーを吹き飛ばして流れて行った。

「増援か！」

「くっそ、よくもアタシのトレンド押されたNOWなマシンに傷付けてくれたわね！」

「増援というより本隊みたいですわね」

リムの後をノロノロと付いて来ていたMTの部隊の本隊がたった今、到着した。

逆間接型はもちろんさつき鈴のアーマーを跳ねた狙撃型にECMを搭載した重装備型のMTも見受けられる。取り残されて動けない者を省いて既に街の住民の避難は済んだ。これからここが本当の戦場と化す。

「セシリアと鈴は狙撃型を頼む。私と箒は他を片付ける！」

「OK」

「わかりましたわ！」

戦況の把握と味方の構成を済ませるとラウラは眼帯を外してその黄金に光る瞳を露わにした。シュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーブレードやプラズマ手刀では重厚な装甲を断ち切る事は叶わない。ならば攻撃手段は限られてくる。

敵は地上を滑走するしか移動手段が無い反面、ISは三次元行動が取れる。制空権はIS側にあるのだからこの有利な条件を使わない手は無い。地上をブースターも無しにヨチヨチと歩く逆間接型の

MTをシュヴァルツエア・レーゲンのレールカノンが撃ち抜き、機体が前のめりに倒れ同時に爆発した。

機体の小ささ故にコックピットとパイロットの位置が容易に読み取れる。そこを狙って貫通力と破壊力に長けたレールカノンで砲撃すれば相性が悪いとも言えども脅威にはならない。ラウラのシュヴァルツエア・レーゲンは弱い低コストのMTに砲撃を加え、その度に爆音が相次いだ。

砲撃パッケージを使い、IS全身を砲塔と化し嵐のような激しさでレールカノンを連続発射した。一方、筈はプラズマ手刀など比にならない切れ味を誇る二刀一対の刀を振り回し、重装備型のMT3機を相手に優位に立ち、乱舞する。

「セシリア、そっちはどうだ？」

「ちよろいものですわ。そのキレイな笠をふっ飛ばしてあげますわ！」

プライベート・チャネルの向こうからセシリアのスターライトMK?の発砲音が聞こえて来る。

遠距離戦に特化したMTではあるがいかんせん向こうは殆ど動かないのに対してセシリアは空中を飛び回り、高い精度で敵を撃ち抜く。決定的な性能差の前にMTの大部隊は次々とその数を減らして行き、やがて全滅した。被害状況は鈴のアーマーが吹き飛んだだけでそれ以外は一切、ダメージを受けていない。幾多のMTを叩き潰したが依然、街を焼く炎は留まることを知らない。

街の中央から爆音が遠雷のように鳴り響き、目標を失った弾丸やミサイルが空の彼方へ消えて行く。2機のACが戦っている場所はちょうど人が良く集まるデパートの付近である。

「私達は人命救助だ」

「ああ……」

住宅街に被害は行かなかったとは言え自分達がたまに行く街が戦火に包まれてしまっているのだ。当然、良い気分になどなれない。箒は目を瞑って目の前に広がる惨状を受け入れず、できる限り多くの命を救おうと燃える街の中を飛び回った。

そんな暁のように赤く燃え上がる街を一夏とシャルは講堂の窓から見詰めていた。

あそこへ行ってもきつと一夏は足手まといになる。機体がいくら強くなっても福音戦以降、ずっと暗雲のような物が一夏の心を取り囲んでいた。今作戦より除名された一夏をシャルは気にかけていたのだが、さつきから妙に落ち着いている。

業火に見舞われた街を見て激昂するかと思いきや、眉間にシワを寄せて目つきを鋭くするだけで何も変化は無い。

「い、一夏？」

もう我慢出来なくなったシャルは一夏の名前を呼んだ。彼らしさに欠けた様子を彼女は心配せずにはいられないのだ。

どこまでも他人を気遣い、優しい少女、だがそれは自分を殺す事になるかもしれない。

「どうしたシャル……」

「何か変だよ。一夏らしくないって言うか……作戦から外された時も何も言わないし」

こめかみに指を当ててトントンと叩くと一夏は返した。

「作戦から外された時、確かにビックリしたさ。でも考えてみりや一緒に居た方が良いだろ？」

意外にも一夏には一夏の考えあつたのだ。仮に誰か来ても2人いればなんとかなるという意味を込めて言つたつもりなのだが、恋する乙女は何故か気恥ずかしさを感じていた。

「何もないね……」

「無いなら無いでいいさ」

シャルの懸念はこの静けさだ。向こう側の戦力とこちらの戦力を比べれば明らかにこちらが上、なのに敵は真つ正面から攻撃を仕掛けて来た。大きな被害を出したのは紛れもない事実だがあくまで敵の目標はシャル、街の破壊活動ではない。

IS学園には上級者が警護にあたっている訳だし簡単には入り込め無いがそれを差し引いても敵の攻撃が単調過ぎるのはどうも引つ掛かる。勘の良い者はこの違和感にもう気付いているだろう。

そもそもMTの数が少ない時点でシャルは腑に落ちない顔をしていた。ISに比べてコストが掛からないMTを小出しにする必要などどこにもない。簡単な話、数の暴力で押し切ればシャルの捕縛はもつと簡略な物になっていただろう。敵側の意図がどうも読み取れない。

「おーい、織斑くん。デュノアちゃん」

講堂の扉を開けて入って来たエドワース、彼女は前線には出ずオペレーターの仕事を行っていた。

「フランシイ先生？」

実は初めて見るエドワースに2人は首を傾げながら聞く。

「おう、織斑先生が呼びだせオラ」

「何の用だ……？ 千冬姉が作戦中に呼び出すなんて」

「ほらほら、さっさと行くぞオラオラ」

エドワースにせかされ一夏が彼女の後をついて行こうとした時だ。シャルの手に光子が集まり、凝縮され一丁のアサルトライフルが生成され、銃口をエドワースの後頭部に向けた。左手にはブレードを装着し鋭い眼でエドワースを睨んだ。

「一夏、下がって」

「オラオラ、教師に銃向けんじゃねえよ」

「アナタが教師なら向けませんよ」

「アタシはれっきとした教師だっちゅーの」

「一夏早く！」

ただならぬ気配を察した一夏はエドワースから離れ白式を展開してシャルの所まで引き下がった。彼の擬似人格システムの霧影はやはり起動しない。これは大きなハンデとなる。

「織斑くんまでそんな事するのかよ。まったく嫌なガキ……」

それは刹那の時だ。一夏の体は突然吹き飛ばされ講堂の壁に叩きつけられた。

余りの速さに一夏は何をされたか理解出来ず、シャルは衝撃砲のような見えない攻撃を使ったと錯覚した。が、それは違いその証拠に黄色と黒のしましま模様の蜘蛛を連想させる脚がシャルの真横にあった。

視線を元に戻すと巨体のエドワースはそこには居らず代わりに平均的な身長的女性が立っていた。背中から8本の機械的な蜘蛛の脚を生やし、禍々しさを振り撒いている。その女性の足元にはエドワースの顔を模した覆面が脱ぎ捨てられ、自身のサイズに合わない大きな服を袖を余らせながら着ていた。

先ほど突き飛ばされた一夏は再起し、雪片を青眼に構えた。シャルもISの展開を済ませて初めて見る敵に警戒心を高めていた。ISは基本的には人型だがこの女性は蜘蛛の形をしたISを身に纏っているのだ。背中から脚だけを生やしている為、厳密には纏うというよりも部分展開と言った方が正確かもしれない。

どちらにしても蜘蛛の特性を考えれば厄介な相手というのは見て取れるし、明らかにISの操縦経験は向こうが上だ。

ラウラと戦った時を思い出し、また連携プレーであの女を翻弄したい所なのだがどうにもこうにも、シャルの調子が良くないと来た。

「リムのバカが任務放り出して私闘始めっから俺が駆り出されたじやねえかよ」

自らを俺と称する男勝りな性格、黙っていれば美人なのだろうが口の悪さがさつな態度がどうも彼女の女らしさを影へ追いやっている。

「誰だお前……」

「ああ？ ジャックの目的とプロシユの目的が一緒にいるのは本当に好都合だぜ」

「誰なんだよ……！」

「うつせーなクソガキ！ 亡国機業のオータム様だ！ 覚えとけ」

「一夏、出来るだけ長く持ちこたえよう。騒動に気付いたら先生がなんとか——」

「来ねえよバカ。まあ来ても無駄だろうな。なんせ講堂の周りをシールドで隔離したからな。テメエ等はさっさと捕まれ」

8本の脚は2人を捕らえようと一斉に伸びると一夏は右へシヤルは左へ飛びオータムの攻撃を回避する。

「ちゃんと逃げろよ。この蜘蛛型IS“アラクネ”に捕まったら最後だぜ。ビーストウ。ーズみたいだろ」

常に襲いかかってくるアラクネの脚の範囲は驚く程広く、尚且つ脚は馬鹿げた位に堅いのだ。零落白夜なら切り落とせるかもしれないが莫大なエネルギーを消費してまで決定打にならない事をする価値は無い。1本を弾いてもまた別の脚が一夏を襲う、強化されたスラスターの出力があるからこそ回避は出来るが講堂内は3機のISが自在に飛べる程、広くはない。むしろ閉所と言っても過言ではない。

至近距離でのショットガンを弾く硬度を誇るアラクネの脚部にリヴァイヴの火器は通用せず、グレネードを使ってようやく外装を溶かせるくらいだ。

「どうしたあ！　これがフランスの代表候補生かよ！」

一夏は知っていた。シャルの技量があ程度の物ではないと。心に不安や迷いを抱えた状態で本来の力を発揮出来る筈がない。一夏はアラクネの脚を払いのけてシャルの元へ駆け付けようとスラストを噴射する。

「させるかあ！」

突如、アラクネの脚が一夏の脇腹を突き、また勢い良く壁へ打ち込まれた。

「一夏っ！」

オータムの意識が一夏へ向いたのを見計らい、シャルはイグニッション・ブーストを点火し急加速をつけてオータムへ接近する。

「甘えよ」

前面から4本、後方から4本の脚がシャルを捕らえると、いとも簡単に絡め取られその動きを封じられた。攻撃はそれだけに留まらず、脚から高圧電流を流してシャルへぶつけた。無敵に見えるシールドも疲弊すれば紙のように脆くなる。

最初は無効化していた電流もエネルギー残量が減るうちにシャルへ伝わっていくのだ。強烈な痛みが彼女を絶え間なく責め続け、シャルが気を失うまでに時間はかからなかった。

「シャル！」

雪片にエネルギーを注ぎ込んだ雪片を振りかざし一夏は空中を疾

走する。バカ正直に突っ込めば簡単に止められる。

ならば、相手の意表を突く攻撃を仕掛ける。一夏は機体を急停止させブレードから三日月型の光波を払った。破壊力は零落白夜と同等、下手なガードは命取りになる。

高速で迫り来る光波をオータムはISを解除し身を低くして地に伏せる事でやり過ごし、アラクネを再び展開すると脚の先に付いているニードルで一夏を突き刺した。

左右均等にアラクネのニードルが白式のシールドを貫通し串刺しにする。講堂の地面におびただしい血が水溜まりを作っていた。ぞんざいに一夏を放り投げるとオータムは気絶したシャルの髪を乱暴につかみ取り、両手を後ろに組ませて手錠をかけた。

予想以上の出血に一夏は虚ろな瞳でオータムとシャルを見ていた。助けなければならぬ、しかし体はそれを拒否するように動かないのだ。ブレード光波と連続しての大ダメージで白式は完全にその機能を停止していた。次第に一夏の手に入る力が弱まって行き、いつしか意識を失った。

オータムは2人が気を失ったのを確認すると怪しく笑い、一夏にも手錠を付けようと彼の手を取った。

「懐かしいな。2年前にテメエを拉致つ時に土手っ腹と胸にぶち込んだ鉛弾の傷はまだ痛むか？　へへへ……」

せせら笑いながら一夏に尋ねたが彼は既に気を失っている。

見下した目で一夏の拘束を完了させたその刹那、白式のスラストに刻まれたホルスの眼が開きオータム目掛けてレーザーを放った。アラクネの脚を組み合わせ壁を作り、レーザーを防ぐが8本の内の1本が折れて使用不能となった。白式は機能を停止し一夏は意識を失った筈だった。しかし現に彼は何気ない顔で立ち上がっていた。

多量に出血をして。

『やはり織斑一夏じゃまだ無理か』

ボソツと呟いた一夏にオータムは白式から距離を置いて初めて臨戦態勢に入った。話しているのは一夏に間違いないが、雰囲気は少年から打って変わり、歴戦の勇士のような威圧感が生まれていた。発する声は若い男の声に違いはないのだが一夏ではない。

「再起動だと……！。こんなISありえんのか……！」

霧影が作動し雪片につぎ込まれたエネルギーが機体に回歸する。

「デメエ……何なんだ」

『名乗る名前なんか無いよ』

羽毛のようにふわっと飛び上がりスラスタを噴かしながら小刻みにジャンプし、空と地上を変幻自在に動き回る。

さつきと明らかに動きが違うのは見て分かる。磨きがかかった機動はオータムを翻弄しつつエネルギーの通っていない雪片で彼女を上下前後左右とあらゆる方向から斬りつけてシールドを削いで行く。目で追う事は出来ずどこからやって来るか分からない攻撃をオータムはアラクネの脚を無闇やたらに振り回して暴れた。

狙ってもいない攻撃が当たる筈が無い。

アラクネの脚は1本、また1本と切り落とされて行く。その度に死が近付いて来る事をオータムは予感していた。

相手は一夏ではなく一夏の形をした正体が分からない者、彼からは鋭利で明確な殺意が向けられている。霧の中に迷い込んだかのようにオータムは右や左を絶え間なく見回し、その足取りは夢遊病者のそれであった。いつどこでどこから来るか全く予測出来ない攻撃

に自然と彼女は体を震わせた。肩の砲口にエネルギーを限界にまで圧縮した極細のレーザーでオータムの両足を撃ち抜き、動きを封じた。

脚を全て切り取られたアラクネに残ったのはISのシールドエネルギーだけである。

『重火器は鈍重で好かないが良いだろ』

身動きを取れずに地べたを這いずるオータムの背後に立つと左手の手中に格納された荷電粒子砲の砲口が出て来る。

踵のフットロックが下ろされ2基のスラスタをしまい込むと放熱ファンを代わりに展開した。ホルスの眼の部分にもエネルギーが圧搾される。手と肩の3門の荷電粒子砲が白い塊を形成して発射の準備を終わらせた。

いくらISにシールドがあってもこれだけの荷電粒子砲を受ければISはおろか、操縦者も塵埃と化すだろう。

アラクネに福音くらいの防御力は無い。

オータムに逃げる術はなかった。

『死ぬ前に名前くらいは教えてやる。私はフォグシャドウだ。さよ
うな』

オータムに向けた砲口をフォグシャドウは突如、射界から外して天井を向くと彼は溜め込んだ荷電粒子砲をそのまま放った。

3門の荷電粒子砲は講堂の屋根を吹き飛ばし、光線は暗夜の彼方へと飛んで行った。すると、遙か上空に大爆発が巻き起こり飛行物体が消えて無くなった。

オータムの事はもはや眼中に無く、空を見据えていた。講堂を囲っていたシールドはさっきの荷電粒子砲の一斉砲撃によって破られている。

目を細めていたフォグシャドウは急に砲撃状態を解除してスラスターを噴き上げて動き出すが、寂然とした空から降り注ぐ弾丸の雨の直撃を受けてしまった。

『くっ……しくじった!』

高高度から降下して来るのはISではなくACであった。茶色い配色をした軽量機だ。

『まさか織斑一夏にここまでやられたのかオータム?』

掩撃したのはバーテックス最古参レイヴン、鳥大老とその機体“エイミングホーク”だった。闇夜の礫を回避仕切るのは困難を極める。白式のスラスターが破損し、それと共にフォグシャドウの人格も消えてしまった。

白式は自動的に解除され一夏はピクリとも動かず、その場に伏している。

『オータムは戦闘不能、織斑一夏とシャルロット・デュノアの回収を開始する』

レイヴンとリムが砲火を交えてから20分が経過して機体は互いに痛んでいた。

損傷はバレットライフの方が大きく、コアや脚部から火花が散っていた。流れ弾やミサイルの誘爆で高層ビルは崩れかかり、アスファルトの道路は割れてしまっている。

『レイヴンなどもはや不要なんだ……！』

口に力を入れて歯を食いしばり操縦桿を折れんばかりに握り締めるとリムの目から血の涙が流れ、奥歯に亀裂が入り欠けた。

バレットライフの両腕のフィンガーを一斉掃射するとネクサスはミサイルを放ってOBを使って真横へ逃げる。

迫る7発のマイクロミサイルをデコイを使って無効化すると、チェインガンを展開し、高速で疾走するネクサスを横撃した。

側面にチェインガンの弾丸を受けて右腕部が損傷した。反撃にバズーカを撃って後退した。高速の飛弾をリムはあっさり回避してネクサスを迫撃する。

流れ弾はまた建物に当たり、炸裂した。

至近距離からのフィンガーの直撃は何がなんでも避けなければならぬ。最大速で勝るネクサスはフィンガーの射程圏から外れて、片膝を付くとレールガンを展開し赤い閃光と共に砲撃した。凄まじい弾速を誇るレールガンの弾はバレットライフのマイクロミサイルを貫いて行った。

リムはミサイルを失った事を確認すると連動ミサイルをさつさとパージし、機体を軽くした。必殺の狙いをこめたレールガンの衝撃にコックピット内は大きく揺れていた。後からやって来た風圧をその身に受けながらフィンガーやチェインガンの弾丸をネクサスへと叩き込んだ。

射程圏外にいるネクサスへは決定的なダメージにはならず、装甲に傷が付く程度に収まった。レールガンを折り畳んだネクサスはOBを噴出してリムの間合いへ入り込んだ。バズーカとマイクロミサイルによる奮撃でバレットライフは深手を負ったが、同時に至近距離でフィンガーを受けてしまった。

『お前は死ぬ定めだ！ 咎人が生きて良い筈がない！』

『ならお前はどうかんだ？　ここへ来るまでにお前だって人を殺しただろ。傭兵^{レイヴン}になった時点で善も悪も無いんだよ！』

『お前を殺しさえすればそれで十分だ！　後はどうなっても構わない』

『では、死んだ親父と同じ運命を辿るがいい！』

ネクサスは空中へ舞い上がるとレールガンを展開し、放つ。轟音と共に発射されたレールガンはバレットライフのコアに命中した。無機能コアの高い防御力に助けられ中破には至らなかった。

空中からのレールガン発射、アグラヤ戦から数えてこれで3回だ。常人には出来ない絶妙な荒業は大きな負担となってレイヴンの体にのしかかった。

吐血しかけた血を飲み込み、空中からガトリングを撃ちながら下降する。

『死ね……死ね……しね……死ね……シネ……』

リムの瞳孔は開ききり、ありとあらゆる負の感情が滲み出している。父親の仇、自分の敗北、リムを突き動かすのは憎悪の一言では表せない所まで来ていた。

弱さを悪と見なし詰り、周囲を遠ざけて生きてきた。表では仲間
のふりをしていながらも心の中は常に1人であった。

もう誰も愛さない。もう誰からも愛されない。純真な少年は遥かなる時に流され、今ここにいるのは醜悪な復讐鬼だった。

ビル群を突き破った2機のACは視界がひらけた場所を戦場にした。そこは街の中央のデパート前の広場である。

当のデパートは爆発による火災で燃え上がり、崩れている。対峙するネクサスとバレットライフ。先手を打ったのはバレットライフ

だ。チェインガンの銃声を轟かせながら弾丸をネクサスへ撃ち込んだ。

OBの噴射と同時にネクサスは真横へ移動すると急速旋回でバレットライフの側面を捉えた。マイクロミサイルで横撃され機体の動きが鈍くなる。四脚の特性を生かしてなんとか踏ん張り、フィンガ一の弾幕がネクサスの装甲を突き破り命中しなかった弾は背景のビルの窓ガラスを打ち碎いた。

弾切れを起こしたガトリングをパージするとレイヴンは橙色に発光する高出力レーザーブレードを装着し、バレットライフへ迫った。リムは狙いをネクサス本体ではなくさつきから確実にダメージを与えてくるバズーカに目を付け、チェインガンを右腕の根本にありつたけぶち込む。

『くそっ！』

多大な撃力にネクサスの態勢が崩れ、バズーカを握った右腕は吹き飛んで行った。

レイヴンは変色した手のひらから血が出る程に操縦桿を握り締めると再びOBを展開してバレットライフをレーザーブレードの射程圏内に入れると、敵のバルカンの掃射などものともせずブレードを振り払い、バレットライフのコアに甚大なダメージを与え、尚且つ右腕を切り落とした。

更にマイクロミサイルでバレットライフのチェインガンを破壊。爆風でのけぞった所にまたレーザーブレードの一撃が叩き込まれた。リムは最後の力を振り絞り、フィンガーをパージした。格納されているのはマシンガン……ではなくレーザーブレードであった。

バレットライフはブースターの推進力を活用して左腕のブレードで突いた。

だが、その刃は虚しく空を打ち自らが破壊した右腕があった箇所を突いていた。

レイヴンはレーザーブレードでバレットライフの前面の2本の足を切り裂いた。

支えを失ったバレットライフは前にうつ伏せるように倒れ込み頭部がネクサスを見上げていた。もうリムに抵抗する術は無く最後の反撃は言葉を発するだけであつた。

『最後に言い残す事は？』

『レイヴン！ 殺してやる！ 俺が死に絶えても必ず呪い殺してやる！』

憎悪が滲むリムの罵倒をレイヴンはしっかりと聞き、ネクサスは片膝を付いてレールガンの砲口をバレットライフの弱ったコアへと向けた。

『安心しろ直ぐに親父の所へ送ってやる』

レールガンの砲身に電流が流れ始めるとリムは憎しみを全身で表しながら脳裏をよぎる走馬灯に意識をやった。

ピン・ファイヤーが殺されてからのリム人生が浮かんでは消えて行く。彼の復讐にかけた人生はある意味レイヴンよりも荒んでいた。

「父さん……」

コックピットでリムはそつと呟くとネクサスのレールガンが発射されバレットライフのコアを貫いて行つた。ピンとリムを戦場で支え続けた機体は轟然たる爆音を上げて爆発し燃え盛る炎の中に消えて行つた。

迷彩柄の装甲が散らばり、ネクサスは戦闘モードを解除する。敗者にかける言葉などなかった。

『織斑先生、戦闘終了だ』

『了解した。レイヴン、早く帰って来い！』

『どうしたんだ？』

ただならぬ事態を察知したレイヴンは炎に背を向けて歩き出したかと思つたその時だった。奇妙な風切り音と共にバレットライフが燃えて行つた炎の中から何かが飛んで来た。振り返つた頃には既に遅く、一本の鉄パイプが衰弱したコアの装甲を突き破つてレイヴンの腹に突き刺さつたのだ。

『うつ……………ゲハッ！』

大量に血を吐き出してレイヴンはそのまま気を失う。死して尚も襲いかかる。

リムの執念が最後に一矢報いた。

『レイヴン！ どうしたんだ！ 返事をしろ！ レイヴン！』

ネクサスのコックピットには千冬の声が響いていた。

背徳の技術、ヒトの超越（前書き）

台風が近畿に来るって言うていたからいろいろ備えてたんですが見事にズレて行って今日は晴れです。

テストも終わって休日連続です。

休みが多いとどうも更新が遅くなるんだよね〜。

背徳の技術、ヒトの超越

市街地での激戦の果てに得られた物は何も無い。数百の命を散らし、IS学園の生徒を誘拐され敵を撃破したレイヴンは意識不明の重態。これだけでも学園側からすれば手が足りないというのに後からノコノコと現れた日本政府は学園がACの存在を隠蔽していた事を咎めて来たのだ。

自分達の地位を是が非でも守りたい政府からしてみれば早々にACのデータを入手して対策を取りたい所であった。

しかし、IS学園は国連が認めたどこの国家、企業の介入を許さない場所。日本にあると言ってもこの規定がある以上、日本政府でもIS学園を咎める事は出来なかった。不問、という事でなんとか収まったが生徒を管理する立場でありながら生徒を2人も誘拐されては学園としても面目が丸つぶれた。

学園上層部で会議を開いている中、IS学園に配備されている病院ではレイヴンの手術が行われていた。

腹に刺さった鉄パイプの傷は酷く、尚且つ彼は肺を病んでいる。病気と傷の2つを治すにはかなりの時間がかかり、レイヴンの手術が終わったのは搬送されてから20時間が経過した頃であった。

延命装置を取り付けられたレイヴンはまだ目を覚まさない。ベッドの隣りにはラウラが座っている。千冬から連絡を受けて彼女がレイヴンを運んだのだ。

心配で胸が張り裂けそうな彼女は黙り込みずっとレイヴンを見詰めている。

ガラスとドアが空き、病室に千冬が入って来た。一夏とシャルを救えなかった無力感が彼女を押さえ込んでいる。

「教官……」

「レイヴンの命に別状は無い。後は目を覚ますのを待つだけだ」

それを聞いたラウラの表情に幾分か柔らかくなり緊張の糸が切れて椅子に座り込んだ。

「たが……」

「シャルと一夏は行方知れず……でしょう？」

「まあ、そうだが。最終的な目的地は恐らくデュノア社本社だろう」

「デュノア社が……？」

「ああ……。現在、学園上層部が会議中だ。話し合っている暇など無いというのに……！」

拳が震える程握り締め千冬は苛立ちを覚えた。まごまごしている内に肉親に危機が迫っているかもしれないのだ。姉である千冬は心中穏やかではない。

「行くぞラウラ」

「はい」

千冬とラウラが病室を出て行き部屋には延命装置の音が点々と聞こえる。

（うーん……目を覚ますタイミングを逃したな……）

意識を取り戻していたレイヴンは頭をポリポリとかきながら千冬

の言っていた事を思い出す。

（一夏とシャルルが誘拐か……。まあ明日に話せば問題ないか）

レイヴンは寝返りをうつとそのまま眠り込んでしまい再び目を覚ましたのは翌日の正午であった。朝方にラウラが見舞いに来ていたらしいが、その時はまだ夢の中で彼女はまだ意識が戻っていないと思っていた。

大きな欠伸を1つかきレイヴンは勝手に延命装置を外して上体を起こした。鉄パイプが刺さった腹はまだ少し痛みが残っている。強化人間なら鉄パイプを引っこ抜いて止血でもしていれば勝手に自己再生が始まり、もっと早くに治っていただろう。

こういう時、強化人間の生命力が羨ましく思えてしまう。病室から見える景色は保健室とは違い、新鮮に見えて来る。

緑の木々の奥には煙りが上がる市街地が見える。2日前、戦場と化したあの場所は今は完全に消火されて政府が復興活動にあたっている。

嘆息を漏らしてレイヴンが横になった途端、病室のドアがやかましく音を立てて開けられ2名の少女が乱入する。

「レイヴンさん！　大丈夫ですか！？」

「おっさん大丈夫！？」

少女の正体は鈴とセシリアである。

2人は入って来るなり布団にしがみついて叫ぶ。

「わたくし達があなただを倒すまで死ぬのは許しませんわよ！」

「おっさんを倒すのはアタシ達なのよ死ぬんじゃないわよ！」

「……お前等は人を怪我人だと思っているのか？」

騒がしさにたまらずレイヴンは起き上がった。

「あ、起きた」

相変わらずこの2人はうるさい。一応、ここが病院というのわかっていて聞きたくなるくらいだ。

「な〜んだ〜生きてたのか〜」

「て〜つきり死んだのかと思いましたわ〜」

「まあお見舞い持って来たから受け取ってね」

鈴からは酢豚と何故か菊の花をもらいセシリアからはお手製のサンドイッチと椿を貰った。菊に椿、どちらも縁起の良い物ではないのだがこの世界の風習を知らないレイヴンは見舞いの花だと受け取った。

鈴の酢豚の腕前は折り紙付きだがセシリアの料理の下手は常軸を逸しているのだが、レイヴンはその事を知らない。

「さあ、レイヴンさんわたくしのサンドイッチ食べて下さいな」

「あ、ああ」

バスケットに入っているサンドイッチを手で掴むとレイヴンは反射的にサンドイッチから手を離れた。

「どうしたんですか？」

「何でもない……」

数多の死線を潜り抜けて来た傭兵としての野生のカンがセシリアのサンドイッチを危険物と判断したのだ。固唾を飲み込みレイヴンはまず、相手の出方を伺う。

無機物が入って居ないか、怪しげな妖気を放っていないかとあらゆる角度から観察し、鼻を利かす。匂いや見た目は大丈夫だが一番の問題は味だ。

意を決してレイヴンはそのサンドイッチを手に取り頬張る。

「美味しいですわよね？」

サンドイッチを握ったままレイヴンは俯き、固まっている。

「し、死後硬直？」

「失礼ですわよ鈴さん！ ささ、もう一口」

「おっさん？」

「レイヴンさん？」

鈴が指でレイヴンを突いてみるとその体は簡単に押し倒されベッドに仰向け寝になった。手は未だサンドイッチを掴んだままである。

「……………絶対、死後硬直よ！」

「死後硬直ってもう死んでるじゃありませんか！」

「とりあえずアタシの酢豚で延命処置を……」

「ナースコールですわ！ ナースコール」

鈴とセシリアは慌てふためき、ナースコールのボタンを何度も連打し、心臓マッサージを繰り返した。

セシリアのサンドイッチに気を失ったレイヴン。彼がちゃんと目を覚ましたのは結局、翌朝の事であった。

鳥大老の乱入のおかげで一命を取り留めたオータムは足に負った傷の治療に励んでいる。全脚部を切断されたアラクネはコアこそ無事であった為、今は修復と改良に向けている。肝心の回収された一夏とシャル、シャルは近い内にフランスへ送り届けられるだろうが、一夏は違う。

亡国機業も調べる価値無しと放置していたのにも関わらず、ジャックだけが興味を抱いていたのだ。言わずと知れた男色家のジャックが一夏への興味と言うと怪しい気配を感じてしまうだろう。

アラクネの一撃を受けて更にフォグシャドウが無理矢理に体を動かした所為で一夏はかなりのダメージを負っていた。

左右の脇下から腰まで均等にニードルで突き刺された傷は縫合され包帯を巻かれてなんとか塞がれている。ISを展開して直ぐに戦闘など行える訳も無く、目覚めた一夏はベッドの上でジッと横たわっている。

布団の中で右手首を触り白式が無い事を確認すれと次に薄目で部屋全体を見回した。監視カメラは無く一夏を幽閉する部屋というより誰かが使っている部屋に入れられたという感じた。

ベッドから出ると一夏はまず部屋の物を物色し始めた。白式がどこかに隠されているかもと言う僅かな希望にかけていた。

「起きて早々に人の部屋の物を物色とは感心しないな」

若い男性の声に身を震わせて一夏は棚の中にあつたナイフを握り、体の後ろへ隠した。隙を見て足なり腕なり斬りつけて逃げるつもりである。

「私はジャック・O。初めまして織斑君」

余裕を見せるその男は部屋のドアを閉めると椅子に腰掛けた。

「傷付けはしない。少しの話しとお楽しみを済ませれば直ぐに君を解放しよう」

「シャルはどこだ……」

「シャル？ あの子ならフランスに送られる準備中だ」

もうあまり時間が無い事を悟り一夏はそつとナイフを抜き取った。

「ナイフを置け」

「——！？」

ジャックは一夏がナイフを隠し持っている事を見透かしていた。腹をくくり、抜き取ったナイフを振り上げて一夏はジャックに襲いかかった。

「うおおっ！」

だが、一夏のナイフを持っている腕はジャックに掴み取られ、ひねり上げられると左手は一夏の体をしっかりと拘束した。

「私は以前から君に目を付けていた。若々しい……良い尻だ」

「あんた……ゲイか」

「その通り……やらないか」

ジャックの声を聞き、怖気が一夏の背筋を撫でる。このままここに居れば一夏の貞操が危うい。そう判断すると一夏は死に物狂いで暴れ出しジャックの拘束から逃れてベッドの上にまで行き、距離を取る。

「……わざわざ自らベッドに行ってくれるとは話しが早い」

「あんたの目的は何なんだ」

「君自身と言えば分かるだろう？」

「……変態だ」

「そうそう、君の白式はドアの隣りのテーブルの中だ。大人しく私に身を委ねれば返してやろう」

こんな所で大人しく掘られる訳にはいかない。ジリジリとジャックが迫って来る。

「さあ、イこう。エデンへ」

太い腕を伸ばして来ると一夏はがら空きの股間を一力一杯に蹴り上げた。

「うおっ!？」

流石に効いたようでジャックは股を抑えてそのままうずくまると一夏はテーブルの中の白式を手に取ると一目散に逃げ出した。暗い廊下、妙に湿気の多い空間に一夏はある記憶がフラッシュバックする。

2年前、中学だった一夏を突如として何者かが誘拐した。その日が千冬のモンドグロツソの決勝の日であり、誘拐の知らせを聞いた千冬は大会を放り出して一夏を助けに行った。

後にこの事件をきっかけにラウラの怒りを買う訳だが。一夏が救出されたのは誘拐されてから2日後の事であった。

どうにも彼は見知らぬ男に攫らわれ、四肢を拘束されてからの記憶が曖昧で次に鮮明に現れるのは強く、凛々しく、毅然とした姉の姿であった。

壁にもたれ胸に激痛が走り、一夏はその場にしゃがみ込んだ。呼吸は荒れて肩で息をしている。

嘔吐感に打ちひしがれながら白式を右腕に装着し薄暗い廊下を走り、闇雲に角を曲がった。出来るだけ早くここを離れたいと言う気持ちが一層大きくなる。

それはジャックから逃れたい気持ちからではなく、一夏の首をしめる過去から逃れたい気持ちであった。

どれだけ走ったかは分からない。だいたいこの基地の規模も分からない為、もしかしたらただ同じ所をグルグルと回っていたのかめ知れない。

一夏は今、荷物が並ぶ倉庫に隠れていた。そこで大きく深呼吸を

して記憶の糸を辿ってみる。オータムのアラクネに貫かれて気を失った。

一夏は額を何度も指で叩いていると、ふと別の記憶が蘇った。

「シャル！」

ジャックが言っていた。フランスに搬送すると。一夏は立ち上がり倉庫から出ようと走り出したその時だ。

倉庫の扉がゆっくりと閉まり始めたのだ。一夏は更に加速するものの扉の閉まる速さには勝てず、倉庫の中に閉じ込められてしまった。

白式を展開して破壊すれば簡単な話したが、コトを大きくしても何の特にもならない。どこかに出口は無いかと辺りを見渡すと小さな窓を発見した。少し高さはあるがジャンプすれば問題はない。一夏は助走をつけて飛び上がり窓の縁に掴まり、外を見た。

「あれは……シャル！」

倉庫の向かい側に輸送機が止まっており、何人かの男が手足を拘束したシャルを輸送機の中へ入れる所が見えた。

エンジンがかかり、シャルを乗せた輸送機が動き出す。

「シャル！ くそっ……このままじゃフランスに飛ばされて……！」

この際、四の五の言ってられない。一夏は白式を展開すると雪片で倉庫の壁を斬り破り、格納庫へと躍り出た。輸送機は今にも飛び立とうとしている。

「見つけたぞ織斑一夏だ！ 捕らえろ！」

格納庫の入り口からは数名の男が拳銃を片手に追って来る。

「この急いでる時に！」

拳銃の銃弾が何発も発射されるがISのシールドに阻まれて弾は地面に転がる。

IS級の火力がなければシールドエネルギーは減らない。一夏は左手の荷電粒子砲を出力を少し抑えて男達の足元に放った。

男達は爆風で吹き飛ばされ一夏はスラスターを最大出力で噴射し飛び立つた輸送機を追った。

「逃げられたか」

1人の男が舌打ちをすると通信機を使いスコールへ連絡を入れた。

「織斑一夏は逃しました。今はシャルロット・デュノアと共に輸送機の中です」

『そう、わかったわ。もう撤収しなさい』

「了解」

輸送機を追いかける一夏。最大速では白式の方が上である為、輸送機に追い付くのは容易であった。一夏は雪片で輸送機の倉庫に小さな穴を空けて入り込み白式を解除した。ちょうどエネルギーが尽きてしまったのだ。

連戦でちゃんと白式を休ませていない所為である。しばらくは展開したくても出来ないだろう。一夏は倉庫の隅に座りシャルを救う機会を待つ事にした。

亡国機業のモニタールームにはスコールとジャックそして鳥大老が居た。

「織斑一夏が逃げられました。アナタはどうして彼を捕まえようとしたのかしら？」

「性的興味もあるが、あの少年は自分の事に気付いて居ないかどうか確かめたかった。」

「ええ、織斑千冬ですらあの少年の真実に気付いてないわ」

「私も知ったのはついさっきだが……なるほど、哀れな少年だ……。私が慰めてやったものを」

「ああ……そうね……」

一夏とシャルの誘拐について学園上層部からようやく決断が出た。内容は『織斑一夏及びシャルロット・デュノア救出は織斑千冬が全権を担う』と言う物である。

要するに丸投げだ。フランス政府にはもう許可を得てデュノア社は結果的に国家から見離された。しかし救出すると言っても相手は多大な軍事力を持つ巨大企業、普通に行っても追い返されるだけだ。千冬は箒、セシリア、鈴、ラウラをピットへ招集した。2、3年生は市街地での戦闘の後処理、一般生徒は昨日から始まった夏休みで殆どが家に帰っている。

最近、多忙で夏休みの事などすっかり忘れていた。

「今回の作戦だが……戦闘はなるべく避けるようにする為、ECMを使用する。市街地での戦闘は絶対に避ける事、フランス政府からの条件だそうだ。今、作戦はECMをかなりの広範囲にバラ撒きハイパーセンサーの使用は不可能となる。その点を留意するように」

「はい」

「結構は今から6時間後だ。ちなみに今、作戦は私が現場で指揮を取る」

「教官が自ら!？」

「どうした、何か意外か？」

「い、いえ」

「それでは解散だ。各々ISの整備を忘れぬよう」

「はい!」

ラウラ等がピットから出て行くと1人残された千冬は握り拳を作り自分の額を殴打した。たった1人の弟を二度までも奪われてしまった自分が情けなくてしょうがない。親に捨てられその身一つで一夏を育てて来たのだ。

千冬はポケットから一本のチェーンを取り出すとそれを手首に巻き付け大事そうに撫で、学園側が提示して来たECM作戦の内容を眺めた。全権を任せると言っておきながらこの大胆な作戦の押し付け、責任から逃れたい気持ちが見え見えだった。

電波攪乱の為もしもの事態にフランス政府に救援を要請が出来ない。雄弁な千冬の横顔にはIS学園に赴任する遙か前、彼女がまだ白騎士の操縦をしていた頃に酷似していた。あの時は実弟である一夏も千冬を恐れていた。

思慮を欠いた行動は慎むべきである、しかし今の千冬にはそれ程の心の余裕は無かった。しばらくして千冬もピットを去って行き、室内のパソコンの分厚いディスプレイに大きなひびが入っていた。

日本を出立した輸送機はたった今、ロシア上空を飛んでいる。

あれから数時間、IS学園の面々も今頃は作戦を開始している頃だろう。輸送機の倉庫内に潜む一夏は時折、窓の庇にぶら下がって外の景色を見ていた。白式は未だに展開出来ず休み続けている、

あれだけの騒ぎを向こうで起こしたのだから自分が輸送機の中、もしくはその付近に居る事は恐らく連絡が行っているだろう。倉庫に寝そべって一夏はつい最近までの生活を思い出した。

弾とよく遊んだ中学時代、箸がこけても面白かったあの時が妙に名残惜しい。

自分がISを動かせる、それが一夏の人生の分岐点だった。藍越学園にそのまま弾と一緒に入学していればと考える。

辛い目にあうと誰でもそんな事を考えてしまいが今更変えられない。一夏に出来るのはシャルを救うだった。

「はあ……さむっ……………」

無意識の間にでたのは何の変哲も無い一言だった。一夏にまた眠気が襲いかかりそのまま深く寝てしまった。

当の誘拐されたシャルだが、機内のある一室に幽閉されていた。

両手両足を手錠で拘束され椅子に縛り付けられている。

彼女のラファール・リヴァイヴ・カスタムは没収されて今は無い。彼女の目の前にはコンピュータが配置され画面の奥にはプロシユが居た。

『大事な話があるが……それは本社でしょう。どうやらお前が大好きなあの少年が機内に乗り込んでいるらしいぞ』

（一夏が……？）

『まあ私自身彼に興味があるから生かしてやっているが』

「油断は身を滅ぼしますよお父さん」

『油断？ これは余裕というものだ。それに絶縁したお前に父と呼ばれる筋合いは無い』

「では何故、私を呼び戻したのですか」

『興の一つと……続きは後で話そう。織斑先生の弟も含めて』

そう言うつと画面の電源が切れプロシユが消えてしまう。プロシユが居ないだけでシャルの気持ちはだいぶ楽になる。それだけシャルは彼を嫌っているのだ。

プロシユの常に何かを企んでいる笑みとシャルの本心を見透かして来る瞳、他を全て軽蔑の眼差しで見詰め人を物と同等に扱っている。これだけ外道という言葉が似合う人物は彼を省いてシャルの過去には1人も居ない。

どの道この拘束から逃れてもISの無いシャルに逃げる術は無い。それに仮に逃げたとしてもプロシユはまたシャルを捕まえに来

るだろう。最初の抹殺という指令がいつの間にか消えていたのは気になる点ではあったがシャルは触れないようにした。

今、輸送機はロシア上空を抜けてヨーロッパ方面に入った。父との対面まで後少しだった。

体を拘束されてはぐつすり眠れる訳もなく、シャルは何度か眠ったり起きたりを繰り返し、ふと目を覚まして辺りを見回した。出来れば夢でありたいと何回願ったか分からない。

いつもなら隣りのベッドにラウラが居て教室には友達が居た。考えれば昨日から何も食しておらず腹のムシがさつきからずと鳴っていた。

シャルを幽閉していた部屋のドアが開いて外から4人の男が入ってきた。シャルはその男達とは顔見知りではあるが、あちらが覚えているかどうかは分からない。

シャルにしても今はそんな事はどうでもよかった。1人が椅子の拘束具を外して足の錠も外し、ようやく少し自由に動けるようになった。胸を締め付けていたバンドが無くなり解放感がある。しかし余韻に浸る間もなくシャルは男達に連れられて輸送機を降ろされ滑走路の近くに停車している一台の高級車に寄せられた。

シャルは輸送機内にいるであろう一夏が心配だった。代表候補生のように訓練を受けている訳でもなくほんの数ヶ月前までは普通の学生だったのだから。

シャルを乗せた車はそのまま動き出してデュノア社へと向かった。所変わって輸送機内の一夏だが、まだ誰にも見つかつてはいなかった。それどころか、深く寝入ってた今起きたり所だったのだ。一夏は大きな欠伸をかい窓から外を見ると目的地に到着した事を悟る。

格納庫のドアは開いていつでも出る事が出来る。

「待ってるよシャル、すぐに助けるからな……！」

白式の状態は全開時の80%と言った所だ。不安になるような数値ではなく一夏は握り拳を作って指の骨を鳴らし、今まさに白式を展開しようとした時だ。

「おい」

何者かが背後から拳銃を一夏の頭に突きつけている。

（俺の……バカ）

「ゆっくりと両手を挙げる」

一夏は指示に従い両手を上に挙げた。

背後にいる男が一夏の白式に触れた瞬間、足を後ろに蹴り上げて男の股間を強打すると同時に白式を展開、白い粒子が装甲を形成し、一夏は白式の装甲で覆われた腕で男をなぎ倒すと急いで輸送機を出て空へっ舞い上がった。これで一夏が逃げた事が向こうへ伝わり、侵入は難しくなるだろう。

エネルギーの消費を抑える為に雪片は召喚していたない。シャルを救出するいざという時まで置いておくつもりだ。

学園からすぐに援護に来ると信じて一夏は猛スピードでデュノア社へと向かった。

ECM作戦を結構したIS学園、肝心のECMは気前よくフランス政府が出てくれるようで千冬等はシャルと一夏の救援に専念出来るという訳だ。千冬、ラウラ、鈴、セシリア、箒が乗っているのはかなり小型のジェット機である。技術の進歩と共に小型化が更に進み、低コストでハイスペックを実現した。シャルが乗っていた輸

送機よりま遙かに速く、太平洋の上空を飛行中であつたまさにその時。

『織斑先生、未確認機を確認しました。以前アリーナに現れた物です。数は6』

ゴーレム？という名の無人ISは千冬達が乗る小型ジェット機より10km先に確認出来た。

「わかった、私が出る。お前達は引き続き作戦を続行しろ」

「はい」

ISスーツに身を包んだ千冬の姿は新鮮でピタリとフィットしたスーツは胸をどこか強調しているようにも見えた。

ジェット機のハッチが開くと躊躇せず千冬は飛び降りた。ジェット機は航路を変えて飛んで行く。

千冬の手首に巻き付けられたチェーンが発光し、粒子が彼女の体を覆ったかと思うと中からは赤色の機体が現れた。

紅椿のように赤一色ではなく、赤をベースに黒色が施された機体だ。目を引くのが背部の2基のユニット、福音のバックユニットより一回り大きい。頭を覆う兜のような装甲には特徴的な1本の突起が後ろを向いて生えている。

瞳は青く光り、神々しく背中中のバックユニットを広げた。

「出陣だ。打鉄九式」

6機のゴーレム？は打鉄九式を取り囲むと一斉に大出力レーザーキャノンを放つて来た。12本のレーザーは打鉄九式は見事に命中するが、しかし——煙りが弾け飛び中から無傷の千冬がいた。彼女

の周囲には青いシールドが張られゴーレム？のレーザーを全て遮っていた。

防御力を上げるのならシールドを二重にすれば良い、そんな単純な思考によって生まれた全く新しい機構“エクスシールド”であった。千冬は右手に粒子を集めて剣を形成する。雪片よりもやや大きいが千冬の技量なら問題なく扱える。名を“白鳳輝”。

雪片よりも燃費が更に劣悪な物となったが破壊力だけなら雪片を超えた極端な攻撃特化の剣である。

「包囲殲滅か……」

エクスシールドと白鳳輝を目の当たりにしたゴーレム？は不用意に千冬の間合いへ入ろうとしない。ゴーレム？等は何度も攻撃を加えて耐久戦に持ち込みたい所だが、千冬は短期間で6機全てを破壊しなくてはならない。ゴーレム？と千冬の利害は一致せず、彼女はその右手の剣を担いだ。

同時にゴーレム？が臨戦態勢に入ったがもう遅い。1機は破壊される事は決定的だ。担いだ白鳳輝を千冬は横薙に振り抜くと同時に剣は彼女の手から離れて行き、眼前のゴーレム？の胸に白鳳輝の巨大な刃が突き刺さったかと思うや否や、打鉄九式のバックユニツトが展開され4基の噴気孔が露わになるとそれら全てからイグニッション・ブーストを放射して脅威的な加速でゴーレム？に近寄ると白鳳輝の柄を蹴り、突き刺さった剣は更に奥へと進みコアを砕いた。先ずは1機が破壊され千冬は即座に白鳳輝をゴーレム？から取り出し、背後から襲い掛かる2機のゴーレム？の胴体を真つ二つに切り裂く。屑鉄となった無人機は海へと没して残す所、後3機で三角形に陣形を組んでいた。千冬の勝利は決定的であった。後ろ向きだった角が前へ倒れて青色のバイザーが赤へと変わると千冬はまた瞬間移動のような速さで3機のゴーレム？の陣形のだ真ん中へ入り込むとスラスターを一定の方向へ傾け、機体を回転させ自分の周囲に

いたゴーレム？は白鳳輝の斬撃によって切り裂かれてしまった。

最初のレーザーの一斉発射から相手は何の応射も出来ず、やられてしまった。

一夏と鈴が2人がかりでやっと1機倒せたゴーレム？も千冬を相手なら赤子同然であった。

最強の名は伊達ではない。

「時間を無駄にしたか……」

千冬はハイパーセンサーで現在地を確認すると背中中のバックユニットからイグニッション・ブーストを展開して空の彼方へと消えて行った。

デュノア社に到着したシャルは今、手錠を外されて体に付けられていた拘束具は一切、取られ社長室にいた。

シャルの面前にいるのは当然のごとくプロシュだ。いつもなら奥が見えないにこやかな笑みを浮かべているものの今日は違った。鋭い目つきでシャルを睨むように見詰めシャルもまた同じ様に見詰め返していた。

「話しはなんですか？」

うんざりした様子でプロシュに尋ねると彼は高級感溢れる椅子から立ち上がり机に座った。

「本来なら君を強化人間の実験体しようと考えていた」

強化人間の話しは僅かに聞いていた。ラウラのような試験管ベビ

「ではなく真つ当な人間の体をいじくりまわして通常の何倍の身体能力を植え付ける悪魔の研究。」

今はどうであれ腐つても実の娘をこの男は強化人間の実験に使おうとしていたのだ。とても正気とは思えない。

「しかし、強化人間の技術が遂に完成してしまったんだよ。つい最近にな」

「なら私には用はないでしょう」

「いや、実験にすら使えない生ゴミを置いておく気は無い。再びお前を殺そう」

ブロシユはゆっくりとこちらに歩み寄つて来る。シャルは身構えてブロシユがどう攻めて来るかあらゆる方面に気を配らせていた。代表候補生としているんな訓練を受けて来たシャルは勿論、護身術も会得している。並みの男よりは遥かに強い。

ましてや40過ぎの男を行動不能にするのは容易い。だが、この不安と悪寒が少しずつシャルの戦意を削いでいた。

「どうしたシャルロット。足が震えているぞ」

ブロシユが手を伸ばしシャルロットの腕を掴み宙へ浮かせた時、社長室の椅子の奥にある大きな窓ガラスに白い機影が映ったと思うと分厚いガラスは砕け散り、外から白式が一夏が乱入して来るなり零落白夜を発動し、鬼気迫る勢いでブロシユへ斬りかかった。ブロシユの背中を斬りつけたにも関わらず金属音が響き、雪片が弾き返された。

「織斑君だったな。残念ながら私の君への興味はとうの昔に無くな

っているんだよ」

ブロシユはシャルを離すとまだ癒えていない一夏の横っ腹の傷にパンチを入れ、白式ごと吹き飛ばした。

包帯が破れて傷口が裂け、血が滲み出る。

「ごほっ！ 生身でISを……？」

「生身ではない」

スーツ姿のブロシユは上着を破り捨て上半身を露わにした。

「——！？」

「そんな……」

凡そ40過ぎとは思えない肉体だが、それよりももっと驚くべき事がある。

彼の左胸、心臓の位置する場所にはISコアが埋め込まれていたのだ。

「強化人間は序章に過ぎない。私の目的は人体へのISコアの移植。何百人の人間が犠牲になったが大成するには仕方ない数だ」

ISコアが脈動し、ブロシユの腕に血管が浮かび上がった。

「ISコアを人体に埋め込む事により反応を伝える速度を限りなく0へ近付けた。強化人間の技術と併用する事で肉体面で常人の40倍の力を発揮する。コアの移植を使用したのは歴史上で私が2人目だ」

一夏は息を呑んだ。出血により痛みなど忘れ去るかのような禍々しさ。雪片を再度構え直すとブロシュの机に目掛けて飛んで行き、机を両断した。中にしまつてある待機状態のリヴァイヴを取り出す。

「シャル！」

リヴァイヴを投げ、シャルはそれをキャッチするとすぐさま展開する。アサルトライフルで牽制しつつ一夏の元へ引き下がり左手にショットガンを呼び出した。

「たがだか2人で何が出来る？ まあ、この際だ。真実を教えてやる」

ブロシュの姿が2人の視界から忽然と消えたかと思うと一夏の背後に回り込み、一夏の首を掴み取る。せめてもの抵抗としてその手の雪片をブロシュの腹に突き刺すがさつきと同様に弾かれてしまう。

「無駄だ」

ブロシュの右手は一夏の胸を殴り、その衝撃で一夏は吹き飛ばされ、壁にめり込んだ。

「ISCコア移植の話したが、歴史上で初の人間は君だ。織斑一夏」

「何バカな事言つてんだよ」

「ではそれは何だ？」

ブロシュに指を指されて一夏は殴られた胸を見ると肉は爆ぜて肋骨を失い、本来なら心臓が露出している筈だった。しかし、一夏

の胸の中には赤く光るISコアが埋め込まれていた。シャルも口を押さえて目を疑い、一夏はあまりの驚愕さに手を震わせ息を詰まらせていた。

「第2回目のモンド・グロッソの日、君は亡国機業に誘拐され、異常に暴れる君に苛立ったオータムは持っていた拳銃を発砲した」

次から次へと伝えられる自分ですら知らなかった出来事に頭の中は完全に混乱状態に陥っていた。

「織斑一夏、君は2年前に既に死亡しているのだよ。ISを体に埋め込みんでいる。君が男にもかかわらずISを動かせる理由だ」

「……………俺が…………俺が…………もう…………し、死んでいる…………？
嘘だ…………」

「残念だが事実だ。空調も温度も設定されていない飛行機の中で何故生きていれたと思う？」

話しただけならただの嘘だと言いつけたが自分の胸の中で光るコアをまざまざと見せつけられ否定的な言葉が出て来ない。

「そのコアは現在行方不明中の暮桜のコアだ」

一夏に言い返す事は出来ない。言い返す言葉が見当たらない。目の当たりにした現実が怖くて堪らないのだ。

「当時の暮桜のコアはオリジナルではなく似せて作った物に過ぎない。行方不明のコアが君の胸の中にある事は織斑千冬ですら知らないだろうな」 楽しそうに笑うプロシュを一夏から見れば怪物のよ

うに映っていた。

「一夏！ 君が死んでいてもいなくても僕には関係ない。君は僕に居場所をくれた僕に希望をくれた。だから……こんな所で折れないだよ」

「良いセリフだ、感動的だな。だが無意味だ。一度死んだ男と望まれない女、お前達は引かれ合っているのか？」

度が過ぎた侮蔑な言葉に流石に温厚なシャルも怒りが沸点に達した。至近距離から2丁のショットガンの連射に加えて、自らのダメージを省みずグレネードをブロシユへ叩き込んだ。

親子の縁は切れたのだ。シャルは躊躇いなくリヴァイヴの火器を一切合切、ブロシユへ使った。脅威的な力を持っていてもブロシユはまだ使い慣れていない。

態勢を立て直す暇も与えず、シャルはアサルトライフル、スナイパーライフル、グレネード、ショットガン、ブレードの順に攻撃を加えた。

雪片を弾く堅牢なボディには未だに傷が付かずにいた。スナイパーライフルの薬室にマガジンを込めて貫通弾を放つ。

「ここだ」

ウィークポイントを見つけたシャルは高速切替でアサルトライフルを呼び出し引き金を引こうとした時だ。シャルの腹に強烈なパンチが飛び、シャルはのけぞる。

ブロシユの腹から砲口が現れるとエネルギーを瞬時に収束し撃ち出す。

「手加減してやろうと思ったが止めだ」

薄い橙色の装甲が消し飛びリヴァイヴはなんとか持ちこたえていた。精神的に肉体的に衰弱したシャルに戦意を失いかけた一夏、2人の勝機は薄い。

ISコアの再生力で胸に空いた穴は治療されているが以前、一夏は俯いたまま動く気配が無い。

「さっさと駆除するか」

ブロシュは一夏の方を向くと一夏は立ち上がりエネルギーが通っていない雪片をちゃんと握っている。

スラスターを運用してブロシュへ迫り、シャルが見つけたウイークポイントのコアと肉体の接合部を狙って雪片を突き出した。ギリギリの所で雪片を素手で受け止めたブロシュは一夏にかち上げられ天井に押し込まれる。それだけではなく一夏はイグニッション・ブーストを点火してブロシュと一夏は天井を突き抜けて、屋上のヘリポートに押し出した。

「生きた死体の分際でやってくれるな」

雪片の切っ先が突き刺さり、コアと肉体の接合部から血が漏れだしている。

白式のエネルギーも後僅か、スラスターをしまい、エネルギーの消費を抑えて雪片を構えた。ここからは拳と剣の戦いだ。

地面を蹴り上げてブロシュは一夏に迫り手刀で白式の装甲を斬り、反撃に雪片でブロシュの頬を裂く。

人を超えた者、人あらざる者、2人の戦いは苛烈なものであった。霧影のサポートもあってか一夏に軍配が上がりかけていた。ブロシュの左手首から先は切り落とされて無くなっている。変わらず出血は少ない。

「人も殺せない奴が随分の変わりようだな」

「お前は人じゃない。ただの化け物だ！」

「差別的だな。人の命に優劣を付けているように聞こえるな……」

「俺は……俺は人間だ」

「人間？ 死人が偉そうに」

一夏は雪片を上段に構え、切っ先を天に突き立てる。IS戦というよりも剣道に近い感覚の一夏は深呼吸を繰り返して息を整えた。対するブロシュも右腕に全ての意識を集中させて態勢を低く取り、脇を締めた。一夏は心で念じ白夜の一切合切のエネルギーを雪片の刀身へと送り込む。

——零落白夜、発動。

刀身に蒼白のエネルギー体がまとわりつき刃は巨大な物へと変わっていく。しかし今は膨張しただけの無駄な破壊力はいらぬ。いるのは相手を切り裂く鋭利さと相手よりも速く斬り込む速度だ。

蒼白のエネルギーは徐々に圧縮されていき小さく、鋭く研ぎ澄まされた刃へと変わって行った。

空を指す雪片は確かな威厳を備えていた。ブロシュは確信する、あの雪片式型に斬られれば間違いなく体を切断されてしまうと。

ブロシュは地面に足が埋もれるくらいに力を込めて踏ん張り、青筋がたつ。

コンクリートを巻き上げてブロシュは低空を飛んだ。同時に一夏も走り出して真っ向から迎え撃つ。

振り上げた雪片をブロシュの左肩目掛けて斬りおろすと、彼は有り得ない軌道で体の向きを変えて一夏の一撃を回避した。

がら空きの横っ腹に向かってブロシユの拳が入る。だが、それは引き戻した雪片の柄に阻まれて命中はしなかった。

凄まじい衝撃で態勢を崩れた一夏に追い討ちをかけるように飛びかかったブロシユはショットガンの弾を叩き付けられて大きく後退する。

一夏が空けた穴からリヴァイヴが疾風のように現れ、シャルはまたブロシユにショットガンを撃ち込み、その度にのけぞる。

左手にもう1丁のショットガンを呼び出して反撃の余地が無いように一方的に攻撃を加える。ブロシユの体はビルから落ちるかどうかというギリギリのラインに押し込まれていた。ISコアは不気味な程に赤くなりブロシユの体液を蒸発させる。後1発撃てばブロシユを殺す事が出来る。

だがシャルは躊躇った。娘を顔色一つ変えずに殺そうとする男に情けは必要ない、それでもシャルはトリガーに指を添えたまま動けずにいた。

「どうしたシャルロット、後1発で私を殺せる。因縁を絶ちたいなら引き金を引くんだ」

「うつ……！」

「撃ってみろ！ シャルロット！」

固唾を飲み込みシャルはショットガンの引き金を引いた。

散弾はブロシユの体を押し飛ばし、彼は胸から煙りを吹き上げと体はビルの下へと落ちて行く。それがとてつもなくゆっくりに感じられたのだ。

顔が見えなくなるまでブロシユはずっとあの奥が見えない怪しげな笑みを続けていた。シャルはショットガンを落としてその場に崩れるように座り込んだ。

嫌いだった、憎かった実の父を葬った感覚は酷く苦い。シャルの目から自然と涙が溢れ出し頬を伝った。

「終わったんだな……」

「う、うん……」

声をあげずに泣くシャルの頭を撫でて一夏は優しく抱き締めてやる。

「帰ろうシャル」

そのままシャルを抱いて立ち上がろうとした時だ。青いレーザーが一夏の頬の横を流れて行きヘリポートの一部を吹き飛ばした。

「え？」

「一夏あゝ！ アタシ達が居ない間にシャルとチヨメチヨメしてたわね！」

「セシリアやってしまえ」

「心臓？ つまらないですわ。その綺麗な顔を吹き飛ばして――」

「またそれが」

空中にはISを展開したセシリア達が居た。かなり遅れてだが救援に来てくれたのだ。

「お前達……」

「一夏、ここら一带にECMをバラまいた。敵がこちらを発見しないうちに退散するぞ」

「ああ」

ラウラは手早くシャルを担ぎ上げ、箒は一夏の腕を肩に回して飛び上がりデュノア社から姿を消した。

一夏、シャルの両名の救出は完了した。

ただし一夏の心には計り知れない傷がついた。自分が死んだ事は千冬にも絶対に話せない。胸に手を当てて一夏はプロシユに言われた言葉を思い返した。

一夏等を救い出し皆はジェット機の止まる空港へと降り立った。千冬も到着したらしく一夏の姿を見て安堵感に少し頬が緩み笑顔を見せた。

「よく帰ってきたな一夏」

「千冬姉、ただいま」

「さあ帰ろっか」

生徒達の手前、今すぐに抱き締めたい気持ちを抑えて千冬はジェット機へと乗り込み他の生徒も後に続いた。エンジンを奮い立たせて機体は動き、フランスの地を飛び立った。

一夏とシャルは疲れ切り死んだように眠っている。時折、額を突

つついたりもしたが全く反応が無い。

一夏を救って安心とはいかない。問題はまだまだ山積みとなっている。

千冬はジェット機の窓から海を見詰めながら考案する。レイヴンやACの存在、微々たる情報から聞く亡国機業、更に各地で最近現すACを模した青色のラインが入った機体。交戦記録は無く向こう側からも攻撃をして来ず様子を伺っているようにも見えた。

束の所有する巨大コンピュータ“インターネサイン”が何か関係していると千冬は睨んでいる。尤も最近束に一切連絡がつかず本当に行方不明となってしまうている。嘆息を漏らして千冬はシートに深く腰掛けた。議題はまだあるがとりあえず命より大事な弟を取り返せたのだから文句は無い。

千冬が瞼を閉じかけると遙か遠方に青い閃光がほとばしった。一瞬の出来事だが千冬は本能的に危機を察知し、喉が裂けんばかりに叫ぶ。

「敵襲だあ！ 戦闘準備！」

千冬の声に真つ先に反応したのはラウラであつたが遅すぎる。彼方からやって来たのは巨大なレーザーであり、千冬達が乗るジェット機の腹を貫き破壊した。

空中で大爆発が巻き起こり機体の破片が地上に燃えながら落ちて行く。

黒煙が少しずつ晴れて行き、中からはエクスシールドを張った打鉄九式がいた。

生徒全員を守る為にかなり広範囲に張ったおかげで打鉄九式のエネルギーはかなり消耗してしまった。

白式やリヴァイヴも紅椿の絢爛舞踏によってある程度までは回復出来ている。操縦者の疲労は別であるが。

それよりも攻撃を仕掛けて来た者だ。一夏やシャルは亡国機業と予想したが、それは大きくハズれた。雲の中から姿を見せたのはA

この数倍の巨軀を誇る巨大兵器だった。現代技術でこんな代物は開発出来る筈がない。そうなると心当たりは1つとなってくる、レイヴンの世界の兵器だと。

『シャルロット、お遊びはおしまいだ』

スピーカーから聞こえる声はブロシュである。トラウマがぶり返しシャルは身を震えさせる。

『今度こそ皆、地獄へ送ってやる。ブロシュ・デュノアとこの“レビヤタン”でな。世界を私色に染め上げ……おゝっとこれ以上は言えないな』

ISは7機、十分戦争を起こせる戦力だが巨体にものを言わせた破壊兵器に威圧されて攻撃を躊躇った。

ブロシュとの最終戦が始まる。

太平洋上空でレビヤタンと砲火を交えている頃、IS学園内の病院に入院しているレイヴンは退屈であくびをかいていた。

真耶は先ほど慌てた様子で病室を飛び出して行き今は居ない。聞いても教えてくれない。真耶にしてみればレイヴンの身を案じているつもりなのだが当のレイヴンとしては非常に面白くない。

大方、千冬達に異常事態が発生したのだろうと予想はしていた。今日で何回目かわからないあくびが出た。ベッドにまた横になると病室にエドワースが入って来た。

「レイヴン起きているか？」

「何だ？」

「織斑先生達が巨大兵器“レビヤタン”とか言つのと交戦中、苦戦を強いられているようだ」

「俺にどうしろって言うんだ？ ACは修理中でISは10分しか稼働出来ない」

「そこでだ」

病室のテーブルにエドワースは錠剤を一錠置いた。たいそう派手なガラの錠剤は毒々しく薬と言っても薬物のようにも見えた。何かの秘薬ではあるが説明も無しに吞もうと言つ気にはなれない。

「IS適性を無理矢理上げる薬剤だ。当然体への負担は計り知れないし副作用もあるから気をつけろよ。オラオラ」

「どのランクまで上がるんだ？」

「適性E以上なら稼働時間は飛躍的に伸びる。多分適性Bかなオラ」

副作用や体への負担は覚悟の上だ。また真耶やラウラの心配そうな顔が脳裏をよぎるが行かない訳にはいかない。

レイヴンはエドワースからもらった錠剤を飲み込み病室を飛び出して行った。

「三十路前のオッサン本当に頑張るなあオラオラ」

病室を抜け出したレイヴンはISスーツに着替えを済ませてアリ

ーナの格納庫にいた。改良を加えたレイヴンのリヴァイヴがそこにしまわれている。

レビヤタンの件で教員の殆どは管制塔にいる。レイヴンに座るように身を任せると紫色の装甲が体の各所を装甲で埋めて行った。バスターブレイカーの刃を一度展開して調子を確認しているとオープン・チャネルに真耶から連絡が入って来た。

『何をしているんですかレイヴンさん！』

驚きで大声を出しているが怒っているようではない。

「奴らの救援に向かう」

『IS適性Eのあなたじゃ途中で機能停止を起こしてしまいます！』

「その件はもう解決済みだ」

真耶は一瞬首を傾げたが直ぐに我に返ってレイヴンを引き止めた。

『その体じゃ次こそ本当に危険なんです！』

「俺が無傷で帰れば良いんだろ？」

『そうですけど……そんなの無理に決まっています！』

「出来るさ」

真耶の言葉を見殺ししてレイヴンは格納庫から出てくると目を凝らしてスラスターとバーニアを点火する。

『待ってください！』

「まだ何かあるのか？」

『改良されたりヴァイヴでも今から行っても間に合いません。だからこれを使ってください』

管制塔から送信されて来たISの移動ユニットのデータがリヴァイヴのディスプレイに表示された。

「IOB？ 何だこれは」

『ISのイグニッション・ブーストとACのオーバードブーストを組み合わせた物です。超音速での飛行になりますから気をつけて下さい』

「了解」

レイヴンはIOBを展開、背中には10mはあるブースターが光と共に現れた。

アリーナの地面が開いてカタパルトが顔を出すとリヴァイヴの向きをソツと斜めに傾けた。左右均等に8つつ原子炉が搭載されている。噴気孔にエネルギーが集束されていく。

「イグニッション・オーバードブースト点火」

アリーナの砂を巻き上げて風圧で地面をえぐり出してリヴァイヴは瞬く間に空の彼方へと消えて行った。

織斑一夏、凶刃に堕ちる（前書き）

レイヴンが完全に空気だった（反省）。

最近、固い話しばっかりだからそろそろ緩い感じの書きたいな！。

8月は更新速度にとられずに緩やかにやろっと。

スイカ美味しい。

織斑一夏、凶刃に墮ちる

夕日が浮かぶ空を流星のごとく飛行する1機のIS、IOBは原子炉からエネルギーを注入して段階的に速度を上げて行き注入し終わってパーツからどんどんパージしていく超音速ユニットだ。

既に日本を飛び出し韓国上空も超えた。

凄まじいGが体にかかるが気にしてられない。ハイパーセンサーで相手の位置を探ると目標地点に後、20分で到着する。

リヴァイヴが通った場所にはソニックブームが巻き起こり、本当にミサイルようであった。レイヴンの記憶ではレビヤタンと言われれば倉庫内で調整中の物を思い出すが今は違う。ちゃんと飛行する巨大兵器なのだ。多種多様の兵器を搭載しECMでレーダーから姿をくまらず。

厄介極まりない兵器というのは言うまでもなくその戦闘力はレイヴンが最も良く知っている。現場で何があったかはわからないが現に千冬がいながら苦戦中と聞いてレイヴンの額から脂汗が流れた。

IOBのパーツがまた1つ捨てられ機体の速度が上がる。エドワースの薬剤が無ければ今は海のもくずとなっていただろう。レイヴンはバーニアにも点火して更にスピードを上げた。作戦領域に入り目標までの距離は50km、IOBは全てパージされスラスターとバーニアを併用してそのままレビヤタンに突進する。

空中では激戦区となりセシリアのレーザーや箒の光波が絶え間なく飛び交い、その都度レビヤタンのグレネードランチャーの爆発音が聞こえた。絢爛舞踏を使いこなし始めている筈はチームの回復係り、彼女を失うと形勢は一気にプロシユに傾いてしまう。

距離20km。バスターブレイカーを開き手にはアサルトライフルとショットガンを持つ。頭の中に入ってくる味方の陣形、レビヤタンの動きや武装と無数の情報を整理して戦型を組み立てる。レビヤタンとの戦いを長引かせるつもりは無くレイヴンは以前、対峙し

たように破壊するつもりであった。メーターを見れば距離は残り200mの所まで接近していた。

レビヤタンは肉眼でも確認出来る。リヴァイヴのスピードを緩めずレイヴンは一直線にレビヤタンに弾丸のように突っ込んだ。その場にいた全員が何が起こったのか全く理解出来なかった。一筋の光線が気が付かぬうちに飛び込むと眩い閃光を放ったのだ。

レビヤタンの巨体もぐらつき斜めに傾いた。

『何だ！？』

レビヤタンの衝突した箇所にはレイヴンが駆るリヴァイヴがおり、バスターブレイカーを装甲に突き刺していた。

「救援に来た」

そう言いながらレビヤタンの装甲を食いちぎるようにバスターブレイカーでえぐり出し内部にショットガンを撃ち込む。

『——！？ レイヴン……初対面だな。濁った目をしている』

「お前に言われたくない」

レビヤタンの後部から大量のミサイルが発射されレイヴンはその場を離れて高度を上げてミサイルから逃れる。アサルトライフルで迎撃しつつバスターブレイカーで切り裂き、盾で防御する。

不動を決め込み砲撃だけしていたレビヤタンはようやく動き出す。巨体に見合うブースターを起動させる。

生徒達の攻撃を嘲笑うかのように空中を飛び回り分厚い装甲に身を固め、弾き返す弾丸やレーザーは無駄という二文字を突き付けて来るのだ。想像以上に疲弊したシャルと一夏は後退している。

「レイヴン、身体は……」

「大丈夫だ。それより織斑先生、あれをどうする」

レビヤタンのグレネードランチャーは福音の光弾よりも遅く、数も少ない為当たりはしない。レーザーキャノンは確かに弾速は速いが発射までのタイムラグがあり、回避出来る時間がある。ミサイルもさっきの通り逃れる事はさほど難しくはない。

武装で恐れる物は特に無い。ただあの桁外れの装甲に悩まされているのだ。

「レイヴン、あれを破壊した事は？」

「昔にある。あの時はACだったし向こうは調整中で動けなかった」

「プロシュ・デュノアがあれに乗る理由があるのか？」

「どういう事だ？」

「政府を敵に回してまで得る程の力があれにあるのか？」

「無い。雪片で事足りる」

千冬は腑に落ちない表情で飛び回るレビヤタンを見た。厚い装甲に閉じこもり遂には攻撃もせずただ飛び回っている。

必殺の攻撃力を持つ打鉄九式と白式はエネルギーの回復の為に戦わずにいる。

プロシュの行動が全く読めない。

「鈴！ セシリア！ 反撃して来ないからと行って無闇に飛び込むな！」

エネルギーが減れば絢爛舞踏で皆を回復する筈、無尽蔵のエネルギーには変わりないのだが勿論リスクはある。使い続けられれば次の発動までに時間の幅が開いてしまいやがては回復が間に合わなくなる。紅椿の絢爛舞踏発動までにかかる時間はもう20分を超えた。そろそろエネルギー回復が間に合わなくなる。

（何を考えている……プロシュ）

千冬は怖い目つきで遠くからレビヤタンを睨み付けた。レイヴンの攻撃の際はミサイルによる反撃を仕掛けそれ以外は眼中に無い。セシリアが撤退しラウラも撤退する。長時間の戦闘をしても皆を回避不可能までに追い込む事など出来ない。

（ISでない以上、弾薬にも限りはある……）

今、戦っているのはもうレイヴンのみだがそろそろ全員のエネルギーが回復する。

「さあ、時間だ。産まれろ！」

コックピットでプロシュが狂気に満ちた笑顔で叫ぶとレビヤタンは空中で大爆発を巻き起こして自壊した。

レイヴンも呆気にとられ目を見開いた。

決して自爆をした訳ではない。その証拠にシャルの震えは収まっていない。いや、もっと酷くなっている。黒煙の中からはACブースター音でも無い音が聞こえて来るのだ。ヘリコプターの羽音に近い轟音を響かせる。煙を風圧で跳ね飛ばし、姿を見せたのは千冬で

すら吐き気を催す程、醜く禍々しい物だった。

体長はレビヤタンを超え、黄緑色の円形なボディに2枚の羽根を高速で揺らし空中を飛ぶ巨大な“AMIDA”であった。

AMIDAの身体の中には上半身だけが出たプロシユの姿があり体中の血管が浮き上がり肌の色も人間離れた黄緑色をしている。胸のISCコアは常に脈打つように動き巨大なAMIDAとプロシユにエネルギーを送り続けている。

「我がデュノア社の粹を集めた生物兵器だ。レビヤタンはこの子を守る殻でしかないのだ。さあ、我が身体の一部となれ！」

AMIDAは足の下にある口を広げて大気を吸収する。その吸引力にふらふらのシャルは耐えきれずに吸い込まれる。

「シャル！」

「きゃあッ！」

AMIDAの鋭利な歯が並ぶ口の中に入りかけた寸前にレイヴンに足を引っ張られなんとか事なきを得る。

「あ、ありがとうございます」

返事をする余裕もないレイヴンはシャルを仲間の一番後ろに下がらせた。

「くっ……この子の餌が。まあいいデュノア社特製のAMIDAの力を見るがいい！」

再び大口を開けた巨大なAMIDAは口の中から無数の小さなAMIDAを吐き出した。

「回避しろ！」

レイヴンが疾呼するとそれにあわせて散開する。放たれた小さなAMIDA達は自爆していき生物らしい生臭い血肉を撒き散らした。ブロシュが本体と睨んだレイヴンはスナイパーライフルを呼び出しブロシュの額目掛けて弾丸を撃つ。1発の貫通弾はブロシュの目の前まで来ると視認不可の膜に当たって消えた。シールドを張っているととなると一夏の雪片か千冬の白鳳輝でなくては破るのに時間がかかる。

「織斑先生、一夏。エネルギーは？」

「十分だ」

「俺も大丈夫です」

「俺が意識を逸らす。どちらが仕留める」

「了解」

「わかりました」

作戦が決まり、レイヴンは左から迂回しながら近付きバスターブレイカーの刃をAMIDAの胴体に突き刺す。呻き声をあげて触手を伸ばすとその束を握り、手のブレードでまとめて両断した。次に顔に乗ると黄色い複眼にショットガンを撃ち、また別の目をグレネードで吹き飛ばした。

今度は絶叫し、潰された目を何本もの足で押さえて悶え苦しんでいる。レイヴンはその足の1本をバスターブレイカーで切り落とし

た。

「AMIDAの力を舐めるな！」

ブロシユの意識と繋がっているAMIDAは彼の考えを感じ取り、辺り構わず胃酸を撒き散らした。レイヴンは直ぐにAMIDAの身体の下に潜り込みブレードを突き刺すと腹を裂き、青色の血が流れた。返り血を浴び、顔についた血を拭うとレイヴンは接近戦を止めて中距離からの攻撃に変更する。

図体の大きい巨大AMIDAはデタラメな攻撃力を持っていても小さなISに当てる事が難しい。上下左右を飛び回って銃弾を絶え間なく撃ち込むものの数秒もすれば傷口は直ぐに再生してしまう。

「目障りな男だ……お前はコイツ等の相手でもしている」

巨大AMIDAの口からは3匹の生体兵器が飛び出しレイヴンを取り囲んだ。四本足の生体兵器はその頭蓋骨を突き破って過剰に膨らんだ脳が露出しており、AMIDAから産まれたばかりで全身に滑りが付着している。手は無く、代わりに太い爪が肉片を垂らして生えている。

背中肉を破って2基の砲台とスラスターが接合され、口を開ければ牙と三枚に割れたグロテスクな舌を覗かせた。

放たれてから他に目をくれずにレイヴンただ1人を敵視している。AMIDAよりも奇怪且つ、珍妙な生き物は仲間とコンタクトを取りレイヴンにジリジリと近付く。

相手の攻撃をいちいち待っている時間も無い。手に持っているアサルトライフルを目の前の一匹に撃つとスラスターを上手く使いレイヴンの頭上へ舞い上がる。

同時に背後から一匹、右から一匹飛びかかって来る。頭に何か埋め込まれているのかその生体兵器の連携は機械よりも精密で完璧で

あつた。

レイヴンは頭上と右から来るバケモノをバスターブレイカーで掴むと容赦なく真つ二つに裂いた。体内からは血と臓物、そしていろんな人工物をばらまき、海へと落ちて行つた。

残つた背後の一匹をレイヴンは素手で首を掴み、暴れる生体兵器の手足をバスターブレイカーで挟み、引きちぎつていった。

抵抗力を失うとショットガンでその頭を吹き飛ばす。

「生ゴミが……！」

レイヴンを一時的に追い払つたAMIDAに攻撃を仕掛けているのは千冬である。

全身から伸びる触手をかわして一夏の為に時間を稼ぐ。四方から来る触手を目にも止まらぬ速さで切り落とすが直ぐに再生して襲つて来る。一夏は零落白夜を発動すると疲れ切つた体に鞭を入れるように胸の中のコアが痛み出し意識を保たせる。

両手で剣を持つと一夏はAMIDAの真つ正面から突進する。巨大な生体兵器の中心で薄ら笑っているプロシュを今度こそ仕留める為だ。雪片を振り上げエネルギーの刃はAMIDAを斬り裂けるだけの大きさまで巨大化する。三日月状に伸びる蒼白の刃、一夏の果断な行動は幸をなす。AMIDAの触手は既に千冬を絡め取り、ISSスーツの中にまで侵入しまさぐるように這い回る。

気持ち悪さに眉を潜め、プロシュは余裕綽々と無抵抗の千冬を見上げた。

刹那、プロシュに突風が吹き抜けAMIDAはこの世の物とは思えない脳を掻き回すような奇声をあげた。

プロシュは豁然とさとる。

自分やAMIDAが気付かぬ内に一夏に斬られたと。千冬を拘束する触手は力無く抜け落ち、巨大なAMIDAは切り裂かれて絶命する。

呻き声も無くその巨体は海へと落ちて行き、海中の中へ消えて行く。

「……終わったか」

『まだだ』

突然、スラスターのホルスの眼が開きフォグシャドウの声が一夏の頭に響いた。

「まだって？」

『奴は私達の下にある無人島に逃げた。相手も満身創痍だ。殺れ』

一夏は頷くとフォグシャドウの指示した無人島に向かって降下する。プロシュを生かして置けば次にどんな事をしでかさかわからない。

無人島の森林の中へ降り立った一夏がプロシュを見つけ出すのはそう難しい事ではなかった。満足に動ける訳もなく木にもたれかかるようにして立っていた。

奇人変人のプロシュに最大限警戒して歩む一夏。

「私を殺すのか？」

顔を木に向けたままプロシュは問う。

「ああ」

「本当にお前に殺せるか？」

エネルギーの無い雪片は以前弾かれたが今回は貫ける自信がある。

「やってやるさ」

「そう……なら殺してみろ。お前の死の現実がある限りお前の本性はレイヴンと大差ない」

瞳を閉じて一夏は無言で駆け出し雪片を目の前へ突き出した。金属のこすれる音がして一夏は目を開けるとブロシュの腹には雪片が突き刺さり、血を吐き出して俯いた。

「俺の本性か」

雪片は粒子と化して消えるとブロシュの死体を後に飛び立とうとする。

「ワタシガ……もうシンダとオモッタカ」

ブロシュの声がして一夏が振り返ろうとするが一夏の胸には6mはあるブレードが飛び出しISSコアを貫いている。

「お前はもうオワリダ。死ね！ 織斑一夏！ 地獄へ落ちろ！」

「ぐっああああ！」

暮桜のコアは損傷して一夏の手はだらんとぶら下がり口の端からは涎と血が混ざって流れ出た。白式は自動的に解除されISSスーツを着ただけの一夏がうつ伏せになって倒れた。ブロシュもさっきの刃傷で息も絶え絶えでブレードを杖のようにして立っている。

「人生に3度めハ無いゾ」

「一夏ア！」

一夏の後を追って千冬の目に飛び込んで来たのは最悪の光景である。残された最後の家族はたった今、ブロシユによって潰された。静かに憤る千冬は理性の鎖を食いちぎり、ブロシユに挑む。

ブロシユの首を掴みひっきりなしに剣の柄で殴り、大木に打ち付けた。

「死ね、お前の弟と共に！」

「その時は貴様も道連れだ」

ブロシユに勝ち目は無く体もともに動かないでいる。反撃と云えば言葉で詰る事と手に持つブレードを振り回す事だけだ。

打鉄九式のバックユニットがブロシユの方へ向けられ内蔵されたプラズマ砲が彼の装甲を溶かした。何本もの木を貫いてブロシユの体は数十m先で止まった。

大木にしがみつくブロシユの頭を鷲掴みにし、背中から手を入れて胸を貫通させた。千冬の右手にはISコアがありそれを容赦なく握りつぶし白鳳輝で頭を跳ねた。

「あの世には1人で行け」

コアを無くしてブロシユは完全に息絶える。千冬の意識はもうブロシユには行っておらずISを解除して一夏の元に駆け寄った。

「一夏、しっかりしろ！ 一夏ア！」

プロシユ・デユノアは死んだ。何日間も戦っていたようなそんな気がするがこれは3日4日の話しなのだ。

戦いを終えて全員が帰って来た時、レイヴン以外全員の表情が暗く曇っていた。

一夏は今、生命維持装置を取り付けられている。ISコアが自動的に修復されるのを待つしかないのだとても、とても長い時間がかかるだろう。

シャルの話しと一夏のISコアの件で彼が2年前に死亡しているという事を知った千冬や鈴、箒は言葉を失った。

幼なじみが肉親が死亡していたなど誰が気付くであろうか。悲しみにくれる中病室のエドワースだけは全く別の方向に気が行っていた。

（例の薬を投与してレイヴンに異常無しか。レイヴンにはもっと強くなってもらわないとなオラオラ）

エドワースはレイヴンに飲ませた錠剤を摘むとゴミ箱へ捨て、怪しくわらった。

（彼の計画は最終段階。また一歩近付いたな。レイヴンとパルヴァライザーが共に滅びるその日が）

織斑一夏、凶刃に堕ちる（後書き）

シャルロット・デュノアの父、ブロシュという名前の由来は戦闘機からきています。

原作でもちよつと外道でしたのでその黒い面を強調しました。シャルパパの存在は一夏の心境の変化に最も影響を与えた事でしよう。女の子を守る頑張る男の子を書く為には最適な悪役でした。

前述通り、一夏とシャルをメインにした為、IS学園攻防戦の回からレイヴンやACの影が薄くなりました。

ストーリー構成難しさを痛感しました。

私もまだまだだなあ……

レイヴンの裏切り（前書き）

夏休み暇だなー。今回性的シーンがちよびつとだけあるんで規制に引っかけたたら編集します。大丈夫だと思うけど。

次話は死霊のはらわたでも見ながら考えるか……

レイヴンの裏切り

統合そして分裂、有史以来の人類はこれの繰り返しで出来ているだろう。デュノア社はプロシユを失い壊滅状態に陥り、不正な技術が全てフランス政府に漏れてしまいデュノア社は完全に世界から名を消し去ってしまった。

デュノア社を失って援助を受けられなくなっている亡国機業だが宛はある。イタリア政府の上位層の一部は亡国機業と繋がりを持っている。亡国機業とジャック等は互いに自分達の計画を明かしておらず利用出来るからという理由で手を組んでいる。

だが、ジャックの計画とスコールの計画に急変を迎えるのであった。

ジャックの駆るAC“フォックスアイ”は頻繁に亡国機業の本部を留守にして世界中を飛び回っている。その真意は鳥大老なら知っていただろうが気難しい性格の彼は誰が質問しても一切答えずにくた。

世界各国で目撃例が出ているACに似た青い機体、パルヴァライザー。ジャック達がいた世界ではジナイダーとあの青年が破壊した。しかし、パルヴァライザーの統括機構であるインターネサインは突如として失踪。一応の安寧が訪れた訳だがインターネサインは目標をこの世界に移して水面下に潜みパルヴァライザーを作っていたのだ。交戦報告が無いのは敵がこの世界の技術を観察している為だろう。

もう一つのレイヤードの管理者、それがインターネサインだ。

あの時は未完のままでジナイダーとあの青年が共闘して破壊したが今回はそのどちらも居ない。ジャックの懸念はインターネサインの所在が不明である事であった。

今日もフォックスアイで飛び回っていたジャックは亡国機業の本部に戻って直ぐに鳥大老を自室へ呼び出した。ジノーヴィーもエヴ

アンジエも意志はジャックと共にあるのだが単独行動が目立つ。バーテックスの同士であり尚且つ、組織のNo.2である鳥大老のジャックからの信頼は語るまでもなく厚い。

50歳に差し掛かったとは思えない屈強な肉体の鳥大老はジャックの呼び出しに応じて彼の部屋に向かっていた。

途中、エムとすれ違うものの挨拶の1つも無く通り過ぎて行く。髭をいじりジャックの部屋の前に来るとドアを叩いてみる。

ノック無しに入る事を彼は異様に嫌うのだ。

「ジャック、私だ」

「入れ」

許可がありて鳥大老はドアノブをひねりジャックの部屋に入るとまず一礼する。

そして、適当な椅子に腰掛けると腕組みをした。部屋は整理され机の上には書類等が何も置いていない。重要な情報を盗まれては堪らないので作戦や機密事項は全てジャックの頭の中に入っている。

「ジノーヴィーが作戦を開始したぞジャック。それで用は？」

「パルヴァライザーはISの戦闘データを吸収しつつある。もしパルヴァライザーが完成すれば我々では破壊不可能だ」

「そんな事を言うつもりで私を呼んだ訳ではないだろう」

「IS学園にいるあの男の力が必要だ。それに奴にはもっと強くなつてもらふ」

「どうする気だ？」

「奴をバーテックスに引き込む」

「あの男をか？ 無理だな」

「いや、ちゃんと手は打つてある。数日すればわかる」

ジャックの表情は自信に溢れ、鳥大老は不安感が胸をよぎる。IS学園に少なからずも情があるレイヴンがバーテックスに寝返るかすこぶる心もとない次第であつた。

レイヴンの存在が世界に露呈してから世界政府の内情は少し荒れ模様だつた。

男性と女性が戦争を起こせば女性の勝利は揺るぎない物であると言われていた事を一体、何人が覚えていようか。一夏が男性側について大した戦力にならないと軽視していたがレイヴンなら話は変わつて来る。聞こえてくる戦果だけでもその力量を計るに十分な材料だ。

世界政府の決定でとりあえず、レイヴンはIS学園に放置するという結果でまとまつたのだ。

重要な問題は1つ片付いたかに見えたが実はまだ残っている。シヤルと一夏を助ける為にフランスがどれだけ手を貸してくれただろう。当然、その見返りはIS学園に要求された。

見返りの内容はなんとレイヴンを借りるという物だつた。ISの戦闘データはそのまま他のISも転用出来る。

最高クラスの戦闘データの導入はフランスのISの性能を上げるに最も手っ取り早く簡単な作業なのだ。

IS学園側に断る権限も無くフランス政府の要求を受諾した。

その事実を知らされたのはレイヴンがフランスに発つ1日前だった。

「そんな訳で明日からフランスに行ってもらうぞオラオラ」

「……唐突過ぎるぞ」

「まあ、フランスには私とお前。後、ラウラを連れて行きたい」

「織斑先生と山田先生はどうした？」

「織斑先生は弟君の件でだいぶ参ってるみたい。山田先生は世界中で現れた変な機体の調査。だから私が行く事になったオラ」

「ラウラの同行は許可されているのか？」

「おう」

世界政府がレイヴンの存在を許した矢先、狙い澄ましたかのように恩を売っていたフランスからの招集があった。エドワースからの薬も大した副作用も無かったので良かったと言えば良かった。

「お前のリヴァイヴの準備をちゃんとしておけよオラオラ。明日は結構大事な日になるからな」

エドワースの声は弾みまるで遠足にでも行くようは雰囲気である。彼女のいついかなる時でも軽いノリが長所であり短所でもあった。最低限の内容をレイヴンに伝えたエドワースが部屋を去るとレイヴンはベッドに上体を倒して白い天井を見詰めていた。解せない点は幾つかあるがそれをいちいち探るのは命を縮めかねない。

この世界に来て、傭兵としての経験を生かしISの操作を瞬く間に覚えて代表候補生2名を全く寄せ付けられない実力を見せ付けて来た。IS学園の教員や生徒は口々に嘆賞しているものの女性が絶対と考える者は物陰でレイヴンを冷罵した。

女尊男卑のこの世界で男性を嘲る者は少なくなく、およそ世界政府の連中は殆どコレである。国家代表に匹敵する実力は少なからず男性の士気を高める。

政府はレイヴンを消したくて仕方がないのだ。しかし、死に物狂いで暴れる鴉を仕留めるのは至難、たった1人に国の重要戦力を削ぐのどうしても避けたいというのも事実だ。

消したくても消せないもどかしさを押さえ込み敗北感が積もっていた。

開ききっていたレイヴンの瞼は今にも閉じそうとうとうとと睡魔がやって来る。

四肢の力を完全に抜いてレイヴンは眠りに落ちて行った。

エドワース、ラウラと共にフランスに発ったレイヴンは明朝に目覚めた時から妙なわだかまりを感じ胸の中をくすぐっていた。ここ最近レイヴンと過ごす時間が少なかったラウラにしてみれば少人数での行動はレイヴンと一緒にいる機会が多くなると1人喜んでいた。飛行機内ではレイヴンの隣りの席に座り、頬を赤らめていた。

軍人ではなく恋する乙女の顔になるラウラはクラリッサの指示を思い出して必要以上にレイヴンに接近した。

豊麗な少女はつぶらな瞳でレイヴンを上目遣いで見つめた。あどけなく迫るラウラを無碍に突き放しはしないが内心、どうしていいか解らないでいる。

性交の経験があるレイヴンだが恋愛の経験は一切無い。飛行機が

飛び立つてもラウラはまだベタベタと引っ付いて来る。

「フランスに行くのだからシャルルを連れて来ても良かったんじゃないか？」

ようやくレイヴンが言葉を発するが内容がシャルの事なのでラウラ自身おもしろくない。

「シャルにとって今のフランスはトラウマだから来たがらないさ」

「お前はせっかくの夏休みをこんな事に使ってもいいのか？」

「私は構わない。お前と一緒に居れるならな……」

語尾は小さく呟くように言い顔を紅潮させて両手で自分の体を抱いた。レイヴンは無反応だったが、言った本人であるラウラは急に気恥ずかしくなり支給された毛布を頭まで被ってスッポリと顔を隠してしまった。頭をかいてレイヴンは窓に顔を向けたまま固まる。優雅な空の旅は順調に続けられていた。民間機を狙う輩も居ない事だし、レイヴンが放神し眠り込もうとする。ふと、隣りのラウラに目が行った。

無防備な体と心、可愛らしい寝息を立てて毛布にくるまっていた。時折、ピクンと体を跳ねさせる所がまた愛嬌がある。

戦っている時の毅然とした態度は影も形も無い。レイヴンは固唾を飲み毛布をかけて眠った。数多の誘惑にも無視続けていたがたった一回、無防備な姿を見ただけでレイヴンは初めて心を妖しく揺さぶられた。しかしその熱情は後ろの席に座っているエドワースの馬鹿馬鹿しい程大きいびきで完全にかき消されてしまった。

フランスの天候は雨、先日から淫雨に見まわれている。

——このままわだかまりも流してくれれば。

レイヴンは心の中で叶う筈の無い願いを願った。フランス政府が呼び出したのはフランスが誇る最大なアリーナであった。

3人を迎えたのは物腰のやわらかい初老の男性。戦闘データの前にまず実際のレイヴンの技量を知る為に彼はフランス軍の精鋭3名を相手にする事となった。

国家代表クラスなら問題なく撃破出来るレベルだ。列座の重役達にしてみればこんな余興は他に無い。

エドワース、ラウラの両名は政府の重役達と同じ席でレイヴンの戦闘を観覧するのだ。

今回はエドワースの薬物が無いのでいつも通り制限時間付きの戦いになる。

アリーナには既に3人の操縦者がISを纏って待機している。リヴァイヴを軍用にカスタマイズした物だろう。

レイヴンはリヴァイヴを装着しカタパルトから射出されアリーナへ踊り込む。

バスターブレイカーの刃を展開し臨戦態勢に入る。敵方はレイヴンの動作一つ一つに警戒心を怠らず烈女達は政府から渡された武装を召喚し銃口をレイヴンへと定めた。額と脾腹と胸にひりひりと熱を感じたのは錯覚などでは無いだろう。

現に軍の精鋭達はレイヴンの感じた箇所を狙っているのだ。1人がライフルのトリガーを引く。その場の静寂が引き裂かれそれが開戦の合図となった。

細かい動きをバーニアを使って制御してミサイルのような物量で攻めてくる攻撃にはスラスターで回避した。

レイヴンの真に恐るべきはバスターブレイカーではなく、瞬時に行う迎撃と長年の傭兵としての勘を生かした回避率だ。

敵方の1人に腕の良いスナイパーが居るがさっきからレイヴンの変幻自在な動きに一発も当てて居ない。

凄絶な戦いが展開され、軍の操縦者の面々が押され始めた頃だ。フランス政府の重役が3人にある指令を送った。

口吻が少し歪みその指令を嬉々として受け入れると今まで持っていた武器を全て破棄して代わりに新たな武装を召喚する。

多量の粒子が集束され武器を生成していく。1人は肩に装着する規格外の大きさのスナイパーキャノン。

残り2人の武装は変わらずアサルトライフルだが腕と同一化させるタイプの物だった。

（粒子の量がかなり多いな……確かこの手の兵器は何と言ったかな？）

レイヴンに考える暇を与えず4ヶ所の銃口からアサルトライフルの弾丸を一頻りに放つ。少し回避が遅れアサルトライフルの弾がレイヴンの右足を掠めた。本来ならシールドか絶対防御が作動する筈だが何の反応も無く、レイヴンの足から血が流れ出した。

（なるほど……山田先生が言っていた絶対防御を貫通させる殺傷目的の兵器か）

驚く程に冷静に物腰を整理し、死と隣り合わせとなった戦いに歓喜に似た感覚を覚えレイヴンは動き出す。

そんな戦いを不安な気振りで眺めるのはラウラである。

「先生、あれは」

「ああ、IS戦では禁止になっている筈の兵器だオラ」

「ならこんな試合は無効だ……」

力を試すのに相手を殺す兵器は不要だ。

「試合を止めて下さい」

ラウラは立ち上がり政治家の1人に言うが返って来たのは予想だにしない言葉だった。

「イレギュラー要素は抹消する。我が国はそう判断した」

ラウラはこの時全てを悟った。戦闘データがどうのこうの言っていたがそれはおびき寄せる物に過ぎない。

佇立し虚脱感に見まわれたラウラだが直ぐに憤怒が湧き上がり、監視の目も気にせずにシユヴァルツェア・レーゲンを展開しようとした。列座の政治家は依然、焦る素振りも見せずにレイヴンの闘いを見詰めていた。

ISを身に纏いレールカノンに砲弾を入れた時だ。ラウラの首筋に痛撃が加えられ彼女はそのまま気を失った。

違法兵器を使用されてからレイヴンは予想以上の苦戦を強いられていた。被弾率は抑えられているが時間がけを消耗して行き稼働時間は1分を切っていた。これ以上、手をこまねいている余裕は微塵も無い。意を決してレイヴンは3人の懐へ飛び込み攻撃は左のバスターブレイカーで防ぎつつ、右の鉄はスナイパーキャノンを装備する女の胴体を掴み、頭上へと持ち上げた。

「は、離せえ！」

ジタバタと暴れる鉄の中の女をレイヴンは冷淡な眼差しを向けてグツとバスターブレイカーに力を入れた。

胴体は真つ二つに分けられてその女は絶息する。レイヴンの頭に血の雨が降り注ぎ体やアーマーを赤黒く濡らした。

刹那の時に散る仲間の命は余りに儚く、寂しい。残りの2人は烈々たる闘志を燃やしてレイヴンに挑む。

飛来する操縦者達を身体を絹のように簡単に引き裂く残虐な刃を

以てレイヴンは後手に回る。だが、レイヴンの後方、それも重役達の観覧席から数十本のニードルが発射された。行き先はレイヴンの相手の操縦者で無情の針は若い女性の胸、腹、腕、喉へと突き刺さり惨殺した。

絶対防御を貫通する所を見るとその攻撃が違法兵器であるのは明確であった。全身、余すところなく串刺しにされた身体はアリーナの壁に貼り付けられ標本のようであった。観覧席から飛び出したのは1機の戦闘機。

白をベースに黄色いラインを刻まれたその機体は空中で一回転すると驚く事にISに変形した。カナダで開発された可変IS“クオヴァデイス”、エドワースの専用機だ。エドワースの脇にはラウラが抱えられている。

観覧席は酸鼻の極みである。フランス政府の重役達と見張りを血の海に悶えさせたエドワース、鮮血をはらんだ風がレイヴンの鼻をついた。

「行こうレイヴン」

「その前にお前に聞きたい事が――」

クオヴァデイスの手首から麻酔薬を仕込まれたニードルが射出されレイヴンの腹に刺さった。瞬時に身体を自由を奪われ朦朧とした意識のままレイヴンは地に伏せた。

エドワースは天井に穴を空け、アリーナを包む血なまぐさい空気を放出させた。

リヴァイヴを解除したレイヴンを抱えてエドワースはクオヴァデイスで更に上昇すると。

「トランスフォーム！ 変形はこの掛け声が一番よね」

戦闘機形態になったクオヴァデイスは天井の穴を通りアリーナから姿を消した。

後々、アリーナでの異変を聞きつけた政府の用人等はレイヴンの仕業として捜査にあたっている。

亡国機業の司令室にはエムとスコールの2人がいた。基本的に無口無表情なエムだがスコールの命令に反する事は無い。

脳の中樞に仕込まれたナノマシンの所為である。これによりスコールは違反したエムに対して生殺与奪の権限があるのだ。

3人の中で最も理性的で大人しく見えるスコールは腹黒く、凶悪な本性を隠していた。

「プロシユの攻撃で織斑一夏は瀕死、それによって織斑千冬も精神的に追い込まれたようだ」

「わかったわ。現段階で私達の邪魔な存在は無い。と、受け取っていいのかしら？」

「そうだ」

「代表候補生も名ばかりの物……。私達の明日は近いわね」

莞爾と笑うスコール。ウチに隠した憎悪の強さはメンバーの中で最も強い。

先代亡国機業では成し遂げられなかった事がスコール等が遂げようとしているのだ。旧イタリア軍の亡霊、彼女達はそう呼ばれていた。

司令室の直ぐ近くには格納庫がある。

スラスターの轟音を響き渡らせて戦闘機形態のISは開きっぱなしのドアを通り抜けて空中で一回転して人型に変形した。

「ただいま。スコール、オータム、ドエム」

小脇にレイヴンとラウラを抱えて登場したのはIS学園の教員、エドワース・フランシだ。彼女を迎えたのはエムとオータムだった。

「誰がドMだ！」

「いいじゃん。実は本当にドMなんじゃないの？ 悔しい……ビクンビクンってな感じでさ」

怒る気力も失せたのかエムは黙ってまま首を横に振る。

「長期任務お疲れさん」

労をねぎらってくれるオータムだが言葉の中に一切の気持ちがない。もっていない。

「エドワース、レイヴンはジャックの所にこの小娘は拘束しろ」

「了解。どうやってエロく縛ろっかな。ここは無難に亀甲縛りかな
オラオラ」

「普通に拘束しろこの変態！」

ラウラを地下室に入れとりあえず両腕を吊し上げ足が着くか否か

という高さで固定し未だに気を失ったレイヴンはジャックの下へ運んだ。

激痛が頭に走って気絶したラウラは水の滴る音に起こされた。薄暗い部屋に湿った空気が漂っていた。いまいち記憶がハッキリとせず一体誰がどの様にして自分をここへ連れてきたのか解らなかった。常に爪先立ちを強制される立ち方は辛く力を抜けば手にロープが絡み付く。

首輪をはめられ鎖が部屋の壁に繋げてある。シュヴァルツェア・レーゲンは没収され肌に離さず持っていた愛用のナイフも無くなっている。拷問に対する訓練もラウラは受けている。

どんな苦痛を与えられようと口を割る気は無かった。重厚な扉が開きスコールが現れるとラウラは全身に力を入れて口を閉じた。亡国機業の首魁である彼女の瞳はどこか妖しい力を宿しており見詰められると意識がどんどん彼女の方へ行ってしまうのだ。ラウラは胸の内をくすぐるような気持ちであった。

何も語らずスコールは木製の椅子に腰掛け苦しい態勢のラウラを舐めまわすように見た。生殺しにされている気分で仕方がないがこちらから何も言わないと決めているラウラは更に口を固く閉じた。

それから数時間、両者の間に会話は無くただいたずらに時間だけが過ぎて行く。

疲労でラウラの足がぶるぶると揺れ始め熱い吐息を吐いて頬を赤くしながら相手の出方を待った。スコールが何を問うか何をして来るかを考えていた。

同じ頃、レイヴンは目を覚まし眼前にはジャックを筆頭に古参レイヴン鳥大老、超新星エヴァンジェがいた。懐かしい面々であった。

「ジャックか……最近の事件はお前が首謀者だったのか」

「それは誤解だ。アグラーヤの件以外は全て亡国機業の仕業だ」

かつてレイヴンズ・アークの上層部を追放し数多のレイヴンを統括して見せたジャックの能力は良く知っている。

だが、当時のレイヴンからしてみればジャックなど興味の対象ではなかった。

自身の気持ちがどうであれ結果的にはレイヴンはジャックの下にいた事になる。

「最近の青色の機体については君も知っているだろう」

「話しくらいはな」

「あれは旧世代の遺物だ」

旧世代の遺物という言葉はレイヴンにしてみれば嫌な記憶しかない。初めて自分を死に追いやった特攻兵器、雨のように降り注ぐあの破壊兵器を思い出すだけでレイヴンの表情は険しく力のこもった両手の平の皮膚が裂けて血が流れ出ていた。

「青色の機体の名はパルヴァライザー、パルヴァライザーは戦闘を繰り返す度にそのデータを蓄積し永久に進化し続ける兵器だ。奴を完全に倒すにはその統括機構であるインターネサインを破壊するしかない」

聞き慣れない言葉ばかりだがレイヴンは大方の内容は理解出来ている。そして自分が次に迫られるであろう選択も薄々だが察していた。

「インターネサインがこの世界にあり所在が分からない。あの存在がある限り我々人類に未来は無い。レイヴン、バーテックスに入れIS学園はお前の居場所じゃない」

「ジャック、お前の口車には乗らんぞ」

一切の拘束もされていないレイヴンは隠し持っていたナイフをジャックの喉元に突き付けるが彼は顔色一つ変えずにいた。

「特攻兵器にやられた屈辱よりもお前に対する抑えられない嫌悪感が何倍も強い！」

レイヴンは昔からジャックの事が気に食わなかった。表は出ずに裏で工作し相手を倒し常に感情を読ませない姿勢が腹が立つ程、鼻についた。

「ほう、君が私を好かないのは構わないさ。嫌いならそのナイフで私を殺せばいい筈だ何故しない？」

「——！ 斬つてやるとも！」

ジャックの胸倉を掴んで再びナイフを振り上げた所でレイヴンの手は止まる。

「お前を目覚めさせる為にアグラーヤまでけしかけて見いだせたのは戦い方だけのようだな」

「俺は……」

——IS学園はお前の居場所じゃない。

ジャックのその言葉が嫌らしいくらいにまわり付きレイヴンを迷わせる。

「ぬるま湯に浸かりすぎて自分の存在価値も忘れてしまったのか？
地を這い、草を食み、泥をすりながらも目的を完遂する。それが
レイヴンが傭兵という物だろう？」

返す言葉が見つからない。

「役に立たない感情など捨ててしまえ。レイヴン、答えは明日聞こう」

ジャックと鳥大老が部屋から消えるとエヴァンジェがレイヴンに
迫り、地面に落ちたナイフを拾い上げてしまう。

「付いて来い。お前の連れに会わせてやる」

久しく見ない間にエヴァンジェは変わってしまった。若く軽薄な
態度が減り緊張感を持った偉丈夫で自身の力を過大評価する自信家
でもなくなった。

「ここだ」

「エヴァンジェ」

「黙れ、お前はさっさと決断しろ」

突き放すように言いエヴァンジェは行ってしまった。レイヴンがその部屋のドアを開けて中に入るとベッドの上で横たわるラウラがいた。だいたい痛めつけられたらしくISスーツの至る所が破れて素肌が覗く。

「レイヴン！」

ラウラは自分の瞳に映ったレイヴンを見て歓喜の声を上げる。

ラウラの隣に腰掛けると彼女の肩に手を回して強く抱き締める。突然の出来事に少し緊張気味だが次第に解けて行き小さな少女の手は自分を抱く分厚い皮の手の上に重なる。

「レイヴン……どうしたのだ？」

「何も言っな」

2人はそのままベッドにもつれ込むとラウラのISスーツを慣れた手付きで脱がし始めた。四肢の関節の力を抜いてレイヴンを受け入れようとするラウラに覆い被さり、指と舌を使い彼女の胸、腹、内股に陰部を責め立てる。顔を真っ赤にしてレイヴンの手の中で乱れ目に涙を蓄え汗に濡れる姿は艶やかで美しい。

シーツを噛み締めて声を押し殺し、身を右へ左へとくねらせる。

その白く綺麗で触れば指が埋まる程柔らかな肌を遊ぶ度に鼓動するのが伝わって来るのだ。

傷口を舐めてやれば体はピクツと反応する。

絶え間なく与えられる快感に浸り、何度となく絶頂を迎えてラウラは息を切らして再びベッドに横たわった。

今度はいささかの力も感じられず糸が切れた人形のような様であった。

「ハア……ハア……」

「ラウラ、明日お前はIS学園に帰れ」

「え……？ お前はどうする気だ？」

「俺はジャックと共に行く」

「そんな……！ 私達を裏切るのか！？」

「そうだ。許しは乞わない。だがこれが俺が出した結論だ」

レイヴンのその広漠な瞳の奥の凄絶な闘志は高く熱く燃え上がり炎の渦のように巻き上げている。あまりにも突然過ぎてラウラは虚脱と絶望に気が狂いそうになる。

「嫌だレイヴン……ならば私も残る！」

「ダメだ。そうなればお前は生涯を裏切り者として生きていく」

「それでも構わない！」

「ラウラ！ お前の愛した男はもう居ないんだ！」

ラウラの心を貫いた悽愴たる一言はどんな拷問よりも辛く痛く、傷付けた。

涙は出ず、離れて行くレイヴンの背中を見てラウラは笑い声を漏らした。

そこで初めて大粒の涙を流し、枕に顔を伏せて悲しみに暮れていた。

部屋の外にはジャックが居た。

「よく決断してくれた。お前が今よりも過去を選んだ事、感謝するぞ」

（恨んでくれラウラ。だが、戦い続ける事が今の俺の生きて行く証なんだ……！）

ラウラの気を失わせてエドワースはクオヴァデイスを駆り、亡国機業の本拠地を発った。そしてそこでエドワースは千冬と代表候補生等にレイヴンの裏切りを告げた時、千冬達の心配は言葉に出来ない憤怒へと変貌した。

薄暗く巨大なラボの中央には化け物のように大きいスーパーコンピュータ“インターネサイン”がそびえ立っている。

その中でパソコンの画面に食い入るように見詰めるのは束であった。インターネサインの解析は進んだ。

「ふぁ……眠たいなあ」

キーボードを叩きながらまぶたをこすり束は作業を続けた。

「パルヴァライザーは何機が作ったしそろそろやろっかな」

遅くノロノロとした指の動きは速くなりキーを叩き始めるとインターネサインの中央部が青い光を放ち、中から浮遊する機体が現れた。コードに繋がれている為、満足に動けはしないがその巨体は実

に威圧的であった。

『インターネサインノ縮小化ハススンダカ?』

「もう完成するよー」

『ヨロシイ……』

飛行型のパルヴァライザーの胸が開き中から無数の触手のようなコードが伸びると束の体にそれを絡みつかせ持ち上げる。

そしてゆっくりと束をパルヴァライザーの体内へと入れた。

『ダウンロードを開始』

パルヴァライザーと束の混ざった無機質な声が脱け殻となったインターネサイン内部に響く。データを読み込む度にパルヴァライザーの体は青に変色し、機体はどんどん大きくなる。

AC戦、MT戦、IS戦、の戦闘データを恐るべき速さで吸収し、ダウンロードが終了するまでに5分とかからなかった。

『ブロシュ・デュノアは私の計画に大いに役立った! さあ、世界へ宣戦布告だ!』

巨体のパルヴァライザーの背中のハッチが開き、無数の特攻兵器が夜空へと射出される。

世界が特攻兵器とパルヴァライザーに恐怖し跪く日は近い。

動き出す鴉達（前書き）

最後の更新からちょうど1ヶ月も経ってたのか。

久しぶりの更新だなー。1話をどこで区切るかを決めないとなかなか話が進まないんですね。

動き出す鴉達

8月15日、多くにとってそれは突然に起こった。無数の特攻兵器による世界の軍事基地の襲撃、ISと通常兵器を狙った破壊行動は世界の軍事力を弱めて行き今や無傷のISの保有数だけならばIS学園が最多という結果となっていた。

首脳陣は急遽会談を開いたが話しは進展する気配を見せずに停滞状態にあった。大掛かりな調査を行えばパルヴアライザーの尻尾くらいは掴めただろうが、彼等はそれをしない。

世界にあれだけの被害を与える兵器に対抗の術は無く我が身可愛さのあまり敵の報復を恐れ手を出せずにいるのだ。

特攻兵器の物量とパワーに対抗し得る兵器はこの世界に存在しない。束の叡智とパルヴアライザーの力が合わさった今、人類滅亡のカウントダウンは既に始まっている。

自らの生きる証を見いだしたレイヴンはIS学園を離れジャックの率いるバーテックスへと移った。レイヴンを心から愛したラウラはその最愛の人に裏切られ虚脱感に捕らわれ半ば放心状態にあった。エドワースと共に帰還し彼女が嘘を並べててもラウラに言葉を発する元気は微塵も無かった。離反を知った皆はショックや憤怒を露わにして口々に言い合っていた。

「オッサンが裏切った……？」

「そんな……嘘……」

鈴とセシリアは驚きを隠せず、呆然と佇立しシャルや箒は静かに怒っていた。

だがただ1人、織斑千冬は何も口にしないでかつてレイヴンがいた保健室のベッドに座り俯くラウラに視線を落とした。

「フランシ先生、お前等は席を外してくれ」

エドワースはわざと腕を押さえ殊更に足を引きずり生徒を連れて保健室を後にした。千冬や生徒達に見えない位置でエドワースは頬を釣り上げてほくそ笑んだ。

千冬と2人になってもラウラは依然、何も語ろうとはしない。ただ俯き納まりがつかない自分の欲求に吞まれていた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ。お前に真実を語ってもらう」

エドワースの証言を頭からは否定しないしラウラのショックも教官だった千冬ならわかっている。だがあの毅然としたラウラが一切を話さないのは明らかにおかしい。他にも千冬が何かを言っていたがラウラの耳には届いていない。

「顔を上げる」

言われるままに顔を上げると虚ろな右の赤い瞳が千冬を見た。そこからラウラは走馬灯のように今までの記憶を振り返った。

「お前が悲しむのは無理は無い。が、お前は一軍を率いる隊長だ。世界がこうなった今、自分に何が出来るか、何をすべきかを考えなさい」

千冬の口調はいつになく優しい。自分の生徒はやはり大事なのだ。出来損ないの烙印を押された自分をここまで育て上げた恩師、ここでありのままを話せば最も愛した人を裏切ってしまうのではないかという疑念が生まれ、寡黙を決め込めば最も敬う人を裏切ってしまう。

ラウラが頭を抱えて苦悶し、懊惱し、混乱した。とても決められる物ではない。

決別の一言を放たれても乙女にレイヴンを忘れる事など出来ない。気が付くと目の前にいた筈の千冬は忽然と消え失せ、外は夕闇に包まれ誰も居ない保健室でラウラは枕を濡らした。

（私はどうすれば良いんだ……レイヴン、私にはお前を撃てない……）

こんな所で泣いている場合では無いというのに。ドイツに帰還し乱れた黒ウサギ隊を指揮しなければいけないというのに。

求めれば求める程に彼は遠のいてしまいレイヴンは深遠な闇の中に戻っていった。

戦う為に創られた彼女ではレイヴンを照らす事は出来ない。かと言って未だ自分の戦う意味すら見いだせないラウラではレイヴンと同じ位置には立てない。

何もかも半端な存在なのだ。しかし、そんなラウラでも放っては置けない者くらいはわかっている。散々、流した涙は枯渇し全くなかった。

金色に光る左目を眼帯で覆った。今やるべき事は泣く事ではなく学園に堂々と入り込んだスパイを排除する。

校内は静まり返り、寮にいるのは各学年の代表候補生くらいだろう。ラウラは人気の無い廊下を歩きその度に軍靴の足音が響き渡った。

（未熟な私でもあの女をみすみす好きにさせてはいけなくらいわかってる）

あの時、千冬が何故追及しなかったかは分からない。恐らく今のラウラには一生理解出来ないだろう。

ラウラは着けたばかりの眼帯を外しポケットへなおした。右足の待機状態のシュヴァルツェア・レーゲンが月に照らされて皎々としていた。

ACが保管されているのは地下二階の格納庫である。そこは学園の上層部や一部の教員しか入室が許可されていない。

エドワースはその出入りは自由である。レイヴンが駆る灰色のAC“ネクサス”は悠然と立っている。この鉄の巨人に一体何機のISと何人の命が奪われただろうか。そしてそのACを討つのもまたACである。

AC同士の戦いはリムの襲撃でエドワースは見ている。建造物や人民など毛筋ほども気にせずに戦う様は昨日の事のように覚えている。

いつになく静かなエドワースはレイヴンのパイロットスーツをコックピットに投げ込むとACが出撃出来るようにカタパルトが展開される。

「直ぐに帰還命令か面倒くさいなオラオラ」

カタパルトの先のシャッターを開け、少し熱をはらんだ風が入ってくる。

「さ、おさらばおさらば」

「やはりACを奪取しに来たか」

背後から声をかけられエドワースが振り返った先にシュヴァルツ

エア・レーゲンのレールカノンの砲弾が飛来し、エドワースはクオヴァデイスのニードルでそれを撃墜した。

クオヴァデイスを腕部のみ展開しラウラの砲弾を撃ち落とすのは流石と言えよう。

ラウラは瞬時にエドワースに集中し“ A I C ”で彼女の動きを封じ込めた。

展開を腕部に限定したのが徒となった。

完全にクオヴァデイスを展開させていれば飛行形態の圧倒的な出力で振り切られてしまう。

「乱暴だなラウラは。だいたいここは生徒立ち入り禁止だぞオラオラ」

「随分と余裕だな」

「お前はもう少し大人しくしてくれると思ってただけだなあ。レイヴンに捨てられたからさ」

刺のある言い方にラウラの拘束が僅かに緩んだ。多大な集中力を要する A I C を言葉で惑わせ動揺を誘えば断ち切る事はさして難しくは無い。

不安定な精神のラウラなら尚更、効果はある。クオヴァデイスは空中で変形し左右に飛び回り A I C を完全に断ち切るとそこから I S に変形し落下と同時に重い蹴りを放つて来た。ワイヤーを張って防御を試みるもののエドワースとクオヴァデイスの相性は群を抜いており、そこから発生する攻撃はどれも重く、防御し辛かった。

シュヴァルツェア・レーゲンの防御を打破しラウラが転倒するとすかさずそこへバルカン砲を叩き込み、両手足の装甲に細いニードルを突き刺して身動きを取れないようにする。

実力は千冬、真耶に次ぐというのは事実らしい。現一年生で最強

のラウラも容易く完封するのだから。

「邪魔者は消えたしさっさとトンスラするか」

エドワースがネクサスのコックピットに入るとキーを差し込みA
Cを起動させる。

『メインシステム戦闘モード起動します』

ここまでは習った通りに出来る。だがACの操作は非常に困難で
あり初心者撃つどころか歩行すらまともに出来ない。

操縦桿を握り、画面を見ると部屋の端でもがいているラウラが映
った。

『あー、あー、テステス。そんじゃあねラウラ。アタシの事は織斑
先生に適当に言っというてバイビー』

室内という事も気にせずエドワースはさっそくOBのハッチを開
いた。噴気孔にエネルギーが凝縮され今にも噴射しようとしたま
さにその時、カタパルトの出口から打鉄九式が現れる。疾風のように
駆け抜けて千冬は白鳳輝をネクサスのコアに突き付けるとエドワ
ースは思わずACの進行を止めた。

「ラウラの話しはやはり本当か」

『織斑先生じゃないですか弟さんの面倒はどうしたんですかオラ』

「黙れ……！ 逃げ場は無い降りてこいエドワース・フランシィ」

打鉄九式が入って来たカタパルトから紅椿、ブルー・ティアーズ

と甲龍そしてラファール・リヴァイヴ・カスタムが突入した。

最後にリヴァイヴを纏う真耶がドアから現れた。クオヴァデイス単機なら逃げ切る事は不可能ではない。

「レイヴンのオッサンに続いてフランシ先生もですか!」

自分の担任が裏切り者だったと知った鈴は剣幕に怒号する。

『鳳、アタシはレイヴンみたいに昨日、今日裏切った訳じゃない。元々あちらに居たんだよ』

今にも双天牙月で斬りかかってやろうかという程に怒りを覚えたが代表候補生はそこまで思慮に欠けてはいない。

「ならACは尚更、奪わせる訳にはいかない」

「そこから降りろエドワース・フランシ」

前面に千冬、後方に真耶、周囲には復帰したラウラを含めた代表候補生と筈が固めてある。今回の使命はACの奪還でありIS学園の者との戦闘は極力控えるようにと指示を受けている。

多勢に無勢、おまけにエドワースはACで戦闘を行うにまだ十分な技量は身に付けてはいない。軽く溜め息を吐いてACの座席が後ろへ下げ、コックピットからエドワースが姿を現す。

まだ諦めや焦りの表情が見えず警戒心を解除出来る状態ではない。

「お前を連行する」

千冬が目で指示を送り真耶がエドワースの背後に回る。

「織斑先生、君の弟さん、1人にしていいわけ?」

怪奇に笑い出し意味深長な言葉を呟くとその場にいた全員の背筋に冷えた汗が湧き出し千冬にしてみれば明らかに動揺を隠しきれてはいなかった。

「織斑君に何をしたんですか」

「さあ？」

振り返り様にISを展開し回し蹴りで真耶を吹き飛ばしそこから1秒もかからずにクオヴァデイスは全方位にニードルと凄まじい閃光と爆音を響き渡らせた。

光は目を眩ませ、音は耳を惑わせる。

閃光弾とは初歩的だが絶大な効果を発揮するシロモノだ。皆がみんな目と耳を抑えている隙にエドワースはコックピットに戻る。

「くうッ！ 逃がすか！」

ネクサスがOBを噴かし、爆風で室内の器具を吹き飛ばし圧倒的なスピードで動き出すと千冬は感覚だけを頼りに白鳳輝を振り抜いた。

結果的にネクサスは奪取されてしまったがそのACのコアには千冬がつけた傷が刻まれていた。

ACが奪取され荒れきった部屋に気を配りたい所だがエドワースが残したあの一言が気になってしょうがない。

打鉄九式を解除し千冬は部屋の事など放り出して1人、一夏が眠る病室へと急ぎ、その後を皆が追う。

荒っぽく病室のドアを開けた千冬の息は少し乱れていたが部屋の静けさとベッドで寝たっきりの一夏を見て安堵の溜め息を吐いた。

そして同時にエドワースにまんまと騙された自分に苛立ちを覚えていた。

暗い部屋で鈍く光を放つ暮桜のコアを見て一夏が生きている事が確認出来る。

「織斑先生！」

「山田先生、織斑なら無事だ」

ハツタリで良かったがそのハツタリに騙されたと考えるとどうも良い気分にはなれない。

レイヴンにACが渡りエドワースがあちら側と判明した。もしも向こうが本格的に攻めてくればIS学園に為す術は無い。

亡国機業の本拠地は移動しジャックやレイヴン等もそこに移住した。最もレイヴンはジャックやスコールの依頼を聞き各国の基地を無差別に襲い、血と灰にまみれた戦いに投じている為そこには居ない。現在はイスラエルの基地を壊滅させた所であった。

岩に腰掛けて自分が潰した基地を眺める。その隣にはサイレント・ゼフィルスを纏ったエムがいた。

黒煙が立ち込める廃墟を見てエムは息を呑む。稼働時間のギリギリとは言え7分で基地を破壊したのだ。

「エム、次はどこだ？」

バイザーを上上げて作戦内容が書いてあるデータを空中のディスプレイに映し出す。

「アメリカ。目標は銀の福音」
シルバリオゴスヘル

福音と聞き一瞬だが生徒達の顔が頭をよぎったが直ぐにアグラ―ヤとの戦いに記憶が塗りつぶされる。

「入隊から1日でこの扱いよう。随分と人使いが荒いな」

レイヴンが何を言ってもエムは何も話さない。彼女が言葉を発する時と言えば作戦の通達か亡国機業の面々との会話しか無くそれ以外には全く興味を示さないのだ。

レイヴンも元々、口数の少ない男だがエムがこつも反応しないのであればコミュニケーションの取りようがない。

さつさとエムは目的の福音があるアメリカへ向かいたいのだがIS適性が低いレイヴンは一度稼働時間の限界にまで達すると少しばかり時間を置かなくてはいけない。

入って日の浅いレイヴンの監視役として来たエムは彼を厄介者のような目で見詰めていた。腹の内を読ませない姿勢に疑いの色を入めた視線を送ってもレイヴンは顔色を変えない。

一体どちらが無愛想なのかわからなくなる。

「……エム、お前の顔は織斑千冬にそっくりだな」

何気なくエムの素顔を見た時の第一印象を口にしたに過ぎないがそれはエムに対するタブーである。粗雑なオータムもこの少女を怒らせないようにその事は言わないのだ。

眉間に深いシワを寄せてエムはバイザーの奥からレイヴンを睨み付け殺意を帯びた瞳が鬼火のように光っている。

エムはナイフを股に巻いているホルダーから引き抜き刃を指で優しく挟むとレイヴンへ綺麗に投射した。

切っ先がレイヴンの頬に突き刺さろうとした瞬間、ナイフはリヴ

アイヴのブレードによって折られ空中を流れて行った。

右肩だけを覆うリヴァイヴ、既にレイヴンは部分展開も可能な程に腕を上げていたのだ。

「失言だったようだな。それで織斑千冬と関係があるのか？」

ついさっきナイフを投げつけられたというのにまたエムを怒らせるような質問をするレイヴン。怖いもの知らずなのか単なる無神経なのか。

「私の事にこれ以上触れるな」

今度はレーザーライフルを突き付けて威嚇をする。今にも引き金を引きそうなくらいに感情が高ぶっている事を見抜くとレイヴンはそれ以上の質問はしなかった。

ISも展開していない状態で巨大なライフルに撃たれるのはごめん被る。

一夏よりも少し幼い容姿のエムは顔の紅潮を収めてサイレント・ゼフィルスを解除した。

「展開が可能になれば言え。作戦はそれから開始する」

それだけを言い放ちエムはレイヴンの返答も聞かずに座り込み壊滅した基地へ目を向けた。

（しかし軍事基地をたった7分で破壊か……スコールの言うとおりこの男は明らかな危険因子だ）

薫風にうたれて何も考えていないような顔でどこか宙を見ている姿からとてもそうには見えないが外見で人は決まらない。

1対1で戦えば自分の敗北は明確であるとエムは自覚している。ジャック等と亡国機業は協定を結んではいるが絶対的な壁が存在している。レイヴンはジャック側の存在だがスコールとしてはこの男をどうしても亡国機業側へ入れたい。

圧制を通じての平和を掲げる亡国機業にしてみれば強い味方は問わずに居て困らない。

(……スコールめこんな男のどこが。単独を好む奴は組織にいらない)

「エム……エム！」

「——！ 何だ」

いつの間にかブツブツと声に出して愚痴を言っていたをエムはレイヴンに呼びかけられて我に帰った。

「稼働可能だ。行くぞ」

「ああ」

スラスターを点火しようとしたちょうどその時だ。エムのプライベート・チャネルにスコールから通信が入った。

『エム、作戦は中止よ。直ぐに帰還して』

『どうしてだ？』

『理由は後よ。それとレイヴンにはそのまま作戦を続行させて』

『了解、通信終了』

「何をもたついている」

「緊急の作戦だ。私は今からロシアへ向かうお前はそのまま福音の奪取を続行しろ」

もちろんエムがたつた今、思い付いた嘘である。エムはそれだけ言い残し飛び立つとレイヴンの方にも通信が来た。相手はジャックだ。

「どうした？」

『話がある亡国機業の元本拠地に来てくれ。それとエムは居るか？』

現在の本拠地に呼び出さない所に意味深長なものが宿っている。

「居ない」

『なら構わない』

「続行中の作戦はどうする？」

『放棄しろ』

「了解」

通信が終わってレイヴンはベルトの形をした待機モードのリヴァイヴを展開する。

濃い紫色の装甲板が両手両足、胸部を包み込みヘッドギアが当て

られ背中に2基のスラスタが生成され後に4基のバーニアも装着された。

最後に両肩を攻防一体の兵器バスターブレイカーが覆った。展開までにかかる時間は0.01秒。

この速さは十分達人の領域に到達していた。傭兵としての戦闘経験がこれほどにレイヴンを昇華させたのかはたまたただの才能か。

計6基の推進装置が機体を遙か大空へと持ち上げリヴァイヴは黒煙すら上げなくなった基地を後にした。

レイヴンを1人残したと思い込んでいるエムは本部へと戻り会議室にいた。

エムが遅れた事は誰も咎めず部屋にはエドワース、スコール、オータムが着席しており部屋の最奥には壁一杯の画面が配置されそこに映っているのは青い機体の頭部であった。

「何だコイツは」

『やっぱり私を変な物と見るな』

パルヴァライザーは映像を切り替え機械の頭から束の顔へと変える。

「篠ノ之束……！？ スコール、まさか影の協力者というのは」

「ええ、彼女よ」

『篠ノ之束というのはちょっと間違ってるよー。今の私は篠ノ之束

でありパルヴアライザーでもある。好きな方で呼んでくれタバネライザーでも構わない』

時々、機械的な男性の声と束の声が混合した声は不気味さを醸し出していた。

『数時間前に1機のACが私に攻撃を仕掛けたが軽い物だった。それじゃ本題だよ。今、お前達と協定を結んでいるジャック・Oが率いる連中だが、直ちに排除しろ』

ジャック等が気に入らなかったオータムは待つてましたと言わんばかりに微笑み、やや落ち着きが無くなった。

亡国機業とバーテックスは互いに真意をさぐり合わない代わりに力を貸し合うというのが協力の条件ではあるが、そんな物は表面上の条件に過ぎない。

いくつかルールを決めたが最後の条件には両組織の目標に阻害要因となる物は全て排除する亡国機業にしるバーテックスにしる。というものがある。

その条件をスコールが忘れる筈も無い。

『ジャック・Oの目標は私を破壊する事。だからあの人達とあたし等はどうも反りが合わないんだよね』

「総員、亡国機業の元本拠地を襲撃する。時間は30分後よ」

『ゴーレム？使いたいならいつでも束さんに言ってね。あたしはちょつと用事があるから後はよろしくね』

モニターの電源が落ちて各自席を立つ。

「エドワース」

「何？」

「回収したレイヴンのACだけどうしたの？ 格納庫に無いみたいだけど」

「運んでる最中にジャックが前の本部に持って行けって。まさか裏切ってたなんて知らなかったし仕方ないかなー」

忠実に任務をこなすエドワースは組織の利になるのだが彼女の思慮の浅さにはほとほとうざりする。少し考えれば違和感を覚えるにも関わらずジャックに言われるままにレイヴンのACを渡してしまった。

「わかったわ。もういいから準備を始めなさい」

「わっかりました」

兵器の総数はかなりの物だがそれを動かす人員が足りないのが亡国機業の欠点である。その為、作戦は毎回奇襲などに絞られてくる。ジャックはもちろんの事、彼の腹心の鳥大老も抹殺対象である。頻繁に基地を空けているジノーヴィーは真意不明で放置するとしてスコールの見立てではエヴァンジェ、レイヴンの両名がジャックへの忠誠心が極端に薄くあわよくば亡国機業へ引き込もうと思案していた。

ジャックの言うことも無視し淡々と腕を磨くエヴァンジェの目にこの世界の命運に興味を示してはいなかった。

プロシユのMT技術、束の無人ISの技術、それらが全て亡国機業の手元にあるのだ。軍事力ならもはや寂れた小規模なテロ組織な

どではない。

だがスコールは素直には喜べない。

圧倒的に足りない人員をどうやって増やせばいいのか毎日悩んでいるのだ。

「組織の経営は大変ね……」

既に使わなくなった亡国機業の元本部に招集された元レイヴンズ・アークの傭兵達^{レイヴン}。まだ来ていないのはさっきまで作戦行動中だったレイヴンだけで他のメンバーは会議室に集まっていた。

傭兵^{レイヴン}の性が相変わらずチームにまとまらない気配が漂っておりエヴァンジェは我関せずと言いたげな顔をしている。

「少し遅れた」

ようやくレイヴンが到着するものの誰もねぎらいの言葉や文句すら言わない。

「全員揃ったか。特攻兵器が世に放たれた事は知っているだろう」

「特攻兵器！？　どついう事だジャック！」

「言葉通りだが、まさか知らないのか？」

「……ああ」

「相変わらずお前は情報には疎いな」

嘲りの言葉を投げかけたのはエヴァンジェであった。

「パルヴァライザーと篠ノ之束に先手を打たれ亡国機業が奴の下にいる。我々との力の差は開くばかりだ」

「篠ノ之束……？」

その名にレイヴンは聞き覚えがあった。

IS学園の臨海学校で現れてAMIDAや紅椿やらを持ってきたあの女。

（確か篠ノ之箒の姉だったな……）

そこまで思い出すとレイヴンの頭に電撃が走り、最も重要な事を思い出した。

束はあの時確かにインターネサインの事を話していた。当時の彼女がそれをどれほどの物と認識していたかは分からないが束がそれを所持しているのは確かである。

もっと早く思い出していれば――、とレイヴンは後悔するがもう遅い。

既に恐るべき事態へ発展しているのだ。

「早急に篠ノ之束を捕らえ――。伏せる！」

第六感に近いくらいのジャックの聴覚は厚い壁の向こうの僅かな違和感と機械音を聞き、叫ぶと会議室の屋根に赤い幾つもの光線が走り抜け横一文字に切り裂くと、凄まじい爆風が頭上に吹き荒れ壁を破壊し天井を空へと吹き飛ばした。

空中にはサイレント・ゼフィルス、クオヴァデイス、そして更に

蜘蛛らしい体型となったアラクネがいた。八つの複眼が4人を認識し蜘蛛の脚先から針を出す。

ジャック等の周りをゴーレム？が覆っている。

レイヴンはリヴァイヴを呼び、戦闘態勢に入るがジャックがそれを制した。

この人数は流石のレイヴンでも勝利する事が不可能とジャックは悟ったのだ。

「バーテックスは私達と対立するようだな」

サイレント・ゼフィルスのライフル“スターブレイカー”の照準はジャックに定められている。ゴーレム？の数は10、ACは格納庫にある。

携帯性の高いISは即座に攻撃、逃走に移れるがACはわざわざ搭乗する必要がありそこはどう足掻いても消しされない隙になるのだ。

この絶望的な不利であってもジャックの表情には余裕がある。

「レイヴンとエヴァンジェ以外はここで殺せ。ACは回収する」

エムが指示を出しゴーレム？が各傭兵^{レイヴン}を狙う。

「エドワース・フランシイ、貴様の任を解く」

「了解」

マシンガンを構えていたエドワースはジャックの言葉に応え、銃口をゴーレム？へ向けて斉射する。不意に弾雨に晒され瞬く間に1機のゴーレム？が破壊され屑鉄となって地表に墜落する。一瞬の虚を突いたエドワースの行動、クオヴァデイスを変形させ空中を旋回しゴーレム？のビームの雨をかくぐり再びIS型に変形すると両

手首と腰から二ドールを射出、そして貫通。

また1機のゴーレム？が墜ちるとクオヴァデイスをエムが射撃する。

スターブレイカーの一撃を紙一重で回避し、事なきを得る。

「エドワース、お前……！」

「想像通りよエム。スコールの奴に伝えな。人類は終わらせないってね」

「裏切り者が……」

オータムは苦虫を噛み潰したような顔でアラクネから7発のミサイルを撃つと反対方向からアラクネの物よりも大きなミサイルが飛来し迎撃する。

壊れた格納庫から“エイミングホーク”を駆る鳥大老が出撃した。屋根を潰された時に既に鳥大老は最善の行動を頭に描き格納庫へ向かっていたのだ。

『まさかこんな若造に一杯食わされるとはな』

軽量機のエイミングホークは瓦礫の上を一步、また一步と歩き近づいて来る。

そして高機動型特有の高出力OBを噴かしサイレント・ゼフィルスとアラクネの上を行き、制空権を奪う。

強化人間の恩恵で長時間の対空を許されるからこそ出来る芸当である。空からはガトリングとレーザーを次から次へと撃ち込み、ゴーレム？を撃ち落とす。

「鳥大老か……！」

相手は全員、腕利きの傭兵達。しかしACさえ無ければ楽に倒せると甘く考えいた。特に警戒すべき相手であるジャック・Oを完全に軽視していたのがミスであった。

ゴーレム？を合わせて残存しているのは4機、バーテックス側はクオヴァデイスとエイミングホークに続いてデュアルフェイス、オラクルそしてネクサスが動き出していた。

数量的にも劣り、機体の相性も最悪と来れば勝ち目は無い。既にジャックはフォックスアイで逃走を図り作戦の大目標を取り逃がしてしまった。

憤怒の形相でエドワースを睨み付け余裕綽々としているエヴァンジェに更なる苛立ちが募る。

いくら怒っても形勢が変わる事はない。
残されたゴーレム？はたった今、オラクルに撃破された。

『もう退くんだ。君達では我々には勝つことは不可能だ』

手も足も出なくなった2人にジノーヴィーは哀れみを込めたように言い放つ。

飽く程落ち着いたエムに対して短気なオータムは今にも飛びかかりそうな気迫である。

『待て、ここは捕らえて情報を聞き出す方が良い』

『その必要は無いだろう。エヴァンジェ』

ジノーヴィーは機内のディスプレイからエドワースのクオヴァデイスに視線を送る。

完全な敗北感を味わわれたエムはプライベート・チャンネルでオータムに通信を送った。

「撤退するぞオータム」

「……チツ、わかったよ」

アラクネはフレアを散布しミサイル攻撃をされないようにするとエムと共に逃げて行く。エムが感じた初めての敗北の味はとてつもなく苦かった。

彼女の口の両端からは腥血が顎にまで伝い、ポタポタと滴り落ちていた。

粗雑なオータムも怒り狂うエムにいつものような軽薄な言葉は投げかけられなかった。

エドワースが散々荒らして行った格納庫をまた綺麗にしているのはシャル達と学園にいる教員達であった。ラウラは乱れた部隊の統率の為にドイツに帰国する事となった。

壁はOBの炎で焼かれて黒ずみ、爆風で機材が全て飛ばされ使用不可能なまでに潰れてしまった。

「なぐんでアタシ等が掃除やんないといけないのよ！」

腑に落ちない様子で地団駄を踏む鈴にシャルはなだめるように言う。

「他の生徒が居ないんだし僕達がしないとね」

「それはそうだけだよ。セシリア！ アンタも手伝いなさいよ！」

「え、ええ。わかりましたわ……」

顔を曇らせてセシリアはエドワースが見せた機体を思い返す。

（カナダの第三世代IS“クオヴァデイス”可変型が実用化されていたなんて……）

可変ISなどロマンの集まりに過ぎないとどの国も全く目をやらなかったし戦闘機型に需要が無いと思われていたがどうやら違う。IS型と戦闘機型の2タイプを持つ事で戦術の幅は勿論、インプットしておくデータも増える。

クオヴァデイスはシャルのリヴァイヴ以上の武装を備えている、そう言えるのだ。

「セシリアア！ 手伝いなさいって！ ボーっとしてたら日が暮れるわよ！」

勘考しているのはセシリアだけでは無い。チリ取りを持った箒はケータイの発信者番号を見て眉をひそめていた。

ケータイの画面には束と表示されている。姉からかかってくる電話など初めてでこういう風の吹き回しかと思いつつ束の着信に応じた。

『ハロー、箒ちゃん！ 束さんだよ〜ん』

「どうしたんですか姉さん」

無愛想な声だが束のテンションは変わらない。

『箒ちゃんにあげた紅椿の話なんだけどね』

「あれがどうかしたんですか？」

『コアが少し不完全でね。フルに性能を発揮出来ないんだよ。箒ちゃんが使いたい時に絢爛舞踏使えないでしょ？』

「……はい」

『やっぱりねー。まあ、なんたる久しぶりに2人つきりで話さない？ 言いたい事も……あるし。ね？』

あの束が口ごもる様子に妙な気分を感じたが内心、箒は嬉しかった。

「わかりました」

『ホントに！？ よかった〜断られるかと思ったよ。じゃ、また後で連絡するね』

一方的に電話を切られたが箒は嫌悪感も出さずにケータイをポケットにしまう。

「姉妹か……」

頬がほころび歓喜に煽られチリ取りをテキパキと動かしてゴミを集めた。

頬はまだ知らない。篠ノ之束は既に篠ノ之束ではなくなっている事に……。

一夏、復活と覚悟（前書き）

台風で学校休みになんないかな。

大学が決まったぜ！ フォー！ これからじっくり書いて行く事が出来るぜ！ フォー！

一夏、復活と覚悟

生と死の境目、そこは最も半端な場所と言えよう。死してあの世に行く訳でもなく生者として生活する訳でもない。

眠ったままいつ起き上がるか全く分からない状態が長々と続くのだ。

少なくとも見守っている側からしてみればただ寝ているだけに見えるかも知れない。しかし、織斑一夏の心中は眠りとはかけ離れた程に荒れ果て、零落した光景が広がっているのだ。

ブロシユの一撃で彼の生命維持を行う唯一の糸が切られた。当人はその後の出来事は一切知らない。

ブロシユが死んだ事、レイヴンが裏切った事、エドワースが敵であつた事、全て。

意識の無い一夏にいつも映し出されている景色は灰と雲に覆われた空、鉄屑が散乱し人の血肉がまき散らされた大地である。

目に映るだけでも10機以上のACが片膝を付きあるいは佇立した状態で大破し、物悲しげに黒煙を上げていた。

この惨憺たる景色を見ても一夏は特別驚いたりはいしない。以前、銀の福音との戦いで負傷した際にも僅かだが見ている。

あの時から何も変わらないという事は一夏の心の中はあれからずっと乱れたままなのだ。

茫乎として見えるこの世界にはいつもあの男がいる。

束のインターネサインのデータから無理矢理、蘇らされた半ば死人の戦士フォグシャドウ。

一夏とフォグシャドウは深層心理の中にいる時だけ顔を合わせて対話が出る。

しかし今日ばかりは会話だけでは済みそうにはなかった。意志に関係なく一夏は白式を装備しており手には例のごとく雪片式型がある。

一夏もfogshadowのただならぬ雰囲気を感じ取り、自然と雪片を力強く握り締めた。鉄柱に腰掛けているだけの人間に一夏はこの上ない警戒心を払っていた。

雪羅のスラスタに刻まれたホルスの眼は閉じ、荷電粒子砲は愚かレーザークローも使用出来ない。

尤もその両兵器はあまり使用しない為、気にはならないが。画面上のエネルギー残量を表す数値は表示されていない。

「また……来たのか」

fogshadowのこもった声には呆れの色が含まれていた。一夏自身でも情けないと感じている。

brochuの息の根を完全に止める事が出来なかった一夏の甘さが敗因だ。本気で殺すつもりで振った剣だが、一夏の心にあるほんの僅かな迷いが奴を生かす事になってしまった。

あれから毎日のようにbrochuの放った言葉を一夏は反芻していた。

本性は一夏もレイヴンとなんら変わらない。死に際に放った一言が拭い去れない毒針となって残された。

自分は本当は何を守りたかったのか？

そもそも守りたい物があつたのか？

守る資格があるか、守る力があるか、守る覚悟はあるのか……。

「brochuの言う通りだ。お前がその憎しみを抑える蓋が無ければレイヴンと大差ない」

「アイツと一緒にするな……！俺は仲間を――」

「守る……か？ またそれか」

Fogグシャドウが瓦礫から腰を上げて大破したACを殴りつけた。

「俺はお前の本心が知りたいんだ！ 死に絶えたお前ではなく生きているお前に問うているんだ！」

雪片を地面に突き立てると一夏はその場に立ち尽くし俯き、自分の記憶を振り返る。自分の守る行為が本当に正しかったのか？ それはただの押し付けに過ぎないのでは、そう思えば一夏は自嘲気味に笑い天を仰いだ。

眼前には鉛色の空が広がり虚しく風が吹き抜けていた。

「お前の覚悟はいつも脆いんだ。守るなら命を賭せ、殺すなら迷うな、勝ちたいなら最後まで足掻き続ける」

一夏から返答は無い。

荒れた大地から決起と雪片を引き抜くと威圧的な眼差しで泰然と構えるFogグシャドウを見据えた。

見た目だけでは以前と何も変わらない気振らいではあるが、眼には凄絶な感情が蘇っていた。淒涼、悲憤、慷慨、歓喜、死人と変わる所の無い眼にようやく生気が宿った。

同時に一つの覚悟の色もだ。剛毅に構えた朴訥な青年は眉を微々も動かさない。

言葉を交わさずともFogグシャドウは分かっている。ようやく一夏はスタート地点に立つ事が出来たのだ。

Fogグシャドウが引っ張って行くのはここまで、後は一夏が自らの足で第二の人生を歩んで行く。

薄暗く眼界に取り留めなく広がる空にようやく太陽の光が差し込んで来た。

「一夏、これが最初で最後の試しだ。俺を倒せないならレイヴンに

は永遠に届かない。その時は君の体と白式は俺がもらう」

「いいさ、俺は負けねえからよ」

「俺が求めるのは価値のある戦いだ。期待を裏切らないでくれ」

赤黒い地面からメタリックな液体がフォグシャドウの四面から吹き上がり、彼の頭からその液体が降り注ぐ。

瞬く間に銀色に体を染め上げると液体金属はそこから形状と色彩を変化に持つて行く。元の彼と殆ど変わらない体躯、深緑と薄い黒を刻み込まれ思い切りのいい直線的な文様も施されていた。

一夏はフォグシャドウのその姿を見ても驚異一つ感じず、雪片式型の刃を彼へ向け続ける。

最強の人型兵器、フォグシャドウはかつての自機“シルエット”を身につけていたのだ。

大きさこそ人間程しかないが肩のエンブレムであるホルスの眼がその証拠だ。

両手のショットガンで幾多の強敵を撃破した。

実戦さながらの意気込みのフォグシャドウはふと、懐かしい記憶が戻って来た。

当時のトップランカー、メビウスリングを倒した男の事だ。

しかし、思い出巡りはまた別の日にとって置こう。薬室に弾倉を装填するとシルエットの背面のブースターが蒼白に燃え上がり力を溜め込んだ。

一夏は息を吸い込み、ゆっくりと吐き出しこれを三回行くと雪片を上段へと構えた。エネルギーを通して居ない大刀の刃は青くも無く無骨な剣として一夏の手の中にあるがままとなっていた。

ACと戦うのはこれが初めてだ。

中東の米軍基地からではない。レイヴンのネクサスを初めて見てから一夏はこの機体にこの上なく恐怖していた。

しかし今は鉄の巨人としての風格は見当たらず一夏の内面の恐怖心は泡雪のように消滅した。

4基のスラスターを吹かし、前進すると雪片を地面に突き刺し砂埃を巻き上げた。血と骨と鉄を剣にはらませて幔幕を作るとフォグシャドウの視界を奪う。

戦況がほんの少し一夏に傾き雪片を横一文字に切り裂くとそこには確かな手応えは皆無であった。

自分の剣が空を流れたと知るや否や全スラスターを一方向に向けて噴射し振り返ると既にフォグシャドウの散弾が迫っていた。

だが、その弾の雨も目標に当たる事無く虚空へ消えた。

判断よりも更に速く本能的にイグニッション・ブーストを作動させ弾丸をなんとか凌いだ。

上体を半回転させ弧を描き迫る雪片の切っ先を身をフォグシャドウは微小に後退させまた回避する。

今までの一夏にはなかった殺意のこもった攻撃。それが一夏の攻撃一つ一つを強く鋭角に切り込ませているのだ。

対するフォグシャドウ、ショットガンを2丁持つのはシャルもよくする戦型だがしかし、扱い方は彼が遥かに上である。

ステルスミサイルに連動させ肩のポットからミサイルが飛び出すと一夏は白式を後退させミサイルが直撃する瞬間を見計らってイグニッション・ブーストで直角に曲がった。

1発は空の彼方へ消え、残り3発をまた急激なカーブを使いやり過ごす。

安堵の溜め息も吐かせずフォグシャドウのショットガンが白式を襲った。一撃必殺技を狙っているのかフォグシャドウは一夏に異様に張り付き、射撃を加えてくる。

銃弾を弾き剣を回避し対角線状に向き合いながら凄絶な攻防は続けられた。

ある時はフォグシャドウの散弾が白式の脚部を撃ち抜きまたある時は一夏の雪片がシルエットの脾腹の装甲を切り裂いた。

空ですれ違い、地上でぶつかり合い、前後上下左右を2人は思う存分に飛び回り戦闘を繰り広げた。

状況は一夏が押され始め、被弾率が上昇しつつも相手のミサイルをさばいて致命的なダメージを受けないようにした。

アーマーに弾痕が残り弾が掠めた個所は黒ずんでいた。一夏の動きは以前よりもずつと良くなっているのだが、まだこの程度で満足していてもレイヴンを倒せはしない。あの男が仮に無制限にISを乗れるのであれば千冬にも劣らないだろうし、AC戦は聞こえてくる戦績だけでもあの男の力量を計るに十分な資料だ。

豪雨の如く放たれるショットガンとミサイルを雪片一本で耐えきるのとは不可能に等しい。

一か八か、レイヴンの幻をフォグシャドウに重ね合わせ、一夏は地面すれすれの低空を飛んだ。

脚部の破損に成功すれば勝利の光明は見える。それに頭上と足元は人間が防ぎ難い弱点でもある。

限界まで接近した一夏は突如として右腕以外の白式を解除した。フォグシャドウもだいぶ面食らったように佇立する。

左腕を地面について逆立ちするとそこから全身に回転をかけてフォグシャドウの右足に一太刀浴びせた。

切っ先に付着した血のりが傷がどの程度かを推し量る。超一流の傭兵^{レイヴン}だけあって初見の技であっても直撃を避けるだけの腕はある。

天地逆転の斬撃に流石のフォグシャドウも驚きを隠せないが、歓喜に似た物も感じていた。

「これくらいの力はあってくれて嬉しいよ」

ボソツと呟くとシルエットの背面の装甲が開きOBの大型噴気孔が露出された。

瞬時にエネルギーを収束、そして解放し軽量のシルエットは白式のイグニッション・ブーストを凌駕する速度で一夏に迫った。

スラスターを前面に吐き出した白式だったが僅かに反応が遅れ、フোগグシャドウは一夏をすり抜けて行く。

至近距離からのショットガンをぶつけて。

胸のアーマーが見事に砕け散り、青と白の破片がキラキラと光りながら四散した。

加えてステルスミサイルを背後から迂回しながら一夏に抱きつくように迫り、命中した。

フোগグシャドウは依然一夏の四囲を軽快なステップで飛び回る。

今の一夏は霧の中に迷い込んだただの木偶の坊に過ぎない。溜め息一つ吐く暇も与えてはくれない。考えても焦っても無意味だ、既にフোগグシャドウの必勝の陣形が出来てしまったのだ。

（反撃に移れない！ このままだと……！）

——このままでは自分の命すら守れない。

煙と弾丸にまみれた中、一夏は目を開くと同時に白式のホルスの眼が開いた。

（俺無しにホルスの眼を……）

左腕の荷電粒子砲の砲身を地面に突きつけると最大出力でそれを放った。

爆風と轟音が周囲を支配した。

放胆な選択ではあるが効果はてきめんであった。過剰な爆発で煙は弾けて消え、弾丸は強制的に方向を曲げられ一夏に至らなかった。危機を脱出する事は出来た。

しかしながら劣勢という事実揺るぎなくそびえ立っている。これを突き崩せるとするなら唯一無二の一撃、零落白夜の発動である。今ここで使わなくていつ使うというか。

雪片の刀身を凝視し一夏は雪片を握った手をゆっくりと右へ向け

る。

（俺にある戦況をひっくり返す必殺の一撃……こんなすげえ能力を俺は腐らせていたんだな。ごめんな白夜、そしてありがとう千冬姉）

雪片の刀身が均等に割れ元の刀身が縮み鐔にまで収縮されると刃を失った雪片に蒼白の光が灯された。

膨張し炎のように揺らめく光は一夏の心に同調し刃の形を作り上げ、大きさも無駄な巨大さから通常のサイズに凝縮された。

「零落白夜、発動……！」

黄色い光が白式から瞬き、一夏はフォグシャドウに向かって一直線に突き進んだ。

白式が通った後には深い溝が出来上がり焼け跡らしき物が残る。硝煙が立ち込めるショットガンの銃口を迫り来る一夏へと向けた。ACの頭部のカメラが一夏を補足し距離を測る。

狙うは一夏の胸のコア、身体を覆う装甲の奥でフォグシャドウの鋭い目はより一層に研ぎ澄まされ一夏の雪片がフォグシャドウの胸を貫くか否か、刹那の瞬間にトリガーを引いた……。

いつしか空には太陽が浮かび、凄惨な大地は何の変哲も無い地面が広がっていた。

そんな最中で一夏とフォグシャドウの戦いは決着を迎えていた。白式のスラスタと右腕の装甲が破壊され一夏の手には雪片はない。

交差し、一夏の背後に立っているのは腹に雪片が突き刺さったフォグシャドウであった。

深緑の装甲は粒子となって霧散した。

「これで2回目だな躊躇わずに人を刺したのは」

「ああ」

「わかった……だろ？ お前はレイヴンのように顔色一つ変えず殺せる」

「そうだな。確かに俺はあの人と……いや、殺人者と変わらない。俺は戦いの中でも光を見たい」

「とことん理想論だな……。まあそれも良いだろう」

莞爾と笑いフォグシャドウの体はさっきの装甲同様に光の粒子となつて消え失せ、白式の中へと戻って行った。

「ずいぶんと休み過ぎたな……」

明け方のIS学園は平日の何倍も静かであった。空は晴れ渡り、雲も浮かんでおらず、風もない。

町もまだどの店も開かず、しわぶき一つ聞こえて来ない。

IS学園の病室には一夏とそれを看病していた千冬が居るのだが、疲れて眠ってしまい一夏のベッドに伏していた。

外にいるスズメの鳴き声と朝の日差しで目を覚ました千冬の目には驚喜に満ち満ちた光景が待っていた。

上体を起こした一夏がそこに居たからである。

「おはよう、千冬姉」

「い、一夏……本当に前か……？ 怪我は大丈夫なのか？」

「ああ、心配かけたよな。ごめん」

目を細めて笑いかける一夏を千冬は抱き締める。一夏を一度助けられず二度は死の淵に立たせてしまった事を彼が起きるまで何回、いや何十回後悔しただろうか。

眦から涙が流れ落ち、一夏の寝間着の裾を濡らした。初めて見る千冬の泣き顔に一夏は慌てた仕草をしたが、一夏は優しく頬を撫でた。

姉弟が抱擁し一夏の回帰を心から喜んでいるまさにその時だ。いつものように見舞いに来るシャルは口をポカンと開けて病室の外で佇んでいた。

一夏が起きている事、千冬の意外な行動が頭の中で入り混じり上手く状況が整理出来ていない。

「デュノアか」

一夏に抱きついていて瞬間をシャルに見られ焦るかと思いきやいつものように振る舞おうとする千冬、しかし頬は赤らみいつもの厳格な彼女は居なかった。

それどころか裾が乱れネクタイもたいぶ緩く締めているの所が更にだらしなさを加速させていた。

「えっと……おはようございます」

「おはよう」

しばしの静寂、相変わらず無神経さの一夏はケロッとした態度で2人を見ているのだがシャルと千冬は居心地が悪くて気が気でない

様子だ。

シャルは愛想笑いを浮かべ、千冬は恥ずかしさのあまり俯いて貧乏揺すりを始めた。

そして机をバンツと叩くと何も言わず病室を出て行ってしまった。怒っている訳ではないただ見られたくない所を見られ恥ずかしいだけなのだ。

一夏とシャルが2人つきりになったが両者、なかなか言葉が出て来ない。

「お散歩でもしよつか」

「そつだな」

寝間着のまま一夏は病室のベッドからのそと出て来るとスリッパを履くとシャルの手を握り先導するように部屋を出た。

思い切りのいい行動にシャルの顔は赤くなり同時に狼狽する。病院から出て2人が向かって先は学園と寮を繋ぐ道であった。

夏の日照りが2人を照らし時折、吹いて行く風が涼しく心地よい。学園の池を背景にして一夏とシャルはそこに立ち止まった。

話したい事はいくつもあるが、今はただ隣り合わせに居るだけで満足であった。

シャルの父を殺めた男でありシャルを父から救い居場所をくれた男、彼女の解釈は大方これだろう。

「シャル……俺は弱い。仲間みんなを守る力はない。でもお前だけは守り抜いてみせる。信じてくれそれだけで俺は戦える」

照れくさそうに告げた誓いの言葉には相手への恋情が込められ、且つ覚悟を色濃く表していた。

恍惚と笑いながらシャルは手を伸ばして一夏の首に回すと僅かな

間だが両者の唇が合わさった。

掛け替えの無い瞬間を一年のように長く感じ微睡みのような安心感を分かち合った。

「信じてるよ一夏が僕を守ってくれるってね」

「ああ……」

夏休みをずっとIS学園の寮にて過ごす予定であった箒は姉である束に合う為に臨海学校の際に行った海へと向かっていた。

いささか不機嫌な顔付きなのはもはや意地と言っても良いだろう。内心は喜びと期待に溢れていた。

電車の窓の向こうで流れては消える景色を楽しみながら左手に巻いてある紅椿の待機モードの金と銀の鈴を鳴らして遊ぶ。

車内には箒しか居らずただひたすらに電車の動く音がし電車の揺れに身を任せている内に箒は昏睡した。

箒が次に目覚めたのは運良く丁度降りる駅であった。汽笛に起こされドアが開まる合図が送られ箒は隣の座席のカバンを肩にかけて慌てて電車を降りた。白いワンピースに身を包み麦藁帽子という涼しげな格好をしている。

海がすぐ近くだと言うのにも関わらず人の気配を見せない駅と街、箒は気にする事も無く弾んだ足取りで駅を出た。

「箒ちゃん！」

駅を出てすぐに声をかけたのは言うまでもなく束であった。あの時とは一切変わらぬ服装と特徴的なウサギの耳のカチューシャ。何

も考えていなさそうな笑い方がぼやけた姉の記憶を鮮明に捉えた。

「久しぶりですね。姉さん」

「相変わらずよそよそしいなあ。やっぱりまだ怒ってるんだよね？」

「……………ええ、あなたの所為で家族はバラバラ、たらい回しのよ
うな生活と過剰に保護されて生きている気持ちにはなれませんでしたよ」
「ごめんね」

思った以上にすんなりと出た謝罪の言葉と顔を曇らせた束を見て
箒は咳払いしつつ氣を使ったように言葉を重ねた。

「まあ……………そこまで思っていたんでしたら良い……………かな」

語尾に力が無くなり氣恥ずかしい素振りで頭をかいた。

それから木々が生い茂る道を抜けるまでまだ束がISを開発する
前、家族が一つになっていた頃を懐かしみながら話しあった。父が
居て母が居て束と箒がおりたまに一夏が遊びに来たあの頃だ。

氣が付けば2人は箒が紅椿を受け取った例の海岸に来ていた。波
の音が絶えず聞こえ日に晒され熱を持った状態の岩盤の上にはたく
さんの機材が置いてある。

潮風が吹くような所に精密機器を野晒しにするというのは科学者
としてどうかと思う行為ではあるが。

さっそく束は機材をいじり始めるとキーボードを高速で叩き、そ
の間に箒は岩の陰に隠れてISスーツに着替える事にした。

着脱が簡単なワンピースにしていた所為もあつてか箒が着替える
のに大した時間は要いず束の方の準備が整う時とほぼ同時であつた。

「また昔みたいに戻れますかね……………姉さん」

自分でも言つてて馬鹿馬鹿しくなる戯れ言だった。でも少女は僅かな希望を求めて出した言葉であつた。

「無理だよそんなの」

「……………ですよね」

「そう無理、だって人類は直に死滅させるからね」

「——！？　どういう事ですか？」

疑問の色を乗せて聞き返すと束は不適極まる笑いで言い返した。

「そのままの意味だよ箒ちゃん。古い人類は私と篠ノ之束が殲滅し新たな人間を造り出す」

もはや説明が無くとも篠ノ之束が本来の彼女でない事は明らかである。

少女の声から野太い男性の電子音に変わり束の姿をした何かはまるで傀儡のような動きであつた。

息を呑み込み、箒は得体の知れぬ何者かに対して最大限で警戒すると途端に束の体は風船のように膨れ上がり、破裂した。

啞然と立ち尽くす箒に追い討ちをかけるように次なる異変が起こつた。眼界に広がる大海の水面が盛り上がったかと思うと大量の水飛沫を巻き上げて青い機体が現れたのだ。

ACでもISでもない異形の機体が発する威圧感に飲み込まれてしまう、そう直感した箒は半歩下がり左腕をかざした。

「行くぞ紅椿！」

金と銀の鈴が閃光を放ち、赤い粒子が箒を包み込み紅椿の装甲を形成して行く。

だが、紅椿は箒に身に纏われる事なく中空で霧散した。

『紅椿のデータは十二分に手に入れている。私の意志一つで強制解除も可能だ』

「姉さん……私を騙したんですね」

『能天気についてくるから悪い』

——ようやく和解するチャンスが来た。

そう思っていたのは箒だけであつた。

僅かな希望は無惨に引き裂かれ踏みにじられ絶望の奥へと消えて行つた。

悔しさ、憎しみ、怒り、負の感情が滲みながら箒は何度も紅椿を呼び出すが全てパルヴァライザーの意志で阻まれてしまう。

『お前に役目をやろう篠ノ之箒』

パルヴァライザーの胸が微小な針が撃ち出されそれは箒の喉に刺さつた。

ほんの少し血が出ただけでそれ以外の外傷は無い。

瞬間的に針に仕込まれたナノマシンが箒を支配すると彼女の目は虚ろとなりさっきの束同様に傀儡のような動きであつた。

『この女も墜ちたか。まあ直に慣れる』

パルヴァライザーの邪悪な笑い声を上げながら上昇を開始し、箒

は紅椿を展開しパルヴァライザーについて行つた。

全世界の人間がパルヴァライザーを視認するのはまさにその日であつた。

レイヴンVSパルヴァライザー

廃墟と化した街、ほんの数時間前は栄えて世界有数の都市であったが今は見る影も無く崩壊し絶望と悲憤に満ち溢れた非情な空間へと成り果てていた。

空はこんな悲惨に状態に対して明るく、光が地面を照らしていた。生存者が居ないのか街には人の呻き声一つ聞こえて来ないのだ。

黒ずんだ崩れかけのビルの隙間を風が流れて淋しい音がするだけで街にはいささかの活気も見いだせない。

街が襲撃を受けたのは見ての通りであり残骸の中に警察の重火器が混ざっている所を見ると機動隊も出撃したのは分かる。

しかし理解出来ないのは街を一つ破壊しそこに住む何十万の住民を抹殺する事が可能となった事だ。ISには到底不可能、それこそ核兵器を使用しない限りこれだけの大量殺人など到底無理な話だ。大々的にはされていないこの事件、一見すれば内容を過剰に膨らませた記者の虚構に過ぎぬと多くの者が思うだろう。

そして一部の者は真実と受け止め得体の知れない相手に怯えているだろう。

特攻兵器の襲来で世界の軍事力が衰退し街を守る戦力すら残って居ない為、ドイツ軍がベルリンに到着するまでに相当な時間がかかってしまった。

街の様子を偵察に来たのは黒ウサギ隊のメンバーとその隊長ラウラと副隊長のクラリッサであった。

シュヴァルツェア・レーゲンが低空で散策しその姉妹機のシュヴァルツェア・ツヴァイクは高空が街の状態を見た。

何度センサーを使っても生体反応は無し、信じられないが本当に街の人を皆殺しにしたのだ。

部隊長としての役目を全うするラウラは毅然とした態度で振る舞い、どこか千冬を彷彿させる所があった。

黒いISはかつての街の中心地へと出て来ると彼女は驚きのあまり声を失った。

緑が綺麗な公園だった場所になんと灰色のAC“ネクサス”が立っていたのだ。

幾度となくその機体を見ただろうか。

ラウラはネクサスを見ると同時にそのパイロットの顔が脳裏をよぎって行った。

興味が失せたように廃墟を眺める鉄の巨人にラウラはシユヴァルツェア・レーゲンのレールカノンに向けた。

しかし、電撃のように頭を通り抜けるレイヴンの顔が引き金を引くという行動を止めさせるのだ。

ようやくネクサスはラウラの存在に気付き重い体を動かしした。

「まだ……まだ殺し足りないのか！ レイヴン！」

母国への愛などラウラは最初から持ち合わせていない。ただあの男が暗闇に沈んで行くのをもう見たくないのだ。

意を決してラウラはレールカノンの砲弾をネクサスに叩き込むとあの巨体のどこにあんな速度があるのかと思わせる軽捷な動きで砲弾を回避する。

「レイヴン……答えてくれ本当に私を捨てたのか！？」

悲しみのこもった声で嘆きながらレールカノンを発射しネクサスはそれを悉くかわして行く。

レイヴンは右手のバズーカを構えて砲弾を撃ち込んだ。

「レイヴン！」

ベルリンの崩壊から遡る事、10時間前の出来事、亡国機業から離反したバーテックス一同は行く場所を失い皆バラバラの状態にあった。

基地はジャックが直ぐに見つけるので問題は無いとして肝心なのは束のバルヴァライザーである。完全体バルヴァライザーが出来上がっているのならその進化の過程であるタンク型、四脚型、二脚型、フロート型がどこかにある筈だ。

指令は束から出されるが戦う相手は襲う場所はバルヴァライザーが自らの意志で決めて行動する。その点の制御はバルヴァライザーも束も一切していない為、最悪の場合は派生のバルヴァライザーが亡国機業を襲う事も考えられる。

バーテックスのメンバーから離れたレイヴンとエヴァンジェは単独で移動していた。エヴァンジェは通信全てを拒否し行方を眩ませたがレイヴンはジャックやジノーヴィーと連絡を取っていた。

「こちらネクサス、現在はACの補給を完了した」

「こちらはフォックスアイ、了解した。拠点を見つけるのは私に任せて君は好きにやってくれ」

「いいのか？ 組織の一員が勝手にやっても」

「君はまた別だ。そうだレイヴン、最近ヨーロッパの方では奇妙に機体がうろついているらしい。偵察を頼めるか？」

「構わない」

『破壊は君にまかせる。通信は以上だ』

やや一方的に通信を切断されてジャックが何か急いでいると判断し不快には思わなかった。ACをガレージへ格納すると座席が後ろへ下がりハッチが開くとレイヴンはコックピットから姿を表した。物資供給の為にイスラエルの小さな基地を襲った。通常兵器のみであつたので施設の破壊は極力抑える事が出来た。

ヘルメットをコックピットに投げ捨て汗だくの顔をパイロットスーツで拭いた。

この基地を乗っ取ったおかげで少しばかりだが休息を取れる。ガレージから兵士の宿舎へ向かいパイロットスーツを脱ぎ捨ててシャワー室に入った。パルヴァライザーが人類を殲滅しようとしている。

その事実にはレイヴンは驚愕以外の感情は湧き上がって来なかった。アーク時代から数えて自分も数々の基地や施設を破壊して来た。

無数の人間をこの手で殺めて来た。

まるで報いを受けさせるかのように特攻兵器はレイヴンに絶え間なく降り続き殺した。

久しぶりに胸が苦しくなり口から血を吐き出しシャワー室に膝を付いてドロドロと粘着質な血を垂れ流していた。

「俺も生い先短いか……」

ACの技量は未だに凄まじい成長を見せているレイヴンだが代わりには命を恐ろしい早さで蝕んでいつているのだ。

これが報いと言うのならレイヴンは甘んじて受けるつもりだ。

呼吸を荒く、シャワー室を出てまたパイロットスーツに着替えてレイヴンはACのガレージに戻って来た。

基地を乗っ取ったとは言え兵士を完全に殲滅した訳ではない。生き残りが他の基地に助けを求めて援軍を率いて来る可能性もある。殆どバーテックスに入ってからまともにベッドで寝た記憶が無い。殆ど

どがエムと野宿をした記憶だけで埋め尽くされている訳だが。

A Cのコックピットに座り座席を少し後ろに倒してレイヴンは仮眠を取ることにした。

敵が来てもレーダーとA Iが知らせてくれる。

時々、レイヴンはI S学園の面々を思い出す事がある。あそこを離れてからまだ3日程度だが1ヶ月以上経過した気分になった。

あの場所で過ごした日々は退屈であったが、久方ぶりの人間らしい生活をさせてもらった。

気付くと頭の中で振り返っていた思い出は夢に変わりレイヴンはそのまま眠った。

寝心地の悪いコックピットで深い眠りについていてレイヴンはうなされる素振りも無く突如として目を覚ました。

レーダーには一切の反応は無い。

だがレイヴンは異様な胸騒ぎを覚えると座席の角度を元に戻してA Cを起動させた。

『システム、通常モード』

ディスプレイにA Cの各装備の情報が現れコックピット内に明かり灯った。

ネクサスはガレージが開ける事もなく壁を突き破って外へ出るとレイヴンの勘の赴くままにA Cを動かした。

バーテックスに入隊した際にA Cの肩に刻まれた鴉のエンブレムは皮肉にもレイヴンがかつて自機に張っていたエンブレムと非常に酷似していたのだ。

背面のブースターが噴射され機体は低空を行った。この胸騒ぎの正体がジャックの言った通り“奇妙な機体”なら交戦を想定しなくてはならない。

固唾を飲み込み込み操縦桿を改めて握り直すとレイヴンは不安以外に激しい感情の高ぶりを感じていた。

自身にもその感情の正体が定かではないが、少なくとも常軌を逸した思考であるのはまず、間違いない。

灰色のACはOBを展開し加速を付けると日が昇りかけの空を背景に流星のように流れて行った。

同時刻、黒兎隊の指揮の為にドイツに帰国したラウラは上層部に挨拶も無く真つ先に黒兎隊の本部へ帰還した。

ドイツの基地が特攻兵器で大ダメージを受けている最中、黒兎隊は副隊長クラリツサの指揮で特攻兵器の難を逃れた。街の被害報告は皆無に等しく敵が本当に軍部のみを狙ったと見て取れる。

本部は大して荒れた様子も無く確固たる敵の情報が行き届いておらず隊員達の中には明らかな不安がはびこっていた。

ACはまだしもパルヴァライザーの存在などラウラでも知らないシュヴァルツェア・レーゲンを纏っていたラウラは本部に到着すると直ぐにそれを解き、長いフライトでの疲れを癒やす間も無くクラリツサを隊長室へ呼び出した。

「隊長、失礼します」

ノックをして部屋に入ると部屋の中心に配置された椅子にラウラは腰掛けていた。

「お疲れ様です隊長」

クラリツサ・ハルフォーフ、22歳と部隊の中では最年長者であり右は青い瞳で左目にはラウラと同じ眼帯を付けている。

紺色のセミショートの髪型、ラウラの愛らしさと別に大人の女性

としての魅力を醸していた。

黒兎隊が現行、ほぼ無傷という所を見る限りクラリッサの指揮官としての能力の高さを伺える訳だ。同時に部隊の結束力も相当な物だと言うのは語るまでもない。

膝にかかる程の丈のスカートと長袖の制服を着用し且つ、手袋まで付けており他の隊員と比べて比較的、露出を控える服装であった。

「クラリッサ、ACや亡国機業の存在は知っているな？」

確認までに尋ねるとクラリッサの答えはラウラの予想通りであった。

「はい、謎めいた組織“ファントムタスク亡国機業”と人型兵器“アーマードコア”あなたが好意を寄せられているレイヴンという男もアーマードコアを駆る、と聞き及んでおります」

一度深呼吸をしてクラリッサは黙って聞くラウラに再度話をする。

「IS学園を離れて今は亡国機業に同行し世界各地の基地を手当たり次第に襲っているそうですが……」

「レイヴンの情報は他にあるか？」

「いいえ、なにぶん目撃者が少なく。仮に目撃しても影と形しか覚えていないと言う始末です。この数十時間でレイヴンが世界にあらゆる影響を与えています。以前起こった未確認兵器の爆撃に比べればほんの些細な話しに過ぎませんが」

噂が真実となりラウラは齒を食いしばり眉をひそめた。

「フランス政府はもちろん、我がドイツ政府ですら彼を消そうと考えていたようです」

それを聞きラウラは顔を上げてクラリツサを凝視した。フランスがレイヴンを力量を計ると称して暗殺する所はこの目で見た。だがそれはあの国の勝手な行動に過ぎないと思っていた。

「一応レイヴンに手出だしはしないとなっていますが殆どの国がフランスと同意見でしょう」

「私達もレイヴンの抹殺に出向く訳か」

「最悪の場合です」

一つの部隊を預かる者として脅威と成す者に軍上層部から抹殺命令が下ればそれを遂行しなくてはならない。

そこに私情を挟む事は厳に慎むべきである。ラウラの階級を考えればなおのこと任務に私情を排除して当たらなくてはならない。

クラリツサもラウラが好意を寄せている男の抹殺命令など言いたくも無いが、実際問題で言えばレイヴンは明らかな“イレギュラー”要素だ。

クラリツサがここまで話してレイヴンの状態を理解したラウラの心情はいかばかりか。

「まだ抹殺命令は出ていないな？」

「はい、世界的には今は未確認兵器の方へ意識が向いていますので」

「未確認兵器の件が片付けばレイヴンを第一に捕縛する」

「はっ！」

クラリツサが敬礼をした途端、施設内のアラームが鳴り響くとラウラはクラリツサを引き連れて作戦室に足を運んだ。

数人のオペレーターが待機する作戦室にはラウラとクラリツサ以外の隊員が出入りする事はない。

「状況は？」

「ベルリンで未確認兵器が突如襲来、機影からしてACと思われるです」

ラウラの知るACはネクサス以外に知らないがレイヴンと繋がりのある男達もACを保有していると考えておくべきだろう。

ISとACの相性の悪さは百も承知の上でラウラはある一言を放った。

「出撃命令を出せ」

ラウラの決断に異を唱える事無く黒兎隊は本部を飛び立った。

違和感に誘われるままドイツ圏内に入ったレイヴンはネクサスのリーダーにずっと反応する敵機に気を配りながら上空を飛んでいた。そしてレイヴンはある境界線の向こう側の光景に息を呑んだ。地図によるとベルリンの街がある場所の目の前にレイヴンは居るのだが見えるのは瓦礫のみで地図に従って街の中に入って見るが、あるのは焼けたビルや溶けて灰と混ざり合って黒く、飴のように垂れたガラスや大破した通常兵器やパトカーであった。

荒れ果てた大地に反して空は馬鹿らしいくらいに綺麗に澄んでいた。

即座にレイヴンはジャックの言っていた例の機体を思い出した。ブースターを噴かさずに亡くなった街を鉄の巨人が徘徊する姿を何も知らない人が見れば侵略者のようにも伺える。

リーダーに表示される個所を撃つても砲弾は水面に映る月のように微妙に揺れるだけで一切の反応も無かった。

活気も精力も感じなくなった都市部をただ茫然と眺めているとリーダーにまた新たな反応があった。

距離的には近くスピードもありネクサスはガトリングとバズーカを持った両腕を構える前に黒いISシュヴァルツェア・レーゲンが現れた。

ラウラは悲憤に満ちた顔で叫んだ。

「まだ……まだ殺し足りないのかレイヴン！」

街を襲ったのはレイヴン、そう思ったラウラは多分に思慮を欠いてレールカノンを構えた。

一瞬だが戸惑いを見せて砲口が僅かに揺れたがラウラは砲撃を開始した。

小回りを利かせてシュヴァルツェア・レーゲンは出来るだけ近くでレールカノンを連射し、ネクサスはそれを悉く回避していく。

「レイヴン……答えてくれ本当に私を捨てたのか!？」

私情を排除しなくてはいけない。

あれだけ自分に言い聞かせた決意は綺麗に消滅し、揺さぶられた心は自ずとラウラの動きに乱れを与えた。

ネクサスの右腕のバズーカから砲弾が発射されラウラ目掛けて一直線に飛んで行く。明らかに回避を計算から省いたラウラとネクサ

スの距離、A I Cを使おうにも今はそれだけ集中出来る状況ではないし、仮に発動しても間に合わないだろう。

飛来する無情な鋼の塊が瞳に映りラウラは瞼を閉じる。

独特の風切り音と共にネクサスの放った砲弾はラウラの真横を通り過ぎて行く。

単に外した訳ではない。否、この距離からでレイヴンが外す筈が無い。

元よりラウラには敵意など無くレイヴンが向けた敵意は彼女の背後、崩れかけたビル of 陰にあった。

バズーカの砲弾はビルの陰に潜む何かに命中し爆発した。

見えぬ相手は黒煙と背ビルを切り裂いてレイヴンとラウラの前に躍り出るとその姿を見せ付けた。

二脚タイプのその機体はA Cに近く、青い色彩で飾られた機体は不気味な程人間らしく動き、わざとらしく被弾した個所に目を向けていた。

全高はA Cより少し高く何より特徴的なのは腕と一体化した青いブレードである。

『聞こえるかラウラ』

「ああ、聞こえる」

『直ぐに離れる。お前ではパルヴァライザーの相手は無理だ』

「何を言う！ 私も戦——」

ラウラの言葉は爆音に掻き消され同時にパルヴァライザーとネクサスは戦闘を開始した。

パルヴァライザーのデータは大凡、わかっているつもりだ。機体を後退させて馬鹿みたいに突っ込んで来るパルヴァライザーにガトリングを撃ち込みダメージを与えて行く。

再度街の広場に出るとレイヴンの背後に新たな熱源体から現れ、彼が気付く前に青い光がネクサスの背中に被さった。

衝撃で前のめりに倒れたネクサスはOBで直ぐに態勢を立て直すと今度は右側面からレーザーを浴び、また地面に付した。

新たに現れた2つの熱源体、それは最初に現れたパルヴァライザーと同タイプであった。

「パルヴァライザーが……3機!？」

ラウラはその絶望的な光景に虚脱したように見つめレイヴンがパルヴァライザーの攻撃の嵐をなんとか凌いで持ちこたえている様を見ているしか出来なかった。

開けた土地では包囲されてしまうと考えOBを使い、焼けた市街地へ逃げ込むと1機はネクサスの後ろをもつ2機は左右から回り込むようにビルの間へ入って行った。

ACを凌駕する機動性でネクサスに迫りエネルギーマシンガンを斉射し辺り構わずに破壊を行う。

身を屈めたり肩をずらしたりとエネルギーマシンガンを紙一重でかわすと肩のミサイルポットを開き、後退する機体を止めてOBのハッチを開け放つと高速でパルヴァライザーに接近し擦れ違い様に7発のマイクロミサイルを叩き込んだ。

全弾が命中した時の破壊力は凄まじくコアの装甲を剥がし、内部構造が露出した状態になっていた。

消えた2機に気を配りながらOBを止めて入り組んだ廃ビルの中へ逃げ込むと、崩れたビルから青いブレードが飛び出しネクサスの胴体を切り裂かんと迫り来る。

少し面食らったがレイヴンは慌てず機体を空中に浮かせて回避を試みたが、空には無傷のパルヴァライザーが待機しておりコアに再びレーザーを撃たれ装甲の一部が溶かされた。

体の不可など考えず、レイヴンは空中でレールガンを展開すると

砲口に赤い光を収束させて超音速の弾丸を放った。

目標に命中はしたが致命的なダメージとはならずパルヴァライザーはそのまま攻撃を再開した。前、下、後ろを取られ圧倒的に不利な態勢に持ち込まれる。

（まずい……！）

3機のパルヴァライザーは両腕に膨大なエネルギーを溜め込みいつでもレーザーキャノン撃てる態勢にあった。

あの攻撃を受ければどんなACも一溜まりも無いだろう。

レイヴンは勘考した。

ここでコイツ等に分けるようでは束の乗る完全体パルヴァライザーに永劫届く事はないと。

OBを展開しその超加速で集中砲火だけは免れ、彼の背後にはさっきまで溜め込んだパルヴァライザーのレーザーキャノンが爆発し青い光を辺りに放っていた。

レイヴンが真っ先に目を付けたのは地上にいる最も被弾したパルヴァライザーである。

ビルの上からネクサスは飛び降りエネルギーを使い過ぎて動きが鈍くなっている内にパルヴァライザーの肩へ飛び乗った。

ACの重量と高所からの落下のスピードもあわせて相当な衝撃がパルヴァライザーの足に響き、レイヴンの睨んだ通り右膝は重さに耐えかねて火花を散らしている。

そして頭部にバズーカを撃ち込み、パルヴァライザーから飛び降りると敵機はブレードによる近接戦闘を仕掛けて来たのだ。

ネクサスは後退し弱った右膝を執拗にガトリングで狙い、肩のミサイルは既にパルヴァライザーの破損箇所をロックしていた。

レイヴンの眼は獲物を狩ろうとする猛獣のそれと同様であった。

遂にガトリングの段幕はパルヴァライザーの右足を吹き飛ばし転倒を余儀なくされたパルヴァライザーは地に伏せるとレイヴンは間

髪入れずにマイクロミサイルを放った。

そこからバズーカとガトリングによる一斉射撃によりようやく1機を破壊に至らしめた。

安堵する間もなくレイヴンの意識は残りに向いた。バズーカの弾数にはまだ余裕はあるがガトリングは僅かにしか残っていない。

ネクサスはOBの大出力を利用し一度市街地を抜け出すと残りのパルヴァライザーから思いもよらぬ攻撃を受けた。

レーザーでもブレードでも無く突進を要いてネクサスを弾き飛ばすとその先にはもう1機が待ち構え、腕のブレードがガトリングを切り裂きレーザーがネクサスのバズーカの銃口に入り、暴発した。銃身を失ったガトリングをパージしレーザーブレードが装着された。

「いい気になるな！」

ブースターから青い炎を吹き上げて眼前のパルヴァライザーに斬りかかるとまたもや不意を突かれてレーザーを被弾した。

レイヴンのブレードは後少しの所で目標に届かず、虚空を流れた。再度ミサイルポットを開き、マイクロミサイルを放つと今度は直撃せずにパルヴァライザーはミサイルをエネルギーマシンガンで迎撃したり、ブースターを巧みに使って急停止と急加速を行いミサイルを確実に回避した。

破壊されたパルヴァライザーから別のパルヴァライザーヘレイヴンの戦闘データが送られその場で機体を最適化する。

ISの自己進化など比ならぬ成長速度である。

動きが更に速く鋭くなったパルヴァライザーにレイヴンは苦戦を強いられていた。

機体には幾つもの被弾個所がありコックピット内のディスプレイの一部は黒いノイズが度々入っていた。それはカメラの損傷が原因である。

今や防戦一方のレイヴンをただ茫然と見ているのはラウラであった。

「早く……早く本気を出せよ……そんな奴らさっさと片付けて……レイヴン！」

涙声で叫ぶラウラの声はレイヴンに確かに聞こえていた。

歯を食いしばりラウラはレールカノンをパルヴアライザーに突き付けたものの集中力が掻き乱された彼女の照準はあまりに覚束なくふるふると震えていた。

意を決してラウラが引き金を引こうとしたその刹那、一陣の風と共に緑色のレーザーキャノンがラウラを掠めるとそれはパルヴアライザーへと命中した。

レイヴンもラウラ、そしてパルヴアライザーも何が起こったのか全く理解出来ずにいると濃い青色の色彩をベースにして機体各所を白色で彩られた中量二脚タイプのACは地上に着地するなり左手のブレードでパルヴアライザーの片腕を両断した。

蒼白の刀身のレーザーブレード“WL-MOONLIGHT”が特徴的な機体“オラクル”がレイヴンの目の前に立っていた。

パイロットは言わずともわかるあの男と同時期に傭兵^{レイヴン}になった男、エヴァンジェだった。

アライアンス戦術部隊司令官だった頃もあった。

『情けないな。私以外の奴に倒される事は許さないぞ』

『エヴァンジェか……相変わらず自信過剰だな』

『ふん……。さてコイツ等だがあの被弾した奴は私が相手をする。残りは任せるぞ?』

『わかったよ』

だいぶ攻撃を受けてボロボロになったネクススはオラクルに手を握られ立ち上がると橙色のブレードを伸ばした。

レイヴン、エヴァンジェは背中を合わせて自分が討つべきパルヴァライザーを見据えると両者は全く同時にブースターを噴かし粉砕者へと向かって行った。

現在の亡国機業の本拠地は当然の事ながら変わって居ない。バーテックスの面々を1人も捕られず更に殺す事も出来なかったオータムとエムだが、スコールとの恋仲があった為か彼女にはお咎めは無い。

対してエムの方だが――。

「うつ……くつ……。クソ……………スコール！」

怒気に満ちた声を薄暗い部屋で呟き、いつも携帯しているナイフを握り締めてコンクリートの壁をガリガリと削っている。

肉体的な年齢は13→4、精神的な物や経歴を省いて彼女の背中や内股、首にある生傷は余りに痛々しく、幼気な少女には不似合いなものだ。

「ク……クフフ、私など所詮は作り物、そう作り物だ。作り物で良い」

下着姿でベッドの上でうずくまった状態でエムは傷の痛みを苦痛より快感へ変更し気味の悪い笑い声を上げていた。

狂気に事欠かぬ少女は何やら空中に映像を投影しIS学園の連中やバーテックスの面々の画像に×印を打つ行動を始めていた。その姿を部屋の四隅のカメラで全てスコールが監視されているのはエム自身、気付いていたかは定かではない。

作戦会議室ではスコールと画面の向こうの束もといパルヴァライザー以外は居なかった。

『散り散りになったバーテックスの傭兵達^{レイヴン}に追撃隊を送ったが残念ながら全て撃破された。鳥大老には四脚型をジノーヴィーにはフロート型を送ったんだがな。流石は歴戦の勇士だな』

迎撃された筈がパルヴァライザーの声はどこか弾んでいるようにも聞こえた。

パルヴァライザーは戦闘を繰り返して負ける度にデータを蓄積し、進化する兵器。

その理念から乗っ取れば敗北しても相手の戦闘データを入手出来るのだから問題は無い。

スコールは言わず語らず、パルヴァライザーと束に恐怖心を抱いていた。

対人、対AC、対ISを網羅したこの機体は確実に人類を滅びの道へと導くと。

そうなれば亡国機業の圧制を通じての平和は完遂しない。

「あなたにすればどうでもいいでしょうけど一応報告しておくわね？」

『何を？』

「イギリスの代表候補生と中国の代表候補生が母国に帰還したらしいわ。織斑千冬の命かは知らないけどISの第3世代終期型を使う

かもしれないわね」

『あらあら、あたしが第4世代開発したのに世界はまだ3世代をウロウロしてるんだね』

「公式のISでは最新鋭に入りますよ」

『織斑千冬の目はバーテックスと我等だ。奴らは共闘を考えていない。少し笑えて来るな簡単過ぎて』

「話は変わるけどエムは今後どうするつもり？」

『適当に先兵として使って要が無くなれば脳のナノマシンで脳細胞を焼き切れる。あれは束が作った物だ好きにすれば良い』

「了解」

『私はこれより世界にこの姿を刻み込んで来る。年端の行かぬ子供でも覚えられるように単純で残酷な方法でな』

パルヴァライザーから通信が切られスコールは背伸びをし、パソコンを閉じた。

思慮深いスコールは理解していた。

パルヴァライザーと束の目指す未来と亡国機業が目指す未来は大きく違っていると。

作戦会議室を後にしたスコールは本部の最下層へ向かった。ここは幹部のエムやオータムも入った事は無く、束ですらない場所であった。

明るく広い研究室の中心に巨大な円柱型の水槽が立っており中には無数のコードに繋がれた機体がある。

東が放棄したインターネサインのデータバンクを調べ残りカス程度しか無い情報からなんとか復元した兵器だ。

レイヤードの管理者兵器、そう言えばジャックなら少し知っているかもしれないが、スコールにしてみればこれの製造目的などどうでも良いのだ。

ただパルヴァライザーがスコールの計画の妨げになればこの兵器を彼女は躊躇わず起動させるだろう。

（もしもの時はよろしくね）

エヴァンジェが加勢してから戦いはそう長引きはしなかった。オラクルは早くもコアの実弾イクシードオービット“EO”を全弾使い切っていた。

強化人間の恩恵を受けている為、肩のキャノンに発射制限は一切無くレイヴンのように姿勢制御やベクトル調整を行わなくてもいくらかでも撃てる。

強い衝撃力を誇るオラクルのリニアキャノンとリニアライフルでパルヴァライザーを牽制し、外郭からチマチマと攻撃を加えて損傷を増やして行く。

ACの標準的な戦術である。

パルヴァライザーは通常のACとは違いリニアキャノンの衝撃力を以てしても硬直を促す事は出来ない。レーザーキャノンは弾速が遅くパルヴァライザーには当たらない。

エヴァンジェはレーザーキャノンをパージし弾薬の殆どを使い切ったリニアキャノンも排除した。

敵機が空中へ飛び上がり片腕のブレードにエネルギーを集めて弾速のある巨大なレーザーを放つ。

紙一重でレーザーキャノンをやり過ぎし流れて行つた膨大なエネルギーの塊は空中で四散した。

一瞬の隙を突きオラクルは空中へ舞い上がり月光を振り抜くとパルヴァライザーも残りの腕のブレードを振って対抗する。

オラクルのブレードとパルヴァライザーのブレードが拮抗し両者は一步も後退せずに空中に止まっていると、ブースターの出力で上回るパルヴァライザーはオラクルを機体ごと押しやり、幾つものビルを貫き塵埃を巻き上げて突き進んだ。

オラクルを突き放しビルに叩き込み追い討ちをかけるようにブースターの炎を大きくし機体を押し込むが、ここでパルヴァライザーは予想だにしない事態に見舞われた。

総合的な機体性能で勝るパルヴァライザーの腕のブレードは根元から見事に両断され折れた刀身は地面へと突き刺さった。

『ドミニアントである私が負ける筈はない！』

ここぞとばかりにエヴァンジェはブースターを噴かし、推進力と月光の出力を活用しパルヴァライザーのコアを貫通させた。

背中からは蒼白の刀身が飛び出しておりエヴァンジェは即座に引き抜くとそのまま上昇しながら穴の空いたコアにリニアライフルを何発も撃ち込み、メインシステムを破壊されたパルヴァライザーは全身の青い色彩を失い地上へ落下した。

市街地から轟然たる爆発音を聞き、エヴァンジェはレイヴンがまだ戦っているかと悟った。

加勢はしない。何故ならば既に勝利は見えているからだ。

ミサイルやレールガンを使い切りネクサスにある武装はブレードのみと特化型機体のような兵装であるがその分機動性に長けて、パルヴァライザーのレーザー系の攻撃は今全く命中していない。

加速力と最高速はあってもパルヴァライザーには小回りが利かない。ISからみたACもそう映るが、側面や背後に回られるとこの

パルヴァライザーは急に脆く逃げるようにして走り去り、一定の距離を置いてから旋回する。

『篠ノ之束、よく見ておくんだな』

ネクサスは軽くジャンプしOBを使いまるで消えたように真横へ飛び、パルヴァライザーを側面からブレードで斬りつけ右腕を切り落とし、逃げようとするパルヴァライザーに対してブレードを腹に突き刺し、噴気孔を素手で引きちぎる。

移動手段を失い、逃げる事が出来なくなったパルヴァライザーをレイヴンはさつき突き刺したブレードをゆっくりと斜め右へ斬り上げ、装甲は熱で融け、焼き切れて機能が停止に向かっているのを感じた。

コア、頭部を真つ二つにしレイヴンはパルヴァライザーから離れて爆発する瞬間を見届けた。

『終わったか？』

エヴァンジェの問いにレイヴンは答えず彼はラウラの方を向いていた。

『そろそろあの女の部隊が来る。早急に撤退するぞ』

『あ、ああ。わかった』

オラクルとネクサスが街から去って行った頃、爆音を聞きつけた黒兎隊がようやくラウラの元へやって来た。
遅い事を指摘もしない。

「AC同士の戦闘ですか？」

「ACとパルヴァライザーだ」

「パルヴァライザー？」

「クラリツサ、この街の青い機体の残骸を回収しろ」

「了解しました」

ラウラの命令を聞き隊員は直ぐに残骸の回収作業を開始した。

「隊長、ACを追撃しますか？」

「無用だ。これでわかった。私達人類が真に戦わなくてはいけない相手が……」

パルヴァライザーの脅威とそれを破壊し得る者の存在を目の当たりにし、ラウラが次取るべき行動は決まっていた。

「黒兎隊の全権はクラリツサ、お前に預ける」

「え……隊長はどうされるおつもりですか？」

「日本に戻り、教官と話す。今はあの人が軍部の実質上の司令官の筈だ」

「わかりました。お氣をつけて」

クラリツサが敬礼をするとラウラは頷き一足早くに黒兎隊本部へと戻って行った。

カナダの第3世代ISクオヴァデイスの最大の特徴はIS史上初の可変機構である。戦闘機形態による高機動は銀の福音を凌駕し他のISを寄せ付けない程の上昇力が売りである。

亡国機業の元本拠地から逃れて来たエドワースの追撃が最も激しく、MTを30機、ゴーレム?を6機退けて来た。

エドワースの確かな腕前もそうだがクオヴァデイスを独自に改良してレイヴン等の世界の兵器との相性の悪さを幾分か解消しており、低コストの逆間接型MTなど有象無象に過ぎない。

連続稼働時間は48時間を超えているが一流のIS操縦者ならばこれ位は朝飯前、戦闘機形態のクオヴァデイスは先に逃走を図ったジャックとの合流場所へ向かっていた。

その場所は十中八九、バーテックスの新たな本部になる所だろう。それを察していたからエドワースは追撃部隊を1機も残さず破壊する事に専念したのだ。

追っ手を排除して快適な空の旅に勤しむがそんなひとは長続きしないらしい。

ハイパーセンサーに現れた6機の機影、3機で1つのグループとなり、左右から挟み込むようにクオヴァデイスを追って来ている。

（戦闘機? 違う…… またゴーレム? かよ）

うんざりしたように嘆息を漏らすとクオヴァデイスは空中で急停止し、人型に変形すると左腕のビームバルカンを撃ちながら敵を牽制し右腕のミサイルで的確に命中させて行く。

「遅い遅い!」

ゴーレム?のレーザーの弾幕をクオヴァデイスは戦闘機形態へ移

行し圧倒的なスピードでレーザーを置いてけぼりにし、直線的な動きで敵を翻弄する。

6機のゴーレム？の周りをニードルを放ちながら飛び回り、飛び込んで来る1mの鋼鉄の針はゴーレム？の首や脾腹、腹に絶え間なく突き刺さり、豪雨のような激しさでゴーレム？を踏み碎いて行く。エドワースの攻撃が止む頃には全ての敵機は海中に没していた。

（わざわざ本部をカナダになんかしなくても良いのにオラ）

残骸と化したゴーレム？に興味など湧く訳もなくエドワースはジャックの合流地点へ急ぎ向かった。

しかしその時、ハイパーセンサーにまた新たな反応があった。今度は複数では無く単機だ。

強力な電磁波を飛ばして来る機体にエドワースの瞳によやく本気の色が宿ると人型へ変形し臨戦態勢に入った。

ニューヨーク炎上（前書き）

この作品もそろそろ終盤って考えたらずし名残惜しいな…。

ニューヨーク炎上

パルヴァライザーの脅威をその目で見たラウラの心中には未だ鮮やかにあの機体の不気味な気配が残っていた。ACより強力でISより速く進化し、人間味ある動きに加えて淡々と人類を殲滅して行く姿は西洋風に言うならば悪魔と称するだろう。

パルヴァライザーは世界のあらゆる個所で目撃されているが全ては機影のみで本当の姿を見たのはラウラと黒兎隊の面々だけである。実質上の司令官である千冬はバーテックスと亡国機業を敵に戦おうとしているがそれは圧倒的に不利、特攻兵器の襲来で軍事力と貴重な人材の多くを失い世界はともじやないがその2つの組織を相手に戦える程の余力は無い。

即戦力としてIS学園の代表候補生も戦場へ駆り出されるのは想像に難くない。

それだけ疲弊している事の現れなのだ。

ラウラが千冬が居る軍事基地に到着したのは夜中の2時を回った頃であった。

そこは東南アジアの軍事基地の全てを管轄する東洋総司令部、IS学園学園から移動させたISを含め保有数は170機が存在する。通常兵器、兵士の数も並外れており特攻兵器の被害を受けていても問題なく稼働している基地の1つである。

空軍の機能も併用しており複数のカタパルトに管制塔も設置されている。

西洋総司令部は残念ながら特攻兵器の襲来が酷く事ここに至る。現状稼働している軍事基地は大規模な物だけ見ればこの東洋総司令部とドイツのブラックラビット、中国の上海基地、イギリスの第一司令部そして近日、音信不通となったカナダの防衛司令部である。これは音信不通だが偵察機の映像で稼働していると断定されている。

各国家が改良中、試作機のISを省けば東洋総司令部のISが今の世界のISの総数と考えても違いは無い。

司令室は慌ただしい空気に包まれており理由は互いの意見の不一致によるものであり2人の表情を見ればどちらも自分の意志を譲るつもりは無いらしい。

「教官、どうしてレイヴン等と手を組もうとしないのですか」

「奴らの真意は不明、それにレイヴンは裏切り者。従軍しているなら離反者に対する扱いは心得ているだろ？」

「私はこの目でこの体でパルヴァライザーの不気味な一部を体験して来ました！」　ラウラの声が徐々に強くなる。

「特攻兵器もパルヴァライザーも我々だけでは対処仕切れない！このままでは誰もが死ぬ……それが分からないのですか！？」

「くどいぞラウラ、レイヴンが世界に与えたダメージは大きい。奴も到底放置して良い存在ではない」

「ISはもう最強兵器ではありません！　彼らと手を組む事で明日があるのです！」

「学園に帰れラウラ」

「教官！」

「帰れ！　命令だ！」

「……………わかりました」

ラウラはそれ以上の反抗を見せずに踵を返し司令室のドアの前で敬礼すると部屋から消えた。ラウラが居なくなると千冬は頭を押さえてうなだれた。

レイヴンと共にベルリンを去ったエヴァンジェはそれから直ぐにまた消息を絶ってしまった。オラクルの武装は捨てられ今あの機体が所持しているのはリニアライフルとブレードのみである。

機体を修復するしないは勝手だが悲惨な機体状況で彼が次に何を仕出かすのかは同期のレイヴンですら皆目見当がつかない。

ネクサスの武装はブレード一本と泣けて来る程貧弱で機体は大破寸前であった。

燃料も僅かとなりネクサスのブースターも出力がドンドン落ちてくる。

なんとか日本の国境を越えたがあまりこの国での長居を望まないのがレイヴンの本心であった。

ネクサスから暗号化された救難信号だけをジャック等にとるとコックピットを開けてネクサスをその場に放棄するとレイヴンは森林の中を当て所なくさまよっていた。

幾らか歩いた後に自身の所持品を確認した。ナイフと携帯無線機、待機モードのベルト型のリヴァイヴそしてエドワースから渡された例の錠剤が2錠あった。

あの錠剤が一度レイヴンに投与されたが全く支障の無い物に見えていた。

しかしあの錠剤は一種の麻薬であり、適性を上げる代わりに本人の知らず知らずの内に彼の病を推進させていた。当人はその効果の裏側については全く知らされていない為、自身の体が蝕まれている事は勿論わかっていない。

リヴァイヴを起動すれば移動は遙かに楽になるがリーダーに捉えられる可能性を考慮すれば使うのは賢い方法ではない。

森林を出るまでに大した時間を要する事は無く街に出るが人の視線は彼に向かっていた。

ACのパイロットスーツは人々の観念では珍しい物と言えた。そんな中、レイヴンの名前を呼ぶ声が背後からした。

「レイヴンさん！」

ゆつくりとのそつと振り返ればそこに居たのは黛薫子と言う少女である。

レイヴンの記憶にも彼女の存在はしつかりと残っており、IS学園を抜けてバーテックスに入った事は彼女は知るよしも無い。

「黛……薫子か？」

「覚えてくれてたんですね。すごい疲れてるみたいですね。ウチ来ます？」

「結構……」

「そんな事言わずにね。姉が長期出張で居ないからあたし一人暮らしだから大丈夫ですよ」

レイヴンは少し考え込むと薫子の元で世話になる事を承諾した。IS学園になど戻れる訳もないし、ACが殆ど使えない状態ならレイヴンの今の素性を知らない薫子は利用価値がある。

受信を傍受されないように暗号化した救難信号はいずれジャックへ届きエドワースか鳥大老がネクサスの回収に向かってくれるだろう。

一通りの作業が片付けば無線機に連絡が入る。それまで英気を養えばいいのだ。

なんの変哲も寂れも栄えも無いありふれた2階建てのアパートが薫子の現住所である。2階には人が居ないのか些かの気配も無い反面1階からは少し年のいった女の笑い声や子供の声が定期的に響いて来る。

薫子の部屋は人気の無い2階であり階段を上って直ぐの部屋である。

ポストには新聞がたまっておりさつきまで気が付かなかったが薫子の手にはビニール袋が握られていた。

ポケットから鍵を出して薫子は部屋を開ける。

「どうぞ」

機械的に言い放ちレイヴンを招き入れる。

室内は意外にも綺麗に整頓されてレイヴンの予想を裏切る結果であった。

ゴミ袋や脱ぎっぱなしの服や下着が散乱し慌てふためきながら片付ける彼女を想像していた為か少し残念な気持ちでもある。

「適当に座って下さい。お茶かコーヒーを出しますから」

薫子の言葉通りにレイヴンが卓袱台の前にあぐらをかいて座り込むとそれに合わせたかのように湯のみに入っていたお茶を持ってきた。

新聞部所以かさつきまでポストにたまっていた新聞をレイヴンがお茶を飲み干すまでに読み切りさつさと畳んで部屋の隅に放り投げてしまった。

「ふふ……」

ふいに薫子が微笑しレイヴンが顔をあげると微笑が爆笑へと変わった。

「何が可笑しい？」

「だってレイヴンその変な服似合っていないですって！」

パイロットスーツが似合っていないなど初めて言われ疑問や戸惑いを表した表情で薫子を見つめた。

「それでなんなんですかそのパイロットスーツみたいなの」

そう質問し一方的に喋るのが嫌になり音を求めてテレビの電源を入れた。

薫子の質問にレイヴンは答える気は無いが黙ってやり過ごせる程彼女は消極的な性格ではない。押しが強く内気なタイプの男の子を引っ張っていくような少女だ。

「それでそれで何の服なんですかレイヴンさん！」

「あ——」

ISスーツ、とうそぶこうとした途端にテレビの画面にノイズが走りやっていたバラエティー番組が突如切断されたかと思うと束が画面にいた。

一般的な家庭のテレビを乗っ取るなど束にすれば簡単な話だがそんな無意味な事はしない。

『地球のみんなへ天才科学者の束さんダヨ』

ふざけた第一声は束の言った通り地球全土に広がっていた。家庭のテレビや電気屋のテレビ勿論、軍のコンピューターにも束の顔が映されていた。

それは東洋総司令部にいる千冬とバーテックスのジャックに向けての発信であつた。

巨大な画面に映る束の反対側には千冬が居た。

『やあちーちゃん、最近は特攻兵器とかの襲来でバカな政治家が使えなくて苦労してるんだね。続けて司令官のお仕事頑張つてね、ちーちゃん』

『ふざけるな束。やはりお前が首謀者か……パルヴァライザーをどうするつもりだ！ あれを早く停止させろ！』

『停止？ 無理だよちーちゃん。あたしは遂にコレと一体となったんだよ。もう誰もあたしを止める事は出来ない』

『なに？』

『織斑千冬』

束の声と打って変わり無機質な男の声になり束からパルヴァライザーが映されると千冬は相手が画面内に居るとわかりつつも身構えてしまった。

『街が見えるな……』

「は？」

パルヴァライザーはシールドを展開し機体の上下合わせて5本ある突起物の先端部を光らせパルヴァライザーの特徴とも言える青い腕と同化したブレードを蒼白の輝きを作り出す。

最初は機体の上の2本が更に光り次に真ん中の2本、最後に下の1本が強い光を放った時だ。

機体全体から想像を絶するエネルギーの塊が打ち出された巨大なリニアキャノンは束が画面に出した街に向けて放たれた。

そこが中国の上海である事に気付くにかかった時間はそう長くはない。

文字通り中国の広大な大地にはクレーターが出来上がり千冬を含めて世界の人間が驚愕し恐怖した。

『地球の者よ逆らう者は殺す、従う者も殺す。これは虐殺と言う名の“清掃”だ。誰も助からない、準備をしておく事だな死への準備を』

「束ッ！」

本当の怒気を込めて千冬は叫んだ。

『私はこれからニューヨークを更地に帰す。次は私がお前を殺す時に合おう』

画面が一方的に切られ千冬は虚脱感に似た物を感じ椅子に座り込んだ。

上海を丸々消し飛ばしたあの光学兵器は核などではない。単純な

膨大なエネルギー体だ。

あれだけの放出をおこなっておきながら“これからニューヨークへ向かう”と言ったのだから驚きだ。

大規模に電波をジャックしたのだ世界の九割が今の映像を見たであろう。間違はなく次はニューヨークを更地にした映像を世界へ流し自身の力の強大を誇示し恐怖を撒き散らして行くに違いない。

1つの映像は世界情勢を暗転させた。

その映像は一夏も見ていた。寮の部屋のテレビに束が現れた時は呼吸を忘れるくらいに驚いたが次に出現したパルヴアライザーやそこから撃たれたりニアキャノンを見て彼は、状況がいまいち呑み込めていないというのが現状である。

後から物事の整理がついていき束が、パルヴアライザーが始めようとしている事を理解し次にとある少女の顔が頭に浮かび上がった。来た。

「鈴！」

名を呼んでも返事など無いが一夏は思わず叫んだ。甲龍の新機種を取りに中国へ戻った鈴、彼女がどの基地に行ったは定かではないが、上海基地は一瞬にして塵と化し最悪の事態を想像してしまった。背筋に寒気が走り嫌な脂汗が全身から滲み出して来る。

一夏はケータイを取り出して鈴の電話へ発信した。数々の電波障害が発生するかもしれないが鈴の電話にさえ繋がれば良い。顔色を悪くし電話に耳を当てると電子音が聞こえて来ると――。

『もしもし？ 一夏？』

鈴の声に大層安堵した一夏はそのままベッドに寝転がり袖で額の汗を拭き取った。

「鈴か？」

『そうよ、ようがあるなら早くしてよ今から甲龍の試運転なんだから』

「ああごめん。上海が消滅したからさ。お前が心配で……」

『例の機体ね……。安心してアタシは北京にいるから。セシリアからも電話あったわよ』

「わかった。じゃあまたな」

『うん、またね』

そう言って両者の会話は終了した。

一夏はケータイを投げ捨てると最近、一切連絡が取れない筈を思い出す。

代表候補生はIS学園で待機し常に万全のコンディションにしておく事を命じられている。

一夏も筈も代表候補生ではないが専用機を持っているので待機指令が出されている。筈との連絡が途絶えてから既に3日が経過し向こうから何の返事もないのに一夏は疑念を覚えていた。

世界の九割がああの映像を見ていた、ラウラとシャルもパルヴァライザーの上海を消し去る瞬間を目撃していた。

一夏の恋情が実りすっかり惚けていたシャルもあのような衝撃的な映像を見れば意識は完全に現実へと戻っていた。

ラウラに至っては放送が終了してもテレビ画面を凝視し険しい表

情でベッドのシーツを握り締めていた。

彼女はドイツで何があり何を見たのかを一切話してくれない。ラウラは千冬をどう説得するかで懊悩していた。

パルヴァライザーの脅威はバカでも理解出来た。後は千冬がレイヴンと協力する気になってくれれば……。

「少し出て来る」

「あ、じゃあ僕も——」

「すまない1人で居たい」

「そう、わかったよ」

部屋を後にしたラウラは寮の壁を力任せに殴りつけた。痛みはあるが感じはしない、ラウラは下唇を噛み締め別の事を考えて苦悶した。

師である千冬の命にだけ従う事が本当に正しい筈はない。創られた人間だがラウラはこの世界を好いている。

ラウラの脳裏に映っていくのは黒兎隊の隊員、クラスメート、教員達、そしてレイヴン。身にくいこむような想いは誰の業であつても邪魔する事は出来ない。

「死なせてたまるか……！」

ラウラの答えは決まった。内に溜まりヘドロのように混雑した迷いは一拳に消滅し洗い流された心に残ったのは決意の一言に尽きた。

上海を消滅させてニューヨークへと向かう束及びパルヴァライザーは、筭を連れて遙か上空を浮遊していた。

妨害電波で衛星やレーダーに見つかる事は無いのだがいつまでも長居していても彼等の利にはならない。

筭も目の前であの膨大なエネルギーの放出を目撃した。しかしパルヴァライザーの制御化にある彼女は驚きもせず怖がりもせず虚ろな瞳でただ呆然と直立し紅椿の両手には剣すら持っていない。次の破壊対象をニューヨークと定めてからその街は異様な慌ただしさがあつた。もつと言うならパニック状態に陥っていた。米軍が防衛網を敷いている事などとうの昔にわかっていたし、その戦力の中にACは勿論、ISすら導入されていないのだ。戦車、歩兵、戦闘機、一世代前ならば戦争での主役と言えた兵器なのだが今は単なるガラクタだ、これらが防衛戦の要となる兵器となると笑けて来る。

束は冷ややかな笑みでその兵器群を眺めながら街をどの様にして蹂躪して行くかを考えていた。

バーテックスの所在が不明という事実が少し心残りだがACの1機や2機、完全体のパルヴァライザーならば赤子の手を捻ることと変わらない。

慢心ではない余裕である。束は心持ち目を大きく開き有象無象の軍隊を指揮する人間を胸の内で冷罵した。

「さてと……」

束は亡国機業のオータムのIS、アラクネヘプライベート・チャネルで回線を開いた。思慮の浅いオータムであれば大抵の命令は聞いてくれる。

何故なら、あの女は束を未だに仲間と思っているからだ。

「オータムちゃん聞こえる？」

『なんだよ篠ノ之こっちはちょっと忙しいんだよ』

「束でいいよ。だいたい忙しいって言っても大したことしてないんでしょ？」

『うるせえな！ 忙しいってたら忙しいんだよ！』

どうやら凶星らしく、オータムはそれを悟らぬように声を荒げてごまかした。

「まあまあ怒鳴らないの。オータムちゃん今から日本に渡ってくれる？」

『なんで？』

「日本に着いたら内容は教えてあげるね」

『ケチ……』

「そう言わないの、じゃあね」

毎回通信は束の方から一方的に切られてしまう。恐らく気の短いオータムはこれに苛立って近くにある物を蹴り飛ばしているだろう。

『あの女は使いやすいな』

「だよねーエムはそろそろ要らないと思うんだけどどうかな？」

『まだ用途はある。今はニューヨークの破壊が先だ』

束から返事は無いが了解の意は伝わって来た。上空のバルヴァライザーは下降を開始し紅椿はそれに従うように追い掛けた。

ISのデータを読み込んでおり空中での移動速度もかなり速く目的地に到着するまでに大した時間は要しないだろう。

人民が逃げるのを待っていてはわざわざ人口の多い街を狙う意味が無い。

ベルリンの破壊は成功したが二脚バルヴァライザーが3機全て撃破されると言う事態は束も予想外であった。

それでもエヴァンジェとレイヴンの戦闘データを収集出来たと思えば束の方が収穫は大きい。

最近で言えばクオヴァデイスの戦闘データも得られた。フロート型のバルヴァライザーと交戦して相当疲弊したエドワースがデータバンクの最後に残されている。

バルヴァライザーは速くもニューヨークの上空1000mの地点まで降下が完了した米軍は準備を全て済ませいつやって来るかわからないバルヴァライザーに最大限の警戒態勢で当たっていた。

奇襲をかける程の相手でもない、バルヴァライザーはスピードを緩めわざと見つけやすいような行動を取った。

ステルスを解除し米軍のレーダーにあえて引っかかってやると敵は突如現れた機影に困惑した。

『始めるか』

出始めに背部のバックパックから特攻兵器を生産し射出した。赤い爆弾はまばらに飛行し背の高いビルに突撃し自爆して行く。

敵の戦車や砲台が高射砲を放つがバルヴァライザーのシールドを貫通させる事も出来ず見えない幕に弾かれていた。

砕けたビルの表面からは瓦礫の雨が降り注ぎ戦車を踏み潰し大破させる。

地面に着くか否かという低空を浮遊する形でパルヴァライザーは進攻を開始した。

世界を暗転させたりニアキャノンは今は撃つ気は無いらしいが安心など絶対に出来ない。心事を捻り潰すような威圧感、人間の無力を刻み込むかのように砲弾を一切回避せず、近くにいる戦車をブレードで両断し豆鉄砲に等しいアサルトライフルを撃って来る歩兵を特攻兵器で消滅させた。

背部と機体下部のバックパックが開き特攻兵器を射出し空一面を赤色に染め上げ、まだ避難していない人間、既に街を発った人間に向けて発射された。

この誰もが戦慄する戦闘力を誇るパルヴァライザーを相手にしてたった30分で現今の戦況は最悪であった。

街は烈々と燃え道路には戦車の残骸が転がっている。

空中から仕掛ける戦闘機のミサイルもまるで歯が立たない。

『全機パルヴァライザーに一斉砲火しろ！ 全弾使い切ってもかわん！』

司令部からの伝令を受け数十にも及ぶ戦車が砲撃し援軍のF-22が10機が向けられた。

地上と空からの波状攻撃にもあの機体はビクともしない。

『邪魔だな』

進行をストップしたパルヴァライザーは自身を砲撃する戦車に狙いを定めると胸から赤色のレーザーを何本を撃ち、一台の戦車を砲口から最後尾にかけて両断しまたある戦車は砲塔を切り裂き斜めに落ちかかったところを更に二つに切り分けた。

分厚い装甲は紙切れのように切られ高速で飛び回る戦闘機はパルヴァライザーの突起物から発せられる誘導エネルギー弾によって悉

く撃墜された。熱を孕んだ風が絶えず吹き荒れ派手な色彩のエネルギー体が街中を飛び回った。

建物や兵器は例外なく破壊され生存者も当然のように死んで行く。1時間も前は高層ビルが建ち並ぶ大都市であったのにその面影は些かも無く生氣は失われていた。

パルヴァライザーが宣告した更地という言葉も不可能な話ではない。

『何の抵抗もないと流石につまらないな』

「一応抵抗してるみたいだよ」

部隊の半数を失いその残りの半数も創傷を負っている。これで引き分けの可能性が消え逃走という選択肢も無くなった。

一体何人が凄惨たるこの光景をニューヨークの都市と一目で分かるだろうか。

高速の戦闘機ですら回避もままならないラインレーザー、装甲を容易く融解させるエネルギーシャワー、パルヴァライザーはリニアキャノンを使う気は無い。

猛攻を切り抜けて運良く接近してもまたブレードで真つ二つされるといふ結末があるだけだ。

機体の武装を惜しみなく使い迎撃、進攻を繰り返しているとパルヴァライザーのレーダーに新たな熱源体を感じしそれが背後より急速接近していると知ると地上を走る戦車を無視し振り返った。

『ACか……奴は単独行動に我々を最初から危険視していたな』

崩れかかったビルを曲がり姿を見せたACは言葉を発する事もしないで背中のグレネードランチャーでパルヴァライザーを砲撃した。黒い中量型AC“デュアルフェイス”は頭部の赤く光るカメラを

敵に向け瓦礫をジャンプでかわしながら道路を滑走し次弾を装填し再び膨大な熱量の砲弾を放つ。

既にフロート型を相手にした後で機体も全くの無傷という訳ではない。

ジノーヴィーは迎撃ミサイルのポットをパージし機体を出来るだけ軽くした。

ライフルの弾丸も混ぜながらグレネードランチャーを撃ち込みパルヴァライザーを牽制する。

彼も強化人間の恩恵を受けている為キャノンの発射制限は無い。それとレイヴンズ・アークのトップランカーとしての実力を絶大な強さを発揮する。

誘導エネルギー弾を回避または迎撃してやり過ごし、比較的弾速の遅いエネルギーシャワーは廃ビルを盾にして防いだ。

戦車とは比にならない火力を誇るアーマードコアの参戦により撤退の可能性が生まれた。

同時に人民の避難も可能となる。

『命を捨てに来たのかジノーヴィー』

『違う、果たせなかった責任を今果たす』

『レイヴンに負けたお前など何の値打ちも無い、せめて……仲間くらい連れて来るんだっとな。』

パルヴァライザーの胸の小さな砲口に圧縮されたレーザーが撃ち出される。

デュアルフェイスは空中に舞い上がり機体を捻りレーザーを回避するとその小さな穴に向かってライフルを突きつけ引き金を引いた。刹那、胸のラインレーザーはデュアルフェイスの首を風のように流れて行き、頭部を胴体から切り離れた。

首もとから煙りと火花を上げて機体が少し後退する。

束が口の端を吊り上げて笑った次の瞬間にライフルの弾丸は胸の砲口に入り込み内部で暴発が起こりラインレーザーは使用不可能となった。

ジノーヴィーは好機と睨むとブースターを最大出力で噴射しパルヴァライザーの懐に入り込んだ。

腕のブレードを振る瞬間を見定め蒼白の刀身を紙一重で回避し機体を回転させながら左腕のレーザーブレードを振りパルヴァライザーを斬りつけるとそのまま背後に回り込み、バックパックにライフルとグレネードランチャーを同時発射した。

しかし流石の装甲かバックパックは破損にまで居たらずまともに通った攻撃はレーザーブレードのみであった。

『死に損ないが……甘いんだよ』

振り返らず未だ背を見せ続けるパルヴァライザーにブレードで斬りかかろうとしたジノーヴィーであったが、まさにその時思いもよらぬ方向から攻撃を受けた。

デュアルフェイスの背面、そこには紅椿を纏う箒がクロスボウ型の武装、出力可変型ブラスターライフル“穿千”を手に持っている。依然、箒の瞳は死人と変わらぬ様子であり非情の一撃を与えるには丁度良い状態である。

右腕を根元から持って行かれブラスターの余波から空中での姿勢を保てず道路に落下した。

「敵は1機だけじゃないんだよ傭兵さん」

ジノーヴィーは奥歯が欠ける程歯を食いしばり後悔したがもう遅い、自分がいかに周りを見て行動するかが戦場でのあり方だ。ジノーヴィーは敵が今の今までパルヴァライザー1機だと思い続けたのだ。

数的不利を巻き返せるほど今回の戦いは甘くはない、だとするとやることは短期決戦だ。

長引けばジノーヴィーの不利は明らかである。

「もう諦めたら？ 勝てっこないよ」

『黙れ……諦めはしない。私にも私の意地がある！』

地に伏したデュアルフェイスは息を吹き返しブースターを使い素早く立ち上がり両肩の二門のグレネードランチャーが一斉にパルヴァライザーへ向けられるとこの日初めてデュアルフェイスは発射態勢を取ったのだ。

強化人間の反動制御を以てしても耐えられない衝撃がやって来る。ジノーヴィーは全ての思いを載せて操縦桿を握り、引き金を引いた。

砲身の後方からガスが噴射されたかと思うと耳をつんざく巨大な爆発音が四囲一帯に放ち、大気が震えた。

グレネードランチャーの砲身は熱で折れ曲がりジノーヴィーは即座にパージした。

デュアルフェイスから飛んで行った砲弾はまるで吸い込まれているかのようにパルヴァライザーへと向かって行き、爆発を巻き起こした。

胸の装甲が熱で融けだしている事を確認するとジノーヴィーは紅椿による背後からの射撃をかわし、彼もまたパルヴァライザーへ特攻を図った。

レーザーブレードを伸ばし斬りかかるのではなく肘を目一杯引いて光の刃の目標を胴体の中心へ特定し突く構えに入った。

左腕を伸ばして噴気孔からありったけの炎を吐き出してデュアルフェイスは突き進む。操縦桿を前に倒しブースターの出力は更に増し機体にスピードを乗せ煙りの中へ飛び込んだ。

夏然、黒煙の中から聞こえた音はどちらがどちらを刺した物でありこれにより勝敗が決まるのだ。

やがて煙りが晴れてパルヴァライザーとデュアルフェイスの姿が露わになるとそこには橙色のブレードがパルヴァライザーに僅かに届かず、静止した機体と腰にブレードを深々と突き刺して稼働する機体があった。

デュアルフェイスは力無く腕をだらんと垂らし地上へ落下した。ジノーヴィーにはまだ息があるが機体がこうなれば死んだも同然である。

パルヴァライザーはシールドを張ると上海を消滅させた時に使用したリニアキャノンの発射準備に取りかかった。

（元の世界でも小さな存在……この世界でも小さな存在だったか。アグラーヤ、今逝く）

リニアキャノンの発射の準備が完了しパルヴァライザーは全身に黄色いエネルギー体を纏っている。

「バイバイ、ジノーヴィー」

異形の機体から黄色い光が撃ち出された時、東の視界に映るもの全ては灰燼に帰した。

その日、世界から2つの地名が消去された。宣告通りニューヨークは更地と化しアメリカに巨大なクレーターが作られた。レイヴンズ・アークのトップランカー、ジノーヴィーは敗北を悟りながらも戦い続け消えて行った。

人類がいる限りパルヴァライザーは破壊を止めない。

上海とニューヨークを潰しジノーヴィーを殺して次なるターゲットに向けて動き出していた。

2人の主人公（前書き）

明明後日に入試を控えています。

まあ面接だけなんですけどね。

ポップコーンはバター醤油よりもうすしお派です。

L4Dというゾンビゲームをやってるんですけど最近よく見知らぬ人にフレンドリーファイアで殺されます。

2人の主人公

パルヴァライザーの所行が世界に知らされ世界の国が僅かな軍隊を使って防衛網を敷いて抵抗とも言えない抵抗の準備をしている最中、レイヴンとは言えば黛薫子の自宅で一晚、世話になり薫子と一緒に夕飯の買い出しに行っていた。

真夏の暑さは人からやる気を削いでいき外に出たくない衝動にかられるのだが薫子は、むしろ外で過ごす時間の方が長くこの暑さにも隔たれていない。

レイヴン自身は買い出しに同行するのは遠慮したかった、何故ならば買い出しに行く街の目と鼻の先にIS学園があるからである。

夏休み期間の為、一般生徒と出会いはしないだろうが一夏などの自分の今の状態を知る者がいるのはあまりに都合が悪い。

野菜や肉が入ったビニール袋を持って薫子が買い物をする様子を眺めながらこの街の風景を見渡した。

リム・ファイヤーとの一戦で凄まじい被害を被ったこの街も意外にも復興は早く戦闘の傷痕が残っているのは、ほぼ一部となっていた。

不意に頭の中をIS学園の連中がよぎった。プロシュ・デュノアに誘拐されたシャルを追った一夏はそこで数年前に自分が死亡している事実を告げられ、シャルの言葉で闘志を蘇らせ共闘してプロシュを倒した。

そしてレビアタンに搭乗したプロシュは突如、内部に秘めていたAMIDAを産まれさせ猛威を振るったが千冬と一夏の連携に敗れ、丸裸のプロシュを追撃した一夏はツメの甘さ故に瀕死の重態を負った。レイヴンはそれからの一夏を全く知らない。

回復する前にエドワースに連れられてIS学園を離れ、バーテックス側についた彼はシャルと一夏の恋仲もセシリアと鈴が本国に帰っている事も知らないのだ。

バーテックスに入隊したその日に亡国機業と決別するという忙しない1日から始まりドイツではパルヴァライザーの襲撃を受けたりと最近は一碌な1日を送っていない。

IS学園に流れ着いた当初は平和過ぎると思い、暇を持て余していながらいざ過去のような戦いの日々がやって来るとたまに平和が名残惜しくなる事もあった。

——欲深いな。

レイヴンがそう胸の内で吐息のように吐き出した。

尤も、平和と戦争を天秤にかけると彼は戦争の方に傾くだろう。

短期間で多くの事があり、それを一つ一つ思い返していると薫子の声が響き現実に引き戻された。

「レイヴンさん！ 聞こえてますかー！」

「あ、ああ悪い少しボーっとしていた」

「珍しいですね。普段から難しい顔して何か考えてるのに」

レイヴンは、視線を薫子の手元へ落とすと野菜の他に何か別の生活用品の入った袋が握られており、まじまじとしたレイヴンの目に気付いた薫子はソツと生理用品の入った袋を隠した。

「他に買うものはあるか？」

「無いかな」

全ての用事が済みレイヴンと薫子が自宅の方を向いて歩き出した時だった。2人の前方には一夏と腕を組むシャルが直ぐそこにまで来ていた。

当然向こうもレイヴンの存在には気付いている薫子が霞むほどに

強烈な印象が一夏、シャルの両名の頭に焼き付いた。

「織斑くん、デュノアくん、どうしたの腕なんか組んでさー。付き合ったの？」

レイヴンの奇妙な立ち位置を理解していない薫子は何気ない様子で話しかけたが真相を知るシャルは警戒態勢に入り、一夏は瞋恚に満ちた目でレイヴンを睨み付けた。

「久しいな織斑」

もう一夏とは呼ばない。

「レイヴン………さん！」

「……？ 何この空気、久しい？ あれ……あれあれ？」

尋常ではない空気を感じ取った薫子は勘考してみたが納得のいく結論は自分だけでは出せなかった。

「裏切りは本当だったんですね」

「裏切り？ 元々放浪の身である俺がどこに居ようが勝手だろう。寧ろ今回の帰還の方が正しいと思うが？」

最近じゃない。最初から一夏はこの男に不信感を抱いていた。あまつさえ傭兵という職業と聞いてそれは更に加速していった。

一夏は左手を白式に添え今にもISを展開しようとするがシャルがそれを必死でなだめた。

向こうが先に引き金を引けばレイヴンも迷わずに引き金を引くだ

ろう。一夏に比べればレイヴンにはまだ冷静さがある。

「黛先輩、レイヴンから離れて下さい。早く!」

否と言わせない気迫をたぎらせ一夏が叫ぶと薰子は、何も考えずほぼ反射的にレイヴンからサッと飛び去った。

「一夏、ダメだよこんな所で戦闘するのは」

現状を最も把握し最も冷静であったのはシャルだ。市街地で戦闘すればそれこそリム・ファイヤーの時の二の舞だ。

そして何よりシャルの懸念はレイヴンの実力である。起死回生を迎え新たに力を付けた一夏がレイヴンにどれだけ通用するのは想像も出来ない。

少なくとも常に戦場を駆け巡っていた彼は以前よりも大きな力を以てぶつかって来るのは目に見えている。

薄ら薄らと胸に感じる熱は恐らく殺気である。

固唾を飲み一夏はあらゆる顧慮を乗り越えて一つの決断に至り、ある一言を放った。

「来い、白式!」

「一夏、ダメ……!」

シャルが止めに入ったがもう遅い。

白い粒子が刹那にして装甲を形成し組み上げ一夏のにまとわりついた。

賽は既に投げられた。

レイヴンは冷笑しリヴァイヴを展開すると同時にライフルを一丁、真っ先に形成し一夏の白式を撃ち抜いた。

いきなり肩を被弾し白式は地面を転げ、周囲の人々は銃声を聞いて蜘蛛の子を散らすように逃げ始めた。

「一夏大丈夫!？」

レイヴンは既に遙か上空を飛び一夏を見下している。

(今の形成速度はシャルの高速切替……)

ラベッドスイッチ

シャルの特技である高速切替名前の通り武器の切替、形成速度を限りなく0に近付け臨機応変、変幻自在な攻撃で敵を翻弄する物だが、レイヴンの形成速度は確かにシャルが行うよりも速かった。

「シャル」

「……？」

「今度は勝ってくる」

シャルからの返事は無くとも構わない。

被弾箇所から煙りが吹き出し一夏は顔を一瞬、しかめてレイヴンと同じ高度にまで上がった。

発止！

一夏の雪片がレイヴンのライフルの弾を弾いたのが合図となり対峙していた2人は街の上空ではなく近海にて銃を剣を拳を体を激しくぶつけ合い、そして回避し、また真つ向からぶつかり、それは両者の生命の激突と言えた。フットロック無しで一夏は空中で荷電粒子砲を斉射するとレイヴンはその光線をバスターブレイカーで耐え抜き、バーニアがリヴァイヴの速度を高め、一夏とすれ違い様にショットガンを叩き込んで行った。

まだエネルギー管理が下手な一夏の代わりにフォグシャドウが管理を行っている。

銀の福音よりも不敵極まる存在感がレイヴンにはあった。今までラウラを省いて学園の者にはただの一度も見せた事がない傭兵^{レイヴン}としての彼は、薄汚れ、血と腐肉を食い漁る醜く忌みなる存在、鴉の幻影が一夏の網膜に映った。

零落白夜を使用していない金属の剣を堅く両手で握り白夜はレイヴンのリヴァイヴに向かって動き出した。

この男と戦うのはこれが二度目、一度目は模擬戦とは言え無様な敗北を喫した。

一夏がまず目をつけたのは、リヴァイヴの肩に装備されている攻防一体の兵器である。近接戦闘では脅威的な威力を発揮するバスターブレイカーの破壊を第一に考えていた。

問題は一つ、雪片の切断力を以てしてもバスターブレイカーの盾の部分を持ち裂く事はほぼ不可能である。懐に入るのは危険だがアレスを破壊するなら狙い目は唯一つ、盾と機体の連結部分、自在に伸縮する細いアームを切り落とすしかない。

数あるリヴァイヴの派生の中で最も使用が難しいレイヴンのラファール・リヴァイヴ、いくら使いこなしたとしても必ずどこかにレイヴンの制御が行き届かない隙がある。

レイヴンは適性によるものだが、一夏は機体の特性上長期決戦には不向きな機体である。

「零落白夜……発動」

白式のコアが鼓動し熱を帯びるとそこから雪片へエネルギーが流し込まれた。

——エネルギー充填率、90%オーバー。

白式の零落白夜がエネルギー充填率を100%を迎えた事は一度も無い。否、尋常では迎えないのだ。

機体は発光し白刃は手中した一夏は何も考えず、バカ正直に一直線に突き進んだ。

一夏が雪片を振り上げレイヴンのバスターブレイカーを切り裂かんと迫ると、もう一方の缺が白式を挟み身体を拘束し海面へ叩きつけた。

間髪入れず、一夏にアサルトライフルの弾丸が降り注ぎ一発のグレネードが投下された。水柱が空高く上がり、その光景はシャルや薫子の目にも映っていた。

海中から浮上した一夏は息を切らし瞼が切れて血が頬を伝って顎から滴り落ちている。その手に何も握られていない一夏は思念を腕へ送り、原子達が再び雪片を生成した。

「助けを呼んだらどうだ一夏？」

「呼んでも来ないさ」

「見切りでもつけられたか？」

レイヴンの挑発的な言葉にも一夏の心は微動だにしない。

「いいや、俺はアイツに勝ってくるって言った。だからシャルは信じてる俺がアンタに勝つつてな！」

レイヴンは、言葉も無くバスターブレイカーで一夏の首を挟み切り落とさない程度の力加減でそこに留めた。

「信頼？ そんな形の見えない物が何になる。信頼など下らん！ 信じる物があるとするなら己の力のみ！」

2つの刃の挟む力が増して一夏は声にならない呻きをあげて必死

に押し開かんと両手で抵抗した。

「ラウラの気持ちも知らないで……！」

「お前にアイツの何がわかる！」

本当に力を入れて一夏の首を跳ね飛ばそうとするレイヴン、一夏は渾身の力でバスターブレイカーの刃を開く方向と逆に力を入れて、袈をへし折ったのだ。

左方が使えないと見てレイヴンは迷わずパージする。一夏は折った2本の刃をレイヴン目掛け投げつけると瞬時にスナイパーライフルを生成し弾を連射し撃ち落とした。

「何も信用しないアンタだからいつまでもISの適性が上がらないんだ」

「ISは兵器だ。信用もクソもあるか。戦っている時が最も輝き真価を発揮する」

「違う……！ ISはただの道具じゃない！ 最高のパートナーだ」

「また理想論か！ 本当に頭が痛くなるな！」

右にだけ残ったバスターブレイカーは一夏の真正面から襲い掛かる。

凶刃が迫る中、一夏は驚く程に冷静に状況を判断しレイヴンの攻撃を初めて回避して懐へ潜り込んだ。

レイヴンの手にはブレードがあるだけで他の装備は一切所持していない。

仮にリヴァイヴのブレードで防ごうすれば雪片は刀身ごとレイヴ

ンを両断するだろうし、かわそうにもそれが出来ないくらいに接近を許してしまった。

レイヴンのリヴァイヴは後退し腕のブレードは一夏の左目を狙って動く。

一夏はレイヴンへの攻撃を諦め、回避に移るとエネルギーに満たされた雪片で残りのバスターブレイカーを切断した。

ようやく勝利の兆しが見えた。そう感じたのが束の間、リヴァイヴはこれまでに無い驚愕な速さで一夏に迫るとその拳で白式の胸のアーマーにヒビを入れた。

機体のスピードを40%ダウンを招くバスターブレイカー、それを補う為に取り付けた4基のバーニアがある。しかし今は全てのバスターブレイカーを失い機体は羽のように軽くなった。

そこへスピードを無理矢理引き戻す為の強力なバーニアが加わったのだ。基本スペックを大いに上回る加速力をリヴァイヴは実現した。

白式のイグニッション・ブーストを凌駕する凄まじい加速は一瞬にして一夏の背後を取った。

ショットガンを白式の背に浴びせ、一夏の肩を踏み台に上昇すると頭上からグレネードが落とされた。

一発の炸裂弾が眼前に迫り一夏は息を呑み雪片を坂手に持つと縦に一閃、分断された鉄塊は海中へ落ち、爆発した。

圧倒的な速度で一夏を空間的に包囲したレイヴンはその中心の一夏をスナイパーライフル、ショットガン、サブマシンガン、アサルトライフル、レーザーライフルで攻撃を仕掛けリヴァイヴの持てる武装全てを高速切替で運用し白式へ叩き込んだ。

黒煙が上り詰め轟音、灼熱がしばしの間レイヴンの視界を支配した。

稼働時間に限界が近付いている事を悟り両手のアサルトライフルの薬室に弾倉を装填し次なる攻撃に備えた。

通常であればあの猛爆を凌ぐ事は難しいが専用機持ちに一步譲る

実力に反してどこか掴みどころの無い殺意を漲らせた一夏をレイヴンは、警戒した。

数段自分より実力が劣っていると知りながら。

煙りが晴れかけ、白式の機影がやつと確認出来たその時だ。黒煙から一筋の流れ星のように飛び出した白式は左手のレーザークロウに光をほとばしらせりヴァイヴの肩から胸にかけてのアーマーを削ぎ落とし、至近から雪片でレイヴンの顔を狙い、突き出した。

幸いにも刀身が頬を僅かに斬りつけただけで収まり一夏は舌打ちをして引き下がった。

休む間も与えずにレイヴンの反撃が開始された。2丁のレーザーライフルを生成し一夏へ撃ち込むとレイヴンは、それを手放し徒手空拳で立ち向かった。

一夏は、レーザーを難なく回避し真っ直ぐに飛んでくるレイヴンの姿に一夏は自身を投影しつつ雪片を振り下ろした。

一夏は雪片を振り下ろす前に背中に強烈な攻撃を受けた。スラスタを損傷に追い込んだのはレイヴンが先に放ったレーザー、回避されたレーザーは湾曲し一夏を射抜いた。

「シャルの高速切替にセシリアの偏向射撃か……！」

一夏の脾腹に痛烈な打撃が与えられ気が遠退きそうになる。アーマードコアの操作は何も技量のみで決まりはしない。

強烈なGへの耐性等の最低でも軍人レベルの肉体を強要される。

殴られた個所をさすり一夏はレイヴンが二度も見せた仲間の技に驚きと感心の念を表した。

前者の高速切替はレイヴンも一度は見た事があるかもしれないが後者の偏向射撃フレキシブルに関しては完成させたのはレイヴンがIS学園を去ってからの話で、レイヴンは偏向射撃フレキシブルを一度も見ただけ。

それでいてレーザーの操作はセシリアよりも正確且つ、鋭いカーブで曲がり一夏を狙い撃ちした。

どちらも模倣ではない。それ以上の完成度で使用して来るのだ。
アーク時代に最強の名を馳せた傭兵^{レイヴン}としての技量が、はたまた亡
国機業で情報を得たのか。

スラスター、胸当て、ヘッドギアと白式のあらゆる個所が破損し
ており、レイヴンのリヴァイヴも軽微とは言えないくらいにダメー
ジを受けている。

そして何よりリヴァイヴの稼働終了までに1分を切っていた。

『一夏、私のエネルギー管理にも限界がある早急に決めろ』

「わかってるよフォグシャドウ」

正眼に構えられた雪片式型に一夏は本日2回目のエネルギー充填
を行った。

——零落白夜、発動。

一夏は、心で念じ現存する全てのエネルギーを雪片に乗せた。瑞
々しい生命力に溢れた若き力は比類無き業火の如く、燃え盛りその
瞳は、勝利に疑いなどなくレイヴンを見詰めた。

（いける……俺には雪片が、暮桜が、フォグシャドウが、仲間がい
る！）

一夏が全身全霊を以て挑む事を察したレイヴンはポケットからエ
ドワースからもらった例の錠剤を飲み込んだ。

稼働時間が残り23秒の所でタイマーが止まりレイヴンの適性が
Bにまで上昇した。

信じる物は自分自身、レイヴンの内面は飽く程に静かで一点の曇
りも無い。

白式を破壊するのは多数の火器でも小型のブレードでもない、最も原始的で単純で誰もが持つ拳を使う。

ISに肉弾戦は想定されていないがバスターブレイカーが無い今、レイヴンが持てる最大の武器である。

4基のバーニアが一斉に背を向き前方への爆発的な推進力を今か今かと待ち望むように蓄える。

静寂な空間を打ち破り両名は背面の噴気孔から炎を吹き上げて突進する。

バーニアのお陰かレイヴンのリヴァイヴが僅かに早くスタートを切り一夏に飛んで行く。狙い目は左胸、暮桜のコアに的確なダメージを与える為にレイヴンはその一点に集中力を全て注いだ。

右腕の正拳は1本の矛と化し一夏へ突き出され、いかなる防備も裂く雪片がレイヴンへ振り下ろされた。

金属のかみ合う音が大気を震わせシャルが身を乗り出したかと思うと、両者はすれ違い、互いの身体に確かな傷が残っていた。

狙いは大きく外れたがレイヴンの右肩から左脇下にかけて刃傷を負わせた。

レイヴンも狙いが外れ、左胸ではなく一夏の左肩を粉碎しスラストーももぎ取った。一夏は碎かれた肩の痛みに耐えかねて不規則な呼吸を漏らし叫び声をぶつ切りにして吐き出していた。

武器の破壊力の所為もありレイヴンの方が比較的重傷でありながら彼の闘志はまだ燃え尽きていない。

レイヴンの手にしてあるのはスナイパーライフルである。

——もう誰にも負けるわけにはいかない。

勝ちへの執着心、それが動かなくなつた左腕を無理矢理に動かしているのだ。

レイヴンはスコープを覗き再度、一夏の胸に照準を合わせる。回避など計算に無い一夏は雪片を担ぎ上げ横薙に振り抜いた。

夏然と耳をつんざくような音が轟いたと思うと一夏の雪片を千冬の白鳳輝が受け止めており、真耶が満身創痍のレイヴンを羽交い締めにし他、軍のIS操縦者がレイヴンの四方を取り囲み銃器で狙っていた。

「ち、千冬姉……」

「馬鹿者、市街地でISを起動させる奴があるか！」

「あ、ごめん」

「お前への説教は後にして先ずは……」

打鉄九式を纏う千冬の目はレイヴンの方を見た。多量な出血で意識が朦朧とし始め思わぬ横槍にさっきまで燃え盛った闘志は、いつしか篝火のように穏やかになりやがて消えて行った。同時に意識も絶たれた。

レイヴンはそのまま東洋総司令部へ連行されレイヴンの素性を知った黛薰子へは他言無用と命を下された。

どの道、二学期が始まれば分かる事なのだが。

気を失ったのはレイヴンだけでなく一夏もそうである。軍部の医療システムを使い一夏の肩の治療に入った。

単純な切り傷ではなく粉碎骨折な為、治療が面倒なのだ。

一方レイヴンは一夏よりも速くに治療が済み嚴重な拘束具が取り付けられて殺風景な監視室に入れられていた。

再起してからの居心地は最悪である。

両腕を後ろにして金具で束ねられた状態の為動き辛くて仕方がない。

身体を横にして固いベッドに寝転ぶと部屋の鍵が解除される音がし、真耶が監視室に入ってきた。

童顔で優しそうな柔らかい表情は相変わらずだ。

「レイヴンさん」

と、名前を呼んだが反応は無く目を瞑っている。

「レイヴンさんッ」

次はやや強めに呼ぶとレイヴンは上体を起こして睨むように真耶を見上げた。

「何だ？」

「お話しがあります」

「聞きたくない」

「聞いて下さい。パルヴァライザーの力は私もこの目で見ました。織斑先生はずっと反対だったんですが……」

少し俯いてから真耶は再度レイヴンの顔を見た。

「あの人もようやく考えを改めてくれました」

「何なんだ。回りくどいのは好きじゃない」

「あなた方との共闘を私達は望んでいます。パルヴァライザーはI Sだけでは倒せない。ACの力も必要だと……」

真耶が言い終わるとレイヴンはまたベッドに寝ころんだ。組織のリーダーはレイヴンではないジャックだ。

組織の一員に過ぎない彼にはいかなる決定権も与えられない。

「一年生の3人の代表候補生もこの戦いに駆り出されます」

「3人……？」

シャルの顔は先程、伺った。ラウラも2日前にドイツで会った。

「3人とはどういう事だ？」

レイヴンの質問に真耶はこれまでに無い程、顔を曇らせ自分の襟首を握り締めた。

「ラウラ・ボーデヴィツヒさんは死亡しました……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0607r/>

インフィニット・ストラトス～NEXUS～

2011年10月30日00時15分発行